
優しき勇者・悲しみの冥王

MrR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しき勇者・悲しみの冥王

【Nコード】

N7559M

【作者名】

MrR

【あらすじ】

学校でもイジメを受け、家庭内暴力を受け続けていく日々の中で大宮 優は心の底でこの世界に絶望を感じていた。そんな時だった。

異世界エデルカディアへ藤間光と共に魔王討伐のため、勇者として召喚されたのは。

しかしこの時、誰もが知らなかった。

優が冥王と呼ばれる存在である事など……

第一章「光の勇者・闇の勇者」（前書き）

2011年7月13日大幅に修正・追記しました。

第一章「光の勇者・闇の勇者」

この作品は主人公最強物です。

主人公はハード設定です。

異世界召喚物です。

「優しき勇者・悲しみの冥王」

これは残酷な運命に翻弄された少年の物語

夢を見ていた。

自分の名前を必死に呼び掛ける鎧達の姿を。

皆、皆必死に呼び掛けている。

ここが宇宙空間である事は分かるのだが目の前にいる鎧は何なのであろうか？

明らかに肌を露出している特撮物のパワードスーツ染みた格好をしている人もいるが色々と心配になる。

（またこの夢……）

その鎧達は血涙の跡が刻まれた白い仮面を被る黒髪の天使と戦っていた。

神官のような帽子。

胸や手甲に球体が埋め込まれた鎧を身に付け、羽のような特徴的な形をした赤いマントを羽織っている。

そんな天使が体全身からレーザー光線を放ち、時には魔方陣から

有り得ない量の光の矢を放つ。

圧倒的。

現代兵器の有効性すら霞む程の飽和攻撃を放つ。

如何なる地球上の軍隊であってもこの攻撃を受ければ数など無力と化すだろう。

（最近になってよく見るけど一体これは……）

しかしその鎧達も異常だった。

その攻撃を向けられても誰一人欠けておらず反撃すら行っている。どうして欠けてないのかと問われると自身が無いそう言う確信を持っていた。まるで当然のことのように。

この超人染みたバトルはやがて数の差もあり黒髪の天使が不利となる。

やがて白い仮面の騎士との壮絶な殴り合いの末、戦いに決着がつき大気圏へと突入。

（光になっていく……）

黒髪の天使は体から紫色の粒子を放出しながら溶けるように消えていった。

まるで命の輝きその物であるかのように。

それを止めるように様々な鎧達が引き留めようにして集まっていた。

どうして殺し合っていたのか。

何故ここに来て皆で助け出す行動に出たのか。

それは分からなかったがこの光景を見ると深い罪悪感のような物が沸き上がる。

（どうして……）

まるで自分が大罪を犯してしまったようだ。

自分は世間的には加害者である立場である筈なのに。

（何なのこの気持ち……）

この夢は今の自分に対するメッセージなのだろうか？

分からない。

説明不要なぐらい不思議と意味が分かるだけにより意味が分からない。

（助けて……みんな……）

少年が現実へと帰還したのはその時だった。

大宮 優と言う少年がいた。

一見男なのか女なのか分らない可愛らしい容姿を持つ小柄な少年。体格もまるで女子として生まれてきたかのような体付き。弱々しくて儚く、目も虚ろでもし女の子であるならば演劇でシンデレラに抜擢されそうな雰囲気を持っている。

しかしそんな風になっているのには理由があった。

「優……！ 何時まで寝ているの……！？ 早く起きなさい……！」

朝4時半。

窓が無い倉庫で優は目を覚ます。

ここは広い家のスペースの一部であり、仕方が無いからと言う理由で優はこの部屋を割り当てられた訳ではない。

「ささつと朝食を作りなさい！！ それを作ったら掃除、洗濯…誰の御陰で学校に通えると思ってるの！？」

「はいお母様……」

これが優の朝だった。

人目を極度に気にしているのか両親は高校に通わせてくれているがそれ以外は殆ど奴隷同然の扱いを受けている。

衣食住はしている分はキッチリ働け。そう言って優をこき使っている。

このような酷い扱いの原因。それは優と今の両親は血が繋がってはいないことが原因である。つまり優と両親は他人同然なのだ。

（頑張らないと……また叱られる……）

出会いは施設暮らしだった優を今の両親が引き取ったことから始まり、最初の内は良かったが小学生が終る頃には既に今の様な性格へ変わり果ててしまったのだ。

（本当に何時からこうなったんだろう……）

そう思わずにはられない。

まるで主人に飽きられた犬や猫のような扱いだ。

しかしそれを言ってしまうと路頭に迷いかねないためグツと堪えながら今日も強制労働を黙々とこなすのである。

優は黒い制服姿で毎日手ぶらで登校している。

人目を気にするタイプなのか親は高校に通わせてくれた。今でも

最大の謎であるが質問して機嫌を損ねる何が起きるか分からないので優は黙っておく。

制服姿はともかく手ぶらの理由は簡単だ。

「机が無い…」

教室に辿り着くとそこには自分の机が無かった。

「ああ。お前の机なら外に放り出してやったよ」

窓の外を見ると外に放り捨てられた机が目に行く。

机は落書だらけで酷い有様だった。

「あ、ごめん。手が滑った」

女子生徒の一人が手に持った水鉄砲で笑いながら水をかける。
だが優は顔色一つ変えなかった。

「キャハハハハハハハ！　きたねええの！！」

「そんな姿で授業を受ける気かよ！！」

教室で笑いが巻き起こるが優は黙って教室を後にする。外に放り投げられた机には落書が大量に書かれていた。

マゾ太君。ドM。マザコン。卑猥な落書。確認できるだけでもキリが無い。優はそれを全て洗い落とす為に洗い場へ持ち運ぼうとした。

その時何かが上から投げつけられる。見るとソレはゴミ箱だった。学校の彼方此方から笑い声が聞える。

だが優は動じずに机を持ち運ぶ。これが大宮 優の日常だった。

（学校に何しに来てるんだろうね……）

学校とは皆一緒に勉強する場所である筈だ。それなのにこの扱いは何なのだろうと思う。

（また全部聞いて覚えなきゃ……）

優は何故かイジめられ体質である。

自分でも理由は分らないがとにかく小学生の頃からこの有様だった。

呪われているのでは無いかと思ったときは何度もある。

少年自身もこの状況を望んでいる訳ではないが自分にどうしろうと言うのだ？ と何をどうすれば良いかサッパリ分からないでいる学園ドラマ宜しく熱血教師や何かしらの技能に優れたクラスメイトが自分自身助けしてくれる様な展開を待ち望んでいたりもしたが不幸にも少年に救いの手を差し伸べてくれる人はいなかった。

「失礼します」

「遅いぞ優！！ また机を洗ったのか？」

優が全ての汚れを洗い落としたのは一時間目の半ばの事だった。出迎えたのはクラスメイトの白々しい声。

もう馴れていた。

怒るよりとても惨めな気持ちになる。

「優君…君は…」

「遅刻してすみません」

「……分った。後で職員室に来なさい」

初老の教師が心配そうに声を掛けるが優は女性の様な声で機械的

な返事を返すのみ。

もうこの少年の身に何が起きているか分りきっている教師はそう告げたのだった。

「おい。これ」

優は椅子に座るとすかさず手紙が回って来る。

そこには「チクるなよ」とだけ書かれていた。

パターン通り過ぎてもう何も感じない。

それに優はチクるつもりは全く無い　と言うのも教師に頼って解決した例がないからだ。

イジメを教師に密告したとしよう。そりゃもうメチャクチャ叱るだろう。

だがそれだけだ。後で腹いせ&逆ギレで酷い目に遭う。

イジメと言うのは最終的に自分自身の力で解決しなければならな
いと言う残酷な現実を突きつけられた瞬間だった。

この後職員室では心苦しく思いながらも適当にはぐらかす事となる。

（僕のせいで迷惑かけてごめんなさい……）

担任の先生には申し訳のない気持ちで一杯になった。

自分なんか貴方の受け持ちになってしまったばかりにと。

「オラ！！　次行くぞ！！」

青空が見渡せる屋上。

優は複数人の柄の悪い生徒にスキンシップと称してプロレスごっこを受けて側をずっとこなしていた。

ラリアット、パイルドライバーと言った技を呻き声も挙げず次々と食らう優。本来素人が真似するのは危険な技が多く、ましてや硬い屋上の地面は体にどんなダメージを与えるか分らない。

それでも優はストレス解消の道具となっていた。

「で優？ 何もチクって無いんだよな？」

「はい……」

「本当だろうな？ ああ？ チクッたら容赦しねえぞ？」

「……はい」

柄の悪い生徒にチークスリーパーを掛けられながら優は答えた。どう答えても待遇がよくならないのは分かっていたが態々怒りを煽っても何の得にもならない。

早く終わるのを祈りつつも優は耐える。

「何だその気に入らなさそうな声は？」

「私は別に……」

「そんな奴にはパワーボムをお見舞いしねえとなあ！？」

そう言つて男子生徒は優の小柄な体を持ち上げ硬い地面に叩きつけた。

本当はとても痛い。

だけど知らず知らずの内に心が無くなったのか痛そうだと言うりアクションが取れないでいた。

普段通りまるで人形のようにされるがままとなる。

それをいいことに繰り出される技は激しくなっていた。

気がつけば夜になっていた。

屋上のドアは鍵が閉められ、脱出が不可能になっている。

そんな中、優は裸体を月夜に晒し硬いフェンスに体を預けていた。女性を思わせるボディラインの体は傷だらけで中には火傷の傷まである。

体には落書までありとにかく酷い有様だった。

（何時も思っけど生きてるのが不思議だよね……）

固い屋上の地面でプロレス技の実験台など下手すれば死んでいてもおかしくない。

幸か不幸か昔から暴力に晒されてなければ耐えきれなかっただろう。

それにしても幾ら何でもこれは非常識だ。万が一死んだらどう言い訳するつもりなのだろうかと思うが（何も考えてないんだろうな）と早々と結論が下った。

少年犯罪は昔と比べて減少傾向だが今でも目を疑うような犯罪が起きている。

自分の周りの連中もそう言う類いなのだろうと思う。

「帰らなきゃ」

優は一息ついた後、散乱した衣服を身に付けていく。

全てを着替え終えると優はその場に倒れこみ、都会の明かりで碌に星が見えない夜空を眺めた。

それでも月はハッキリと見えるように輝いている。

（私は……何の為に生まれて来たんでしょうか？）

ふと手を月を覆うように空へ向けた。

その質問に誰も答えてくれないのが分っているのがそれでも質問を繰り返す。

答えはが来ないのは分かっていたが何度も何度も頭の中で問いかけた。

（家に返っても待つてるのは養父と養母のお叱り……それを乗り越えても明日はまたこんな日々が続く……）

だが

まるで悪夢をずっと見続けているようである。

（もう……疲れた……）

だが優はその悪夢にも馴れてしまった。涙も既に枯れ果てたかのように流せない。痛みも時が経つにつれて段々と感じなくなっている。

病院で見て貰った方がいいかも知れないが自分の両親はそんな手間が掛かる真似をしてくれるとは思わなかった。

それに最近は虐待がバレル事を恐れている節すら見せ始めている。最悪口封じすら有り得た。何を思ったか旅行に連れて行ってやるなどと言っているが優の推理が正しければその時にやるのだらうと思う。

自分の命はどの道長くは無い

物心付いた時から幸せとは無縁な境地にいた優はその事実をすんなり受け入れられた。

（いつそのまま死ねたらどんだけ楽なことだろうか）

ぽくと優は空を眺める。

そんな時だった。

「え…？」

自分の周囲に突然光りが現れる。起き上がってみると魔法陣が描かれているのが分る。

視界が満遍なく光りに包まれたのはその後だった。

避ける間もない。

そもそも優は暴力に晒され続けていたのだ。これでもし反応して回避できよう物ならそれは奇跡だ。

訳の分からないまま優は意識が遠のいていく。

「いつてらっしゃい。優君」

男とも女とも取れる声が響いた時はもうその場に優はいなかった。残されたのは笑みを浮かべた青い髪の毛を持つ可愛らしい美青年。頬に記号のようなタトゥーが刻まれている。

まるでピアニストがコンサートで身に付けるような黒いタキシードを身に纏っていた。

やがて優の旅立ちを見届けると彼もまた優と同じように地面へ魔法陣が展開。

それが放つ光の中へと消えていったのであった。

残されたのは夜の学校が持つ独特な静けさだけ……

その日。

優は地球から消え去った。

後にあるニュースが人々を騒がせる。

東京都内にある『二人』の高校生が行方不明になったと。

この事件に関連性はないため単なる偶然として片付けられ、別々の事件として取り扱われる。

各メディアはこの事件を取り上げたのだがやがてこの放送は幾多の事件と同じく時間と共に忘れ去られていく。

そして舞台は出来すぎた剣と魔法の世界へと移るのであった……

プロローグEND

第一章「光の勇者・闇の勇者」（後書き）

どうもRです。ヒーローフォースの打ち切りからこうして再び復帰できました。

この作品は「小説家になろう」で流行の傾向にある異世界召喚・勇者チート物です。

まだまだ始まったばかりで多くは語れませんが完結目指して頑張りたいと思います。

【2011年7月13日】

俺、実は一度上げた話を見直すのが何かメチャクチャ気恥ずかしくて抵抗感があつたんですよ。

だけど……本文をコピー、ペーストしてメモ帳に貼り付けて改稿作業すればあら不思議。とても捗るんです。

いやゝもう一年近く前になる後書きみたんですけど早い物ですね。

この時考えていた展開と今考えている展開はもう似ても似つきません。

ともかく新しいプロローグいかがでしたでしょうか？

元々存在した裏設定を引っ張り出した部分もあり、以前よりも自己満足的な部分が強くなるかな？ とかちよつと心配しています。

最後にこの修正・追記ですが第一話ゝ現在の話まで暇な時にでもコツコツ続けて行こうかなと思っています。

追記は出来る限り読者の皆様に混乱を来さず本編の内容を補足していく範囲で出来たらいいかな？

プロローグでダラダラと語るのもなんなのでこの辺で失礼します。

ご意見・ご感想お待ちしております。

第一話「二人の勇者」（前書き）

遂に本編始まりです。

* 追記：七月二十六日・大幅に修正しました。

* 追記：2011年7月14日：更に大幅に修正・追記しました。

第一話「二人の勇者」

「優しき勇者・悲しみの冥王」

第一話「二人の勇者」

気がつくと優は白い制服姿の少年と共に横になっている。金髪と整った顔付きが特徴で背丈も大きい。快活そうで明るく自分とは何もかも正反対な少年だった。

（ここは何処だろう？）

起き上がって周囲を見てみる。

床には魔法陣が描かれ、高い天井からは月明かりが差し込んでいた。周囲には綺麗な彫刻がなれた石柱があり、その更に外側には円で囲むように水が流れていた。

そして二人の前には白い神官の格好をした白いロングヘアが特徴的な小柄な少女。雪のような白い肌と赤い瞳、まだ幼い顔付き。成長すればきっと美少女になるであろう。

その少女の周りには同じ様な格好をした人物にシルバーカラーの重厚な鎧を纏った騎士達がいた。

何かの撮影だろうかと優は首を捻る。

「勇者様が二人……」

神官の格好をした少女がそう呟いた。

「と、突然何だ……勇者が二人って……え」と君？ どう言う状況

「か分る？」

金髪の少年に声を掛けられるが顔を横に振って答えられる。
マトモな会話が成立する機会が本当に久し振りだったので思わず
ジャスチャーで答えてしまう。

「わ、私はアルクレス王国の神官長のフィリアです」

「僕の名は藤間^{ヒカル} 光です。気が付いたらここにいたんですけど…何が
何だかサッパリで…」

「あの…立ち話では何ですから一緒にいて来て貰えませんか？」

嫌な予感がした。

このフィリアと言う少女の口振りからは何故だか自分一人に掃除
を押し付ける時の同級生みたいな物を感じたからだ。

（こつ言う時の嫌な予感は大体的中するんだよね……）

そう思いつつも言葉に出さず黙って二人についていく。

周囲に自分よりも背丈が大きい上に近代の軍人よりも重そうな装
備を身に纏った騎士達に囲まれた時はどうしてか犯罪者になった気
分になった。

光と名乗った少年は脳天気に関りを物珍しげに眺めている。案外
神経が図太いのもشれない。

二人が案内されたのは様々な絵画が置かれた丸い部屋。
部屋の中央に円形のテーブルが置かれ、まるで会議室のようになっていた。

そこに優と光がやや席を離して座り、その反対側にはフィリアが

腰を降ろしていた。

（あの人は……）

フィリアの傍にはまるで彼女を守護するように漆黒の女騎士がいた。

青い髪の毛を腰まで伸ばし、癖毛なのか後ろ髪の毛の先端がややカールしている。

男勝りな凛々しい顔立ちであり瞳もとても鋭い。健康的に焼けた褐色肌である上に足や腕はまるでトップアスリートのように引き締まっており、胸もグラビアアイドルの様に大きい。

何だかアマゾネスと言う言葉を連想させる女性だった。

だがそれよりも目に行くのはこの女騎士が身に纏う衣装。

黒いレオタードの上に動きを阻害しない範囲で赤い騎士甲冑を装着し、白いマントを威風堂々と身を包んでいる。そんなコスプレ呼ばわりされそうな衣装を本物の戦闘服の如く着こなしている。

この女性は先程から鋭い瞳でにジッと視線を向けてくる。常に臨戦態勢に身を置いているのか手を腰に挿した剣に手を置いていて何時でも抜刀できるようになっていた。

「こちらはアルクレス騎士団に所属するネル・ウォーレンです。今は私の護衛任務の為にこの神殿で警護をしております」

フィリアに紹介されるとその女騎士は無言で頭を下げた。

「アルクレス騎士団？」

「はい。このアルクレス王国の王宮に仕える騎士達です」

「聞いた事無いな……」

優も同じ感想である。

国名からしてなんとなくヨーロッパ辺りを連想するが全く記憶にない。

「あの……自慢ではありませんがこの大陸で一番広い国ですよ？もしかすると遠い地方から呼び出されたとか……」

「いや。そんなに広い大陸なら耳に入ってもおかしくないと思うんだけど。変な事聞くけどどれだけ広いの？ ロシアやアメリカぐらいじゃ流石に無いとは思うけど……」

「ロシア……アメリカ……聞いた事も無い国ですね」

「え？ じゃ、じゃあイギリスとか中国とかインドとかオーストラリアとか」

光は有名な国の単語をぶつけて行くが返って来る答えは知らないの一点張りだった。

これは優も驚く。

ロシア、アメリカ、中国は勉強をマトモにしていない人間ですら知っている国だ。

目の前の少女がそんな人間と同類とは思えない分余計に混乱する。

「聞いた事ありません……」

「嘘だろ……じゃ、じゃあ地球のどの辺り……とか分る？」

「地球……ではあなた達はもしかや異界から来たんですか？」

「異界？」

その単語をオウムの様に光は復唱する。

「フィリア様……学の無い私には確かめる術はありませんが本当に異界の人間なのですか？」

「はい。地球とは古い資料に出て来る言葉でして、それは私達が住む「エデルカディア」と寄り添う様に存在するとか……その存在を

疑問視する声が多いんですか？」

「じゃ、じゃあ……僕達は異世界に来たんですか？ 今一実感が湧かないんですけど……」

「恐らく……ですが……」

優も光と似た様な感想を持っていた。

「あの……じゃあ魔法とかはあったりしますか？」

「魔法……ですか？ あの……地球には無いんですか？」

「ええ。御伽噺に出てるだけの代物なんで何か出来たらちよつと見せて欲しいなと」

その証拠が欲しかったのか光は馴れ馴れしくそんな事をフィリアに要求する。

「では……癒しの光りを。この者達の傷を払いたまえ キュアライト」

呪文と共に少女の小さな両手の間に光りの玉が形成され、それをテーブルの中央に放つ。

そして玉は激しく発光して弾け飛び、光の粒子が自分達に纏わり付く。

（痛みが引いて行く！？）

イジメで受けて疲れ気味だったダメージが嘘の様に引いて行く。その効果を光も実感しているのか目をパチクリ動かしながら両手を交互に見ていた。

「これが私が使う魔法です」

「驚いた！！　これが魔法なのか！？」

「ええ。その通りです」

まるで光は新しい玩具を前にした子供の様に騒いでいた。
反面優は驚きを隠せないでいる。

（これが魔法……）

軽く袖を捲ってみれば痣まで最初から何も無かったかのように消えていた。

確かにこんな事は現代の医療技術では不可能である。

「フィリア様……そろそろ本題に入った方が」

女騎士のネルが促すとフィリアはコクツと一回頷いた。

「本題？」

「はい。今回貴方達を呼び出した理由を今からお話します」

そこから語られた内容は本当に有り触れた内容のお話だった。
だが娯楽とは無縁な優からすれば新鮮に聞える物語。

このウリエール大陸は広大で豊かな土地に恵まれている。

しかしソレは魔物が根付き易い環境でもあったのだ。

やがて何処からともなくその魔物達の統率者達が現れ、そして様々な種族を束ねる魔物達の王。

即ち魔王の誕生であった。

歴代の魔王はその強大な戦闘能力でなくその統率力を武器に幾度となくこのウリエール大陸や他の大陸を恐怖に包んだ。

だがその脅威を打ち砕くべく大賢者ロツソはある儀式召喚魔法を完成させる。

それが勇者召喚であった。

未だに不明な点が多い魔法だが勇者の素質が最も高いとされる人物を見つけ出し、そして召喚すると言う代物である。

こうして召喚された勇者は魔王との戦力差を覆し、平和を齎して来た。

だがこの物語には続きがあった。

何せ魔王が死んでも新たな魔王がやって来るのだから。

時には複数の魔王が。

そうして繰り返される勇者と魔王との戦い。

今もまた魔王達が現れ、それに対抗すべくアルクレスは勇者すなわち「優」と「光」を召喚したのだ。

「何か王道ファンタジーって感じの世界だと思ったけど妙にリアルだね。普通魔王って一体だけだろ？」

「そうであればただけ平和な事か…既に他国でも勇者の召喚に取り掛かっています。この勇者達と力を合わせればきっと打ち倒せる

と思います」

「え？ 他にも勇者がいるの？」

それが意外だったのか聞き返す光。

優にとつては何度目かになる衝撃だった。

絶対的な強さを誇る物語の主人公やそのラスボス達が大量にいる世界。

それが常識だという。

もしかして魔界の神とでも全面戦争でもしているのだろうか？
と笑えない推理が頭の中で過ぎる。

「はい。もしもの場合に備えて勇者の召喚魔法は他国にもあります」

「残念な様なホツとしたって言うか……」

「我々が生き残る為には仕方の無い事だ」

とネルがぼつりと補足した。

「…その少年」

「ッ!？」

続いて優へ視線を向けた。

その途端、体をビクツと奮わせる。まるで猛獣に睨まれた小動物のようだ。

「先程からずっと黙っているが……」

「そう言えばずっとこんな調子だよな」

「名前もまだ聞いてませんね」

表情には出さないが一齐に声を掛けられ戸惑う優。

先程も言ったがマトモに会話をする機会は本当に久しぶりだった

せいもあり中々言葉が出ない。

やがてネルは何を思ったのか優しく笑みを浮かべた。

「名前は何て言うんだ？」

「大宮 優……」

質問されて反射的に答える優。

「ふうん…大宮 優ね……何かどこかで聞いた事ある名前だな」

それは気のせいだろうと言おうとしたが止めておく。

どうせ自分のヤラレ武勇伝の類いだろうと思ったからだ。

「では勇者ヒカリ・ユウ。勇者として私達に力を貸してくれませんか？」

とフィリアが話を締め括る。

知的な見た目に反して単純明快な性格なのか光は乗り気だったが優は迷っていた。

（元の世界に戻っても無残に死ぬだけ。この世界に残っても恐らく自分は死ぬ）

と、異世界で死んだ方がいいか現実で死んだ方がいいのかと考える始めていた。

勇者と言うからには戦場に送り込まれる軍人並に危険は大きいだろう。もしかすると惨たらしい末路が待っているかもしれないかと言って元の世界に戻ってもイジメや家庭内暴力の日々。

引いても地獄、進めど地獄。それが優の現実だった。

「分った。たぶん苦しいとは思っけど、勇者も僕だけじゃ無いと思うし…できる限りの事はやって見るよ」
(私はどちらを選べばいいのだろう……)

結局優は自分の意思を伝えられないまま侍女に寝室へ案内して貰う事にした。

そしてフィリアとネルは二人きりになった後それぞれの意見を交わす。

話題は当然二人の勇者のことだ。

「フィリア様。あの勇者どう思われます」

「一人は溢れんばかりの光。もう一人は底知れぬ深い闇を感じました……」

深い闇。

やはりフィリアも同じ考えに辿り着いていたかと思った。

「やはりですか……」

「はい……見ただけで心すらも食い殺してくるような深い闇です」

二人に重い沈黙が訪れる。

「では……どうなさるおつもりで？」

「もしあの強大な闇の力が王宮に知れ渡ればどうなるか……そこそ災厄が詰まった箱を開ける様な物ですが、もう既に二人が召喚された事は知れ渡っている以上明日の選定の儀は取りやめる事はできません」

既にもう王宮へ知らせてしまったし、目撃者も多い。
隠し立てするのは無理だった。

明日にでも勇者の資質が図られる選定の儀が行われるであろう。
ユウが内包する闇がどれぐらいの物かは分からないが勇者として
呼び出されたあの少年の闇が取り越し苦労で済むとは到底思えな
かった。

だからと言って危険視すればそれが少年を悪魔に変えてしまう可
能性も否定できない。

彼女達を感じた片鱗はそれぐらいのレベルであった。

「ならばフィリア様。できるなら私はあの少年と共に有りたいと進
言致します」

ネルは自分よりも背丈が低いフィリアの前で跪く。

「……あの少年は危険ですよ。下手に関ればあなたにまで危険が……」

「承知しております」

その言葉の意味は単純では無い。

勇者はただでさえ危険が付き纏う上に権力者の道具にされやすい
存在である。

仮に魔王を倒したとしてもその将来が安泰だと保証される訳では
ない。

ネルもその辺は分かっているだろう。

「……死ぬかもしれませんよ？」

「分っております。ですがあの日から私は勇者が召喚された時、こ
の身を賭して仕えると決めておりました」

「やはりあなたは……あの少年にアレクの面影を見ているのですか
？」

「……ええ」

やはりかと思った。

召還されて間もない人間にここまで入れ込むのは余程の事情がなければ考えられない。

その理由が分かったためそれ以上は深く問い詰めなかった。

「お願いですフィリア様。どうしてもあの子をアレクの二の舞にはしたくないのです」

「分かりましたネル・ウォーレン。ではあなたはフィリア神官長護衛の任を解き、勇者ユウと共に魔王討伐の任務を与えます」

ネルは腰に挿した剣を鞘ごと引き抜き、硬い床に突き立てた。そして刃の先をゆっくりと持ち上げる。まるで壊れやすいガラス容器を扱うように……

「は。この剣と勇者アレクに誓って……」

刀身を半分まで覗かせた時、最後に勢いよく剣を鞘へ収める。この動作は騎士が絶対の約束を交わす時に行う動作。（勿論、この世界における騎士の動作だが）

これを破ると言う事は騎士としての裏切りを示す事となった。

誰でも出来る単純な動作だが古くから伝わる重大な仕草。この誓いから騎士道を学ぶ人間も多いと言われる程。

それを行ったと言う事は「例え何があっても優と危険を共にする」と宣言したと同義である。

そんな事をせずとも彼女の決意は分かるのだがあえてフィリアは何も言わない。

「頼みましたよネル……」

既に物語は激しく動き回っている事を自覚していた二人。

双方の勇者はそれぞれ期待と不安を胸に秘めていた。

「勇者か……」

まるでホテルの個室のような豪華な部屋だ。

ベッドも天蓋付きでフカフカと来ている。逆に寝心地が良すぎて落ち着かないと言う態であった。

更には勇者として召還されたと言う夢のような体験がここに来て漸く現実味を帯びたのも原因の一つである。

（ああ言っただけで自分に特別な力ってあるのかな？）

ここに来て光は大見得切ったのは失敗だったかなと思う。

一応ある程度の武道の心得はあるが実戦に役に立つとは思えない。そもそも自分が習っている武術を実戦に役立てる機会やそんな時に恵まれる人間は世の中に何人いるのだろうか？

最後の戦いは女子のクラスメイトが頭の悪そうで柄の悪い不良に絡まれていた時ぐらいである。

「……そっぴや僕みたいに地球から召還された人っているのかな？」

ふとそんな事を思い浮かべる。

フィリアは地球の事を知っていたようだし何らかの形でこの世界に飛ばされた人がいるのかもしれない。

そして地球の人間が何らかの形でこの世界に来るとすれば今のところ自分と同じパターンであるし、勇者は一人だけではなく他国に何人もいるのだ。

もしかしたらイギリスとかアメリカ、中国からも勇者が呼び出されている可能性は決して否定できないだろう。

そこまで考えて次に勇者のことに思考を移した。

（もしかしてよくある異世界で覚醒して強くなるタイプなのかな……）

仮にだが地球の勇者がいたとして……その人達はどれぐらいの実力者かは分からないが魔法が存在する世界で一騎当千だったとは思えない。

たぶん火の玉やら雷を放つ魔法、身体能力強化魔法とかもあるかも知れない。

それに勇者がそう言う敵を全員相手取れる存在だとは限らないだろう。

物語で良くある異世界で強くなる物と考えるのも否定できない。あれこれ考えてみたがまだ碌な説明を受けていない身だ。

（明日フィリアさんに色々聞いてみよう）

そう思い直して無理にでも寝ようとする。

そして優はと言うと不安を押し殺すように布団を被っている。こちらも個室を与えられたが光と同じく真っ当通り越して豪華な

寢床にとても馴れないでいた。

自分の寢床と言えはあの暗い物置部屋で何年干していないか分からないぐらいに薄汚い布団である。

何だかとても複雑な気分だ。

（眠れない……）

今の待遇はたぶん人生で最高だろう。

（本当に戦えるのかな……）

勇者として召還された身としてはとても不安だった。

自分が物語の主人公になれる筈がない。

もし皆の期待に応えられなかったらどうなるんだろうか？

ただただそれが恐くて仕方が無かった。

（あの人は恐くないのかな？）

ふと光の事を思い出す。

余程自信があるのか殆ど即決で死ぬかも知れない。

尊敬していいのか罵倒すべきか正直分からなかった。

そりや確かに人のためにこの身を投げ売れるのは凄いと思う。

けれど家族や周辺の間人はそれで納得できるだろうか？

自分と違ってたぶん家族から愛されてるだろうし友達も沢山いるだろう。今頃大騒ぎになって警察が動き必死に搜索活動が続いているかもしれない。

きつと不運に恵まれた私よりも悲しむ人は多い筈だ。

その答えに辿り着いた時、何だか光をとて羨ましく感じられた。

「……どうなるのかな私」

その問いに答えられる物は誰もいなかった。

第一話「二人の勇者」END

第一話「二人の勇者」（後書き）

このサイトにおいて二人勇者を召喚するパターンは珍しくない形式でして、似た様な方式テイルズ・オヴ・ヴェスペリアのユーリとフレンがあります。

この作品にも私はソレを採用しました。

優の性格とは魔逆にし、藤間 光はムカツクギャルゲーの主人公みたいな奴を意識しています。

第二話「勇者の素質」(前書き)

*七月二十六日、誤字、脱字修正を行いました。

第二話「勇者の素質」

「優しき勇者・悲しみの冥王」

第二話：勇者の素質

召喚されて翌日。

藤間 光はある場所に案内された。

白い床が広がる円形の広いホールの中央にバスケットボールサイ
ズの推奨玉が台座に置かれている。

ホールはまるで演奏会のコンサートのように広く、その周りには勇
者光臨を聞きつけた国の重役達が一同に集まりその護衛の騎士達も
一緒。中には見るからに王様、お姫様、王女様らしき姿もあった。

このホールは歴代勇者の絵画や彫像、エデルカディアの神をあし
らった像などが置かれており普段は資料館としての性格が強い。本
来は水晶玉や台座も普段は厳重に封印されている。

だが勇者が召喚された時は例外。

限られた人数で極秘裏に行う神聖な儀式、選定の儀を行う為であ
る。

（何か外国の美術館に来たみたいだな）

目を輝かせながら光は周囲を見渡す。

何か偉そうな人が護衛を引き連れて自分に様々な視線を向けてき
たがそれよりもこのホールに圧倒され、気にも止めなかった。

まだ光は異世界に来たと言うよりもリアルな映画の世界に迷い込
んだ気分になっていたかも知れない。

「何をするんですか？」

側にいたフィリアに声を掛ける。
選定の儀を行うのは知っていたが具体的な事は聞かされていなかったのだ。

「あの水晶玉に手を当ててください」

部屋の中央に置かれた綺麗な水晶へ指を向ける。
固い床にはまるで儀式でも行えそうな魔法陣が刻まれていた。

「手を……ですか？」

「ええ。この水晶を使って勇者ヒカル。あなたの勇者としての力を
図ります」

成る程。この水晶玉は自分の力を測る便利装置だと光は理解した。
たぶんあの魔法陣は本来の機能を補佐するような役割でも持っているのだろうと現代創作作品で培った知識から推理する。

「そうか……そう言えば大宮君は？」

ふと光は優のことを思い出した。

あの今にも消えてしまいそうな儚い雰囲気を持っている少年だが

「ええ？ ああ………どうしたのでしょうかね………」
「？」

まだ来ていないらしい。

（寝坊でもしたのか？）

一番ありそうな予想を立ててみる。

もしかしてとても緊張しているのかもしれない。

何か人前に出るのが苦手そうなタイプだしと。

「とりあえず後から来ると思いますので。勇者様。手を当ててみてください」

「うん……これだけの人前で自分の力が公開されるなんて何か恥しいなって思いませんか？」

「大丈夫です。あなたは勇者としての素質は充分あります」

「それは大宮君も？」

「ええ」

フィリアとのやり取りで少し安心した光は水晶玉へ向う。

この部屋に集まった人間はみな光の一つ一つの動作を見逃さないように注視していた。

（小学校の卒業式の時も恥かしかったけどこれはそれ以上だね）

そう感じている内に水晶玉の前に辿り着き、一旦深呼吸する。

（自分にはどれだけの力があるのだろうか……）

自分は特別で存在であると自覚したことはない。ただ人よりも勉強やスポーツができるだけだ。

学校ではそれが大きなアドバンテージで周りから羨ましがられてはいるがそれが才能だとは思った事は無い。

よく女の子に付き纏われるのも自然とそうだっただけである。

凄いい奴と言うのは大会目指して必死に練習したり、具体的な将来のビジョンを持ってそれに向けて頑張れる人間なのだと考えていた。

決まったレールを走り続けるだけの自分には到底出来ない生き方である。

自分にはそんな度胸は無いのだが周囲はまるで自分が世界のトップであるかの様だと言った。

今だってそうだ。

成り行きで勇者として召還され、しかも自分には特別な能力があるのだと言う。

肩透かし食らうレベルかも知れないがそんな奴が勇者として呼び出されるのも変な話だ。

まだ実感は湧かないが地球にいた時と同じである。

（だけど勇者として召還されたんだ。出来るんなら皆を守れるぐらいの力が欲しい）

だが才能が無くて許される世界ではない。

自分の能力の有無が大勢の人生を変えてしまうのかもしれないのだ。

アレだけリラックスしていたつもりの方が自然と強ばっている。

「うわ…光った!!??」

水晶玉から溢れんばかりの光がホール全体を満遍なく包み込む。

その輝きは部屋の外に漏れ、まるで神の光臨を継げるかのように空や大地を輝き照らす。

まるで行き成り太陽が地上に現れたかのような光量だ。

光源の最も近くにいた光は思わず目を瞑る。

（凄い光だ!!　これが僕の素質なの!?)

平凡な人生を歩んでいた自分にこんな能力があるとは思ってもみ

なかった。

ただただ啞然としながらその水晶から放たれる自分の輝きを眺める。

やがて光が収まり……著しくの間シーンと静まり帰った。

この時、フィリアを含めた誰もがこう思った。これは想像以上の『金の卵』だと。

光りが収まるまで呆然として突っ立っている光。誰の目にも希望の輝きが宿っていた。

これを見て確信したのだ。この勇者は必ず魔王の脅威を打ち払ってくれると。

誰もがそんな期待の眼差しを向けてくる。

（あゝ何か大変な事になったね……）

部屋から溢れんばかりに湧き上がる歓声に光はタジタジとなる。何の素質が無いよりかマシだと思うがこれはこれでちょっと大変になりそうだなと脳天気なことを考えていた。

「遅くなりました」

「おおネル・ウォーレン。其方がもう一人の勇者か」

「その通りでございます」

優が来たのはそんな時だった。

（凄い光だった……）

完全に優は圧倒されていた。

話から察するに勇者の選定の儀による物だと優は考えている。
あの目映い光があの人を持つ勇者としての素質？
周りの反応から察するにとても凄い事なんだと何となく分かった。

(あれぐらいでなければ……私はどうなるんだろう……)

ただ優はソレが不安だった。

もしアレ以上の成果を出せなければまた元の世界と同じ結末が待っているかも知れないと。

頭がクラクラして何も考えられないようになってくる。

(……怖い。だけどそれでもやらなきゃ)

仮にここで拒んでもどの道分かる事だ。
自分がつまらない存在なのか。
それとも凄い人間なのか。

「さて。二人目の勇者ははたしてどれくらいですか？」

「先程はアレでしたからな。もしかすると今度はアレを越えるのは？」

「いやいや。もしかすると大器晩成型かも知れませんが」

貴族風の格好をした人物の声が耳に入り、一瞬足が止まるがすぐにまた歩む。

なるべく人物を視界に入れないようにしてトボトボと下を向いて歩いた。

「なあ大宮。気軽に行こうぜ？ な？」

「……はい」

途中、光が励ましてくれたが頑張りたいという気持ちは沸かず複雑な気持ちに拍車が掛かったただけだ。

（自分の運命がこれで決まる）

ずっと水晶玉へ手を伸ばす。

死刑判決にサインするような気持ちだった。

（高望みはしません……せめて……人並みに生きられる力はありませんように）

優は手をプルプルと震わせながらゆっくり近づける。

しかし触れる手前で止まってしまふ。

様子がおかしい事に気付いたのかザワザワとした声が入る。

「一体どうなっている？」

「怖がっているのか……」

「ヤレヤレ。勇者とも言えども子供と言う事ですか」

自分の心を見捨てるかのような理不尽な言い分が耳に届く。
次の瞬間。

（え？）

水晶玉から溢れんばかりの深い闇が表れた。

深い闇はまるで全てを食い殺すかの様に溢れ出て、やがて水晶玉を打ち砕き高い天井を突き破る。

まるで決壊したダムのような勢いで吹き荒れ、天高く登る。
そして空を紫味掛かった暗黒へと染め挙げてしまった。

「な、何だアレは！！??」

「魔王が進行して来たのか！！??」

この光景に誰もが。そしてこの国に生きる全ての人間が畏怖と恐怖を持った。

ホールにいた人々も目を疑う。

まるで邪神か魔神の降臨を目撃したかのような。

「ああ……ああ……ああああ！！??」

「う、うわああああああああああ！！??」

「何なんだ！！?? 何なんだこれは！！??」

これは勇者の力を測る神聖な儀式では無かったのか？これが本当に勇者の力なのか？

ただただ目の前の非現実的過ぎる光景にド肝を抜かれた。

護衛の騎士達も無駄だと分かっても獲物を振り回し、高そうな衣服に身を包んだ人間は腰を抜かしてその場にへたり込み口をパクパクと動かし体を今にも死にそうぐらい震わせていた。

空へ突き出た闇の波動はやがてその姿を変えて行き、その仮面で空の色が元へ戻って行く。

やがて言葉を失っている優の前に全身に漆黒の鎧を纏った仮面の騎士が現れた。水晶玉と何かの紋章が刻まれた神官帽子。血の涙の跡が付いた仮面。そこから食み出る髪の毛。胸部に大きな宝石が埋め込まれた鎧にガントレット。幅の広い尖がったショルダーアーマー。翼の様な形状を持つ漆黒のコート。闇の粒子の塊のような光る翼。まるで西洋の騎士をパワードスーツにでも変えた様な格好だった。

（これは夢に出て来た……）

見間違える筈がない。

それは夢に出て来たあの光の翼を生やした黒髪の天使だ。
不思議と恐怖は感じない。

まるで数十年ぶりに親と感動の再会を果たしたかのような気持ちだった。

ソレが優へと歩み寄り、そして優の中へと溶ける様に消えていった。

（な……何これ？）

同時に頭の中にある光景が映し出される。

角を生やした禍々しい鎧を着た長髪の人物が此方に目を向けて何かを口走っている。

周囲には天使、悪魔を模したかのような鎧達が取り囲み一斉に襲い掛かってくる。

空を駆け、大地を抉り、天地を隙間なく埋め尽くす程の物量をもつて。

しかしそれらは全て塵と化して消滅していく。

何故なら自分が手を下したのだから

それが嫌と言う程分かった。

『アインシュタインの一般相対性理論を応用した指向性衝撃波……』

同年年ぐらいの少女の声がその攻撃の正体を解説してくれる。

『細かい説明は省くけどあの衝撃波に触れたらどんな物体も無限加速に耐え切れず、光の粒子となって消滅してしまう……レールガン

で撃ち出し出された弾頭が途中で燃え尽きるようにね……理論上ア
レを惑星規模で引き起こせばどんな文明も一欠片残らず光となって
消滅するわ』

更に補足するように頭の中で情報が引き出される。

知識が付け加えられているのではなく本当にまるで掘り起こされ
るような感覚なのだ。

正直自分でも驚いているぐらいだった。

それが理解できるかどうかは別としてだが。

まるで難解な物理の解き方を訳もわからないま解き方まで暗記さ
せられているような感覚だ。

(こんな記憶知らない……なにこの記憶……)

情報の濁流が終わり、その場にへたり込む優。

まだ頭がガンガン痛い。遠足で乗り物酔いをした時を思い出す。

荒れ果てたホールが不気味な静寂に包まれている事に対して不思
議に思った時優はしまったと思った。

居合わせた人々には勇者として優を見る者はおらず、まるでこの
世を滅ぼす悪鬼を見てしまったかの様な視線を向けてくる。

世界の敵

そんな単語が不意に頭の中で思い浮かぶ。

何故だか分からないが自分が正しくそんな存在になったと言う自
覚みたいものが芽生えていた。

「……………」

少しばかりの沈黙。

そして誰かがこう言った。

「その者を拘束しろ！！」

正氣に戻った兵士達は一斉に武器を向けて取り囲む。

中には魔法の詠唱準備を始める物達までいた。

少しでも変な動きをすれば即殺しそうな雰囲気である。

まだ殺されないだけマシかもしれないがソレは今殺されるか後で
ブチ殺されるかぐらいかの差でしかないだろう。

そもそも何故殺さずに捕縛になったのか後になって疑問に思う者が
が大勢いたがただ単に最初に言葉を発した人間が恐怖の余り命令を
取り違えたただけだ。

「ちよつと待つてください！！ 大宮は確かにやり過ぎたかも知れ
ませんが」

「勇者を避難させろ！！ 出来るだけ遠くにだ！！」

「ま、待つてくださいい！？ きつとこれは何かの間違いですよ！！」

兵士達の手でその場から引きずり出される光。

幾ら勇者の称号や天賦の才を持つ物だとしても今はまだ戦闘技能
も何も無い。

抗う事も出来ず優の名前を叫び続ける事が精一杯だった。

やがて優はその場から自棄に大人しく引きずり出されていく。

「さて…私はこの国の王デュラン・アルクレスだ。力はあるが勇者
としての力ではなく、魔王…いや、それすらも超えているかも知
れん破壊の力だ。その力と呼び出してしまった我々としては放置す
る事は出来ぬ」

声を若干震わせながらこの国の国王らしい白髪の男が言う。 赤い

マントに煌びやかな服、そして金の冠。王と言う固定概念を裏切らず、そしてその風格を漂わせていたがしょせんは人間。目の前で包囲されている勇者に深い恐怖を抱いていた。

「王よ！！ 手が負える内にこの者を！！」

手を震わせながら全身鎧の騎士が言う。

もし優が下手な動きを見せれば今にも斬りかかりそうだった。

「残念ながらこの騒ぎが外へ漏れるのは時間の問題ですぞ……」

立て続けに緑色のローブと帽子を被る年老いた大臣が王へ進言する。

「もしこれが民衆だけでなく外部に漏れれば魔王所の騒ぎではありません。下手に隠し立てしよう物ならば他国の信頼感家にもヒビが入る可能性が……」

「むむむ……」

「何がむむむですか！！ ともかく早急なご決断を！！」

フィリアは大臣の言う事に口を挟めなかった。何せ内容はどれも当たり前のことなのだから。

「フィリア神官長。貴女はこれを知っていたのですか？」

温和な性格で知られる女王がフィリアに問い質す。紺色の髪の毛。まだまだ若く見える美貌。大人の綺麗な顔立ちに穏かな瞳。豊満な体付き。紺色のドレスと高そうな細工が施されたアクセサリーで身を包んでいる。

外見だけでなく王族独特の気品と威圧感にフィリアは黙って従っ

た。

「それをハッキリさせるためにこうして儀式を行わせたのです」

「つまり勘付いていたのね？」

「ええ。ですがこれ程の物とは想像が付きませんでした」

「それでフィリア神官長、お母様。あの者をどうするのですか？」

女王を幼くした様な外見の王女が不安そうに問い掛けた。

「……最悪公開処刑。良くて実験道具でしょうか」

「そんな……まだあんなに幼いのにですか！？」

フィリアと女王は無言を貫く。

国の運営において小を義生にして大を活かさなければならぬ時があるが今はその時であった。

既にもう城下町の民には知れ渡り、何の説明もしなければどうなるか分かった物ではない。

やがて優は運良くこの場合は生き延びられたが城内の牢屋へ入れられる事になってしまった。

数十分後。

フィリアと光は神殿の客室で会話をしていた。

ここは勇者に割り当てられた部屋であり優も同じ待遇を与えられている。

大きなベッドや各種高そうな家具、窓、シャワールーム（使用人によると魔法学園製らしい）やトイレまで完備。まるでホテルの一室だった。

そこで二人は丸いテーブルを挟むようにお互い向かい合い、優の

事を語る。

「それで大宮君はどうなったんですか？」

「この国の城へ……恐らく地下の牢獄へ幽閉されたのでしょ」

「幽閉だって！？　だけど……確かに恐ろしかったかも知れないけど勇者だろう！？」

「はい」

冗談じゃない。光は心底そう思った。

救世主として呼び出したのにソレが恐ろしい者だと分ったら直にポイ。

自分勝手にもほどがある。こんなの断じて認める訳には行かなかった。

「ですがユウの力は既に人々へ知れ渡ってしまいました。勇者は主に光属性：地・水・風・火・雷に特化した存在はいましたがあそこまで強大な闇属性は魔王ぐらいしか……」

「勝手に恐がってるだけじゃないか！！」

「その通りです。ですが民衆は皆あなた程強くは無いのですよ。下手に底い立てすれば私達だけでなく暴動が発生し国の存亡にすら関る危険もあります」

「そんな……」

光が初めてぶち当たる残酷な現実だった。

そしてこれは勇者としての最初にして最大の試練でもある。

人情を取って国を敵に回すか、見捨てて勇者としての使命を完遂するか。

遂先日まで高校生でしかない光にとっては難しい選択だった。

（ファンタジーな世界だからって浮かれてた……）

今時ファンタジー世界の物語でも勧善懲悪では無い。
人である以上地球の人間の用に争いや醜い部分はちゃんと持っている。

ただ剣と魔法の世界と言うだけでその世界の人間は平和的な思考だと決めつけるのは単なる偏見だろう。

そんな風に自分の甘い思考を恥じていた。

（まさかこんな事になるなんて……）

勇者として呼び出された拳げ句、まるで化け物のように扱われて幽閉された優。

権力と言う壁の恐ろしさは頭で理解しているつもりだがこうして立ちふさがるとより高く感じる。

自分の気持ちを優先して守るべき物を敵に回し、
優を見殺しにして勇者となるか。

その二つに一つだ。

「……どうしたらいいんだ？」

答えが分からず誰かに答えを求めるようにポツリと漏らす。

「あたたには何もできません」

ハッキリと告げたのはフィリアだった。

「だよなあ……」

そう言われて沈黙する。

少しばかり静かな時間が続いた後……フィリアは口を開いた。

「あなたの世界では戦争はありませんでしたか？」

「え？」

唐突な質問に一瞬呆気に取られた。

「あるにはあるけど……ただ僕の国はもう半世紀以上前の事で平和その物だよ？」

と、嘘は付かずに答えた。

「ヒカル様の世界での戦争はと言う物かは想像は付きません。ですが戦争は多くの人々が大量に死にます。勇者とはそれを極限にまで減らす役目なのです」

「それがどうかしたんですか？」

「勇者は常に危険と言う矢面に立ち、そして何よりも自己犠牲でなければならぬ……そして人々の希望を背負い、受け止め、応えなければならぬ……勇者とは平和の為の哀れな生贄の様な物なのですよ」

淡々と語るその言葉一言一句が脳裏に刻まれて行く。

光はゴクツと息を飲んだ。

「ヒカル様。あなたは確かに勇者として召喚されましたがソレは肩書きだけの存在なのです。アナタは近い内に勇者として旅立つ事になります……勇者と言う肩書きに押し潰されないで下さい。勇者としてではなく、ヒカルとして行動して下さい」

その訴えにヒカルは何も言えなかった。

その頃、優は薄暗く、ジメジメとして悪臭漂う牢屋に一人いた。部屋内には魔法のアイテムらしき道具が置かれたり張り巡らされていたがどれもどんな効果を持っているのかサッパリ分らない。地球では物置部屋で暮っていたがそれよりも生活環境が悪化している。

そんな事に構わず優はただぼくと硬いベッドの上で三角座りしていた。

自分はどうなるのだろうか？

やはり死刑確定か？

それとも人間爆弾のように扱われるのか？

様々な最悪の未来を思い浮かべる。

（ほんと自分勝手だよ……）

誰が自分勝手なのかと問われたら分からないが勇者として呼び出して置いて大罪人扱いである。

文句を言わない奴がいたらそいつはもう聖人君子とか仏様とかの類いだ。

当然優はその類いではない。ただ不幸に恵まれている哀れな高校生である。

（……死ぬのかな）

この世界には少年法だとか裁判だとかそんな司法制度があるとは到底思えない。

間違いない死ぬだろう。

けどそう思ったとたん何故だか心がスッキリしていった。

（だったらこの不幸もやつと終わるのかな？）

段々と思考が死んだ後の事へ目をむけ始めている。
自分は天国行きだろうか？ 地獄行きだろうか？
もし生まれ変わったら何になるんだだろうか？
そんな妄想を働かせ始める。

「おい聞いたか？」

「ああ。勇者が放り込まれたんだってな……何でも魔王に匹敵するぐらいの闇の力を持っているらしいぜ」

「俺にはとてもそうには見えんが」

「見た目で判断するのは危険だ。モンスターのの中には人間に化ける奴がいるって話があるぐらいだからな」

看守の話が聞える。その話は自分の事のようにだった。

唯一の暇潰しなので優は何も言わず黙って聞く。

「しかしどうなるんだアレ？」

「公開処刑するって噂だぜ……」

「公開処刑？」

だがその一言を聞いて優は悲しむよりも「ああやっぱりか」と思った。

「だけどなあ……魔王に匹敵する程の力を持った奴が大人しく処刑されると思うか？」

「ああ……けどもしそれだけの力があつたら今頃牢屋から抜け出してるんじゃないのか？」

「成る程。頭がいいなお前」

「それでも商人の息子なんだな。だがここまで静かだと逆に不気味だな……」

ふと看守二人が優の前を通りかかる。全身に鎧を纏って顔は分らなかった。

だが驚いている様子だったのは分る。

「噂をすれば何とやらだぜ……」

「ああ。せつかく勇者として召喚されたのに……ヒデエもんだな」

どうやら自分なんかに同情してくれているらしい。

ちよつとそれがおかしく感じた。

その時だった。

城内全体を揺るがす様な地響きが響く。

最初は地震かと思ったがまるで重たい塊が落下する音が耳に響いたところを考えれば何かが落下したのだろう。

「何が起きた!!??」

「分らん!! 俺は上を見て来る!!」

続いて破壊音が耳に届く。

作業重機で物を壊す音に似ているが勢いや破壊音が段違いに此方が大きい。

まるで怪獣が暴れ回っているようだ。

どう考えても尋常ではないだろう。

(だけど今の私じゃどうしようも……)

それを確かめる術を優は持たなかった。

その頃、アルクレス城の城門では

「何だアレは！！??」

高い城門に匹敵する程の巨大な鉄の像。

柱の様に大きな円柱状の銀色のボディ。昆虫の様な四本足。城壁を力任せに粉碎できそうな巨人の腕。赤い光りを放つバケツを引っ繰り返したかの様な形状を持つ頭部。異形とも言えるゴーレムの姿がそこにあつた。

一体何処からこんな巨大な物体が現れたのだ？ 監視は何をしていた？ などと声が飛ぶ中、そのゴーレムは腕を振り回して周囲の物を無差別に破壊して回る。

僅か一分もしない内に門や城壁はズタズタに破壊され、居合わせた兵士達はこの奇襲攻撃に成す術も無く吹き飛ばされて行った。

『どうもおおおおおお！！ 魔王リベレイターの者でえいす！！ 掟破りとか言う奴もいるかしんねえけどよお！！ 悪いけどこれえ現実なのよねえ！？』

図体がデカイゴーレム頭部の脇。

そこに立つローブの人物が高らかに宣戦布告をした。

勇者召還からまだ二日目。

前代未聞のチェックメイトを掛けに来たのである。

第二話 END

第二話「勇者の素質」（後書き）

本来は第一話と第二話は引っ付けて投稿するつもりでした。ですが長過ぎるのもアレなので別々に分けて投稿しました。

次の投稿は来週を予定しておりますが小説の完成次第では修正次第で随時UPして行きます。

ご感想・質問・指摘など随時受け付けております。

第三話「脱走」

優しき勇者・悲しみの冥王

第三話「脱走」

『オラオラオラオラ！！ さつさと勇者を出して見ろよぉ！！ おお！？ それとも勇者がいなければ何もできねえ引き籠もり国家がコラア！？ 根性出して見ろよ！！ えええ！？』

罵倒しつつも四本足の鉄ゴーレムは破竹の勢いで城を破壊して回る。

その後にゴブリン、オーク、首なし騎士ことデユラハン、石造の悪魔ガーゴイルなどが続き破壊活動に拍車をかけた。

「応戦しろ！！ 魔法攻撃の一斉者で仕留めるんだ！！」

鎧を身に付け、その上に赤いローブを羽織った魔法騎士達が到着。すぐさま槍を模した杖を構え、横一列に隊列を組んで呪文の詠唱を始めた。

彼達は王宮に使える騎士達で魔法使いの中でもエリート中のエリートである。魔法を使った戦闘だけでなく魔法を使った接近戦もこなす。

その中でも彼達は炎の魔法を得意とする部隊だった。

『あああん？ 魔法騎士団のお出ましカア！？ やつちまいなああああテメエら！！』

この部隊の出現に反応して魔物の一部が此方へ向かって行く。

しかしこう言う時のために高度な訓練を受けていた魔法部隊の展開は速かった。

早々と横一列に並び、迎撃態勢を整える。

「撃て！！ ファイアアロー！！」

一斉に攻撃魔法が放たれたのにはそう時間は掛からなかった。

それ達は全て火の呪文で統一され、放たれた火炎は混ざり合う様に一つの大きな火球となって魔物の一団をゴレーム諸共飲み込もうとする。

これが合体魔法。今回の場合は同じ属性の技を同時に唱える事によりその威力が倍加する物だ。

本来ならば上位モンスターですら致命傷になりうる一撃で周囲のモンスターは絶命したが砦の様な大きさのゴレームはまるで逆鱗に触れられたドラゴンのように騎士達へ襲い来る。

「散会しろ！！」

察した騎士達の行動は早かった。すぐに退避行動へ移る。

『魔法対策はバツチリ何だよボケなすがあ！！？？』

そのまま騎士団を巻き込むように城壁へタツクル。

轟音と共に激しい土煙が舞い上がり、瓦礫が宙を舞って二次被害をまき散らす。

怯んだ隙を見計らって次々と無尽蔵の如く出現するモンスターが襲い掛かった。

一瞬にして戦いは個人の武力が物を言う乱戦となり、次々と魔法騎士団の面々は討ち取られていく。

更にはゴレームが味方諸とも暴れ回るため、余計に被害が増大す

る。

一見愚策に見えるが費用対効果の面で考えればとても有効だ。
なにせモンスターなどそこら辺にいるのに比べて優秀な兵士を生み出すのには長い歳月が必要となる。

とても一朝一夕では補充できない。

得に魔法騎士団はこの国で言うところの地球の特殊部隊に相当するポジションだ。普通の優秀な兵士を育てるのによりとても手間暇が掛かる。

それに引き替え巻き込んでいるモンスターは替えが幾らでも効くのだ。

またモンスターと言っても雑魚ばかりではなく中には幾ら兵士を集めてもどうにもならない数など無力染みた存在までおり、その対処は魔法騎士達や勇者と言った存在だ。

その事を考えるとこのサイエンの行動は大きな痛手ある事が分かるだろう。

『ふふふふ……派手にやってるな。サイエン』

『ヴェルム様。手筈通り、我々は勇者の抹殺を行います』

その様子を城内で眺めている一団がいた。

黒騎士とも言える不気味な格好。龍を模したヘルムに顔を覆い隠す仮面、血の様に赤いマント。触れただけで呪われそうな禍々しい大剣を手をしている。

ヴェルムと呼ばれた黒騎士の周囲には骸骨の兵士や頭部から不気味な光を放つフルフェイス仕様の騎士達や幽霊のように浮かぶローブの物体があり、その周りには血を流して倒れている兵士が何十名といた。

鎧や剣、盾諸とも両断されており死体の顔も何が起きたのか分からないような驚愕なままの顔になっている。

増援が駆け付けてこないのは悲鳴を上げる間もなく殺されたから

だ。

言い換えれヴェルムがそれ出来るほどの実力者である。

『ああ。私は王族を皆殺しにして来る……神殿の方の勇者はどうなっている？』

『元々今回の作戦は勇者が一人であると言っ前提ですが誤差の範囲内です。今部隊を引き連れてタウラスが向っています』

傍に控えていた青い騎士が答える。

此方もやや簡素だがフルフェイス仕様の装備で固めていた。違いを挙げるとすれば丸いヘルムの頭頂部に一角獣を連想させる角が生えていることだろうか。

彼はヴェルムの副官的な立場なのか淡々とした口調で状況を告げている。

『あのタウラスか……あの程度に殺されるならあちらの勇者の力もその程度の物だな』

『ごもつともです』

魔王軍の行動はまるで地球の軍隊の様に素早かった。勇者復活を聞き付け、そして強大な能力があると分った途端すぐさま全力で潰しに掛かったのだ。

掟破りもいいところであるが態々自分達を殺しに来る奴を強くなるまで待つ奴などよくよく考えてみれば非現実的であろう。

『それにしてもヴェルム様……本当に殺すつもりですか？』

『勇者に情でも湧いたか？』

『いいいえ。捕まっている勇者は処刑する動きがあつたのですから、何も急いでやらずに処刑するのを待ってからの方がよろしかったのではと……』

最もらしい事を提案するが

『だが表向きは処刑した事にしてエデルカディア教会の連中が密かに連れ出し、暗示を掛けるなどして前線に送り込むやもしれん』

『……確かにあの教会ならばやりそうですね』

とてもブラックな会話を交しながら目的地に向うヴェルム率いる部隊。

道中小出しに迎撃の兵士が出て来るがそれも小数が殆ど。今の様に混乱した状況下ではマトモに統制がとれていないのか散発的な遭遇戦のみ。想像以上に順調だった。

この状況は何も王国軍が無能だからでは無い。

自分達が街や砦などを進行せず初手で本拠地へこうして部隊を送り込んだのだから。

例えるならばチェスでいきなり第一手でチェックメイトを宣言するようなものだろう。

恐らく国王達も仰天したに違いない。

『案外楽に片付くかもしれんな』

城の最上階に位置する王の寝室。

そこにあるテラスからこの国の王様「デュラン・アルクレス」はアイアンゴーレムが縦横無尽に暴れまわる様をじっと眺めていた。

あのゴーレムを操る操縦者の罵倒するような叫び声もここまでシッカリと届いてくる。

まるでこの世の終りを見ているかのように顔を青くし今にも気を失って倒れてしまいそうだ。

「何と言う事だ……此処まで侵入を許すとは」

「恐らくかなり以前から計画していたのでしょうか……」

「魔物にそれだけの頭脳が？」

大臣へ意外そうに聞き返すデュラン王。

「一般的に知られている魔王はいわゆる無秩序で力押のタイプの魔王です。ですが今迄現れた魔王の中には今回の様に緻密な作戦を立てるタイプもいるのです」

「そうか……ではこれはまさか……勇者の召喚するタイミングを狙って!？」

「ええ。どう考えてもタイミングが良すぎます。恐らく勇者の光臨による希望で湧き上がる我々の精神を打ち砕く腹積もりなのでしょう」

大胆な奇襲。それを練る計画性。そして士気を挫く精神攻撃。そこまで考えて行動する魔王に対し、改めて王は自分達が相手する敵の手強さを思い知った。

「今ガイウス及び動ける限りの全戦力が迎撃に向っていますがこの混沌とした状況下ではマトモに指揮を」

「もう良い!! それで……どうすればいいのじゃ?」

そう言われて言葉が詰まる大臣。

希望の勇者はまだ召喚されたばかりでヒヨツ子もいい所である。

城の地下へ放り込んでいる勇者を迎撃に出すと言う考えがあったがすぐにこの案を取っ払う

いきなり人を化け物扱いしておいて、自分達が危ないから助けてくれと言われて引き受けてくれる姿がどう考えても思い浮かばなかったからだ。

と言うかそれで助けてくれるのならソイツは勇者と言うより人格破綻者が聖人君子その物かのどちらかである。どちらかと言うと自分達に牙を向けそうだ。

「落城の危険もありえますわ。先ず一旦この城から脱出し、安全な所に逃れるのが良くて？」

ツカツカと紺色の髪のを揺らしながら女王が入って来る。傍には侍女と王女がいた。

何時アイアンゴーレムのタックルを食らって瓦礫の下敷きになるか分からないこんな状況下だと言うのに女王はとても落ち着いていた。

半面王女や侍女達は何処かソワソワしている。

その内心を窺い知ることは出来ないがこの場から一秒でも速く脱出して欲しかった。

「おお。マーヴル（女王）、アリーシャ（王女）……まだ逃げていなかったのか？」

「この状況で安全な場所など何処にもありませんわ。それよりもいい打開策は見つかりました？」

「それは……」

「それよりも姫様、王女様……あのゴーレムは騎士隊が食い止めています、ここも危険です。王と共に逃げて下さい」

大臣は国の精神的支柱であり、そのトップである王族達に進言する。

「ロベルト…死ぬおつもりですか？」

「ええ。幸い先代の勇者の御陰で我がアルクレス王国の人材は未だ有能揃いですから」

早い話自分が死んでも国の運営は問題ないと言う事だ。

つまり自分はここを墓場にすると言う意味にもとれる。

そう感じさせるくらいロベルトはとても爽やかな笑みを浮かべていた。

「だけどソレは將軍の仕事では？」

「將軍ですか……そう言えば未だに姿を見せませんな。まあ口だけの男ですから」

ワザとらしく周囲を見渡す大臣。

そこには件の將軍はいなかった。

「それに、私も男の子ですから言うのには懂れた事がありますかね。その夢が最後に叶うのも悪くない人生なのかも知れません」

と笑って見せた。

王達はその表情に男の覚悟を悟ったのかも言うわなかった。

その頃優は

「遅れてすまん少年……」

（ネルさん？）

優は首を傾げる。牢屋の前に紅の甲冑を纏う女騎士ネルが現れた

のだから。

正体を隠すためか白いマントの上から更に灰色のローブを羽織っており、優の前に現れるとソレを脱ぎ捨て綺麗な青くて長い髪の毛と浅黒い肌、黒いレオタードと赤い騎士甲冑を装備した姿を披露する。

「不幸中の幸いだが…魔王軍の襲来で城内は混乱している。だから今の内に脱出するぞ」

「脱出？」

「そうだ。ここにいても恐らく言い様に使い捨てられるだけだから一緒に来い！！」

「でも……」

混乱に乗じて奪ったのだろうか、鍵が開けられた。

優は不安な足取りで歩く。

「ごめんなさい……出れません」

だが途中で足を止めた。

「な……」

突然歩みを躊躇う理由が分からず驚愕した。

「私のせいであなただに迷惑を掛ける事は出来ませんから」

淡々と掠れた声で本心を明かした。

その言葉が以外だったのかネルは言葉を失う。

「私は……奴隷の様に暮して来ました。何時も他人に迷惑ばかりか

けて。生きてるだけでまるで汚物のように扱われて……そんな自分にあなたを巻き込みたくないだけです」

ポツリポツリ優は本心を明かして行く。

「だからネルさん。私のことはいいですから……」

乾いた音が響いた。

「ふざけるな……お前はただ自分に都合のいい理屈を並べて自分を無理矢理納得させてるだけではないか!!」

「……そうして来ましたから」

再度平手撃ちをする。

「前の勇者もそうやって……他人から与えられた使命をそうやって納得させて……それは勇気でも何でもないしましてや自己犠牲でもない!! ただの破滅願望だ!!」

瞳から滴を流して訴えるが優は表情を変えなかった。

（どうして私に涙を流すのだろう……）

それは初めての経験だった。

「……先代の勇者は私の弟だ」

唐突にその事実が明かされる。

「本当にいい子だった。争いが苦手で、運動神経が悪くて……だけ

ど人一倍頑張り屋だった……」

「……それと私がどう言う関係があるんですか？」

「お前を弟の様にしたくなかった！！ 魔王に殺された事になっているが違う！！ 勇者を殺したのはこの国の人間も同罪だ！！」

勇者召喚の儀は本当に素晴らしい魔法だ。

優秀な戦士を選定し、そして選び出すために……。

だが同時にソレは自分達の手で魔王を倒すと言う諦めを宣言する行為でもあった。

私の弟が勇者に選ばれた時はそれはもう喜んだ。

弟が英雄になる。

国を救う勇者になる。

だが弟の本心には気付いてやれなかった。

それに気付いてやれたのは生き残った仲間から直接聞かされた時だった。

止めたい。

だけどそれはできない。

誰かがやらないといけないから。

勇者として選ばれんだから魔王を倒さなければならぬ。

そんな自己暗示に似た言葉を繰り返し、精神が磨耗して行ったそうだ……。そしてその最後は、貴族の尻拭いの為に無謀な戦いを挑んだらしい。

「……その貴族を憎む気にはなれなかった……私もまた勇者と言う力の前に媚を振る犬だったから……だから強くなろうと思った……また勇者が召喚されたら……もうあんな末路にならない様にと……ずっとずっと……」

優の胸倉を掴み、牢屋の固い壁に叩きつけた。

「それなのに……お前は どうして嫌の一つも言えないんだ！？ どうして自分の運命に抗おうとしないんだ！？ お前にはアレだけの力があるのに……」

「ネルさん……私は……私は……」

今なら言える気がする。

今迄ずっと言えなかったその一言が。

「どうした？」

思えばずっとこの時を待っていたのかもしれない。

「救われても……いいんですか？」

それを聞いたネルは先程までの怒気が嘘のように優しい笑みを浮かべてくれた。

「初めて自分の意見を言えたな？」

「え、ええ……」

態度を急に和らげたネルの変化に優は戸惑う。

この人は先程までアレだけ怒っていたのに此方が譲歩した途端急に表情を和らげてくれた。

嫌な気持ちは湧かない。

「あ……そそ、その、すまない。緊急事態ゆえに荒療治を取らせて貰った」

自分を叱り付けた相手の変化に気付いたのか慌ててネルは照れ隠しするように謝罪する。

若干ぶつきら棒で失礼な謝り方だが優にとってはそれで充分だった。

「ネルさんって、とてもいい人なんですネ」
「ッ!？」

少女声で両頬を赤く晴らしながら初めて見せた天使のような微笑み。目から零す涙と言う笑顔と相反する要素がマッチしより今の優を魅力的に引き立てる。

一瞬ネルが優の性別が分からなくなった瞬間であった。
ちゃんと光からは男だと聞いていたがこうして見ると本当に雄であるのか疑わしく思えてならない。

（い、いかん……何を考えてるんだ！？）

このまま抱きしめたい衝動と深い罪悪感のような物が入り交じったような気持ちが沸き上がってくるが今は何時敵がここに来るのかも分からない状態だ。

これ以上視界に入れるとどうにかなりそうなので　ネルは背を向け手を差しのばす。

自分でもどうかしているとしか思えない妄想が頭の中で次々と沸き上がるが何とか気合いでそれを振り払う。

「と、兎に角一旦通路へ出るぞ」

「はい……」

やや強めに手を引かれて半ば引き摺られるように優はその場を後にする。

だが不思議と悪い気はしない。

ただただ優は自分自身の中に生まれた暖かい気持ちに戸惑うばかりであった。

第三話　E N D

第三話「脱走」(後書き)

どうも～仮面ライダーアギトに嵌っている+絵の作業などで制作ペースが落ちているRです。

このまま第四話へ行きたかったんですが、申し訳ありませんが今日はここまでしておきます(汗)

チートを期待している方はすみません。

次回更新分で修正作業が辿り着いたらいいな～と思っています。

ご意見・ご感想お待ちしております。

第四話「死」

優しき勇者・悲しみの冥王

第四話「死」

その頃、光は神殿は神殿に使える騎士達と共に戦っている。

戦いの舞台はあの選定の儀が行われた（光にとって）忌まわしきホールであり、そこで（何かしらの補正が働いているのか）獅子奮迅の活躍を見せていた。

「でやああああああああ！！」

手に持った剣で次々と薙ぎ倒す。

光が持つ剣は神殿内に保管された武器であり、そして今の光には知る由が無かったが先代勇者が使っていた武器だった。

元々身体能力の良さと聖剣「ブレイブキャリバー」から流れ出る力。そしてリアルタイムで開花して行く自分の能力が併せ持ち、この神殿に襲撃して来た魔物を次々と倒して行った。

一振りするだけでゴブリンやオークが絶命して行く。神殿の騎士達の手厚い援護もあって優勢だった。

この神殿の襲撃を任されたミノタウロスのタウラスはトマホークを床に着いて、鼻息を荒くし、自分達の部下の不甲斐なさを嘆いた。身の桁五mを誇る巨体は自分の身長並にあるトマホークを光へと向ける。

「お前で最後だタウラス！！」

「おのれえええええ！！
たかが小僧だと思っていたが油断したわ

！！　かくなる上はこの俺様が直接手を下してくれる！！」

ビシツと剣を突き付けられて典型的な悪党のセリフを吐くタウラス。もしタウラスが後ろで踏ん返り返っていないで勇者を足止めするなり配下を勇者にぶつけている間に護衛の騎士達を倒すなどしていればまた違った結果になっただろうが後の祭りである。

「観念しなさい。この戦力差ではあなたの負けは確定です！！」

「黙れエエエエエエエエエエ！！　貴様達人間如きに退かぬ媚びぬ省みずうウウウウ！！」

雄叫びと共にタウラスは力任せにトマホークを横に薙ぎ払った。ホールの壁をぶっ壊し。硬い大理石の地面を抉る。咄嗟に飛び上がって光は回避。バク転を何度も決めながら地面へ着地する。

それに合わせて後方に待機している白いローブを身に纏い、騎士甲冑を付けた神殿の騎士団が一斉魔法攻撃を行う。神殿の騎士団はアルクレス王国の王宮に使える騎士団とは別の命令系統に位置し、神殿騎士団とも言われていた。

彼達は国家と言う概念に縛られず、その国での対魔王戦略をサポートする役割を担い、その為の戦力をも保有する。

「今です！！」

フィリアの指示で白装束の騎士団が光の魔法光弾を一斉発射。次々とタウラスへ突き刺さる。

彼達は勇者が扱う光魔法を中心に魔法を学び、武術も学んでいた。その戦闘能力は軍隊に勝るとも劣らないとされた。

「光さん！！　止めを！！」

「ああ！！」

迷う事無く光は踏み込む。

ある程度の距離まで近付き、自分でも信じられないぐらい高さまで跳躍。

唐竹割の要領で白い聖剣ブレイブキャリバーを振り落した。

「うおおおおおおおおお……リベレイター様
あー！ 申し訳ありませんぅううう！？ あああああああ
あああああああああああああああー！」

ズシンと言う音と共にタウラスは両側へ割れた。

「ふう……何とかなった……」

光はその場に蹲って一息付く。戦いが終わったと思った途端疲れがどつと出る。

まるでマラソンの授業を終えたかのように。そんな光にフィリアは辛い現実を教えるのであった。

「ヒカル様。この神殿はどうにか撃退できましたがまだ城の方に多数モンスターがいるそうです」

「何だつて！！？？ じゃあ此方は……囧……？」

「もしかすると両方だったかも知れません……ともかく城が落ちれば魔王討伐所ではなくなります」

「じゃあ早く何とかしないとー！」

神殿に爆発音が鳴り響いたのは其の時だった。

「この爆発……とても近くからですー！」

「まだ敵がいたのか！？」

動揺する光達。何が起きたかはすぐに分った。

「大変です！！
召喚の間が破壊されました！！」

「なっ！！！！」

この場にいた人間全てが顔を青くさせる。

光もとんでも無い事が起きたのは理解出来た。

「召喚の間って……」

「ヒカル様がユウ様と共に初めて来られた場所です……」

ああ、あの場所かと頭の中で思い浮かぶ。

確か床に魔法陣が描かれていてその周囲に水が流れていた部屋だ。

「あの場所が無ければ勇者の召喚は出来ません。それ所か元の世界に帰る事すらも……」

「ええええええええええええええええええ！！？？」

心底驚いた光であつた。

優は危機的状況に陥っていた。

『この状況下で何処へ逃げようと言うのだ？　もう一人の勇者よ』

優とネルは城の広間で敵と鉢合わせしていた。もう外まで目と鼻の先だと言うのにである。

死霊・悪魔系のモンスターが数十体。そしてリーダー格と思われる黒騎士が一体。（龍のヘルムを被った仮面の騎士。ヴェルム）

対する此方はルネと光と違い足手纏いの優。泣きたくなる程絶望的な戦いだっただ。

ネルは剣を構え後ろに優を立たせる。

「すまんユウ……こんな事になってしまつて」

「いえ。ネルさんは悪くありません。此方こそ……力が無くてすみません」

『アレだけの力を放出しておいて力が無いだと？ 本気でそう思っているのか？』

騎士が大剣を向ける。

『我が名は魔王リベレイターに仕える騎士ヴェルム。勇者ユウ……貴様は危険過ぎるのでな。今ここで死んで貰う』

冗談ではない。

折角自分の物語が始まろうとしているのだ。

（こんなところで終らつてたまるか！！）

手を強く握り、睨みつける。

「かれ！！」

ヴェルムは重厚な鎧を着ているとは思えない速さで大剣をネルに振り下ろす。

咄嗟にネルはユウを片手で抱き抱えその場から白いマントを靡かせながら飛び退く。同時に兜の奥底から不気味な光を放つ黒

い騎士と宙に幽霊の様に浮かぶロープの物体「メイジスペクター」が襲って来る。

ここでネルが取った行動は迎撃

「邪魔だ!!」

片手で一閃、二閃。ロングソードの一撃で斬り伏せ走った。

『中々いいセンスだ。だがその役立たずを連れたのは愚かだったな……やれ!!』

『ハッ!!』

何処からとも無く青い騎士が現れ、剣から魔法が放たれる。

名はアイスニードル。氷の氷柱を矢の様に発射する魔法。それを計三発背後から浴びせる。

目標はユウ!!

「クッ!!??」

咄嗟にネルはユウを投げ飛ばす。硬い地面を滑り、ユウはすかさず起き上がった。

「え……」

ユウは一瞬これは夢だと思った。

「ネルさん？」

視界に移るのは腹部の黒いレオタード、肩のショルダーアーマー、そして右胸を氷の氷柱で貫かれたネルだった。

「あ……ああ……」

恐いとか死にたいとかそんな気持ちは一切沸かない。

「ああ……」

周りにモンスターがいるが視界に移らなかった。ネルは涙を流して此方を見詰めているのが見える。

「逃……げろ……」

それだけハッキリと聞えてしまった。

『人の死になれていないのか……何とも情け無い有様だ。貴様に勇者の肩書きは重過ぎたようだな……』

敵が何かを言っている。

『その才能を発揮できぬまま死ぬがいい!!』

剣を奮つ音が聞える。それよりもネルに止めを刺そうとする剣を持った骸骨が目に入った。

『なっ!?!』

最初で最後の人助けになるかも知れない。

「ユウ……お前……」

骸骨の剣士を体当たりして突き飛ばす。

「何で……逃げない……」

ソレは咄嗟の事だから自分でも分らなかった。

「ネルさん」

改めてネルの顔を見た時。

「ええ？」

鋭い痛みが胸に走った。

「ユウ……」

驚愕の瞳が移っていた。

「あれ……おかしいな……体が急に……言う事聞かなくなって……」

糸が切れたかのように優はネルへ倒れ込んだ。

その後ろには血の付いた大剣を持つヴェルムがいる。

『ふはははははははははは！！ 勇者はこのヴェルムが討ち取った！』

「き、貴様ア！！」

優と自分の血で濡れた体を引き起こし、氷柱を引き抜くと同時に緑色の光 回復魔法「キュア」を優へ掛けて行く。自分の魔力を全て注ぎ込むつもりで。

もう後先の事など考えてられなかった。だがその努力を嘲笑うようにヴェルムは笑う。

『無駄だ…もう刺し貫かれた時点で既に絶命している』

「黙れ!!」

『しかし選定の儀の時はアレだけの力を発揮したと言つのに……拍子抜けだったな。まあいい。この渴きはもう片方の勇者で潤すとして』

「黙れ!!　まだ死んでいない!!」

現実から目を逸らすように何度も何度も回復魔法を重ねがけする。

「また…また私は救えなかったのか!!??」

ネルのの悲痛な叫び声が木霊した。

『ふん。そんなにショックなのならお前も後を追わせてやろう!!』

ヴェルムは二人に大剣を振り落した。

第四話　END

第四話「死」（後書き）

大宮 優・再起不能

優しき勇者・悲しみの冥王・完！！

てな事にはなりません。まだまだ続きます！！

「言われそうなのでさっきに説明して置こうなコーナー」

光無双について

元々光は「無条件でもてるギャルゲーのムカツク主人公」と言うコンセプトの元に制作されました。

だから「テメエふざけんなよっ」て言うぐらいのチートになります。

「優しき勇者・悲しみの冥王番外編」

優「どうも優です。今回は作者の作品の垣根をぶっ壊して天照学園放送スタジオからお送りします」

光「って……なんで態々そんな事を！？ しかも性格変わってないか！？」

優「酷いです光さん……そんな事を言う人はあなたのお子さんから借りましたと称していい男の肉体美を満載したゲポルノを大量に送りつけちゃうぞ？」

光「やだああああああ！？　こんなの優じゃない！！　あまりにも本編から性格掛け離れてるよ！？」

優「中の人が出て来るラジオも大体こんな感じでしょっに」

光「中の人とか言っな！？」

優「さて、お頼りコーナーとかやりたいけどね、感想が沢山きてないから出来ません。残念！！」

光「てかまだ十にも満たないだろう……」

優「じゃあ次のコーナーヤサカナ（タイトル）の（仮）略称）探偵団に移りたいと思います。今回は依頼も何も来てないので捏造しますね」

光「酷いな！？」

優「今回登場したブレイブキャリバーです」

光「ああ、アレか……不思議な剣なんだよな、握っただけで物凄い力が湧き出て来てさ」

優「その通り。あの剣実はゼロの使い魔のガンダールヴのルーンの効果を使用者に与えるのです。ですけど弱点も共通で使用者を歴戦の勇士にするのではなく悪魔で身体能力の底上げですから歴戦の勇士にはなれると言う上手い話じゃありません。また精神に迷いがあるとその力が発揮できないと言う点も共通してますね」

光「詳しいな……」

優「だって作者の設定ファイルが手元にあるから」

光「あらら……」

優「さて……次回予告ですがあまり多く語るとネタバレになるのでスルーします（感の良い読者は分ると思うけど）。次回もやるかどうかは分らないと思うけどまたね」

光「あ、もう終りなんだ。え〜と次回は来週中に上げたいと思います……との事です。次回もどうぞお楽しみください」

「ご意見」感想お待ちしておりますBY作者

第五話「覚醒」

優しき勇者・悲しみの冥王

第五話「覚醒」

気がつくと自分は宇宙空間にいた。

真下には広大な青い大地、地球が広がっている。

そして目の前には今朝、自分の体から現れた黒い魔神の姿があった。

優……遥訳会えたね

あなたは誰？

声には出さず二人は念じるだけで意思疎通ができていた。その事に口を挟まず話を進めて行く。

僕は君と共に……生まれた時から。いや、生まれる前から共にあった。だから君自身なんだ

つまりもう一人の僕？

そう……早速だけど君には三つの道がある。片方は最強の力を得る変わりに全てを滅ぼす悪鬼となる道

それは到底取れない道であつた。

後の二つは？

このまま安らかに一生を終える道

少しの沈黙の後、優は口を開く。

最後は？

最後は……一時的にその力を得る変わりに、何かの代償を払わなければならぬ

代償？

今の君の体では到底私の力に耐えられない。だから何かしらの身体機能が必ず犠牲になる

……それでも私は……力が欲しい。最強の力じゃなくてもいい。ただ皆が……笑っていられる力が……ネルさんを救う力が……

本心を搾り出す。自己犠牲だから。仕方の無い事だからじゃない。心の底からそうしたいと言う願いからだつた。

わかつた……

そして時は流れ出す

『なっ……？』

ヴェルムとネルは目を疑った。

「ゆ……ユウ？」

そこにはヴェルムの体剣を片手で受け止めるユウがいた。
体中から紫色の光が溢れ出ており、血を浴びて破れた学ランも全て元通りになっている。

『な、何が起きた！！？？ い、息を吹き返したのか！！？？』

大剣が砕け散る。それもバラバラではなく、まるで光になる様に消えて行く。

一体この少年は何をやったのだろうか。いや、何が起きたのだろうか？ 訳が分らなかった。

それに体から感じる魔力量が半端無い。それこそ国一つを容易に壊滅できそうぐらいの貯蔵量だった。もしこれを自由自在に使われたら想像も付かない。

『き…貴様…何をやった！！？？』

「物質の原子構造を読み取り、その構造に合わせて魔力の振動波を打ち込んだだけ」

「ゲンシコウゾウ…？」

続いて他のモンスターが一齐に襲い掛かった。

空中で魔法を放つスペクターゴースト。刃物を持って襲い来る騎士。骸骨。しかし優は動じなかった。

直接攻撃したモンスターはまるで巨人に殴られたかのように吹き飛び壁に激突してバラバラになる。放たれた魔法はそれを唱えたモ

ンスターの元へ跳ね返って行く。

「マテリアリフククター正常作動確認……」

ヴェルムは戦慄した。この少年の突然の変わり様に。

確かに殺した実感がある。息を吹き返したのも何らかの奇跡が起きたで片付ける事ができるがこれは幾ら何でも異常だ。

圧倒と言っ言葉すら生易しい絶対的な力。勇者と言っよりも魔王に近い物を感じ取る。

同時に自分の予想が実現してしまった事が分った。あの勇者は恐らくその力を持って我々を駆逐するつもりだと。

『ヴェ、ヴェルム様……!!』

『ええい!! ここは退くぞ!!』

床に魔法陣が展開。

光に包まれてヴェルム、副官と思われる青騎士が消えて行く。

「ユウ…なのか？」

ネルは不安げに聞く。魔力の爆発的变化にも驚いているが他にも氷の様に冷たかった表情が柔らくなっていたり目の色が違ったりなど違いが多々ある。

そんな心境を察してくれたのか優は可愛らしい女の子のように微笑んでくれた。

「待ってください。すぐに直します」

「え……」

優が両手向けるとネルの体は文字通り元通りとなっていた。

それだけでなく鎧の破損まで直っている。回復魔法であってもこれは有り得ない事だった。

「一体どうやってこれだけの力を……今迄隠していたのか？」

「いいえ。詳しくは言えませんが再び目覚めたのは先程です」

「どう言う意味だ？」

意味がよく分らないのでネルはより深く問い質した。

「今の私は優であつて優ではありません。優の記憶は全てありますがその記憶を全て持った別の人間だと考えて下さい」

「別の……人間？」

もつと聞きたい事は山程あつたが建物全体を揺らす様な地響きで会話は中断される。

「どうやらまだ戦いは終わっていないようですな」

スタスタと歩いて行く。

「ど、何処へ行くんだ？」

慌てて引き止めようとするネル。

「私は確かに人に恐れられて当然です。私は魔王すら超えた最強の破壊者なのですから……」

「何を言つて……」

ユウの体が光に包まれて行く。頭部に血の涙の後が付いた様な模様が刻まれている白い仮面。頭に聖職者の様な縦長の紫色の帽子や

胸、ガントレットに赤い宝玉が埋め込まれている。鋭い肩―アーマー他全身鎧のカラーは足元に至るまで紫に変わっていた。

手には東洋で使われている青龍刀が新たに出現している。翼の形に似た赤いマントを羽織り、最終的に全身が紺色の禍々しい鎧を纏った仮面の騎士へと変貌した。正しくその姿は選定の儀に優の体内が現れた黒い魔神の姿であった。

基本色は黒から紫色へ変わっているだが本来はこの姿こそが正しい姿であるとすぐに分った。体全身に漲るように魔力が滲み出るその禍々しい姿は誰もが畏怖と恐怖を覚えるだろう。

だが何故だろうか

（何だ……この見ているだけで寂しくなる様な……切なくなる様な不思議な感覚は）

どんな感情よりもそんな感情が優先して湧き出て来る。理由は分らない。だがそう感じざる終えなかったのだ。

「ありがとう…ユウに今の自分と向き合う勇気を与えてくれて……その恩返しを今からしに行きます」

不気味な白い仮面越しに優しく語りかけると赤いマントを羽織った背中から紫色の光を放つ翼が現れた。

『しづといゴキブリどもがあー!!』

「応戦しろ!! 必ず勝機はある!!」

騎士団の混成部隊と四足足のアイアンゴーレムとの戦いは佳境を迎えていた。騎士団達は魔法騎士を中心に合体魔法の大火力でアイ

アンゴーレムの動きを封殺し他の騎士達はその援護に回る。

単純明快だが逆に単純な陣形は弱点は少なく、その弱点をカバーし合う様に動けば破られ難い。それ故に手強い布陣だった。

魔王軍側も既に奇襲の恩得は薄れてしまい、逆に騎士団の優秀さとその精強さを身を持って味わっている。配下の魔物ももう逐一出現するだけで統制が取れずになっていた。町を襲撃していたモンスターが合流してくるなどトラブルがあつたが予想以上に数が少なく（*実は光が倒した）概ね戦況は騎士団側の有利だった。

「ガイウス団長は部隊を率いて王族の護衛に回ってます。また部隊の一部を大臣の直営に回しました」

「ご苦労だったわね…後はあの化け物をどうにかしなくちゃならないんだけど」

腰まで届くウェーブ掛かった海のように多いロングヘアーを横幅が広い青い帽子で保護し、大人びた知的そうな瞳の上に丸メガネを掛けている。細心の黒のロンググローブに大きなキセルを握り、白い肌とセクシーなボディが目立つ体は胸元がパツクリ開いた青いドレス、細長い足を黒いロングブーツで保護している。

複数の部隊からなる魔法騎士達のを務める「マーレイド」。またの名を「水の魔法將軍」とも言われている。王宮の騎士団を纏める団長の候補として挙げられた程の実力者だが現団長に譲った経歴の持ち主でも合った。

そんな女性が目の前の化け物をどうするか考えていた。アイアンゴーレムの操縦者を直接倒す手もあるが、どうやら中に入れるらしくそこへ閉じ籠ってしまった。

また何度も攻撃魔法を浴びせているのだが、一向に倒れる気配が無い。あのゴーレム、どうやら魔法攻撃その物を無効化するのでは無いかと考えている。

直接攻撃で倒そうと思っても城壁に突っ込んでも壊れない程の頑

丈さを持つ装甲だ。並大抵の武器では通用しないのは誰の目にも分る。

「このまま消耗戦は勘弁して欲しいわね…」

「マーレイド隊長！！　勇者が此方へ！！」

「勇者？　確か襲撃されてるって報告はあったけどもう撃退しちゃったの？」

部下の報告と共にフィリアと護衛の神殿騎士、そして剣を持った光が走って来る。

「どうも勇者さん。　なっただばかりで悪いけど状況は最悪だわ。手っ取り早く聞くけどその立派な武器を使って切り裂けるかしら？」

「うーん……　やって見なきゃ分らないって言うのが本音でして……」

光はアイアンゴーレムの巨体に気圧されながらも答える。

（まだ召喚されて一日目なのにハード過ぎないか？）

何か勇者を倒すゲームに迷い込んだ感覚だったけど段々と次々と悪魔を倒すアクションゲーム見たいになっている。

目の前のゴーレムなど本来はもう少し経験を積んでから戦うような相手だと。（自分の事を棚に挙げている光も中々にチートであるが……）

『こつなりや切り札投入じゃあゴラア！！　皆殺しにてやんよお！』

と言った瞬間、空から地響きと共に大きな船が現れた。
まるでクジラを模したかの様なデザインで周囲には護衛なの飛

行可能なモンスターが飛び回っている。驚きと同時にマーレイドは合点が言った。

「そうか…あの船で遠路遙々ここまで部隊を運んで来たんだわ!!」

戦略が逆転した瞬間であった。クジラの口がガコンと開かれ其処からモンスターを乗せた籠を持つドラゴン。飛行可能なモンスター。更にはガーゴイルが次々と現れる。絶望的な光景だった。

『本当はこの城を制圧した後の防衛戦力だったんだけどよおおおおおおおタウラスの脳筋やヴィルムのナルシストがしくじったらこうするしかねえよなあああああああ!!??』

誰しもがこれから始まるであろう勝算の低い戦いを覚悟した。その時であった。

『何だ……魔力数値……測定不可能!!?? 嘘だろ!!?? 測定器が吹き飛びやがった!!』

城が建つ方向から紫色の光が飛んで来る。

「アレは……まさか……」

「大宮なのか」

「ねえ何なのこの魔力量!? まさかもう一人の勇者!!」

誰しもがこの感じる魔力量に畏怖と脅威を覚える。

その根源は空中で翼を紫色に光る翼を羽ばたかせた。

『フェザーミサイル自由発射』

一斉にソレは放たれた。

翼から閃光が飛び出て次々と魔王軍を蹴散らして行く。光はまるでロボットアニメに出て来るロボットのビーム攻撃に見える。

その一撃は容易に硬いドラゴンの鱗を切り裂き、ガーゴイルの石の皮膚を貫く。そんな攻撃を雨の様に乱射。地上にいる四つ足のアイアンゴーレムやモンスターにもまるで爆撃機の絨毯爆撃のように降り注ぐ。

誰かが言った。

神だと。

まるで神話を再現したかの様な圧倒的な姿に目撃者は等しく言葉を失う。絶え間なく光り続けるその攻撃の前に魔王軍は一分も経たない内に数を激減させた。この攻撃はその破壊力、連射力、その量だけではなく誘導性能もあった。

機動性があるガーゴイルやワイバーンもミサイルの様に迫るその攻撃を回避することは出来ずにいる。

『クソツオオオオオオオオオオオオ！ 魔力が吸収し切れねえ！

！？？ 脱出！！』

四つ足のアイアンゴーレムはマーレイトが睨んだ通り外部の魔力を吸収する能力を持っていた。

そのため魔力攻撃に絶対的な防御能力を持つがそれにも許容限界が存在し、サイエンは吸収した魔力を動力や間接部の防御障壁へ回すなどして大幅に消費する事でその弱点を補っている。

だがこのユウの攻撃で一気に限界を迎え放棄。逆バケツ形状のゴーレムヘッドが砲弾の様に真上へ飛び出る。同時にユウの広域殲滅攻撃に晒され現在進行形でダメージを負っているクジラ型空中戦の口に収まった。

船体のあちこちから黒煙を吐き出しつつ休息後退する。これでユウの攻撃は止まったか……に思えた。

「何をやる気でしょうか…」

「分らない。だけど見逃すつもりは無いみたいだ」

右手に持った青龍刀。その刃を横に向けると燃えるようなオーラ
ーが集まり一気に肥大化。魔力は刀身の先で球体の様になる。それ
だけでも見てるだけで寒気がする程の莫大な魔力。

優はソレを逃げようとしているクジラ型の空中戦へと向けた。

『魔神砲・発射』

放たれた攻撃魔法。

一撃で城を容易に粉碎出来る程の破壊力を持った紫色の魔力閃光。
空を照らし夜の闇を食い散らかすかの様に。クジラ船を焼き尽す
様に貫き、欠片の微塵も残さず船はこの魔力砲撃に飲み込まれた。

この瞬間、王軍の勝利が決まった瞬間である。

だが誰もが手放して勝利を喜べなかった。

その圧倒的勝つ禍々しい姿をした勇者を目の前にして。もしあの
力が自分達に向けられたら？

抵抗する間も無く確実に死ぬ。それこそ一瞬で。

優しき勇者・悲しみの冥王

第五話「覚醒」

優はそんな事などするつもりは無かったが、自分の思いとは裏腹

に人々はそう考えているのは分った。

『…行こう』

『何処へですか？　一つ言いますが…この状態は長くは持ちませんよ？』

『分らない……けど、何処か静かな所へ行きたい』
『分りました……』

優は決断すると音速の速さでその場から飛び去った。

自分の新たな物語を始めるために…

E N D

第一章エピローグ

エピローグ

この戦いは後に『アルクレス王都の戦い』と呼ばれる様になり代々語り継がれる事になる。

結果は魔王軍撃退で王軍側の勝利に終った。だが王軍側の被害は多く、特に城への破壊活動の光景や内部侵入、神殿の勇者召喚の儀式に必要な召喚の間の破壊されたことなど精神的大打撃を被った。

試合には勝ったが勝負には負けたと多くの物の心境である。

だが魔王軍側の最大の目的であった二人の勇者抹殺の阻止を成し遂げたのが唯一の救いであり、アルクレス王国は敗戦ムードを遠ざける為光を英雄として称え正式に勇者として大々的に発表する。

そして魔王リベレイター討伐の任を与え、早急に光を旅立たせる事を決意。

一件何処かのゲームの勇者の様な非情な扱いに見えるがこれは被害を王都から遠ざけようとする有力貴族達の差し金でもあった。

こんな水面下で起きるドロドロとした政治闘争など気にもせず光は仲間と共に旅立つ。

アルクレス王都。エデルカディア教の神殿に勤める神官長：フィ

リア。

アルクレス騎士団の女剣士、先代勇者の姉：ネル・ウォーレン。

この三人だけであり、優の姿は無かった。

優は懸命な搜索に関らずその姿を眩ましていたのだ。

だがソレで良かったかも知れないとフィリアとネルは思った。

仮に王族達と和解できたとしても今迄の勇者達と同じく……いやそれ以上に欲深い人間達に利用されるのは想像に難しくなかったからだ。

光は納得行かない様子だったが、今は魔王を倒す過程で何時か会えると納得させていた。

（ユウ……元気にしているか？）

広大な草原の中、ランドドラゴンが籠を動かし大地を走る龍車を動かしつつもネルは祈るのであった。

何処までも続く青い空の何処かにいる勇者の無事を

第一章：光りの勇者・闇の勇者 E N D

第一章エピローグ（後書き）

やっと第一章終了。

第二章は出来れば今週末にでもプロローグ乗っけたいと考えてます。

「優しき勇者・悲しみの冥王番外編」

第二回「冥王の名は伊達じゃない」

優「本当ならゼオライマー並に暴れられるけど実は結構抑えていた優です」（*番外編ではコイツ性格変わります）

光「いや……アレ十分だから。どう考えても戦略兵器の次元だからさ……」

優「だってそう言う設定なんでも〜ん」

光「強過ぎるにも程があるだろ！？ 何だよあの戦闘力！？ タグのスパロボ化ってこれか！？ この事だったのか！？」

優「うん。制作段階で決定事項だったからね。てか君もかなりチートだしいいじゃない」

光「いや……まあそうだけどさあ……」

優「それにさ〜アルクレスの人達も感謝して欲しいよね〜もし僕が

木原マサキ（ロボットアニメ冥王計画ゼオライマー主人公の凶暴な第二人格）みたいな性格だったらアルクレス王都は今頃無に返るところだよ？　んで鬱エンドで最終回だよ？」

光「いや、洒落になってないから……本気でできそうだし……」

優「んじゃあ続きまして探偵コーナー始めちゃいます」

光「前は確かブレイブキャリバーだったけど今回は何やるんだ？」

優「この世界の地図について」

光「そーいや全く詳しく聞いてなかったな……」

優「まずウリエール大陸は地球で言うならユーラシア大陸を横に狭めて縦に広げた感じ。早い話が縦長で横のスペースもある広い大陸だよ」

光「へえーそうなってんだ」

優「で僕達がいたアルクレス王国はウリエール大陸の西部分の沿岸部。北部に近い大陸だよ。特徴的には穏かで温暖だけど魔王達がいる暗黒大陸が遙か西の方にいるから魔王の侵略を比較的受け易いところなんだ」

光「そんなヤバイ所によく国建設できたな……」

優「これも歴代勇者のおかげだよ」

光「……そう言えば今ウリエール大陸には魔王はどれぐらいいるん

だ？」

優「今の時代だとリベレイター、リリス、ギアードが代表的かつとても強力な魔王とされてます。んでその下に格が低い魔王が何名かいて暗黒大陸からは大陸中央部にまで根を置く奴までいるよ。だから最低十体ぐらいはいると言われてます」

光「多いな魔王……」

優「うん。だけど全員が全員強くないから。本当に様々なタイプの魔王がいる設定だよ」

光「大変だなあ……勇者って」

優「さて、今回はここまで。ご意見、ご感想も受け付けております。質問はネタバレにならない範囲でなら答えます……との事です」

光「え」とこのコーナーまだ続けんの？」

イラスト：優＋変身形態

ここでは作中の主人公優とその変身形態を公開します。

まずは大宮 優から

> i 1 0 1 8 2 — 2 4 2 <

ヒーローフォースの倉崎 稜と被らない様にしました（と言うか倉崎 稜の原型がこの子何だけどね……）

元のデザインでは首輪代わりにベルトを付けているデザインです。ですが設定上それを廃棄する形にしました。

このキャラは元々中学時代に作られたキャラでして死神設定などもありましたが何時の間にか自分の手持ちキャラの中では凶悪な設定を持つ最凶キャラになっていました。

次に変身形態

> i 1 0 1 8 3 — 2 4 2 <

冥王の冥を全体で現した様なデザインにしており、記号も冥の漢字を変形させた物にしました。

髪の毛が出ているのはテッカマンブレードの影響です。

羽は一枚ですが奇形マント、ショルダーアーマー、そして翼を真正面から見ると三対の翼になる様にイメージしてデザインしました。

戦闘能力はアバウトにしか決まっていませんが『基礎戦闘能力はラダム製テッカマン並』、『エネルギーは基本無限』です。

まだ明かせない設定ですがこの変身形態はかなり（酷い）制約があったりします。

これはあまり強過ぎるとストーリーが崩壊しかねない為の処置として採用しました。

また他の理由として専門学校の先生に「ヒーロー像」への影響を受けたのがあります。

イラスト：優＋変身形態（後書き）

第二章掲載に先立ち、イラストを挙げて見ましたが如何だったでしょうか？

ご意見、ご感想をお待ちしております。

第二章デモンズパラダイス：プロローグ（前書き）

新章突入しました。

第二章デモンズパラダイス：プロローグ

「優しき勇者・悲しみの冥王」

第二章：デモンズパラダイス

プロローグ

深い木々に包まれた道をガタゴトと音を立てながら荷馬車が続く。外は肌寒く防寒儀を着ていなければ寒さで震えてしまいそうだった。

そんな荷場所の中に一人の少年奴隷がいる。

（ここはどこ？）

名前はユウ。この荷馬車にまるで囚人の様に押し込められていた。荷馬車はまるで檻の箱のようになっており、四角形の木の壁、天井、そして錠が付いた檻。そして様々な人種の少年少女達が鎖や枷に繋がれていた。

この荷馬車の環境は最悪だった。食料は生きるのに最低限な物だけ。

これ運ぶ為に複数の馬が力強くそれを運び、そして同じ様な奴隷箱が数十箱続いている。中には地を走る龍、ランドドラゴンが運ぶ鉄製の馬車があった。このキャラバンを囲んでいるのは柄の悪そうな人間。騎士甲冑を纏った黒いダークエルフ、リザードマンだった。

「ああついてない…どうしてこうなっちまったんだが」

隣の男が言う。髪の毛も茶髪で自分と同じく灰色の簡素な服装をしていたが女の子の体付きをしている自分よりも男らしくガタイも良い。顔を見る限り三十代近くだろう。口の周りはヒゲの跡で覆われている。

この男は他の奴隷達と同様にガタガタと震えている。ユウは寒いとは感じなかったがどうやら外は寒いらしい。

「あの…大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃねえよ。クソ……お前も奴隷として売られたのか？」

「近くの村で拾われて……今思えばとても貧困な村でした。食事も満足に食べられなかったですけど、楽しくやっていたんですが……気がつくところここにいたんです」

「そうか……」

何か哀れめいた視線で見られ優は不思議に思った。

「お前売られたんだよ……」

「え？ 売られた？」

そう言われてユウは自分の世界が止まったかの様に体をストップさせた。

「そんな……悪い事も何一つしていないのに……」

「奴隷の子供にはよくある話だ。飢えを凌ぐ為の金を手に入れる為にまんまと奴隷商人のいい値で安く売られる。魔王の侵略が激しい国とかじゃよくある話だ……」

ユウは兎に角泣きじゃくった。溢れ出る涙を抑えきれず。暫くの間ずっずつと。

「五月蠅いぞ！！ クソガキ！！ 静かにしてろ！！」

この行列を守る兵士にそう言われてやっとユウは泣き止んだ。

「……シヨツクなのは分るがこれからもつと酷い目に会うかも知れ無いんだ。泣くのはそこまにしておくんだな」

「……うん」

「いい子だ。ところで坊主、名前は？」

落ち着いたところで男はユウを尋ねる。

「ユウですがそれ以外は覚えていません……」

「はあ？ 大丈夫かお前？」

冗談と思われたのか間の抜けた表情をする。

「記憶喪失と言う奴なのかも知れません……」

「記憶喪失？ じゃあお前村に拾われて売り飛ばされ前は何をやってたのかも覚えていないのか？」

「はい。山の中に開いた大きな穴の中に倒れていたらしいんですが……」

「はあ？ 何だそれは？」

状況が思い浮かばず詳しく問い詰める。

「何でも流れ星の様に落ちて来て……その星が落ちた所に私が倒れてたらしいです」

「話を聞く限りだとまるで天使様みたいだなお前」

「天使ですか？」

「ああ。まあ魔王とかがいる世の中だからな。天使がいても何ら不思議じゃないだろ」

と男はニヤケタ表情で話を纏めた。

「んじゃあ話してくれて御礼と言っちゃ何だが……俺達が何処に向うか知ってるか？」

「知りません」

「……地獄に最も近い場所で、モンスター達の自治権が認められた場所だ」

「モンスターの自治権？」

得意気に男は語るが優はさっぱりだった。

「そうだ。何時の時代か……倒された魔王の配下が作り上げたのがキツカケだよ。時を追う事にその規模や数が膨れ上がって行き、今では知能を持ったモンスター達の樂園って訳よ。他にも表の社会では生きては行けねえ人間や大富豪もいるが俺達奴隷として売られた人間には関係ねえ話だ」

「何だか凄い所ですね……」

「ああ。俺も噂では聞いていたがな。その名も悪魔達の樂園。『デビルズパラダイス』さ……女の奴隷は娼婦となり、男の奴隷は強制労働……中にはモンスターの餌にされちまうって話もある」

どうやら知らない内にとんでもない所へ連れて行かれているらしいと優は気付いた。

この話を聞いていたらしい可愛らしい少女はガタガタと涙腺に滴を浮かべて震えている。

他の奴隷達も一斉にリアクションを起こしていた。

「よく行き先が分りますね？」

「モンスターと人間が肩を並んで歩いている所を見りや大体想像は付くさ。それに俺はチラツと見たのさ。この行列にはウリエール大陸で指折りの商人が先頭をきってやがる。」

「商人？」

「ああ……専用の派手な龍車から女の喘ぎ声を泣かせてりやな。名前はラハグロ・リッチ。そいつは裏の顔の方が有名の悪徳商人でな。このデモンズパラダイスには何度も足を運んでいて今では外交官の真似事見たいな真似もやってやがるのさ。だから下手な小国の王族よりも権力を持っている」

「へえ……」

「それに周囲を固めているのは奴の私兵だ」

「詳しいですね。もしかしてその筋の人間ですか？」

今迄の話を聞いていると幾ら何でも詳し過ぎる。

テレビやパソコンなどがある世界ならまた話は別だろうがこの世界ではそうは行かない。

人々から聞いた話、書物、自分自身の目で見た物やその体験こそが情報を得る手段だ。そうした世界で生きる人間にいしては詳しいと思った。

そうなれば考えられる可能性はこの男がそう言う裏の世界に詳しい人間と言つ事になる。

（そう言えばテレビとかパソコンとかなんだろ？）

稀にユウは意味不明な単語を出して村の人間を困惑させた事もあった。

そんな体験を重ねて行く内に何だか自分がこの世界の人間では無い様な錯覚を覚え始めていた。

「おうよ…まあ今となつちやただの奴隷だが……俺の名はアーヴィン。元ギルド稼業の人間よ」

「ギルド？」

「聞いた事無いか？」

「全然」

聞き覚えの無い言葉だった。

「ただ田舎にいたんだが……それとも本当に天使の世界から来たんだか…まあ暇だから話してやるよ。ギルド稼業って言うのはギルド協会から依頼される仕事をこなして行く人間のことだ」

「つまり何でも屋？」

「ああ。人探しやら物の運搬…代表的なのがモンスターの討伐依頼だな。特に魔王と激しい戦争を行っている国からすれば手の回らない場所が多いからそういう場所は必然的にギルドの需要が増えるのさ」

「へえ……」

世界は広いんだなとユウは感心していた。

「おっ…見えて来たな……」

「大きいですね」

「ああ。俺も始めて見るが間違い無いだろう。ここが悪魔達の楽園……デモンズパラダイスさ」

一見とても大きく賑やかな大都市の様に見えた。

だが町中全体から負のオーラーと言えいいのか。時折悲鳴まで聞こえる。

町の中央に聳える丸い円形のコロシウムに似た建物。その横に禍々しく聳える黒い塔。空中に浮かぶクジラに似た形の船が飛び交っ

ていた。

その周囲には薄暗く乱雑に建物が立ち並んでいる。

（私はどうなるんだろう……）

新しい物語はこの世の底辺から始まるのであった

プロローグEND

第二章デモンズパラダイス：プロローグ（後書き）

次回はなるべく早く上げる予定。
今日は歯を磨いて寝ます。

イラストを久し振りに描き始めました。
今は銀河お嬢様伝説ユナの主役「神楽坂ユナ」のイラストを描いて
ます。

書き溜めは現在第四章半ばでストップ。やっぱ絵と同時にとなるとど
うしても作業が遅れますね・

「優しき勇者・悲しみの冥王楽屋裏」

優「もうそろそろ一万アクセスが近い優しき勇者、悲しみの冥王…
…主役の大宮 優です。例によってここでの性格は違っけどもう馴
れたかな？」

光「てか何で……奴隷になってるの？」

優「うーんとそう言えば中学時代の作者ノートにはマゾ設定があっ
たからその設定が反映されたり……」

光「ちょっと待って！！ 中学時代って何だ!？」

優「ちなみに光君は即効で決まりました」

光「ええ!？」

優「後光君はちょっとの間出番ありません」

光「酷いネタバレ！？ てかどうして記憶喪失になってるんだ！？
おかしいだろこれ！？」

優「さあゝ何ででしょゝ感のいい読者ならすぐに分ると思うけど…
…あ、今回はここまでです。ご意見・ご感想など、何でもお待ちし
ておりまゝです。ちなみに万が一このコーナー宛にお頼りを送りたい
場合は何処かに『楽屋裏宛』って乗せてね。そんじゃばいばい」

光「誤魔化された……」

第一話「奴隸」（前書き）

これ投稿したら……俺、小説にR - 15タグ入れるんだ……と思
ったら入っていたコーメイトラップ。

第二章はちよつとR - 18へのチキンレース的な描写が多くなり
ます。

第一話「奴隸」

優しき勇者・悲しみの冥王

第二章：デモンズパラダイス

第一話「奴隸」

町に入り目に付くのは寂れた町並みよりも魔物や亜人種。中には人間が鎖で繋がれている光景だった。それよりも衝撃な光景も目にする。道端であられの無い姿を晒す格好の女性が並びその横で下種な笑みを浮かぶ人間の商人が魔物相手に交渉を行い、そして未成年には見せられないキツイシーンが行われ、女性の喘ぎ声がこれでもかと言うぐらい響き渡った。

（これが……この町の日常……）

中には貴族の様に着飾ったオークが豪華な椅子に座り、人間の男達に自分が座る椅子を運ばせていた。

その光景に奴隸の誰も彼もがこの町の正気を疑った。この檻に入られた誰もが自分もあなるのかなと思って言葉を失っている。優も同じ思いだった。

「秩序も何もあったもんじゃねえぞ……クソッ」

（まさかこんな事になるなんて……）

奴隸の心境など知らずに荷馬車は進む。

やがて大きな会場へと辿り着く、そこで全員下ろされた。

「イヤアアアアアアア！ 誰かぁ！！ 誰か私を解放してええええええええええ！！」

泣き叫ぶ者も大勢いたがそう言う人は周りの兵士に容赦無く無理矢理黙らせられる。

会場の中に案内され、また牢屋へ放り込まれた。広い牢屋で環境は馬車の牢屋よりも良かったがソレだけ。薄暗くジメジメとしていて自分と同じ様な格好をした奴隷達が数多くいた。

老人。若い男、女、子供、少女、エルフ、中には獣人までいる。もうこのエデルカディアの人種博覧会状態と言える状態だった。

「奴隷か……」

「お前はまだいいだろ。そんな女みてえな綺麗な容姿ならもしかすると可愛い美女に買われたりしてな」

「よしてください……」

「ああゝあ。俺も色々やったがこれで運の尽きか」

奴隷達に囲まれながらもアーヴィンと優は硬い牢屋の壁際に背を預けて喋っていた。

お互い少しでも嫌な空気から逃れたかったただけかも知れない。年が大きく開いているが何時の間にやらユウの話し相手になっている。

「……何だか懐かしい気がします」

「この牢屋がか？」

「ええ。記憶が刺激されると言うか……とても落ち着く様な……」

「坊主。お前記憶失う前はどんな人生を歩んでいたんだ？」

牢屋が落ち着くと言う少年がマトモな人生を歩んでいる筈が無い。そう言った環境下に馴れている奴が口にする物だ。記憶喪失なので

答えられる訳が無いが聞かずにはいらなかった。

「さあ？ もしかすると記憶を失う前は酷い人生を歩んでいたかも知れませんか」

呆れるアーヴィンにユウは笑って答えた。

「はあ……そう言えばお前記憶失う前は大きな穴で眠っていたとか言ってたな」

「はい。人から聞いた話ですが」

「その前に何か空から光が振って来たとか言ってたよな？」

「ええ。私がその光だと思いましたが……ですが普通あの空から落下したら死にますよ？」

魔法使いも人間だ。物理法則の乗っ取った存在である。

「もしかすると咄嗟に魔法を使って助かったがその落下の衝撃で頭でも打ったんじゃないのか？」

「うーんじゃあ僕はどうして空を飛んでたんでしょう？」

首を捻る優。謎を解決しようとしても新たな謎が湧き出て来る。何だか答えが無い数学の問題をやらされている気分だった。

「そう言えば道中魔法学校とか言っていましたけど」

ふと優はその事を思い出す

「ああ。魔法学校は大きな都市になれば大体ある。だが一番大きいのはこのウリエール大陸の中央部に位置する魔法王国にある魔法学園だ。何でも都市その物が学校らしいからな」

何故だろうか。この単語を聞くと妙に懐かしいと言つか故郷の事を離している気分になる。

「へえ…行けたら行って見たいですね……」

そしてこの地で幸せに生きたい。何故だか早々とそう決断できた。

「だけど俺達奴隷だからなあ……」

「それが残念ですね」

はははと残念そうに苦笑する。

「おい。この中にユウと呼ばれる奴はいるか？」

「え？ 私ですか？」

唐突にユウは呼び出される。アーヴィンや他の奴隷達の視線が一気に集まった。

「なあ……お前何かやったのか？」

「え……何も？」

「つべこべ言わずさっさと来い!!」

これ以上一体何があるのだろうかとユウは不思議がりながらも牢屋から解放された。

自分を囲む兵士達は何故だか落ち着かない様子であったが概ね何事も無くユウは案内されていた。

前にもこんな事があつた気もするがそれが思い出せずむず痒い思いをしている。

「おい聞いたか……アルクレスのこと」

「ああ……今話題になつてゐる奴か。確か邪神が光臨したとか」

「俺が聞いたのは墮天使だが……何でも魔王を超える程の凄まじい魔力の持ち主だとか……国一つを容易に壊滅出来るらしい」

「だが今迄の魔王だつてそれぐらいの実力者だろう？ リベレイタ―やギアード、リリースとかだつて……」

と会話を交えている。話を纏めるとアルクレスに物凄い力の化け物が光臨したと言う内容だ。

（そんな凄い奴いるのか……）

と感心している内にある部屋へ案内された。

その場所は煌びやかな場所だつた。床に赤い絨毯。天井には白い綺麗な細工が施されたシャンデリヤ。高そうな象に絵画。

そして部屋の中央にはテーブルが並んでいる。テーブルには頭が禿げ、体が丸く太つた壮年の男性。仮面を付け全身を黒いローブで覆つた謎の人物がいる。

ユウは運び終わると兵士達は報告を終えてソソクサと退室して行く。まるでこの部屋に一秒たりとも長くいたくない様子だつた。そんな態度を見せた兵士達に何だか物凄く嫌な予感を感じた。

『……とてもそうには見えないな』

仮面の人物はユウを見た第一声がソレだつた。

「ええ。ですがそれは恐らく記憶が失つてゐるからと私は申します」

『騙していないか？　もし噂が本当なら貴様も私も今ここで死ぬぞ？』

「そ…それは…念の為対魔法使い様の特性な枷だけでなく二重、三重にも防御を行っております」

と太った壮年の男は仮面の人物に頭を下げた。

『まあいい……』

「あの……何の話を？」

『貴様を買った者だ…だが私が買った目的は貴様の能力だが、それを使えなければ話にならん』

「は、はあ……？」

ユウは首を傾げるのであった。

何だか自分が過大評価されている上に噂が一人歩きしている気がする。

『貴様にはこのデモンズパラダイスにある闘技場。ヘヴンズゲートの闘士として登録する。オーナーは勿論私だ……』

「ヘヴンズゲート？」

『王国が行う剣技大会など違い、勝つ為には殺人までもが許される』

ユウは顔を真っ青にさせた。訳の分らないままそんな物騒な戦いに放り込まれようとしているのだ。

「そんな…どうして私が…強い人なら他にも大勢いるでしょうに！？」

『ソレを知る必要は無い』

これがユウの新しい人生の始まりであった。

一週間の月日が経過した。

この間色々あったが辛い事が多過ぎて精神がイカれてしまいそうだった。

これでもかと言うぐらい魔法などの知識を叩きつけられた。教官なる厳つい亜人に戦闘技能を叩き込まれた。

それ達のが走馬灯の様に頭に流れ出る。

（もう止めたいです……）

（奴隷の分際で生意気なことを言うんじゃないやねえ！！）

（うッ！？）

少しでも口応えすれば鞭が飛ぶ。

それを何十回も何百回も繰り返された。

だが一番辛かったのは野生のモンスターを狩る事だった。ユウは優しく内公的な少年である。獣を狩る事にも抵抗があった程だ。

（うわあああああああああ！！ 来るな来るな！！）

必死になって殺した。初めて殺したモンスターはゴブリンだった。だがその後の自分はまるで一流の剣士の様に次々と殺せた。まるで最初からそう刻まれているかのように。

その様子にあの自分を買った仮面の人物は及第点だと言う評価を下したのは今でも覚えている。

だが訓練事態は変わらず優は血を浴び続けていた。もし少しでも逆らえば自分の首に搭載された反逆防止様の首輪がギュッと締め付けられるのだ。

不運な事にこれは何度も経験した。まるで猛獣を調教するかのように使われ優は既に反抗の意思が大分下火になっている。

その変わり食事面はわりと豪勢だが最初の内、優は余り口には運べなかった。

「朝か……な？」

久し振りの休日にユウは体を起す。

ユウが与えられた部屋は机に棚ベッドがある私生活の為の部屋とトイレと浴室が一体化した二部屋だった。

窓が無く、棚にはご丁寧に戦闘に関して役立ちそうな物と言う徹底振りである。

与えられた物は剣に衣服　ブーツに短パン、白い生地にジャケットと言う物だ。衣服は何処にでもありそうな簡素な物だが剣は違う。握っただけで呪われそうな黒い刃が特徴だがかなり使い易く強力なので気に入っている。

ドアの下が開かれ：其処から水にパンとスープ、サラダ、ベーコンなど色取り取りの食べ物に乗せられた食事が差し出された。

（奴隷部屋から窓が無いんだね…）

ここはヘブンズゲートの施設内部にある闘奴（奴隷の剣闘士の略称）専用の奴隷部屋。

ちなみに来る途中に見えた闘技場らしき建造物が会場であり、その隣の塔が闘奴の管理施設だそうだ。ここはその一つで最下級の者はこの部屋が与えられる。両隣の部屋にも誰かいるが、それが誰なのかは分らなかった。

「……今日は休みだって言ってたけど。外ぐらいには出させて欲しいよ」

首輪に手を当てる。これがある限り何処にも逃げられないのに。この首輪はとても高性能で、ある特定指輪を付ければこの首輪は誰でも作動できる。またその調整も思いのままだ。

解除呪文を試して見たがそれで外れる訳が無く仕方無しにずっと付けている。

『この首輪はただの拷問道具では無い。もしこの町から離れれば貴様は死ぬ事になる』

とあの仮面の男。『白の貴公子』は言っていた。だからユウはこの町にずっと続けなければならなかった。

体に妙な文様のタトゥーを付けられたり腕に腕輪を付けられたりもしたがこれも自分の知らない防犯処置の一つなのだろうとユウは思う。

（だから嫌が上でもこの町に続けなきゃならないんだね……）

観念したかのようにユウは食事につけた。

大きな水晶が置かれた薄暗い監視部屋。

そこにはリアルタイムで優の同行が映し出されていた。

その水晶の前にあの仮面の人物『白の貴公子』と太った壮年の男性がいる。

『それで……あの少年はこちらの魔法は受け付けないと？』

「はい。身体能力の測定の際に行いましたが……催眠は勿論の事……

…洗脳の類の魔法は一切受け付けないと……」

『冗談では無い……これではまるで何時炸裂するか分らない爆弾を抱え込んだも同然では無いか』

「重々承知しております」

神妙に男性は答えた。自分でも言つて非現実的だと思う。物理攻撃は効くのだが有害魔法は全く通用しないのだ。ただ回復効果などをもたらす魔法は通用すると言う学会にでも発表したら注目を集めそうな体質だ。

他にも高級なマジックアイテムなどを試して見たが有害な物は一切受け付けない。試しに呪いのアイテムを与えて見たのだが呪いの効果は全く現れず強力な武器に成り下がってしまったている。

勇者だとは知っているが段々といつ勇者じゃなくて魔族の人間じゃないのかと思ひもする。皮肉にも白の貴公子はアルクレスの間と同じ様な結論に達していた。

「しかし……私にはどうしても理解出来ないのです。確かに剣術などの才能、特に魔法に関しては既に一流の魔法使いに匹敵しております。ただ念じるだけで上級魔法を連発するなど……既にもう歩く戦略兵器ですよ」

『だがアルクレス城での戦いでは今のそれ以上の力を見せたそうだが……高望みは禁物か』

「最悪の場合、特性の首輪で即時抹殺も可能です……また他の枷も複数付けています。ご心配には及ばないかと」

と言うが本人も初めてのケースに戸惑っていた。今ユウに使っているのは最大級に危険な奴隷に使う物一式だ。

首輪の他にも毒薬が流れる腕輪やら体に激痛を与えるタトゥーなどがその代表である。それでも男は不安に感じた。

『手緩いな。もう一つ枷を植えつける』

白の貴公子も同じ事を考えていたのか男にそんな提案をする。

第一話「奴隸」（後書き）

最近見始めたクウガは第30に到達。

そして現在は第四章製作中。最終話への道則はまだ長いと言う現実。

「優しい勇者・悲しみの冥王楽屋裏」

優「一晩で作者が準備してくれました」

光「はやっ!？」

優「何か中二臭い名前の敵が出てるけどね。異世界に地球のセンス求めるのはどうなのかなって作者は思ってるわけよ」

光「いいたい事は分るけど何かいい訳染みてるぞ……」

優「ヒーローフォースとアウティエル時代の悪い癖が出てるとも言えるね」

光「てかこれ掲載して大丈夫なのか?（内容的な意味で） かなりアウトだぞ……」

優「うん。アカウント取り消しとか覚悟しなきゃだね」

光「うおおおおおおおおおい!？」

優「正に規制へのチキンレース！！ このドキドキ感が！！ 恐怖がたまらない！！」

光「何言ってんの優！？」

優「リボルバー・オセロットとグレイフォックの複合物真似」

光「分る人にしか分らないよソレ！？」

優「さて、今回はここまで」

光「もう終り！？」

優「次回もなるべく早めにUP予定です」

光「スルーか！？ スルーなのか！？」

優「ご意見・ご感想全く来てないけどお待ちしております。このコーナー宛へのメッセージは前回伝えたとおり楽屋裏宛でお願いね
ゝいるとは思わないけど」

光「後ろ向きだなあ……なんか……」

第二話「ユディ」（前書き）

前回よりはマシなR - 18チキンレース。

そして小説タグにある転生憑依の謎が少しだけ明らかになる
かも……

第二話「ユディ」

優しき勇者・悲しみの冥王

第二章：デモンズパラダイス

第二話「ユディ」

「はあはあ……」

薄暗く狭い簡易闘技場の様な場所。ここはヘブンスゲート地下にある闘奴トレニーニング施設だ。

壁が鉄で覆われ、床は砂利。天井はガラス張りになっているらしくそこから自分の戦いが見られる様になっている。

この場所はユウの訓練施設。次々と対戦相手が檻の奥から送り込まれて来ていた。

送り込む側もユウの実力が爆発的に上がるのは感じているのか、それとも白の貴公子のせいか段々と容赦がなくなって来ており、アースゴーレムやトロール、時にはランドドラゴンやケルベロスなどが立て続けに送り込まれた時さえもあった。

「信じられん。どれも高位のモンスターを……こんな短時間で……」
『そうでなくては困る』

何度見ても悪夢の様な光景だった。

ユウの周りにはモンスターの亡骸が地に伏せている。その中央でユウは息を切らしていた。

（何時までこんな事を続けなければならないんだ……）

心底そう思う。だが更に酷い試練が待ち受けていた。

（前にも言ったが近々ヘブンズゲートには正式に参加を決定した。対戦相手は人間の戦士だ。尚戦闘方式はお互いのオーナーの同意の上でデッドオアアライブ方式を採用させて貰った）

人間が相手。勝負判定は生か死か。ユウは今度こそこの世の中に絶望した。自分に人殺しをしろと言っただ。

（……死にたい）

段々とユウの心の内に自殺願望が沸き上がって来る。

（死んでも誰も迷惑しない……誰も悲しまないし……）

そんな事を考えて今日も事務的な虐殺を終え、部屋へとUターンする。

だがユウは知らなかった。

自分の部屋にあるサプライズが待ち受けているとなど。

「お帰りなさいませ。あなたがユウ様ですか？」

部屋に帰ると可愛い少女が丁寧に頭を下げた。

ピンク色のボブカットは綺麗に斬り揃えられており、大きな緑色の瞳はキラキラと輝いている。

だが体付きはいやらしくとても豊満で肉付が良い。胸も大きな果実の様に膨らんでおり、少女の体に大人の魅力を詰め込んでしまったようだ

そんな少女は露出度が高い胸元開き、ヘソが丸出しで鎖骨や肩周
りも露出しているビスチェを着ていた。

下のロングスカートもピッチリした足が片方出ており、ニーソク
ツに覆われて白いガータベルトと連結しているのが見えるだけで
なく細い下着の紐が見えている。か細い首に自分と同じような首輪
が巻き付けられている。少女も奴隷なのだろう。

だがこれだけは言える。

（とても綺麗だ……）

官能的な体付きだが顔は少女らしい清純さで満ち溢れている。

一見、自分とは遠く無縁に思えたが何故だか妙な親近感が湧いて
いた。

「あなたは一体？」

「白の貴公子様を買われた奴隷です。私の名はユディと呼んでくだ
さい」

顔を真っ赤にしながらもユディは笑みを込めて微笑んでくれた。

「奴隷何ですか？」

「はい。ちょっと前までは娼婦でして……失礼ですがその意味は分
りますか？」

「いいえ……」

ユウは性知識にはとても疎かった。

それを聞いたユディはそうですかとだけ答える。

「娼婦とは殿方を満足させるために体を差し出す商売を行う人達の
事でして……」

「体を差し出すって……もしかしてその……まさか……Ｈな事？」
「その通りでございます。白の貴公子様からあなたの専属の娼婦となれと言われておりまして……」

[illegible]

何だソレはとユウは仰天した。これ夢はじゃないのか？ もしかすると罠なのか？

ありとあらゆる可能性がユウの脳内を駆け回った。

そんな様子を見てユディはクスクスと笑みを零している。

「ど、
どうかした？」

「いえ……どんな恐ろしい人かと思えばとても子供っぽい方でした。失礼ですがユウ様の年齢は？」

……以外でした。失礼ですがユウ様の年齢は？」

「記憶を失っているけど自分が十五歳、今年で十六歳なのは覚えて
いる」

どう言う訳だかそれだけは覚えていた。

「では私よりも一つ年下と言う事に？」

「
です
ね」

「……そうですか……年下の方とこれから……」

少女は視線を下に向けて手を胸に当てていた。

「あの……もしかして今からしなくちゃならないんですか？」

「はい。新たな御主人様からそう言われております。もししなかつたらどんな仕打ちを受けるのか想像も付きません。できたらお願いしたいのですが……」

嫌が上でも『ヤレ』と言う事しい。

一体あの仮面は何を考えているのかサッパリ分らなかったが自分が拒否したせいでこの女の人が酷い目に合わせるのは嫌だ。もし拒否すれば命の危険すらあるかも知れない。

（やっぱりしなくちゃいけないのかな……）

そこまで考えてユウはアッサリと折れた。

「分かりました……けどユディさんはいいんですか？ その……嫌じや無いですか？」

「はい。私こそこんな穢れきった女でよければ幾らでもお抱きください」

内心ユディはどう考えているが分らなかったが、とても嬉しそうにニコツとしていた。

ユディは気が付くと見知らぬ場所にいた。

辺りは真っ暗。遠くまで星がキラキラと輝いて真下は吸い込まれそうなほどに広大な青い大地が見えている。

確かユウとの性交を終えて一緒にベッドで寝ていた筈なのだがと思ひ疑問に思ふ。

「ここは一体……」

物珍しげにキョロキョロと眺めた。

もしかしてここはあの世なのだろうかと不安にさえ思ふ。

『もう止めやがれ ！！』

大声で叫ぶ男の声がユディの耳を貫く。

その方向を見てみるとそこには全身に鎧を身に纏った騎士達。全てが仮面を被り顔は見えない。その姿も様々だ。中には信じられないぐらいの大きさを持つゴーレム。鉄の艦など見た事も無い物が数多くある。

彼達の中心地には禍々しい程の魔力を感じさせる『魔神』の騎士がいた。

神官の様な帽子の中央部に何かの模様と宝石が埋め込まれ、血の涙の跡の様な白い仮面を被りそこから地毛らしき黒髪が食み出ている。体には全身を覆い隠すように暗い紺色の禍々しくも立派な鎧を着込み、背中には昆虫の羽根の様な形状をしている赤いマントを纏っている。胸部とガントレットには頭部と同じく宝玉が嵌め込まれていた。そして背中からは禍々しい光を放つ紫色の翼を出している。

『お前がやろうとしている事は間違っている！！確かに馬鹿な奴だつていやがるよ！！そんな奴に人家族をぶつ殺された俺が認めてやるよ！！だからつてお前は六十億人皆殺しにするつてのはだけは認めるつもりはねえ！！』

（六十億人！！？？それを皆殺しに……）

白い仮面の騎士が大声で言う内容に驚愕する。他にも家族をぶつ殺されたなど激しい内容が飛んでいるが六十億人を皆殺しにすると言う内容は衝撃が強かった。

一体ソレは国の幾つ分なのだろうか？

『確かに人間は今迄同じ人同士で憎み、恨み、殺し合つて来た。だけれどソレは人間の悪い側面だけを見ているだけだ！！中にはいい人だっている！！仕方なく悪へ手を染めてしまったひとだっている！！君はただその一方を見詰めているだけだ！！』

赤い悪魔の様な騎士が紺色の魔神へと訴えた。凶悪な外見の割には物凄い良い事を言っている。

ユディは言っている内容が気になった。

（まるでずっと人間同士で戦争していたみたい……）

自分達が住まうエデルカディアでも人間同士の争いはあった。だがこの赤い悪魔は人間同士がずっと醜い争いを続けて来たのを目の当りにして来たかの様な口振りだ。

魔王が存在するこの世界で

『……確かにあなたがたの言う事は正しいのでしょうか。ではこう言うのはどうでしょうか？ 私がこの地球に住まう六十億人全ての精神を支配下に置き、よりよい方向へと導く……これならいいでしょう？』

魔神が言ったプランに再び騒然とした。

『ふざけるな！！？？ 最早ただの世界征服じゃねえか！！』

『て言うかそんだけの力があるなら他に幾らでもやり様があるとは思うんだが……』

ユディも心底そう思う。

六十億人全ての精神を支配下に置く。今迄自分が知る魔王の所業が可愛く思えるぐらいの暴挙だ。

そんな真似誰だって許しはしないだろう。それにソレだけの力があるのならもつと良い事に使えばいいのと思う。

『私の使命は地球に生きる人を監視し、そして不適格だと判断した

場合処分する為に産み出されました。私はただその役割をはたそう
としているだけです』

『まるで神様だな……いや神だったか』

神様と言つ単語に耳を疑う。

（あんな姿をしているのが……神様なの？）

自分の想像とは全く掛け離れている姿とその暴挙に思考が完全に
停止する。

神と言えば自分達を天界から見守り、エデルカディアの教えを心
奉する者達に祝福を与える存在だ。

そんなイメージとはまるで正反対だった。

『彼方達も知っているでしょう。地球人類は長きの間盛大に殺しあ
つて今を築き挙げて来ました。数十年以上に全世界を巻き込んだ
大戦を得ても尚も人類は変わらず、手を取り合つて生きて行こうと
はしませんでした。やがて文明は発達し、その頂点である破滅を体
現するかの様に人々は世界を滅ぼせる力を大量に生み出せるまで
になりました』

（地球つてエデルカディアよりも色々と凄い所ですね……）

何故だかユディはヒジョーに感心する。

そんな凄い所に住んでいる住民はどんな神経をしているのかと思
わず尊敬の念を抱いてしまった。

『やがて人々はその生活圈を今私達がいる宇宙にも伸ばすことで
よう……ですが待っているのは必ず醜い争いです』

『まるで争うこと事態が悪だと言っている様だがソレは違う。争う
ことでしか分かり合えないこともあるからだ』

『全ての人類が貴方達の様でアレば私もこんな真似をする必要はありませんでした……』

『だが疑問がある。お前の能力なら直にでも地球の人類の抹殺など可能だった筈だ。どうして俺達と対決する機会を与えたんだ？』

ユデイもハツとなった。

『……私も分りません。ですがその答えが見付かるからだったかも知れません』

手から邪悪なドラゴンの牙の様に禍々しい形の剣が現れた。

『はじめましょう。もし貴方達が勝てば地球は救われます。負ければ滅ぼします。全力で来て下さい』

次の瞬間魔神の周りに数百体の白い重騎士の様な体躯の天使が現れた。頭部に赤い星の様な紋章が刻まれており背中から鉄の羽が生えていた。

視界に納めた瞬間ユデイはまるで破滅を呼ぶ神々の軍団を連想させた。

『量産型 がアレだけ……』

『恐らく ・ と同じ の の力だろう。』

魔神を取り囲んでいた仮面の騎士達も身構えた。

(す……凄……も、もしかしてこれは神々の戦い？)

そうとしか言い様が無い程の空前絶後の大規模な光景だった。

彼達の間で飛び交う攻撃は自分が知る魔法使いの攻撃が兎戯に思

える程の規模と破壊力。城は一撃で瓦礫になるだろう閃光。万単位の軍団が一瞬で壊滅するであろう光の嵐。

数など幾ら揃えてもこの戦いに介入する事など無理だ。いるとすれば勇者や魔王……もしくは神ぐらいしか思いつかない。こんな戦いを繰り広げる彼達は一体何者なのだろうか？

そうこうしている内に魔神の軍団は一人を残して全滅し、最初に取り囲んでいた仮面の騎士達の側が優勢となっていた。

『いい加減目を覚ましやがれこの分からず屋が……！』

『これだけの力……能力はこちらが上回っている筈なのに……！』

『力つてのは理屈じゃねえんだよ……！ 心が籠ってねえ力なんざ他の奴に通じて俺には通じねえ……！ ましてや拳と交える事を恐れて他の意見を聞かず、押し付けるお前の様な奴の攻撃には絶対な……！』

白い仮面の騎士が魔神を思いつ切り殴りつけている。殴る音は聞えないが素人目から見ても凄まじい迫力があつた。

『そんな無茶な理屈で……これだけの力が……』

『俺は……今日を生きるまでに……色んな奴と戦って来た……！ 悪い奴も大勢いたが中にはいい奴もいた……！ 善悪と言う言葉では割り切れない奴もいた……！ 殺したがソレを後悔した事もあつた……！』

一方的に殴りつける白騎士。こちらは何だか自分が持っている勇者をぶち壊す様であつたが。彼の言う言葉には確かな重みがあつた。彼はどんな思いを。どんな戦いを経験したのか。もしかすると自分が知る勇者もこの騎士と同じ思いを持って魔王と戦っているのかも知れない。

そう思うと何だか勇者とはとても悲しい存在なのでは無いかと思うようになって来た。

やがて戦いは終局を向かえ、魔神は体中から溢れんばかりの光を放出しながら青い大地へと落下して行く。どうやら仮面の騎士達の勝利らしい。

だが皆この魔神を生存を望む様に悲痛な声を挙げている。中には助けようと引つ張り出そうと頑張っている騎士までいた。

『何故助けようとするのですか？』

魔神が激しい炎に包まれて最後を迎えようとしているのに助け出そうと知る。その行為に意味が分らないユディもそう思う。

だが騎士達は当たり前のように驚くべき事を言った。

『ウルセエボケー！ 敗者は敗者らしく勝者に従いやがれ！』

『たく…どうかしているぞ貴様達。アレだけの生死のやり取りをして置いて…世界を滅ぼそうとした奴を助けるなど正気の沙汰ではないぞ』

『友達を助けるのに理屈はいりませんよ！！ 最後の最後まで確立は例え0%でも最後まで諦めずに足掻くんだ！！』

『どいつもこいつも熱血馬鹿だったとはね… まあやれるだけの事はやって見るわ』

魔神の姿がボロボロになって行き、やがて素顔を晒した。

「えー！？？」

ユディは今度こそ目を疑った。

（ごめんね… 本当は… こんな使命なんて背負いたく無かった…
… だけど抗えなかった…）

少年は緑色の粒子となつて消えて行く。やがてその粒子は青い大地全体に広がり、包み込んでいった。

「綺麗……だけどこれは……」

それはその少年が見せた最後の生命の光だった。

（もしまた生まれ変われるのなら今度は……もっと幸せな……人生を送りたいな……）

それが夢の終りだった。

「……ハッ！！？？」

起き上がるとユディはベッドの上で汗だくになっていた。横ではユウが何やら囁かれていた。瞳からは涙を流し、苦しそうにしている。

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

もしかしてユウもあの夢を見ているのだろうかと思像する。

（あの夢は一体……）

神話の断片を垣間見せられた様な夢に思わず震えるユディ。

（あんなのがもし現れたら……）

確実に世界が滅ぶ。断言出来る程の規模だった。

（……だけどあの夢には確かに）

ユディはユウの方をじっと見た。

（いえ。今の私はただの専属娼婦……考えても仕方が無いわ）

やがてユディは無言でユウを膝枕に乗せた。

「……あなたは一体何者なのですか？」

その呟きがユウに聞こえる事は無かった。

第二話「ユディ」 END

第二話「ユディ」（後書き）

クウガ全話見終わりました。最近のライダーと比べるとかなりエグイ話が多くありましたが、それよりも魅力的な人間ドラマや主人公、そして虚しさと悲しみとせつなさ（元ネタ：スト？劇場版主題歌）な最終決戦。

暫くライダー見るのは止めて作業に専念するつもりです。

次回もなるべく早めにUPしたいと考えてます。

〓 楽屋裏 〓

優「そろそろ一万ヒットだね光君!!」

光「いや……ちょ……おま……何か他に色々と言う事無いか？」

優「なにになに？ ちよつと詳しく書くとR-18なシーンがあったとか？」

光「それもあるけど何か後半どう見てもスパロ にしか見えないシーンがあったけど……」

優「気のせいだよ」

光「そ……そうなのか？」

優「そうなの」

「一万ヒット間近な件について」

優「もうそろそろ一万ヒット（アクセス）だね！」

光「……第一章がテンポ良く終って今は第二章だろ？」

優「うんその第二話目」

光「一万ヒット到達したのがちよつと遅く感じるよな」

優「第二章だもんね」

光「後……冥王って言うからには突然性格がブラックになったりどんな強敵も瞬殺する様な展開を望んでいた人とか結構多そうだよな？」

優「いそうだね、まあヴェルム戦でベターマン（勇者王ガオガイガー外伝作品）のサイコヴォイスとかやったけどさ」

光「アレも凄かったな……後カウンター魔法とか全回復魔法とか……」

優「本当は全方位魔力振動波による原子分解とか十二体の分身を作って一斉砲撃とか色々案があっただけけどヴァルシオンの技再現で落ち着いた感じかな？」

光「え、エゲツねえ……」

優「ここだけの話外伝でもしも優の第二人格が木原マサキ見たいな奴だったらと言うのもあったね」

光「大体どうなるか予想付くぞ……」

優「アルクレス諸共リベレイター軍終了のお知らせだもんね」

光「てか大分話逸れたな？」

優「うん。見事に逸れたね。この会話ヤツケだから仕方ないね」

光「うわぁゝ録画やり直し効かないかなゝ」

レ『諦めろ』

光「だ、誰!？」

優「そう言えばこのスタジオ作品の壁ぶち壊して借りてたっけ？」

光「そ、そう言えば……そんな事言ってた様な……」

レ『どうでもいいけど第二章になってから光一気に出番なくなっ
たな』

光「酷い!?! この人酷いよ!?! 一体誰!?!」

優「さて今回はここまで!?!」

光「また無視か!?!」

優「ご意見感想お待ちしております。（めげずに）このコーナーへお頼りを送りたい場合は楽屋裏宛と書いてどしどし応募して下さいね」

第三話「キリングマシン」(前書き)

本日付けで一万アクセス突破しました!!

今回は多少短めです。

第三話「キリングマシン」

「優しき勇者・悲しみの冥王」

第二章：デモンズパラダイス

第三話「キリングマシン」

大観衆が埋め尽くす闘技場『ヘブンスゲート』。

デモンズパラダイスにある場所で弱者こそが悪、強者こそが正義であり、人もモンスターも毎日死んでいる。特別扱いされているのは死よりも恐ろしい辱めを受ける綺麗な女ぐらいだ。

そんな闘技場では高い観客席の更の上に天井に屋根は無くそこから太陽光が降り注いでいる。

観客席は魔法障壁で覆われているだけでなく高い仕切りで生々しい殺し合いの場から区切られていた。

地面は硬い砂の地面で覆われていて一体どれだけの血を吸い取ったのか仕切り同様に赤く変色している部分も多くみられる。

そんな場所でユウは呪いの黒い魔剣を片手にひたすら襲い来る敵を切り倒して行く。

例え相手がどんなモンスターだろうと、男だろうと。

「いいぞいいぞ…… もっとやれ……」

「その調子だ…… ブレイブイーター……」

自分の二つ名、ブレイブイーターが観客席から飛ぶ。

勇者すら殺せる実力を持つと言われる事からそつつけられた名前だ。

一人斬り殺す度に歓声が沸きあがる。

（お、おおおお願い！！ たた…助けて！！ 助けてよ！！）

最初に殺した相手は覚えている。確か貴族として数々の罪を積み上げて来た同い年の少年だった。

戦いの初めはとても強気だったが圧倒的な実力差を感じると尿を垂れ流し、泣きながら命乞いをしていたのは今でもよく覚えている。

（…ごめん）

それでもユウは刃を思いっきり振り下ろす。

白の貴公子から脅迫されていたのだ。相手を殺さなければユディは死ぬと。

ユウはとても迷ったが結局最後は相手を斬殺してしまった。

（ユウ様……月日が経つにつれて段々と弱々しくなっている気がします）

ユディの言う通り、殺人を経験して行く内にユウは何も感じなくなってきた。

幾多の強敵を相手にして生き延びても。例え敵が何人であろうとドラゴンが相手でも。

勝利の喜びよりも虚しさが上回った。

（いやあ！！ いやああああ！！ 止めてえ！！ 止めてえええええええええ！！）

時には衆人觀衆の前で同い年の女の子を陵辱しないといけない時もあった。その時に自分の心が完全に死んだ時だったかも知れない。

一人の女の命の為にその他大勢の命を殺して生き、他の女は辱める。そんな生活を送って行く内にユウの感情は完全に死んだ。精神と肉体が見事に軋み挙げて嘔吐を何度も繰り返していた日々が懐かしい。

誰か教えて。私は後何人殺せばいいの？

そして今日もユウは大勢の人間を殺した。

闘技場の専用に貸し与えられたVIPルームでは白の貴公子と傍に控える太った壮年の男がユウの戦い振りをじっと眺めていた。

VIPルームには今二人切りだが本来ならばヘヴンズゲートに所属している専用の奴隷が貸し与えられるなどのサービスがあるがそれを使わず二人切りである。

『この三カ月でここまで仕上がるとは……』

「はい。白の貴公子様……例の計画は既に発動できるようになっております」

『そうか』

と下卑な男の答えにユウを見詰めながら答えた。

『これで我が復讐が果たせると言う訳か……』

「ですが……少し気になる情報が……」

『何だ？』

「はい。アルクレスで召喚された異界の勇者がどうやら此処へ向っているとの事で」

アルクレスの異界の勇者。

その話は今や有名だ。光の勇者・闇の勇者の片割れとして。

光の勇者とは藤間 光のこと。闇の勇者は行方不明になっている大宮 優のことだ。

光はリベレイターや悪党相手に勇者街道の見本を歩み続けている。当然そこまで派手に暴れれば裏の社会のネットワークを駆使すれば嫌が上でも耳に入った。

『逆もまた然りか……』

と呟いた。

『何が目的か？』

「聞くまでも無いでしょう。恐らくはあの勇者を取り戻しに来たかと……」

『ほう。だが例え勇者といえども今のユウを取り戻す方法は無い。枷を外さん限りな』

「左様でございますか」

ユウは念の為様々な処置が施されているのが一番の枷はユディの命だ。死ぬことさえも戦いを止めることさえも出来ぬ絶対に負けられない勝負。それを続けて行く内にユウは……いや、優は感情を持たないキリングマシンに成り果てていた。

「あの『一つ目』も順調に勇者を狩っておりますし、我々の悲願も近いですな」

『一つ目か……だが奴もまた危険過ぎる』

「ええ。闘争本能の塊ですからねえ」

一つ目とは外見を単純に現した仇名であるが何時の間にかコードネームで呼ばれている勇者を狩る専門の暗殺者だ。既に勇者のパー

ティーもろとも斬殺に成功している戦士であり、白の貴公子が作り上げた暗殺者の一人だ。

だが問題が多く、人格はかなり戦闘狂で戦闘中に錯乱を起こすケースも何度かあった。だがそのリスクを差し引いても勇者と対抗出来ると言うのは大きい。今は任務中でデモンズパラダイスにはおらず、勇者狩りを忠実に行っている。

「万が一奴が暴走した場合の保険変わりと言うのは？」

「……それも考えている。態々リベレイター様の手を煩わせる訳にもいかんのでな」

アルクレスに根を張る魔王の名を白の貴公子は呟いた。

「しかし分らん……何故リベレイター様は我々を必要としているのだ？」

「と、突然何を？」

「分らんのも無理はあるまい。リベレイター様が本気になれば我々の力など借りずとも悲願は達成できるのだよ……」

と、どこか悲しげな声を出す。

「時に君はどうしてウリエール大陸に魔王が来るのか知っているかね？」

「それは魔王による物ですが大部分はルファール（エデルカディア教会の宗教では暗黒神の名とされている）の『欠片達』でしょう」

「ふふふ。まるでヒーロー物だな」

一転、何処か嬉しげになった。

「ヒーロー物？」

『私は一度異世界の作品とやらを目にした事がある。アレは確か魔法学園の図書館だったな……名前はそう。ライドアクターだ』

「聞いた事が無い話ですな……」

『無理もあるまい。異界から流れ着いた物で翻訳も一冊しか無かったからな……その翻訳版もエデルカディア教会から禁書扱いされて今では図書館の片隅に眠っている代物だ』

エデルカディア教会は魔に属する物は全て悪。それ以外は正義と言う分り易い思想集団だ。

まあ貴公子からすればこれは仕方の無い事に思える。何せ何千年物間このウリエール大陸は魔王の侵略に晒されているのだ。その魔王がどうやって？ どんな理由で？ 何故暗黒大陸から攻めて来るのかさえも分っていないのが教会の実情だ。（最も知った所でどうする事も出来ないと思うが）教会としては都合良く全員悪党にしたい方が楽だと言うのもあるだろう。

『ちなみにこのライドアクターが一つ目の誕生のキツカケだ。』

「ほう。それは興味深い……あの悪魔の様な技術を生み出した素がソレとは……」

『最もストーリーとしては中々面白いがな』

ライドアクター。

改造人間と呼ばれる主人公が秘密結社「バックラー」に改造され昆虫型サイボーグとなり人類の平和と自由の為に戦う物語。と言う訳かこれの翻訳版がウラシエザムと呼ばれる魔法学園にあったのだ。

『これが禁書になった理由は主人公が一つ目と同じ『体を弄繰り回された存在』であり、また『人から怪物へと変身する』事で『強力な力を発揮する』からだ』

「成る程……あの教会が考えそうな事ですな」

早い話、怪物が主人公だから検閲に引っかけただけだ。

勇者Ⅱ正義、魔王Ⅱ悪と言う思想の教会からすれば少しでも悪に同情する様な内容は気に食わないらしい。

「しかしあの教会も裏では随分と激しく動き回ってますぞ？」

魔王討伐がシステム化された現在、エデルカディア教会の内部は腐敗が進んでいる。これは自分達の情報網で既に確認済みだ。

中には裏工作をする部隊の存在や、内政干渉して他国の技術を奪取したりするなどの部隊もいる程だ。

表の方の顔でも場所によっては貴族から賄賂を貰い好き勝手にやっている連中もいるのだ。

『放っておけ……知った所でどうする事もできなさ。逆に手を出して来るのなら始末するまでよ』

「分りました」

と返事を返す。

『……しかし試合も最近はずまらん』

「ええ。何せ愛しい人の命が掛かってますからな。演出とかそんなの考える余裕すら無いのでしょ」

話し込んでいる内に試合は終わっていた。結果は見るまでも無く優の勝利である。

何故ならブレイブイーターの掛け声が闘技場全体に響き渡っているからだ。

第三話「キリンゲマシーン」END

第三話「キリングマシン」(後書き)

次回から急展開の予定。

ちょっと書き溜め分の修正作業もやらないといけないので現在はUPロードに専念しています。

次回も早めにUPする事になります。

〓 楽屋裏 〓

光「何か前回のラストから比べると酷い事になってるな……」

優「まさかエロ小説のあっち側の役をやらされるとは思いもしませんでした……」

光「最近何かもう色々ギリギリだね……」

優「一万ヒットの記念回でこれかよって感じです……」

光「それと何かフラグが多い回だったな……」

優「うん。実は今回の話は元々の話に二千文字文ぐらい追加しているからね。書き溜めの内容があったからこそできた話だよ」

光「勇者抹殺とか嫌な単語が出てきたけどこれは……」

優「ちょっとまだ先のフラグだよ」

「ライドアクターについて」

優「ちなみにライドアクターは元々ヒーローフォースにも出て来た作者の劇中劇作品で、元々は高校時代のイラストで誕生したんだよ」

光「てか何でソレが魔法学園の図書館にある設定なんだ？」

優「うん。その辺りはまたの機会になるかな？ ちなみにこのライドアクターのネタは今ぐらいの時期に刑された作者の黒歴史作品「一つ目博士」にも使われていたね」

光「ああ……そう言えばそんな作品があったって誰かが言ってたよ
うな……」

優「アレから一年経ったけど、あの時作者は何て言うか変にテンションが狂ってたんだよ。つーか絶対おかしかったからアレ……」

光君についてー

優「本編では全く出ていない光君だけど、白の貴公子が語る通り王道的な勇者街道を爆進しています。だけど王道すぎてつまらないかな」と言う事であんまり描写されてません」

光「これはこれで酷いな……」

優「だって誰がどう見てもパーティーがギャルゲーだよ！？ うんで美形だよ！？ フラグを立てまくるんだよ！？ 必ず勝つんだよ！？ ジャンプ漫画なら誰がどう見ても絶対打ち切りENDだよ！ ニコニコ動画ならイラッだよ！」

光「……何か僕に恨みでもあるの？」

「最後に」

優「全く来ないけどご意見・ご感想お待ちしております」

光「本当に中々来ないよね……」

第四話「決断」

優しき勇者・悲しみの冥王

第二章：デモンズパラダイス

第四話「決断」

光一向はデモンズパラダイスへと向う。

野盗が現れたりと危険な道則だったが今から向う先は魔王城並に危険場所だ。

お供にフィリア・ネル：新たなお供としてネコの獣人格闘娘「マリュー」、エルフの弓術士「チェリー」をお供に加えている。

何だか前にもまして女っ気が強くなっている光勇者一向であった。

「それにしても本当にもう一人の勇者がここにいるのかニヤ？」

激しく揺れる龍車の中で人間の耳の代わりに付いた猫耳をヒクヒクさせ、短ズボンから食み出た尻尾を揺らしながら疑問を投げ掛けるマリュー。

ブラウンのショートヘアと健康的な肌と体付きはボーイッシュと言う言葉が似合う。背丈は普通だがやや幼さを感じさせる。赤いジャケットに銀色に輝くガントレット。運動靴に似たブーツで身を固めている少女だった。

鋭い八重歯を口から覗かっつも首を捻り疑問を投げ掛けていた。

「わ、私も同感です……あの世に最も近い町と言われている場所で

すよ？ そんな所に何故勇者が」

幼い体付きで赤い髪のを斜め上に括ったポニーテールヘアの少女、チェリーも同じ思いだった。

純情無垢のような童顔と白い肌の上に緑色の衣装に丈の短いスカートを身に付け、小さな足にサンダルを履き、自分の背丈よりも大きい弓矢や矢筒を手にし、懷にナイフを忍ばせている。

見た目はまるで幼女だがこのメンバーの中では一番年上だ。だが精神年齢は外見通りだ。背丈はフィリアより小さく、まるで姉と妹みたいになってしまっている。

「間違いない……あの貴族が嘘を付いたとは思えない。ソレに僕は間違い無くユウだと思う」

光は初めて会った時の事を思い出しながら少し過去の事を思い出す。

読者の知っての通り勇者一行の中にはネル・ウォーレンと言うアルクレスの先代勇者がいた。その死因は貴族の無茶な命令による尻拭いをさせられ死亡したと言う物だった。

旅を続けている道中、光達は悪事を行う悪党を成敗して行く過程でその貴族が現れた。

やがて調査を進めて行く過程でリベレイターと内部で通じていたのが判明する。その証拠を押さえてに成敗しようとした矢先リベレイターの配下の力でモンスター化する。しかし勇者として強大な力を振るう光はこれを打ち倒した。

『これでアレク（*先代勇者・弟の名前）の仇が討てた…礼を言う』

最初から繋がっていたのか、死んだ後に繋がったのかはついぞ分らなかったが、どの道仇であるネルも仇討ちが完了し、涙を流して

いた。優の居場所が分つたのはそれから数日経過した時だった。

『何ですって…優がデモンズパラダイスに！！？？』

宿屋で驚くフィリア。無理も無い話であった。

優が見つかった事にも驚いたが魔都として恐れられているデモンズパラダイスにしていると聞いたのだから。

『偶然聞いたけど分りませんでしたけど…その可能性が高いです』

光も猫耳の獣人マリューに無理矢理酒場に連行された時、偶然耳にしたのだ。一旦光はリベレイター討伐の旅を中断 いや光からすれば此方が本命だったかも知れない。

『アーヴィングって言う人が教えてくれました。奴隷として連れ去られた時、隣に自分が言う特徴の少年がいたとか……』

『何だと！！？？ 奴隷！？ あれ程の強さを持っていながら何故……』

ネル、光、フィリアは何故奴隷になったのか分らずじまいだった。優の戦闘能力はこの目で見ている。もし捕らえるなら国が総力を挙げて戦わねばならないだろう。二人の女性は本気でその事実が信じられなかった。

『どうやら記憶喪失らしいです……』

『『記憶喪失！！？？』』

記憶喪失。その事実は何度目かになる驚愕を覚えた。

『たぶんそのせいで力の使い方が分らず捕まっただんじゃ無いかって

……」

沈黙する二人。

暫く経過した後、次の目的地をデモンズパラダイスに向けて進行了た。

『あの子には命の恩がある。何としても助け出すぞ……』

『例え何であろうと私が呼び出した勇者です。このまま見捨てるのはあまりにも無慈悲過ぎるゆえ……』

決意を固めるネル。

フィリアは念の為此の事実を王宮に知らせる様に手配する。

この情報は遥訳復旧したアルクレス城に激震を与える事になるが、これはまた別の話であった。

そして今に至るのであった

「しかしあのアーヴィングって言う人何者だったかのニヤ？」

「さあ……何でもギルドの人らしいけど……色々親切な人だったね」

その傍らフィリアは浮かない顔をしていた。

「私はそれよりもユウ様が闘技場の王者になっているとは……」

「うん。もしかすると戦い方だけを思い出してしまっているのかも知れない……」

「それよりも私は……あの都市の闘技場で王者になると言う事はそれ相応の人間を殺めていると言う事に」

嫌な予想を語るフィリアに光は言葉を失ってしまふ。

「と言うか絶対軽く三桁台ぐらいは殺めてるのニャ……しかもあの町の闘技場でチャンピオンに君臨していると言う事は最低でもA、もしかするとS級ギルドライセンスを持つ人間に匹敵するニャ」

それをマリユーが駄目押しする。ギルドライセンスは上に行くに依じて協会からそれ相応の実力者である事を認められる事を意味するのだ。それに依じて受けられる依頼の制限が順次解除され、より資金が多く貰える依頼に参加できるのだ。

その中でもS級ギルドライセンスとはギルドに所属する人間の中で最高位の実力者である事を示していた。勇者の戦闘能力に匹敵する、もしくはそれ以上の実力を持つとされていた。このライセンスを持つ物はギルド協会の中でも数名しかない。

「だ、だけどまだ決まった訳では……」

チエルシーがその点を指摘するがネコ娘は首を横に振った。

「デモンズパラダイスとはそう言う所なのニャ……強きが正義・弱きが悪……あの場所で子供が生きて行くにはそれこそ悪魔に魂を売らなきゃにやらない」

「く、詳しいですね？」

「まあにやチエルシー……」

古参メンバーは静まり帰っていた。逆にネルが操る龍車のスピードは加速する。

デモンズパラダイスに到着した時は夜だった。

よりもよってこの悪魔の樂園が真の顔を見せる時である。

龍車を離れた場所に置いておき、徒歩で町に踏み入れ、目に入った光景に光はこの世の救いの無さに目を眩みかけた。

（こんな場所に優がいるのか！！??）

犯罪都市と言う単語をそのまま現した町並みに光は目眩を覚える。狭い路地に薄暗い不気味な光があちこちに灯っている。衛生環境は鼻に漂う何とも言えない臭いが答えだった。

時には死体が堂々と路上で倒れていたり、女の裸体が惜しみなく丸出しにされている。堂々と歩く亜人種、モンスター。目に見えて分る売春宿。馬車馬の様に扱われ、モンスターにまるで主人の様に扱われている悲惨な奴隷。

今なら平気でビデオ屋のR - 18コーナーへ踏みは入れそうな気分になれた。

光るからすればそれぐらい刺激がやば過ぎる町だった。

「勇者様あ……早く見つけてえ帰りましようよ……」

「チエルシーの言う通りだニヤ……ここに長く留まっていたら捕まって肉奴隷にされるなんてのも笑い話じゃないニヤよ」

チエルシーとマリューはどん引きしている。

フィリアとネルなどもう言葉を失っており、この町に来た事を後悔していた。

「勇者様……いつその町は焼払われてから捜した方が手っ取り早いかと……」

冗談に聞えない調子で言うフィリアに光はゾツとする。だが気持ちには分らないでもない。

同時に光は道中でマリユーが言いたかった事を理解した。

こんな場所に長くいれば確かに悪魔に魂でも何でも売り払わなければ生きてはいけない。

もし自分ならばできる事ならすぐにでも立ち去りたい思いだ。

「私も同感だが、ここがアルクレス領内では無くどの国にも干渉する事が出来ない一つの国家だから無理だろう……」

両手と頭を木の枷で束縛され、鎖で全ての奴隷達と繋がれている
あられのない格好をした女性達を見ながらネルは呟く。

このデモンズパラダイスはある意味一つの『国家』なのだ。

町には国の要人が、有力な商人が出入りしている。またこの町を
牛耳っている者達も下手な権力者よりその力は強大だ。

例えるならば中国、イタリアンマフィア、アメリカのギャング、
日本のヤクザを全て敵を回す様な物だと言えば敵に回す愚かさを多
少なりとも理解出来るだろうか？

「取り合えず聞き込んでみましょう……ですけど絶対別行動などは
禁止します」

内心どうなのかは分らないが冷静にフィリアは言った。光もソレ
に異論は無い。

方針が固まりかけたその時であつた。

『おやおや。これはこれはアルクレスの勇者御一行様。ここで何の
様ですか？』

この町に対しての絶望が広がる中、現れたのはなんと「白の貴公
子」だった。

周囲には護衛を引きつれ、付き添いにはあの太い執事服に似た格

好をした壮年の男が下卑た笑みを浮かべていた。
まるで最初から待ち構えていたかの様な準備の良さである。

『明日、貴様はアルクレスの勇者とのエキシビジョンマッチを行う
事になった』

部屋の置くに大きな机と立派な椅子が置かれたオーナールームへ
呼び出されたユウは唐突にその事を知らされた。

「……アルクレスの……勇者？」

以前よりも弱々しく、そして掠れた声で聞き返す。

『そつだ。勝負内容は相手を戦闘不能にしたら勝ち。勿論殺しもOK
だ。今回も負けたらどうなるか……』

ユデイが死ぬ。ユウにとってソレだけは避けたかった。

「強いのか？」

『勇者として召喚され、短期間の内に多大な成果を挙げている。君
と同じようにね……見出しがあるとすれば天才VS天才と言う事にな
るだろう』

天才と言うこの評価は決して間違いではない。

お互い短期間の内に経緯は形はどうあれかなりの名声と実績を挙
げている。

これで天才と言わずして何であろうか。

「……勇者を殺して大丈夫？ アルケレスを敵に回さないの？」

淡々とした口調でユウはその点を指摘した。

『相手の契約書にもサインさせた。文句は言われんよ』
「そう……」

ユウは表情を変えずにトボトボと歩いて行つた。

「ふっ……完全に操り人形だな……」

しかし白の貴公子はこの判断を後悔する事になる。

しかし無理も無い話であつた。

この少年の正体を。

その実力の底の無さも。

何よりも真の力が目覚める条件など知る由も無かつた。

知っている奴がいたら間違い無く哀れみの視線と共に「死亡フラグ」と言つ言葉をプレゼントをした事だろう。

第四話END

第四話「決断」（後書き）

実は書き溜め分の第三章を中盤から書き直そうと考えています。

ですから第二章が終わったら大幅に更新ペースは落ちると思います。

ちなみに今回もまた書き溜め分の時から付け加えています。

〓今日の楽屋裏〓

優「まさかの毎日連続更新!!」

光「何か鬼気迫る物があるな……」

優「ハーレム作ってる光君も久し振りに登場だね」

光「言うと思った……」

優「ちなみに第三章書き直そうとしたのはやはり一つ目博士の反省を思い出したから……」

光「何か定期的に一つ目博士って出ているような……」

優「黒歴史ですからね」

光「それで第二章もクライマックスに近付いて来たみたいだけど後何話ぐらいで終るんだ？」

優「さあ？　だけど第一章よりかは長くなると思うよ。本来はプロローグ・前編・中編・後編・エピソードって分かれていたしね。ちなみにメモ帳で一編辺りおおよそ20kbだからそれを分割して投稿している感じだからね」

光「だから長くなってるのか……」

「ハーレム化している件について」

優「絶対光君おかしいよ」

光「それを言うなら優だってユディさんがいるだろう？」

優「光君のコンセプトは分っているつもりだけど、幾ら何でもおかしいよ」

光「いや、自然にそうなたただけで……」

優「もしかしてアレ？　ハーレムエンド目指していたりする？」

光「してないから……」

「光君の活躍について」

光「何かサラッと語られたな」

優「うん。悪魔で僕が主人公だからね。だから省いたらいいの」

光「省いたって……」

優「まあハーレム作ってるんだからいいじゃない」

光「だからハーレムじゃないって……」

Ⅱ 最後に Ⅱ

優「徐々にだけど評価が上がって来てるね」

光「うん。一日のアクセス数も右肩上がりで上がっていったるしね」

優「さて、最後に……この作品ではご意見・感想お待ちしております。万が一このコーナーにお頼りを送りたいと言う方は何処かに分り易く楽屋裏宛と書いてドシドシ送ってね」

光「全く来ないけどソレはめげずにやるんだね……」

第五話「悲劇は繰り返すもの」

優しき勇者・悲しみの冥王

第二章：デモンズパラダイス

第五話「悲劇は繰り返すもの」

「上位ランカー専用部屋（ヘブンスゲートの選手専用の部屋）」

闘奴を管理する塔の最上階。前チャンピオンが使っていたらしい部屋だ。それを殺して奪い取った形となり、現在では半ばユウ専用の施設と化していた。

その部屋はとても豪華で煌びやかで、デモンズパラダイスに建てられた室内の物とは到底思えなかった。

大きなベッドにテーブル、ベランダ、綺麗な床の下に敷かれた赤い絨毯。

トイレに風呂、倉庫と四部屋と豪勢な仕様だ。家賃は殆ど人とモンスターとの命で支払っている形だがユウはもう動じなかった。

だがそれよりもユウはユディに目が行く。白い綺麗なドレスに無骨な首輪を付けている姿は相反する要素が反発し合い、より魅力を引き立てている。

「おかえりなさいませ……ユウ様」

会う度会う度にとっても悲しそうな瞳を目に向けて来る。今もそう
だ。

（もう……戻れないんだね）

初めて出会った頃がとても懐かしい。

（それでもユディさんは……どうして私の事を受け入れてくれるのだろうか……）

ソレが分らなかった。

何故自分の求めを素直に受け入れてくれるのだろうか。

何故愚痴の一つも言わないのだろうか。

何故辛そうにしているのを隠すのだろうか？

（奴隷だから？ それとも……そう命令されてるから？）

分らなかった。

ユウは私服姿でベッドの上に座り込む。上下共にダークレッド色のズボン、シャツ。少年の心の荒み具合を示している様な服装であった。

「明日の予定は？」

「アルクレスの勇者と戦う」

ユディは何度目かになるだろうか。体をビクツとさせ、目を見開いた。

驚いたらしいとすぐ理解する。

「勇者ですって!!??」

「うん……」

「そんな罰当たりな真似……幾らここがデモンズパラダイスでも限度があります!! 一体どうなるか分ってるんですか!？」

「仮にそうだとしても……私は……」

本当はユディの言う通りなのだろう。だが避ける為にはユディの命と引き換えにしなければならない。

ワザと負けてもユディが死ぬ。ユウが取る選択は今迄通りオーナーの指示通り相手を倒すだ。例え相手が勇者であっても

「どうしてですか…… どうしてあなたは……優しいのに…… そんな悪魔の様な所業で何とも思わなくなってしまったんですか!？」

これももう何度もやったやり取り。

「……ごめん」

それでも情けない事にユウはこれしか言えなかった。
もし真実を話せばユディは自決すると直感で悟ったからだ。

「いいんです…… 私は…… 私は…… ユウ様の奴隷ですから……」

涙を溢れ出すユディを視界に入れてユウはとても心が傷むのを感じた。どんな肉体的な苦痛よりも酷く。

(どうして生まれて来たんだろう……)

ユウはその事をずっと後悔した。

「ここにいるのかユウ!!」

女の声がした。

「誰？」

「開けてくれ!! 私は……アルクレスの剣士!! ネル・ウォーレン!! お前が記憶喪失する前に命を助けられた者だ!!」

ユウがそれが誰なのか分らない。

しかし記憶喪失する前と言う単語にユウはまるで数十年振りにも感じられる興味をそそられた。

「……私の事、知ってるの？」

「ああ!! 一見臆病に見えるが人を傷つけるのが嫌い!! だけど本当はとても優しくて!!」

懐かしく思える声だった。

同時に頭が痛み出す。

「ど、どうしましたかユウ様？」

「……分らない……けど……あの人は……とても大切な人……だったと思う」

自分でも枯れ果てたと思われる涙を流しながらユウはドアを開けた。

そこにはネル・ウォーレン。フィリア……それだけでは無く、新規メンバーの獣人娘マリユーや幼い外見のエルフ、チェリー……そして光がいた。

「いやゝ悪党の言う事をホイホイと信じるなって言ったのは私何だ

がニヤニヤ本当に実行するとは思わなかったのニヤ」

そう。白の貴公子から交した内容を完全にシカトして光達は強硬手段を取る。

ネルがソレに賛成し、半ば押し切られる形で光達もソレに賛同してここに至ったのだ。

「久し振りだね……と言つても覚えて無いよね？」

駆け寄る光。顔には出していないが懐かしさよりも嬉しさよりもこの時ばかり光は悲しみの感情が上回った。それでも光は笑みを崩さずに接する。

「はい……だけど何故だか懐かしく思えます」

分っていた筈だ。だがそれでも光は酷いショックを受けた。

ユウの死人の様な、凍て付いた目に。思えば初めて会った時も今程酷くは無いが同じ目をしていた気がする。

（どうしてあの時僕は……大宮の事を何とも思わなかったんだ）

今の優は光にとって自分の罪が形になってしまった物だった。当然フィリア、ネルも同じ事を考えた。初対面である筈のマリユー、チエリーも深い悲しみを感じ取った。

（だけど……大宮がいなかったらもつと大勢の人間が死んでいた……）

しかも国から化け物呼ばわりされた上での話だ。

（だからって……こんな……こんな事があって言い筈が……）

命の恩人が記憶喪失となって奴隷となっている。到底認められる物では無かった。

「とにかくユウー！　ここから脱出するぞー！」

「いいえ。出来ません……」

「どうしてだー！？？」

「この首輪が……体に刻まれた紋章が……この腕輪が……彼女もまた私と同じ首輪で……」

ユウの説明にマリユーが冷静に細くする。

「その子の言う通りその仕掛けを解除しないとこの町から連れ出せないニヤ」

「つ、連れ出すとどうなるんですか？」

「死ぬのニヤ」

光はクソッと思った。

「どうすればいい！？」

「首輪や腕輪の方もどうにかなるニヤよ。問題は体に刻まれている紋章ニヤが……」

「そちらは私が何とかします」

フィリアが力強く宣言した途端、凄い数の足音が此方へ向って来た。

「この足音は？」

「派手にやったから恐らく追っ手が来たのニャ……」

「何とまあ強引と言うか大胆と言うか……」

ユデイが言う通り力押しもいい所だった。

「じゃあ僕が食い止める！！ その間にマリユールとフィリアさんは解除宜しく！！」

「合点ニャ！！」

「任せてください！！」

光の決断は早かった。

「ネルさんとチェリーは危険だけど付いて来て！！」

「は、はい！！」

「当然だ！！ 命に掛けても守ってみせる！！」

三人は勢い良く戦闘態勢を取りながら部屋の外に飛び出て行く。

「どうして私にそこまで……」

外から漏れ出る喧騒に耳を立てながらユウは急速に変化する自分の世界に戸惑っていた。

「黙っているニャ……気が散る……」

腕輪の鍵の部分に針を差し込み、ソレを器用に動かしながらマリユールは言う。その眼差しは真剣その物だ。

「クソっ！！ 駄目ニヤ…… たぶん特定の魔力波長が込められた鍵で開錠する仕組みだニヤ」

自分が知る拘束具の類とはレベルが違う事にマリューは驚愕を覚えた。ガードがあまりにも固すぎる。まるであの白色仮面の性格を現した様な代物だった。一方、優の背中に回っているフィリアは一段落終えていた。

「ふう……」

「あの…… 解除できたんですか？」

ユディは半ばハラハラしながら問い詰める。

「強引ですが、無理矢理魔力を送り込んで崩壊させた形になります。これで一安心です」

背中からは綺麗サッパリ刻印が消えていた。これで仕掛けの一つは解除した事になる。

「ですが首輪と腕輪は魔力を無効化する特殊な金属が使われています……」

「もしかしてソレは…… まさか……」

「魔力殺しの鉱石…… とても稀少価値が高い金属ですが、まさか奴隷の首輪に使うとは思いませんでした……」

「ただけ贅沢な拘束具かニヤ！！?? 無駄遣いもいい所ニヤ！？」

マリューは叫んだ。表市場では滅多に手に入らない特種稀少鉱物。魔力殺しの鉱石（通称：マジックイーター）。優やユディの拘束具

にこの素材が使われていたのだ。

「しかも強引に解除しようとするれば仕掛けが作動するかもしれない」

「諦めるんじゃないニヤ！！ この少年を取り返す為に此処まで来たんじゃないのかにや！？」

と、必死に叫ぶ猫耳娘。

「ユウ様……あなたの魔法ではどうにもならないのですか？」

「魔力殺しの素材だなんて今始めて知った……」

もし方法があるならば喜んでユウは試している。

無い物は無いのだ。

「……ユウ様……私は今程奴隷になった事を後悔した事はありません」

ソレはユウも同じ心だった。

「ですが……ユウ様と御会い出来て……本当に良かった……」

ニツコリと微笑むユディ。

「貴方と体を交わらせる事ができて……だけど日に日に変わって行く貴方を見るのはとても辛かった」

外の喧騒などが全く耳に入らないくらい一言一句が優の頭に染み付いて行く。

「けど今の今迄言い出せなかった」

「ユディ？」

様子がおかしくなっていくユディにユウは嫌な予感がした。

「あなたは子供の様に純粹で……とても優しくて……ですが今ではもう人を殺す事に何の躊躇いすら無くなっている」

ユディは懷から短刀を取り出した。

「私はもう……そんなユウ様を見たくないです……」

最初に出会った時と同じ満面の笑みで優とこの世から別れを告げた

その頃、光達は激しい戦闘を繰り広げている。次々と送り込まれる兵士達の質は最低もいい所で問題なかった。ネルと光が鬼神の如き戦い振りを發揮しているのも原因だろう。光は償いの為、ネルはユウを助けたい為。今迄に無いぐらい志気は高い。そのせいでチェリーは空気がなっていた。

「ふ、二人とも凄いですね……」

次々と送り込まれて来る兵士達を倒す二人にチェリーは棒立ちしている。

さらに廊下は狭く、下手すれば誤射する危険もあったし殆ど接近戦が主流だったのもある。弓士と言うバトルスタイルで活躍しろと言うのは無理があった。

『人の約束を破って大暴れするとは……勇者らしからぬ行動だな』
「お前は……?」

騒ぎを聞き付けたのか、完全武装の兵士やユウと同じ闘奴らしき連中と共に白き貴公子が現れた。その傍にはあの腹心の太った執事らしき男もいる。

「悪党の言う事を信用できるか……!」

「確かに理に叶ってますが……理解できませんねえ。どうしてあの少年の為にそこまで……」

「命の恩人に恩を返して何が悪い……!」

腹心の男にネルは激怒した。

『ならばこう言う手はどうだ?』

すっ…と白き貴公子は三人に指輪を見せ付ける。

「そ、ソレは?」

「あの少年の傍に居たユデイの首輪の仕掛けも発動する仕組みですよ。これを発動したら忽ち窒息死します」

「……!?!?!」

で合って早々、切り札を出されて言葉を失う。

「そうか……ソレで優を……ずっと……奴隷として脅迫してたのか……」

闘技場で最強であるのならどうして止めようとしなかったのか? 光

が最初疑問に思った事だった。

ソレがああ三つの仕掛けだけだと思いついていた。だがそれよりももっと嚴重な仕掛けを施していたのだ。

『君も知っているだろう？ アルクレスの二人の勇者……その傍らであるユウの能力を。例え敵が何であろうと皆殺しに出来る強大な戦闘能力……それを抜きにしても素晴らしい才能を持っていた』

「ですが何時牙を向けるか分かりませんからねえ……だから私達はより強力な枷を用意したのですよ」

「他人の命を枷と言うか……下種め!!」

接した時間は少ないがネルは優の性格の一旦は知っていた。あの少年は自分の命よりも他人の命を優先する性格だ。現にそんな性格だったからこそ今こうして生きていられるのだ。

「何て汚いやり方を……」

『ここ（デモンズパラダイス）ではこれが日常だ』

光は齒を食い縛って睨み付ける。

「そう。ソレが。この町のルール……如何に強い奴隷であろうと、所詮は奴隷……」

漆黒の剣を片手に優は何かを取り付いたかの様に体中から殺気を充満させて部屋から出た。

闇の外陰を身に纏い、目からは血の涙を流している。

（だ…誰だ？）

光は思わず目を疑う。

さつきとはまるで別人すぎた。まるで悪魔でも乗り移ったかの様に。

その予感が的中したのはすぐ後だった。

「ギャアアアアアアアアアアアアアア！！？？」

何の躊躇いもなくユウは魔法を無詠唱で放つ。

魔法名『ライトニングボルト』。パープルカラーの電気放射をぶつける攻撃魔法。

白の貴公子は障壁らしき物を展開してガードしたが回りの人間はそうも行かない。全員が異臭を放つ墨の塊となった。傍に立っていた腹心の男も同様の末路を辿るが白の貴公子は特に臆した様子は見せなかった。

『いきなり乱暴になったな……………』

「もう…………死んでもいい。殺してやる…………刃向かう奴は何もかも皆殺しにしてやる…………」

『ほう？ ではユディの命は……………』

「その必要は無くなったよ……………」

『なっ！？』

ソレは初めて見せる動揺だった。

「死んだよ…………ユディは……………」

「え…………！？」

光の頭から思考能力が無くなる。ネルもチェリーもだ。

「…………目の前で。自分の胸をグッサリと…………貫いて…………嘘だと思った……………」

ユラリ、ユラリ、足を踏み締めながら一步一步。白の貴公子に死人の様な足取りで歩み寄る。

「心から愛していた人でした……だけど不安でした……その心の内は最後の最後に分りましたよ……」

ユウはやつと理解したのだ。ユディの本当の気持ちを。

「愛していたって……」

鮮血に染まるドレス姿。そしてどんどん冷たくなって行くユディの体。心臓を貫き、最早回復魔法が役に立たぬ程の

『そんな馬鹿な……ちゃんと自殺防止の暗示魔法は付けていた筈！？』

ちゃんとその対策はしていた。ユディはユウと違い、普通の人間だ。その手の魔法はちゃんと効く。もしユディが自殺した場合、真っ先に牙を自分に向けてるのは明白だった。

その為の暗示魔法だった。だがどう言う訳かその目論見が崩れてしまった。

『さて……本当に死んだのか？』

だがここである仮説が思い浮かんだ。本当に自害したのかと。もしかすると騙した上で此方のカードの上を封殺する目論見では無いのかと？

「現に死んだんだよ……僕の目の前で……フッフハハハハハッ

「ハハハ！！」

満面の笑みで大笑いするユウ。

「いやゝねえ……何の為に今迄生きて来たんでしようねえ！？ 何の為に私は大勢ぶつ殺したんでしようねえ！？ 女を殺したり陵辱したりしてまで生きて来たんでしようねえ！？」

笑いながら独白する。

「言ってる事は本当だニヤ……」

「マリューさん……」

ドアからマリューが出て来る。

「今フィリアが見ているが……もう駄目だニヤ……」

貴公子は自分の推理の間違いを認めた。

どうやら本当に死んでしまったらしいと。

「仕方ない。緊急手段を使うか……」

「黙って消えろ！！」

神速の速さで袈裟斬りにするユウ。呆気ない最後だった。

「な……なななな、何ですかアレは！？」

と思われた。

『この体は言わば動く人形だ……』

真つ二つになった白い貴公子の上半身がフワフワと浮いていた。

『当然、仮面もこんな調子だな』

カパッと仮面を開けるとそこには不気味な光を放つ水晶玉があった。

そう。この人物は中身が空洞だったのだ。

「……魔力の流れを捉えた。場所は上流区の中央ですか……」

『そんな芸当が出来るとはな……益々持って君は危険だ。私は牙を向けた猛獣を野放しする程馬鹿ではない。力が覚醒する前に死んで貰おう……』

「ッ！！??」

首輪の仕掛けが作動し首が急速に絞まる。同時に腕輪の仕掛けも作動し体に毒が流れた。

「止める！！止めてくれ！！」

『無駄だアルクレスの勇者……リベレイター様の敵であるなら貴様は私の敵だ』

「なに！！??」

ここで意外な繋がりが出て来た。

『私が憎いか？ 憎いのなら私の元に辿り着いてみるがいい。場所はこの勇者が言った通り上流区の中央にある屋敷だ……』

そう言い終わるとロープの男は抜け落ちたようにパサッと地面に落ち、水晶玉が割れた。

「ユウ！？ シツカリしろ！！ ユウ！！」
「……あ……ああ……」

ネルに介抱されながらユウは首を押さええて苦しむ。誰が見ても生存は絶望的だった。

「あ……ああ……あ……あ……」

そしてユウは最後の一言すら発する事も許されず、そのまま抜け殻と化した。

（ごめん……な……さい……）

そこで意識は途切れてしまった。

第五話「悲劇は繰り返し替えるもの」END

第五話「悲劇は繰り返すもの」(後書き)

「作者が忘れていたお知らせ」

優「今回は今日の18時にアップ予定だよ」

光「何で態々そんな事を」

優「……やって見たかったから？」

光「何じゃそりゃ!？」

第六話「二度目の目覚め」

優しき勇者・悲しみ冥王

第二章：デモンズパラダイス

第六話「二度目の目覚め」

気が付くとユウは朝日が差し込む公園のベンチに座っていた。記憶の中にアル黒い学生服の姿だ。隣には同じ学生服の人間がいた。容姿は光と通じる物があるが顔はボヤけて正確に見えなかった。

「ここは？」

「お前が作り出した精神世界って所だな……」

男はそう言っただけでベンチから立ち上がった。

「じゃあ君は……」

「お前の能力が作り出した擬似生命体って所だ。元となった人間に限り無く近い……まあクローン人間レベル99ってところだな」

「はあ……」

ユウはサッパリ分らない。自分は確か死んだ筈では無かろうか？

「ユウ……今回お前は凄い頑張ったと思うよ。理由はどうアレ、犯した罪は許されなかったと思うが歯を食い縛ってちゃんと最後まで生き抜いた……」

「だけど私は……」

救えなかった。多くの屍を築いても。倫理観を破棄しても待っていたのはあまりにも無残な最期だった。

「アレは仕方なかっただろう。あの白の貴公子とか言う中二臭いネーミングの野郎は有能だった。例えば光達がどんなに上手く立ち回っても結果は大して変わらなかったと俺は思うぞ」

慰めているつもりなのか少年はそう言ってくれた。

「……んでどうする？」

「え？」

「一つ言つとくがこのまま光が白の貴公子と戦えば間違い無く全滅する。そしてまたお前の様に扱われるぞ」

「そんな……」

非情とも言える宣告にユウは驚く。だが否定はできない。

（だけど何の対策も講じないとは思えない……）

あの男の狡猾さはとてもだが光達とは相性が悪すぎる。無いとは言い切れないだろう。

「俺はお前の判断に任せたい……だけど個人的には救って欲しいって思っている……ソレに」

「ソレに？」

「お前は楽に死なせるつもりはねえ。このまま退場し、悲劇のキアラとして終らせるには虫が良すぎる。殺人、強姦歴がある上に最愛の人を死なせたお前の人生を……このまま終らせるのは早すぎる」

言われて辛い物があるが、これには優も同意しなければならない部分が多いと感じた。

（そうだ……私の罪は……重すぎる……）

とても言い訳して済まされる問題ではない。

「……だが俺は例えギブアップしても文句を言うつもりは無い。もしその選択肢を取ればまたお前は記憶を失う事になるからな」

「記憶を……ですか？」

「そうだ。最悪な記憶も、愛しい人間と過ごした記憶も何もかも。また最初からリセットされるんだ」

暫くの沈黙の後、ユウは口を開いた。

「その力を使えば、ユディさんは助けられますか？」
「勿論だ」

ユウは決断した。

「では……そうします」

「後悔しねえのか？」

「はい」

力強く答えた。

「もう二度と戻らないんだぞ？」

「それでもです」

少年はハアと溜め息をつく。

「分ったよ……たく、前々から思ったけど本当に大馬鹿野郎だなお前は……」

「そうなのかもしれません」

優は何故だか笑みを持って答えられた。

「……実はその……な……お前滅茶苦茶強くなつた事に疑問に思った事はあるか？」

「え？」

話は終わりかと思いきや、唐突に話を切り替え始める。何だかとても言い難そうだ。

まるで患者に余命一週間を告げる医師の様な態度と言えは分るであろつか？

「記憶を失う前はそりやもう貧弱その物だった。とてもじゃないが今程の戦闘能力を得るにはどれだけの時間が必要になるだろうつかぐらいだ……」

「じゃあどうしてそんな事を……」

少年は顔を背けた。顔の表情はハッキリとは分らないがとても顔を青くしている事だろう。

「お前に幸せな人生を歩んで欲しかったらしい……だから力の一部を発揮出来るように処置したんだ。だが今回ソレが裏目に出ちまった感じだが……」

前々からオカシイと思っていた謎の一つが遥訳判明した。

（道理でオカシイと思ったら……）

素人が三カ月で生死を賭けた闘技場でチャンピオンになる。

客観的に見ればオカシイ所だらけだ。自分でも作り話としか思えない。だがやっと理解出来た。

もう一人の『自分』はこの世界で充分生きて行けるぐらいの力を与えてくれたのには感謝しなければならぬがそのせいで最悪な記憶を植えつけられる結果となった。

（私……もしかして呪われてるんじゃないでしょうか……）

この空間に辿り着き、消された記憶が徐々に戻るにつれて心底優はそう思う。

異世界に来てからはまるで悪化したかのように酷くなっていた。

「ソレにあの村へ辿り着いたのは殆ど事故だがアイツもあの小さな村なら平穩に暮せると思ってたんだろうな……」

「だけど……あの村は私を……」

自分がこの地獄に放り込まれた経緯を思い出す優。金に変えられて売り飛ばされた事は怒りよりも悲しさが勝った。

あの村は確かに寂れていたが、地球には無かった人の暖かみがあったのである。だけどその暖かみは……そこまで思い出して優は涙を流している事に気付く。

「……仕方ないですね？ 生活があるんだから……だから……きつと……」

「それはお前の誤解だ。大体お前を売った話ってのはアーヴィングって男の推測だろう。実際は村全員の命と引き換えだったんだよ」

優は驚いた。

「ほ、本当ですか!？」

「全て解決したら会って見たらどうだ？ たぶん喜ぶと思うぞ……
今のお前なら以前よりも長時間の間耐えられると思うしな……」

「はい……誰だか分かりませんが……ありがとう」

頭を下げた。

「気にすんな……たぶんこれからも辛い人生を歩みそうだけど……
頑張れよ」

そして視界が元に戻る。

「アレ……私は……」

確か自分は自害した筈だった。

「目が覚めた？」

ユディは重たい目蓋を開ける。そこにいたのはユウだった。
上下を黒い見慣れぬ服装（学ラン）を身に纏い、優しく微笑み掛
けてくれる。ソレは自分が待ち望んだ笑顔だった。

「おはよ……優が愛した愛しい人。始めまして……僕は太宮 優。
最強にして最弱の神……」

ユディは夢かと思った。

「ここは……天国ですか？」

「いいえ。まだあなたの物語はまだ終わっていません。私も……あなたも……まだ終りを刻むには早過ぎます」

ユウはユディを立たせた。

「あの……何が何だか……」

ここは確か自分が死んだユウ専用の部屋だ。

ちゃんと床には乾いた血の塊がある。そして胸を貫いた短刀もだ。確かに貫いた事は事実だ。

「さて……取り合えず」

ユウはユディの首輪に手を触れた。すると砂となって消えて行く。突然起きた待ち望んだ奇跡にユディは信じられなかった。

「な、何をしたんですか？」

神の御技を目の前にしたかの様に興奮しながら

「原子構造を解析し、ソレに合わせて魔力の振動波を打ち込んだだけ。幾ら魔法を無効化をする物質でも所詮は物質。魔力で発生した振動波による原子分解からは逃れられなかったね」

「学の無い私には全く分りません……」

優（*作者独自の呼称で真・優、もしくは神・優とも言う）が行ったのはこうだ。

ヴェルムの剣と同じく触れた物質の原子構造を解析（この優にはスキャン能力がある）し、それに合わせて魔力を器用に操り振動波を打ち込んだのだ。

この攻撃方法は水だけを分解する電子レンジの応用した物だ。（判り難ければ勇者王に出て来るあのロボットを思い出して欲しい）弱点も多く、その能力故に慎重な扱いが求められる。だがこの攻撃方法は把握した原子構造であるならばどんな物質も破壊可能だ。（それ故に慎重な扱いが求められる……）

地球の人間ならともかく、こうした学問が未発達の世界に生きるユディからすればまるで神の秘術の一旦に触れている思いだった。

「だよね……やっぱり魔法が発達すると科学分野は発達しないのかな……」

「あの……何処へ行くんですか？ そっちはベランダ……」

優は背中から紫色に光る翼をブワツと広げ、部屋を明るく照らす。

「勇者を助けに行くんだ。君も来る？」

とても無邪気な笑みをユディへ向けた。

『ほらほらどうした？ 私が憎いのだろう？ ならば存分に私を殺し続けて見せる』

その頃勇者一向こと光は上流区（早い話が金持ち専用の区画。この区画に入るのは許可証が必要だが、怒りの強行突破した）に突入。小さな白程もある大きな屋敷に押し入り、その内部で白の貴公子×百体と戦っている真っ最中である。

これ達は全部操り人形であり、その本体らしき声が屋敷内に響く。何処かで観戦しているのだと思うと憎たらしく仕方が無かった。

「何なんだこの気色わるい光景はニヤ!？」

「ヒイヒイヒイ!？ き、不気味すぎて夢にでちゃいます!？」

「言っている暇があつたら攻撃するニヤ!! でないと永遠の夢を見る事になるニヤよ!？」

チエリーとマリューはこの異常とも言える光景に泣きそうになっていた。(チエリーは既に半泣きになっている)

しかも白の貴公子は頭部の水晶玉を破壊しないと駄目だと言う縛りがこれまた厄介であり、その上一体一体がかなりの実力を持つ魔法使いでもあるのが更に性質が悪い。

もう彼これ二十体程倒したが、それでも次々と迫り来る。現在の戦闘場所は屋敷の内部の入口(エントランス周辺)で天井が高く、広いスペースがあり、また二階にも大勢の白の貴公子が直に発動できる下級魔法を一斉掃射してくる。

並大抵の冒険者なら全滅するだろうがその最上級である勇者一向は何とか堪えていた。

「これではキリが無いぞ!!」

「障壁でどうにか防げますが……これでも十分持ちません!!」

アルクレス組の二人も悲鳴に近い状況を告げる。

魔法剣士であるネル、純粋な魔法使いであるフィリアは純粋な魔法戦では負けないがこの物量相手には流石に分が悪い。

嫌らしい事に下級魔法を連発して動きを封殺し、威力の高い魔法で止めを刺し、前衛の貴公子で封じて他の貴公子を守備に回す最低四つの命令系統に分かれて動いていた。

「この牙城を崩すのは難しいですね……」

単純な戦術だが、逆にだからこそ破られ難いのだ。

「クソ……どうしてだ……どうして……何時もの様に戦えないんだ……」

感情を剥き出しにしながらも光はブレイブキャリバー片手に倒しているが何時もの動きのキレが無い。

攻撃も単調で力任せであり、動きもまるで血走った闘牛のようで徐々にダメージが蓄積されて言っている始末だ。

それは優やユディを救えなかった自分自身と白の貴公子に対する激しい怒りのせいであり、本来の力を充分に発揮出来ていないせいである。ブレイブキャリバーは純粋な心に反応し、力を際限なく与えてくれる聖剣だ。だが今の憎しみや憎悪の力で戦っている光はその能力を発揮できずにいた。

「逃げた方が良いんじゃないのかニヤ！？？」

「そうしたいのは山々ですが！！ ヒカル様が……」

「クソッ……このままでは……また弟見たいな奴が……」

徐々に勇者一向の間で絶望感を溢れ出していた。

『期待外れもいいところだな。ヒカル……』

「黙れ……」

『この様では例えユウと戦ったとしてもすぐ殺されていたな……喜べ、君は正解の道を選んでいたのだ。だが過程が変わっただけで結果は変わらなかった。どちらかが死に、どちらかが生き残る……』

「黙れえ……」

『そして君が生き延びた……アルクレスの勇者……』

一旦白の貴公子達の動きが止まった。

『ここまでの奮闘を称えて少し種明かしをしてやろう』

「種明かしだと！！！！」

（落ち着けヒカル！！ 今の内に態勢を整えるんだ！！）

怒りに燃える光を宥めるようにネルは細くも力強い手で肩を掴んだ。

クツと顔を歪めつつも指示に従う。

『話した通り私はリベレイター様の配下だ。白の貴公子はそれを隠す為の偽名に過ぎん。最もこんな真似をしている輩は私以外に大勢いるがな』

「大勢…他にもいるのですか？」

『それは自分で見つけたまえ。話は遡る事三カ月前……アルクレス城での戦いで我々の目的は三つあった。勇者の抹殺・召喚装置の破壊・城の占拠……最終的にはあのユウと言う少年の手で全てぶち壊しになった。だが私はその強大な戦闘能力に目をつけた』
「だからユウを奴隷にしたのか！？」

光の怒声が広い屋敷の中で響く。

『そうだ。そして様子を探る為に奴隷商人を唆けたが……辛い記憶喪失になっており、私の手駒に加えた。だが念の為私は枷を複数用意した』

「その中にユディさんが……」

『予想以上に効果があったよ。それにユウもユディに対して深い愛情を覚えたのは計画通りだが、あんな行動を取るとはな……御陰で計画は白紙だ』

ワザとらしく残念そうに語った。

「計画……かにや？」

『勇者根絶計画だ』

一同に衝撃が走った。

『今現在ウリエール大陸の戦いの行方を握るのは魔王と勇者だ。だが勇者は殺しても殺してもキリが無い。殺してもまた新たな勇者が湧いて出て来る。ならばその大元を叩いて行くしかあるまい？』

「じゃあ召喚の間を破壊したのもその計画のために！？」

『ソレが我々リベレイターの戦略方針であり、またスローガンでもある。私が考えた計画は勇者を勇者の手で殺させる事により人々に対して勇者への不信感を植え付け、更にはアルクレスへの軍事侵攻も可能となる口実も与える事も出来る。最もこちらのプランは既に発動しているがな』

「何ですって！！！？？」

フィリアが驚く。

『ヘブンスゲートの試合で一度ユウにフェリシア王国の王女と試合をさせた事があってな……詳しい経緯は知らんが権力闘争で破れ、奴隷として売られたらしい。私は試合中に陵辱する様に指示した』
「お前何処まで性根が腐ってやがる！！！？？」

光の叫びが一同の心を代弁していた。

『フフフフ……この情報は既に各方面へ流した。戦争狂いの貴族や商人どもにもな。アルクレスの勇者が奴隷となり、そして権力闘

争に敗れた王女を陵辱されてしまった……人間が戦争をやるには十分過ぎる理由だ』

「何て非道な……」

『さて……語る事は終わった。そろそろ終りにしよう』

瞬間、床に大きな魔法陣が浮かび上がった。

「な、何だニヤー！？？ か……体から力が抜けていくニヤ……」

『私の性格は分っていただろうに……一度退いて態勢を立て直す素振りすらも見せなかったな』

「まさか……こんな単純な手に引っ掛かるとは……」

「も、もしかして絶体絶命のピン……チ……です……か……」

魔法陣が発動している床にへたり込み、倒れ込んで行く仲間達。この魔法陣が現れた途端体から力が吸い取られる様に抜けるのだ。ネル、マリユー、チェリーが床へ倒れ込んだ。

「ひ……ヒカル様？」

「駄目だ……俺も……マトモに体が動かない……」

ブレイブキャリバーの力なのか、どうにか立っていたがそれを維持するだけでやっとだった。

とてもだが戦える状態ではない。

『ヒカル……貴様はユウの役割を演じて貰う。お前達はその人質の役割だ……』

「クソオ！！ クソつオ！？ 俺は勇者だろ！？ こんな所で負けちゃならないんだ！！」

必死に体を動かそうとするが思うように動けず、膝を床へつけて

しまう。

『終りだ勇者』

ここにはいない白の貴公子は勝ちを確信した。

「勝負の行方は最後の最後まで分らない物だよ」

屋敷の屋根を突き破り、何かが降り立った。

「う……嘘だろ……確か……死んだ筈じゃ!？」

「うんうん。僕は死んでない。僕はこうして生きている」

ドレスを纏ったユデイをお姫様抱っこし、紫色に光る翼を羽ばたかせ、黒い学ランを身に纏う女に似た美少年。

『ま、まさか!! 貴様……死んだ筈では!!??』

「地獄の王に嫌われたから現世に戻って来たんだ」

名は大宮 優。

魔法陣の抗力がある筈のこの場に何事も無く立っていた。

第六話「二度目の目覚め」END

第六話「二度目の目覚め」（後書き）

「今回は行きなり楽屋裏」

優「遂カッとなって一日で二話連続投稿しました……ちなみに初の予約掲載です」

光「はあ……」

優「6時だよ！！ ゴールデンタイムだよ！？ もうちょっと驚こ
うよ」

光「それよりも話の展開に付いていけません……」

優「確かに光君ヤムチャキャラみたいになってたね。そんなんじゃ第三章の激戦には生き残れないよ」

光「え？ 第三章そんな全編バトル風になってるんですか？」

優「いや……ちょっとね……」

光「？」

「夢の中に出て来た人について」

光「誰アレ？」

優「うーんと、僕の記憶の中にある大切な人の一人だよ」

光「て事は……どう言う事？」

優「そのまんまの意味だよ。ちなみに覚醒した僕と殴り合って倒せるぐらいの実力はある人だから相当チートだよ」

光「設定上では存在する人なんだね……もしかして第二話に出て来てた何処ぞの幻想　しの様に説教しながら殴り捲ってた人とか？」

優「そうそう。その人その人。本当はその人を異世界に送り込む企画があっただけで強過ぎるんだよね」時間が制限が無くなったテツカマンブレード見たいなもんだよ」

光「ごめん。テツカマンブレード分りません……」

作者「詳しくはニコニコ動画やWIKIで検索してください」

「死者蘇生とかできんの？」

優「遂カツとなってやった。今でも反省していない」

光「いや……まあいいけどさ……死者蘇生とかできるんだ？」

優「実は設定でもかなり曖昧だったり……」

光「マ　テ　や　」

「白の貴公子について」

優「さて……散々非道な事をしてくれた白の貴公子ですが遂に追い詰めたね」

光「読者の視点だとあつと言う間何だろうけど優の場合は出会って三カ月ぐらい経過してるんだよね？」

優「うん。僕が女の子だったらきつともうノクターンノベルズ送りにされちゃいそうな事を」

光「てかしてたよね。未だに天からお塩くらってないけど作者としてはかなりチキンレース行っている気分だったらしいよ」（汗）

優「陵辱物のギャルゲーが元ネタだもん。まあ男をF A K（絶対外国人に向って言わない様に。ケンカを売っている様な物です）しろとか言われたら流石の優君も自殺したと思うけど……」

光「そのネタは色々やバイから……後話逸れてるよ……」

優「んじゃあ気を取り直して……まだ決着付けてないから核心に迫る部分は明かせないけど、モデルはスーパーヒーロー作戦のユーゼス・ゴッツォが元ネタだね。ちなみに白の貴公子って言う名前はスパロボZに登場した黒のカリスマがモデル……ネーミングが房二臭いって言うってたけど異世界の人に地球のネーミングセンスを求めるのはどうかなって言う都合のいい作者理論の元に名付けられました。後覚え易いし。」

光「そんな制作秘話があつたんだね……」

優「性格面はかなり非情でユーゼス寄りだよ。絶対的な力への嫌悪って言う一面も結構共通しているね。本編で経験したと思うけどある意味リベレイターよりも手強い相手で話の展開次第じゃラスボスにもなれたと思うね。兎も角かなり読者の記憶に残る印象的な悪役

「なったと作者は考えているよ」

光「てか普通アソコまでやるとは思わないでしょ……」

「どうして覚醒の条件がハードなのか？」

光「死んで、やっと覚醒だもんな」

優「これは理由は簡単。もう一人の僕によるとあまり強い力を持たせると優が大量虐殺者になって魔王以上の脅威になってしまう恐れがあるから慎重にならざる終えないんだ」

光「だけどまた今回みたいな事が起きたらどうするんだ？」

優「いや、だけど今回は運が悪過ぎだし……ソレにこの設定で作者の拘りでもあるしさ……解禁するとすれば後半ぐらい？」

光「何か過酷だな……」

「最後に」

光「次回はまだ修正中だけどなるべく早くUPしたいそうです」

優「ご意見、ご感想お待ちしております、まったねー」

「ちょびつと最後に雑談」

優「もっと大勢ゲストとかで呼びたいよねーアウティエルとかフォースからとか」

光「ふお、フォースはあんまり人気無いから止めといた方が……て
かアウティエルのパラレルワールドだろアレって？」

優「そう言えば再構成どうなってるんだろっね〜アレ？」

第一話の終りで止まっています。 B Y 作者

第七話「そして審判は下された」

優しき勇者・悲しみの冥王

第二章：デモンズパラダイス

第七話「そして審判は下された」

「久し振りだね皆さん。心配掛けてごめんなさい」

「き、記憶が戻ったのか！！？？」

「ええ。全部……何もかも、どう言う人生を歩んで来たのか、記憶を失う前に何があったのか……全てを……」

優はユディを降ろした。

207

「ゆ、ユウ様……あなたは一体何者なのですか？」

「今はそれよりもこの状況をどうにかしないとね」

下から上に拳を挙げる。その軌跡から斬撃が地面を抉り取る様に食い破る。

その攻撃で魔法陣が削られると見る見る内に光が収まる。

「魔法陣は高度な計算式の塊だから少しでも不具合が生じるとこの様に抗力を失うんだ」

『今の攻撃は一体……魔力の反応は無かったぞ！？』

「高度に研ぎ澄まされた武術は魔法と変わらない……って誰かが言ってたね。何か違う気もするけど」

技名：カマイタチ。

手刀から生み出される真空波の刃で相手を両断する技。ユウはこの刃の切れ味を自由自在に調整でき、（新基準の）モース硬度15（物質の硬度115はダイヤモンド相当）すら両断できる。（ちなみに硬度とは悪魔で物の頑丈さでは無く、その物質を硬さを示す数値であり、ハンマーで叩いても普通に割れる）

『攻撃しろ!!』

「ちよつと時間貰うよ？」

複数の白の貴公子から攻撃魔法が飛ぶがソレが届く事は無かった。新たな魔法陣が優の足元から広がり、その魔法陣から張られたドーム状の障壁が全て防いでくれたのだ。

「凄い……力まで戻っていく……」

同時に自分の体が羽の様に軽くなって行くのを感じ、戸惑うヒカル達。

その間に優は懷からカードを取り出す。そのカードにはまるで特撮物に出て来そうな緑色のパワードスーツを着た戦士が映し出されていた。

「使わせて貰うよ、お姉ちゃん……」

前面に紫色の魔法陣を展開。カードを投げ込む。

するとそこから背中中に二門の大砲を背負った緑色のパワードスーツの戦士が現れる。

無骨な外見。丸いヘルメットに光る赤いツインカメラ。黄色い球体が埋め込まれた胴体。両ショルダーアーマー内部、両足側面部にミサイルコンテナ。太い腕にとっても大きくて厳ついゴテゴテとした

20mm大型ガトリング砲を装備、それを片方に付き一門〓計二門。見るからに基地一つ吹き飛ばせそうな程の火力心奉主義的な重火力。何の前触れも無く出現したソレにド肝を抜かれた。

『リレーの世界から出張だよと……ってお前突然呼び出したな？』
「火力で来るなら火力で対抗しないかね」

自分が呼び出した相手へ親しげに言葉を交わす。

光はおろか、他の皆は突如として現れたとても場違いな特撮物に出て来そうなのその姿をマジマジと眺める。質問したいのは山々だがツツコミ所が多すぎて何処からツツコめば良いのか分らない様子。

そんな様子に構いもせずこの超火力スーツは全火器を優が張ったバリアの外へしつこく攻撃する白の貴公子軍団へと向けた。

「皆、耳を塞ぐ準備は出来たかな？」
「ま……まさか」

何が起こるか分った光は顔を青くした途端、背中のバックパックから炎を吹き出し上昇。吹き抜けのおよそ二階部分に辿り着くとすぐさま両腕のガトリング砲を左右に向けた。

『ファイナル・エクス・ブロージョン起動！！ テメエら纏めて全員ぶっ飛ばす！！』

頭部ヘルメットから額透明部からビーム砲、ヘッドフォンパーツから対人掃討バルカン砲、胸部の球体部から、両肩の二門の大砲から拡散ビーム砲。両肩、両足のミサイルコンテナが開かれマイクロミサイルが、両腕に持った20mmガトリング砲が火を噴いた。

ちなみに皆の鼓膜を守る為に優は念の為に防音魔法を掛けていた。

『このパワードスーツは単独での一体多数を想定されたパワードスーツだ！！ 砲撃戦なら負けん！！』

相手の障壁諸共ビームの光りが、弾の嵐が、ミサイルの爆風が次々と屋敷諸共吹き飛ばして行く。破壊に次ぐ破壊。轟く轟音と爆音。紙屑の様にバラバラとなって吹き飛ぶ白装束の軍団。

屋敷が随分と風通しがよくなりボロ屋同然までに半壊するのにそこまで時間が掛からなかった。勿論偽の白の貴公子軍団はこの一斉射で全滅。

この壮絶な惨劇を目の当りにした光達は言葉を失い呆然となっている。異世界組もそうだったが科学技術と言う物を知っている光でさえもこの未来から現れた超兵器とソレによって引き起こされた惨劇に信じられずにいる。

『さて……タイムアウトだ……手助けはここまで。白の貴公子はお前の手で倒せ』

「うん。ありがとう……りょ」その名は英雄の称号と一緒に捨てたよ

右手に持ったガトリング砲が光の塵に変わり、仮面の戦士は優へ向けてサムズアップ（他の指を折り畳み、親指を真上に向けるポーズ）した。

『じゃあな……皆仲良くやれよ……』

そう言っただけの仮面の戦士は光りの粒子へと変わり、その粒子は優の中へと消えていく。

『……成る程、想像以上の化け物だな』

「厳密に言つと僕が手を下した訳じゃ無いけどね」

戦闘が一区切りしたのを見計らい白の貴公子が何処からか話し掛けていた。

『……最早退路は無いに等しい以上……直接相手をしてやろう』

白の貴公子は腹を括った。一度死ぬ前に居場所を探知されたのと同じ様にもう既に居場所を探知されたと考えたのだろう。そうした可能性を吟味した結果、潔く戦う道を選んだらしい。

続いて屋敷全体を揺らす程の地響きが起きた。

「脱出するよ」

「「「「「え?」「」「」「」」」」」

優を中心に光の玉が形成。メンバー全員を包み込むとそのまま空高く上昇。

悲鳴と共に屋敷の全貌が見渡せる地点まで辿り着く。同時に屋敷へと続く道が左右に開かれ、そこからファンタジーには似合わない鉄の機動兵器が現れた。

「アイアンゴーレム!? アルクレスで見た奴と形状が違う!?!」

「うん……サイエンって人、子供向けアニメの悪役みたいにしぶとく生きていたのか。それともあの白の貴公子が作ったのか……まあ負けるつもりはないけどね」

「信じられんぐらい強気だな……ユウ……」

現れたのは白いカラーのゴーレム。騎士のヘルムにコウモリの羽の両側を?ぎ合わせた飾りを額に付け、赤い大きな宝石が埋め込まれた頭部。頭部と比べやや不釣り合いな大きさを誇る円形のボディ。

ドラゴンの頭部上半分を模したシオルダーアーマーに合わせて腕はドラゴンクロー。尻尾や翼もドラゴンを模した物だろう。足も図太くドッシリしていた。

『サイエンが作り上げた最新型のアイアンゴーレムだ。ただお前を倒すためにな』

全長はおおよそ30mはあるだろう。ピンとこなければ学校の二倍近く（一回辺りの大きさを3mと仮定し×4で15m）一般的に知られるロボットの大きさよりも一回り小さいの大きさだと思ってくればいい。まるで地獄の其処から魔神の様な迫力があつた。

「離れた所に転送するよ？ 僕が倒すから安心して」

「え！！？ …… ちょ……待……」

最後まで言い終わる前にユウは全員を転送した。

場所は少しはなれている下層区エリア（最初に優、光が訪れた場所）である。

それを終えると同時に優は姿を変えた。最強と言ふ言葉すら生温いあの魔神の姿へと。血の涙に似た模様がある白い仮面、紋章が刻まれ宝石が埋め込まれた神官帽、赤い羽根の様な奇形のマント、シオルダーアーマー、大きな水晶玉が埋め込まれた胸部装甲にガントレット。体中に黄色い装飾が施されたその姿はアルクレスの時と同じく神々しさと禍々しさを感じさせた。

その姿へと変わる過程で相手が先手必勝。両腕からコンピュータのプラグラムの様にシステム化されて形成した攻撃魔法を乱射。一発一発が上級レベル。勇者相手でも数発であの世送りに出来る。それを雨の様に打ち込んだ。

攻撃の余波で周辺に被害が出ていた。ここが奴隷達が住まう場所ならともかく、ここは上流区の人間が住まう場所。流れ弾でその屋

敷に被害が出ていた。

『……やったか？』

ユウがいた場所を中心に濛々と煙が立ちこめ、一旦攻撃を停止。流石にこれだけの攻撃をアレだけ打ち込めば死ぬだろう。そう判断していた。

『この程度で倒せると本気で思ったのかな？　かな？』
『なっ！！！？？』

悪夢の様な光景だった。

報告にあつた魔神へと姿を変えた優。その威圧感や感じる恐怖は魔王すらも超えている。現にコクピット越しから見ても体の震えが止まらない程だ。黒い外蔭と光る翼を空中に靡かせ、血の涙のような白い仮面越しにこちらを見詰めてくる。

今ここに悪夢を体現した究極の勇者が誕生した。

名は大宮　優。アルクレスが呼び出した異界の勇者である。

Ⅱデモンズパラダイス：下層区エリアⅡ

その頃光達はその戦いを遠目から眺めていた。

町の中央にあるタワーに隠れて見え難いが、火災が起きている場所があるのですぐに分る。それに光は知っていた。

本気で戦えばこの程度の被害で済む筈が無いと。今にもっと戦いが広がると。

住民達も先程の屋敷を半壊にした攻撃により発生したキノコ雲で既に異常事態を感じ取っており、周囲では騒ぎと喧騒で人がこった

返す様な状況になっている。

更に上流区から非難してくる者も多く何時も以上に人が大勢駆け込んでいた。

「ネルさん！？」

「私は元の場所に戻ります！！」

何を思ったのかネルは突然優の元へ戻ろうとした。

「正気ですか！？」

フィリアは耳を疑った。優の『本来の戦闘能力』は並大抵の軍隊を一瞬で壊滅できる程の力を持つ。

対するゴーレムも優程では無いが最早常軌を逸している。上級魔法クラスの魔力攻撃を雨の様に連射し、優もそれに合わせて信じられない程の超火力を叩きつけていた。

そんな中に飛び込もうとするなど最早勇氣ではなく無謀とも言える行為だ。

「ええ……だけど……何だかこの機会を逃せば……二度と会えなくなる気がします……」

ユディはあの夢の内容を思い出す。

（間違い無くアレはユウ様だった……死ぬ事は有り得ない気がしますけど……私は知りたい。彼方の事をもっともっと……）

例え正体が世界を滅ぼそうとした神様だってもいい。
まだ傍にいたかった。

「すみません！！　ちよつと行つて来ます！！」

呼び止める声が聞えたが振り向かず走る。

人ゴミを自分でも信じられないぐらいの反射神経、スピードで駆け抜け赤く燃える夜空の元へ。

周りの建造物を瓦礫の山へと買えながらお互いの魔力光（＊魔法を發動する際に起きる光）で闇を照らし、激しい魔法合戦が行われていた。とてもだが常人が入り込む余地が無い程に幾多の上級魔法級の攻撃雨の様に乱射していた。

激し過ぎて一見どちらが有利なのか分らない。（後に光が語るが、まるでシューティングゲームのボスキャラ同士が弾を打ち合っている様な光景だと述べていた）だが白の貴公子が駆るアイアンゴーレムが不利だった。本来ならばこのゴーレム一台で人間の要塞一つを壊滅する事も可能な程の魔力貯蔵量、攻撃力、手数、防御力、機動性を備えていた。

それでもユウは倒せなかった。いや、遊んでくれているから決着は付かないと言つていいかも知れない。それよりも此方のダメージは早くも危険域だった。

『クソ……このままでは！！？？』

魔法合戦で徐々に押され始めて行き、彼方此方から煙が上がった。アイアンゴーレムから放たれる魔法攻撃も段々と収まって行き、その場に膝をついて各坐してしまふ。

『これで一気に決める！！』

ユウは一気に空高く上がり、まず巨人の腕を魔力で形成。とても図太い腕であり、これだけで今戦っているゴーレムを殴り倒せそうだ。

更に巨大な魔力の斧を作り出す。それは漆黒の　まるで巨人が使いそうなサイズだ。それこそ今戦っているアイアンゴーレムよりも一回り大きいサイズ。

恐らく遠くからでも確認できるだろう。

『ジェノサイドアクス!!』

優の体全身が紫色の光に包まれる。

『これが闇の勇者の力……まるで魔神ではないか……』

夜の闇すらも食い破る様にソレは振り落される。まるで神が怒りの鉄槌を振り落すかの様に。これを目撃した誰もが思った。魔神が現れたと。

その魔神が振り落しているジェノサイドアクス　対大型魔獣専用魔法。デカイ相手にはデカイ物をぶつければいいと言う単純な発想を元に作られた決戦（切り札）魔法。

このアクスはただ単純な魔力エネルギーの集合体では無く、それを極限まで圧縮し、相手を両断する事に特化した魔法。

発想は馬鹿げているがその能力は実証済みだ。

『チエストオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

巨大なエネルギーアックスが振り落される。チーズを軍用ナイフで切り裂くかの様に両断。右腕、右翼、右足が切断され、勢い余って地面をも綺麗に切り裂く。

綺麗な断面を作り上げ、地響きを立てて地面に倒れ込む。優は続

けて頭部を切り飛ばし、地面に降り立って近付いていった。その際に魔力エネルギーの集合体である巨大なアクスや巨人の腕も全て霧散させる。

遠くから悲鳴が聞えるが構わず倒れ込んだゴーレムへと近付いた。

『ハアッ！！』

頭部へと近付き、決じ開ける。生体反応があるコクピットだ。そこに居たのは白い仮面とローブを付けた人物。すぐさま胸倉を掴み上げ、仮面を剥ぎ取った。

『……驚いた。まさか女の人だったなんて……』

意外な正体だった。

醜い化け物か知的そうだが猛禽類のような目つきをする男だとはかり思っていた。

だが蓋を開けてみれば可愛らしい少女だったのだ。体付きはローブで分らないが背は高く、金髪をポニーテールに括るが氷の様に冷たい鋭い目つきをしている。

「驚いたか？」

死を覚悟しているのか何の抵抗もしなかった。

『……うん。しかも王女の一人だったなんて……』

「記憶を読み取る力もあるのか……察しの通り、有り触れた権力闘争に敗れてこの世界に堕ちて行った人間の一人だ……」

とても簡単に、分り易く過去を纏めて言い切って見せる。

白の貴公子と名乗っていたこの少女もまた自分と同じく暗い過去

が続いていた。

「もう記憶を読んでいるのだから分っているのだろうか？ 私は白の貴公子と名を変え、ずっと一人で生きていた。分っていると思うがこの体はリベレイターに出会った時に改造され、その結果莫大な魔力と、不老の力を手に入れた」

『……サイボーグ技術？』

深く語ると長くなるので割愛するが、優にとつてはとても馴染み深い技術だったがまさかこの世界でも行われているとは思わなかった。

「察しの通り、魔道具を体に埋め込んで人体改造を施したのだ。私は多くの奴隷達を使って人体実験を繰り返し、その結果を元に今の私が誕生した」

「またしても過去を簡単に語るが逆に飾りっ気が無い分真実味があった。」

『それだけの悲しみを知っていながらどうして……』

「裏の世界で女が生きて行くには誰よりも狡猾で、残忍で、力を持たなければならぬ。それでも陵辱された身でね……」

と口元で笑みを作りながら語った。

「ふふふふ……勇者など存在しなければ私はここまで堕ちる事も無かっただろうに……」

『だからリベレイターの思想に共鳴した？』

「ああ……」

勇者召喚の儀は確かに才能のある人間を呼び出すが、全てが勇者として大成する訳が無い。中には戦いの中で人格が変わる奴だって当然いる。

私を滅茶苦茶にした勇者もその一例だ。

世間で知られる勇者の迎える結末は二つ。名誉の戦死、魔王の打倒として英雄となり、名前が後世にまで語り継がれる。

前者はいい。また代わりを呼べばいいのだからな。

だが問題は後者だ。

勇者によって平和によって与えられた政治屋どもは皆勇者を利用しようとする。

私が知る勇者もまた例外では無かった。

これに吐き気を覚えたのか、勇者は王国の敵に回り自分達の国を建国。そして非常に珍しい人間同士の戦争を始めた。

結果は王国側の敗北。

私の全てが奪われたのはこの時だった……全てを失い、暗黒の世界を彷徨い歩いた。

そして私は国を巡り様々な勇者達と出会い、聞く内に勇者に対する

リベレイターと出会い、私は知った……この世界の現実を……。

冷静に考えて見ればおかしいと思った。

この大陸規模のチエス見たいな状況を。

それが数千年にも渡り行われているのだ。

だがこの地獄を止める事はその原因に関らずもつ止める事はできない。それこそどちらかが滅び去らない限り。

『その原因を知った時、あなたは这个世界から勇者を消し去ろうと考えた』

「ふふふ……便利だなその能力は。察しの通りその『秘密』を知った時、私は这个世界を呪った……勇者で頼る事でしか平和を勝ち取れないこの大陸の連中に……」

それは優でさえも啞然とする内容だった。だがソレなら『勇者』に対しての疑問が全て解決する。

「反吐が出るよ……这个世界は……」

少しの間、沈黙が流れた。

「一つ聞くが……記憶を読み取る能力があるくせに何故私の語りに付き合う?。」

実はこの会話はある最後の作戦をする為の時間稼ぎだが、記憶を

読むのなら思考も読み取れる筈だ。

防御策は施していたが突破されているので、何らかの方法で無効化されたのだろう。だからこそ不思議に思えた。

『……あなたは僕と同じ。私の写し実に思えたから』

「写し身……だと？」

思いもよらぬ返答に戸惑いを覚えた。

『そう。あなたは僕と同じ……全てを否定して……自分の意思だけを無闇に押し付けようとした……だけどそれは優しい心があったから……全てを一人で抱え込もうとしたから……』

「だから何だと言うのだ!!」

ユウは仮面を取り除き、微笑みかける。

「だから僕は」

アイアンゴーレムが起爆したのはその時である。
最後の手段。それは自爆攻撃による抹殺だった。

「ユウ様!!?? ユウ様!!??」

一瞬目が眩み、爆発の衝撃波で吹き飛ばされそうになったが必死にその場で踏み止まって見せた。

（無事でしょうか……）

体中を埃塗れにさせながら歩を進める。豪華な屋敷に火が燃え移り、爆発の衝撃波でその多くが吹き飛び、流れ弾で廃虚となっているのも少くは無い。

本当に数多くの様々な声などがそこかしこで聞えるが構わず突き進む。

あの煌びやかだった上流区がまるで大災害の跡地へとなっており、この町に住む人間からすれば誰もが待ち望んだ様な光景となっていた。

意図した訳では無いが実質デモンズパラダイスが陥落したも当然の有様だ。心の奥底ではユディも望んでいたが何の喜びも沸かない。それよりもユウは心配でならなかった。

「ユウ様……」

屋敷周辺に辿り着くとそこにはクレーターが広がっていた。勿論アイアンゴーレムの大爆発により引き起こされた物である。必死に姿を探すが何処にも見あたらなかった。

『聞える？ ユディ？』

「ユウ様……？」

頭の中にユウの声が響き、立ち止まる。

『もしかするとまた何かが代償となって消えるかも知れない……』

「そ、それは本当ですか!？」

その説明で一瞬の安堵も吹き飛んだ。

『本当だよ……それに一緒に居られない……色々悪名がかなり有名になってしまったからね』

「そんな事はありません！！　ユウ様は！！　ユウ様は私にとって……」

ユディは必死に優を？ぎとめようとする。

『だから僕は一旦離れるよ……』
「ユウ様……」

焦燥感が心に生まれた直後

『だけど……もし……』

優は

『……もし、もしも……また会えたらその時はまた……また』
徐々に涙声になり　そして

『記憶を失っていても……最愛の人でいてくれますか！？』
暫くの沈黙の後

「意外と自分勝手な人なんですネ……」

ユディは決心したかの様に空を見上げた。

「はい！！　私は……私は！！　ユウ様の最愛の人である事を誓います！！」

赤く染まる空の中で一際輝く紫色の光りに向い、ユディは町全体

に届きそうな大声で答える。

『ありがとうユディ……』

光りは空の彼方へと消えて行き　そして大雨が降り注ぐ。

「……絶対、また見つけてみせます、ユウ様」

服や髪の毛を濡らしながらもユディはある決心をつけた。

第七話「そして審判は下された」　E N D

第二章：エピソード

優しき勇者・悲しみの冥王

第二章：デモンズパラダイス

エピソード

寒村の寂れた村。

ユウはそこである人物に出迎えられた。

年老いたシワクチャのマリーお婆さん。僅かの期間だけだったが自分の育ての親だった人物　が自分を抱き締めて泣いてくれた。

「ごめんよお……ごめんよお……ユウや……お前を奴隷商人なんぞに売り飛ばしてしまつて……」

「その気持ちがあれば私は充分許せますマリーお婆さん。だけど僕は……旅立ちます」

「そうかい……どんな理由があれ、ワタシやっちゃいけない事をやったのは分つてるよ……その罰と思うさ」

「……マリーお婆さん」

ユウはほっぺに軽くキスをした。

「僕にはこれしか出来ないと思いますけど……お元気で」
「ほんと、変わった子だねえ……ユウは……」

笑顔で見届けられながらユウは翼を広げ旅立った。
同時に彼方此方から声が届く。

「ごめんなさい!!」

「ずっと忘れないから!!」

「また帰って来いよ!!」

ユウは目蓋から滴を流し、闇の大空を切り裂く様に舞い上がった。

(……記憶がある内に魔法学園、目指して見ようか)

たぶん今の記憶もきつと消えるのだろう。

幸せな思いでも辛い思いでも。全部全部また死を迎えるまで。
だけどユウは思う。

(世界は……誰をも受け入れられる程の優しさで満ちているから……)

だからこんな自分にも受け入れてくれる場所はある筈だと。

朝日で輝く平原の道を一台の竜車が駆け抜ける。
どんな道だろうと何のその。力強く走っていた。
アルクレスの勇者はその竜車の中でこう思う。

(もつと強くないと……)

馬車に揺られながら光は思う。

(今回もユウに全部助けられた……)

自分は確かに強くなった。だけど今回は助けようとした相手に救

われてしまふと言う何とも情け無い結果に終わってしまった。
その上臈にまで掛かり、全滅も充分にありえた。

「しかし分らん……何故また姿を消したのだ？」

「……たぶん私達に迷惑を掛けたく無いからでしょう」

馬車を操るネルの質問にユデイが答える。フィリアと入れ替わりになる形でこの度に参戦。

ちなみにフィリアはアルクレス王国に戻り、すぐさまフェリシア王国に対する緊急会議を開くように進言しに行ったのだ。

戦力低下は避けられないかも知れ無いがやむ終えなかった。

「強大過ぎる力は返って争いの火種を生みます。それを分っていた
のでしよう」

「根拠は？」

ランドドラゴンを操りながら質問する。

「あの人はとても優しい人ですから」

涙を流しながら青空をながめた。

「それで……これからどうするニヤか？」

「強くなりたい……もっと、もっと……ユウの足手纏にならないぐ
らい……」

「も、もしかして行き先は……」

弓の手入れをしていたチェリーが察する。

「そうだ。ルトバ王国で開かれる武術大会……そこに参加するつも

りらしい」

「おお！？ 確か他国の勇者も参加すると言ったあの有名な武術大会かニヤ！？」

「うん。だからこそ負けられない。絶対優勝して見せるよ……」

あのユウに追い付く為に。グツと決意して見せた。

「何か本来の目的忘れていないかニヤ？」

「まあこれからの事を考えれば強くなるにこした事は無いだろう」

リベレイターを打ち倒す旅は一旦中断。

優達はルトバ王国へ向った。

（あれからもうどれだけ経つのやら……）

少女は彷徨う。

何処とも知れない場所をずっとずっと

『もし償う気があるのなら……この世界を見詰めて生きて下さい』

そうユウは言っただけだ。

アレだけの酷い仕打ちを受けて許すなどと言う神経をしているのだろうかと思ったがそれを問う事は二度と無いだろう。

結果的に生かされてしまった。

死ぬ機会すらも奪われ、そしてアレだけ野望に燃えていたあの飢

えた心すらも無くなった。

（そして全てがゼロになったか……さて何処へ流れるか……）

憑き物が全て落ちたかの様に穏かな表情を浮かべつつも彷徨う。

金に光るポニーテールを揺らし、白いローブを風に寄せ、何処までも何処までも

第二章完

第二章：エピソード（後書き）

〓 楽屋裏 〓

優「祝！！ 第二章完結！！」

光「しかし最後の方が色々と物議を醸し出しそうな終り方だな……」

優「いやゝ色々と理由があるんだけどね、作者がちょっと死に掛けだから又また何時かの機会にと言う事で……」（これ書いてる時夜の3時……）

光「何やってるんですか作者は……」

〓 第二章を終えて 〓

光「何か色々と驚いたな……」

優「僕はこれ本当に主人公チート物だよね？ って思った」

光「うん……僕も。後文量とか第一章に比べると増えてたよね？」

優「中編とかも入ったからねゝしかも後編に入ってから修正しまくってるから殆ど別物になってるよ」（制作時は話毎に分けず大まかに前・中・後編など大雑把に分けている）

〓 パワードスーツについて 〓

光「突然緑色のパワードスーツが現れたのにも驚いたね……」

優「修正点の一つだね。本当はあのシーン僕が手を下す筈だったんだけど、折角のチート物からってことで変更したんだよ」

光「そう言えばあの人も優とは親しげだったけどもしかして元の世界の人だったり？」

優「うん。高校生なのに一人で蕎麦屋に行く様な人なの」

光「一人で蕎麦屋って……」

優「他にも登場するかも知れないけど次誰が来るかな……」

〓 第三章について 〓

優「何時掲載できるかどうかは分らないけれどもとにかく制作を急いでいます。まだ製作途中なので此方にも情報が入って来ません」

光「確か書き直して中盤ぐらいまで書き終えているって聞いたけど完成は何時になるか分らないのが現状です」

優「……あつ、そろそろ作者が限界らしいので後日また会いましょう」

光「ご、ご意見・ご感想をお待ちしております」（汗）

優「またね」

外伝「フィリアの憂鬱」

優しき勇者・悲しみの冥王

外伝「フィリアの憂鬱」

光達と一旦別れを告げたフィリアはアルクレスに戻り、忙しい毎日を送っていた。

それはもう一つミスれば国家間戦争が引き起こされると言うプレッシャーに苦しまれながら。

Ⅱ 数日前：両者代表会談Ⅱ

両国トップがブラック王国の宮殿に赴き始まったこの会議。（フィリアの提案で此方側から赴かせた）

当初の予想を裏切るかの様にどちらの王族もまるでお葬式のようなテンションの低さだった。

予想通り相手側の国（ブラック王国。アルクレストは比較的近所の国だ）はリベレイターの策略と言う事で納得してくれたらしいが監督不屈きだの何だの抗議が来た。

逆に政力闘争で姫をデモンズパラダイスで性奴隷にしている「お前達の王族の管理体制はどうなってんだゴラア？」（実際とはセリフが違うが大体あってる）と言い返したら途端に低姿勢になった。その姫様かなり民衆から支持があり、王宮務めの騎士達の信頼も厚い。行方不明になって血眼になって探していたのだがまさかデモンズパラダイスにいたとは知らなかったそうだ。

何だかお互い暴動が起きそうな爆弾を抱えてしまっている様な酷い有様だった。

ブラック王国はすぐさま兵をデモンズパラダイスに出兵させる事を決意したが尻込みしている。

だあ最後は騎士団長が悲壮感漂う様な決意で『やって見せます』と述べた事で決定した。

そりゃデモンズパラダイスはウリエール大陸の悪党達の見本市見たいな場所だ。下手に敵へ回すと「お前らこ言う時だけは仲がいのな」と思えるぐらいの驚異的な連係プレイによりあの手この手で家族を人質に取られたり弱みを握られて脅迫されたり……最悪兵士達が離反するかも知れない。

デモンズパラダイスの脅威は外敵に対してはまるでスパイ国家の様な迎撃機構を保持している所にあった。

まだ魔王城に突撃命じられた方がまだマシだったと思ったに違いない。

だが幸運もあつた。

あのデモンズパラダイスだが……意図しなかったとは言え町の有力者がいる上流区を壊滅に追い込んだ（ユウの力を考えれば原型を留めているだけでも奇跡である）のが行けなかったのか分らないが情報によると連日勢力争いの紛争地帯と化しているらしい……どうやら白の貴公子の勢力が崩れた上にあの上流区での騒ぎで大勢有力者が巻き込まれ、その空いた権力の穴を巡って激しい奪い合いをしていると言つのが原因だそうだ。

この状況下ならもしかすると救出できる……かも知れない。と言

うかよくよく考えれば逆に困難だと思う。正直白の貴公子がそう言うただけで実際はよく分らない（と言うか奴隷に王女が二人も三人もなっているとは思えないし思いたくも無い）が一応ヘブンスゲートの闘奴になっっている筈だかそれ以外は知らなかった。

だが少なくとも本来の迎撃機構が働く恐れは少ないと思った。地球のアメリカの様に指揮系統が確りしていればまた違ったがデモンズパラダイスの支配者達は損得感情や利益、利権などで手を組んでいる様な輩であり、町ぐるみで潰しに掛かると言う事態は避けられた。

そして都市を構成しているのは殆どが下層に位置する人間である。奴隷となっっている現地住民を味方に付けられる可能性は充分にあった。

しかしそれでも困難な事には変わらず、正直同情したい気持ちもあったがアルクレス王国もまだユウによって引き起こされた風評被害（ブレイブイーター（*ユウがヘブンスゲートの闘奴時代だった頃名乗っていたリングネーム）ー時代の活躍や通称邪神形態での圧倒的な戦果やインパクトなど）で忙しく、取りあえずその場を後にした。

〓そして現在〓

（やっと終わりましたね……）

フィリアは古巣の神殿内にある執務室でフウと溜め息をついた。両側の壁は本棚が塞ぎ、その後ろの窓から暖かい日が差し込まれている自分だけの空間。

ここにいて自分は帰って来たんだなと心底そう思う。

（救助できたのは喜ばしいことですが……この反応は如何に……）

一応バラット王国の王女は無事救出出来た。

外見は何だか娼婦の様にふくよかになったが、以前よりも実力が爆発的に上がったり、何だか最近世界滅亡の夢を見たお手紙には書いてある。

ユデイも同じ様な夢を見ていたらしい……またユウの過去らしき夢も見ていたそうだ。

（偶然にしては出来過ぎてますね……）

二人の共通点は性交を重ねた事だ。それによりこんな現象が引き起こされたと考えるのが妥当である。

ぶつちやけ100%近く推測に近いがユウは何でも有りだからこれぐらいの怪現象は朝飯前だと考えていた。もう全部面倒な事は頭の中で「ユウだから」で片付けている。

心境的には魔法の存在に対して光が「ファンタジー世界だから」と納得している感覚に近い。魔法の専門家からすればギブアップに等しい行為だがそれを咎められる人物は幸いフィリアの周りに誰もいなかった。（フィリアの役職は神官長である。警察で言うなら署長、軍で言うなら大佐の役職だ）

（……それで私にどうしろと）

あと優の事らしいが『出来るならまた会いたい』と言う恋文に似た衝撃的な文章があった。

大観衆の前で犯されてMッ気にも目覚めたのだろうかと失礼な事を考えながらフィリアは正気を疑いながら書状には当たり障り無く「現在行方不明。交信はできません」とだけ書いて置いた。

（……ルトバ王国の大会に参加すると言っていましたが大丈夫でしょうか）

強引にフィリアは思考を移す。（＊決して現実逃避では無い）

正直光はかなり強いがまだまだ荒削りで他の勇者と比較すれば幾らか見劣りする点が多い。

だが確実に才能はある。

（勇者狩りの件もありますし……いい機会でしょう）

勇者根絶計画の一環なのか、最近一つ目の騎士に襲われたと言う話が相次いで耳に届いている。

一度狙われたら最後、勇者とそのパーティーは斬殺されるそうだが正体は分らないが来るべき勇者を狙って来ると以上、戦う可能性は高い。

リベレイターとの来るべき決戦に備え、強者との経験を積ませるのにルトバ王国の武術大会はいい機会だった。

（それにしてもリベレイターの本拠地は一体何処に……）

アルクレス国内にいて思われているがどうもフィリアはその説に疑問を感じる。

そもそも今迄の魔王が現れた国内にいたと言う点がおかしいかも知れ無いが……アレだけ大規模の軍勢を動かすならソレに応じた規模の施設はある筈だ。

ソレが一行に見付からない。しかも此処最近はかなり静かだ。

（もしかするとルトバ王国で何かしらの計画を練っているせいなのかも知れませんか……）

フィリアの推理だがルトバ王国での武術大会で動く可能性は充分にあった。

何せ大陸中から大勢の優者が集まる大会である。そしてリベレイターの目的は勇者の根絶。警戒しない方がおかしい。恐らくルトバ王国も気付いているだろう。

（一応教会の情報網を使って警戒は呼び掛けていますが……どれだけ効果があるのやら……）

はあと溜め息をついた。

リベレイターは歴代魔王の中でもかなりヤバイ部類に入る。そして勇者殺しをも成し得ている魔王だ。

（しかも直接手を下さずに）

ソレに人材の層も計り知れない。一応生死不明なども混じっているが知っている頭角だけでもどれも光達では手強い相手がまだ残っている。ユウの隔絶した強さで忘れがちだが本来勇者の力が無いと並大抵の冒険者では歯が立たない強さだ。ヴェルムなどがその例だろう。

不安要素は幾らでもある。

だからルトバ王国で自分の予想が出来ない様なとんでも無い事が起こりそうな予感がしてならないのだ。

（備えは万全だと分つていても……杞憂であればいいのですが……）

光意外に勇者はいるしルトバ王国の兵は精強だ。それにギルドの人間も数多く集まるだろう。備えは万全だ。

だが……もしこれでリベレイターの計画が上手く行けば？

（……机上の空論でしかありませんが、恐いですね）

最悪の未来予想図を思い浮かべようとしたその時執務室のドアがノックされた。

「フィリア様。失礼してもよろしいですか？」

「構いません」

そこで自分と同じ女性の神官達が入って来た。

「ご報告します……勇者召喚の間ですが……未だに復旧の目処が立ってません。何分勇者召喚の儀事態は最高機密ですから総本山から派遣されて来る術者を待たねば……」

「そうですか……」

アルクレスでの戦いのドサクサに紛れて吹っ飛ばされた召喚の間だが未だに復旧の目処が立っていない。

取りあえずホーリーマウンテンからやって来るだろう術者を待つ他無い。

ちなみに最高機密なのは万が一魔王がソレを利用し、勇者を自分達の戦力にするのは防ぐ為だ。

「後これは……言い難いですが……勇者の活躍に人々は希望よりも動揺が広がっております。特にデモンズパラダイスでの一件はかなり知られておりましてこの国への報復を心配する声もあります。また兵士の中には何時か闇の勇者に復讐されるのでは考えている物もおります……」

「ある意味白の貴公子の思惑通りですね……」

「は？」

「いえ、何でもありません……」

勇者根絶計画はある大きな穴がある。ソレは世界中の召喚の間を

破壊しないと行けない上にソレの修理が可能な総本山の術者達を倒さないといけない。

白の貴公子はその穴をカバーする為に勇者であるユウを使い、勇者と言う存在に対して思考が麻痺している現状を変えようとした。

この作戦は少なからず成功したと言えよう。既に勇者根絶計画は教会の情報網を通じて大陸中の王国に伝わっている。もし勇者が自分達の敵に回ったら？ そう言った可能性に気付かせるだけで十分だ。

人々は知らず知らずの内にそう言う可能性を知った事になる。

これも時間が経過すれば元通りになると思うが、リベレイターはこの現状を利用しない程に優しい相手ではない。

（だからこそルトバ王国で動く可能性は高い……）

自分がリベレイターや白の貴公子なら必ずそうする。勇者根絶と言うスローガンを掲げているのなら尚更だ。

（……頼みますよ、ヒカル様）

遠い地にいる光に向けてフィリアはエールを送った。

そして次に……

（ユウ……私はあなたを呼び出して遥気付いた事があります）

と心の内で語り始めた。

（私は心の内で何度か勇者召喚の儀について疑問を抱いた事があります。けれども私は神官としてずっと考えないようにして来ましたが

今は違った。

（あなたの出現は自分勝手だと思いますがまるで我々への警告に他ならない様に思えてならないのです……）

自分でも思い込みかも知れないと言う考えを述べる。

（そして成り行きとは言え、あなたを処刑……良くて兵器として扱うと言う最悪の事態を引き起こす所でしたが、あなたはそれを許してくれたかの様に去って行った。それ所かデモンズパラダイスでも助けてくれた。経緯や過程はどうアレ愛する者の為に戦った……）

そして最後にこう付け加える。

（もしまた会う機会があれば私は……あなたに誠心誠意謝罪せねばなりませんね……）

心中でここまで語り終えると……フィリアは再び机に向かい合った。

己の役割を果たすために。

番外編：フィリアの憂鬱 E N D

外伝「フィリアの憂鬱」（後書き）

〓 楽屋裏 〓

優「まさかの番外編！！　ちなみに殆ど突貫で作ったからデキは保証し無いと言う……」

光「いや……保障しようよ……」

優「今回のストーリーは時期的に言うと第二章→エピローグ、そしてその後の話を描いた内様だね」

光「じゃあ第一章と第二章の間とかはやる予定あるの？」

優「うーん、作者の気分次第だね？　今予定しているのはエピローグ後のユディの話、光の話、そして僕の話ぐらいだけど基本作業は第三章優先だから。一応中盤の半ばまで行ってるけどまだ完成の目処が立っていない状態だね」

光「はあ……」

優「ちなみに第三章は舞台が舞台だからねえ〜なるべくキャラは増やさない様にしてるんだけどどうしても増えちゃうんだよ……」

光「だけど第二章のパターンからすると僕の活躍は省いて速攻で魔法学園何だろ？」

優「それはまだ言えないけどね。ちなみに第三章のパターンには帝国の一兵卒編とかもあったらしいよ」

光「いつ一兵卒編？」

優「遥ゲーの影響で作った物語だね。僕の周りはアメリカの海兵隊の様なむさ苦しいオッサンだらけでリベレイター軍が調査している謎の古代遺跡を襲撃、そして調査と言う過酷なミッションを描いた物語だよ。まあ没にしたらしいけど」

光「なんつーか……世界観が変わっているって言うか何と言うか……」

優「後第三章だけど現段階ではまた新たな勇者が登場する点かな？」

光「そう言えばまだ本編だと他国の勇者に会って無かったっけ？」

優「他の勇者が大勢登場するSSではかなりチートな人が多かったりするよね。本作品では魔王討伐終えて自由気ままに旅したり他国の勇者の援護に回ったりしていたり、密かに暗殺されていたり……」

光「暗殺！？」

優「勇者根絶計画の一環で殺して回っているのが第二章で語ったと思うけど僕は援護要員に過ぎなかったんだ。だから勇者の暗殺事態は続いている訳」

光「言われて見れば確かに……」

優「詳しくはまだ言えないけど一つ目の戦闘能力は色々とバグッてるからね……正体も驚いたけど」

光「正体？」

優「これもあんまり詳しくは言えないけどね」

「最後に」

優「最後に番外編如何でしたでしょうか？」

光「ご意見、ご感想お待ちしております」

三万アクセス突破特別企画

優しき勇者・悲しみの冥王

三万アクセス突破特別企画

記念雑談会

ユウ「今回は特別ゲストとして」

宮園 恵理「私の事覚えてる人いるかな」宮園 恵理です!!
アウティエル、ヒーローフォース世界から来ました」

森口 沙耶「ピクシヴ、小説家になろうからこんにちわ」森口 沙耶です。最近未来を掴んだりしたけど女好きは変わらずよ」

光「うお!?! 世界の壁突き破って参上!?!」

ユウ「本当は嘗て楽屋裏担当をしていたリンディ・ホワイト（アウティエル、フォース世界参照）さんとか呼びたかったけどこの二人を呼んでみました」

光「え」と恵理さんが確かサイボーグで沙耶さんは魔法少女でしたよね?」

沙耶「私は既に未来を掴んでいるわ……腐女子パワー、」

ユウ「仮面ライダーカブ ネットは止めようよ……てか何でパーフェクトゼ ターとか持つてるの？ 作ったの？」

沙耶「私の手に掛ければある程度の特撮ネタは再現可能よ……フォースじゃディエン ネットとかやったけど」

恵理「フォースも連載が続いたらFFRとかFARとかやってそうよねゝ内の作者」

沙耶「第二章のラストで性懲りも無くまたディエンドネタやりやがったけどね」

光「……何か場の空気支配されたね」

ユウ「あの二人メチャクチャ仲がいいからね」

沙耶「ちなみにユナちゃんはお留守番してるわ」

恵理「それにしても三万ヒットだからこんな雑段階よりも何かやる事無いの？」

光「って言われてもなゝ」

ユウ「じゃあ没ネタでも挙げて見る？」

恵理「そう言えば没テキストは40kbぐらいあるとか言ってたわよね？」

沙耶「じゃ、それを掲載してツツコンでく形とかどう？」

「第一章没シーン：最終プラン」

王女「お父様。ここは一つ勇者の力を頼って見ては？」

この発言に皆一瞬目を白黒させた。

王「そうしたいのは山々何じゃが……」

大臣「もう既に勇者を頼ってどうこうなる状況でもありませんからな」

王女「でも……魔を持って魔を制すと言う言葉もありますわ」

母と同じ紺色長髪を揺らしつつニツコリと微笑んで提案するこの王女の発言に場は沈黙した。

「終」

恵理「まあ試しにあげたけどこんな感じかしら？」

ユウ「補足するとサイエンがアイアンゴーレムに乗って暴れ回る所を遠くから見詰め、絶望を感じていた王と大臣に王女がそう提案するシーンだね」

光「なんつーかユウの気持ち無視しているよなこれって？」

沙耶「作者もそう思って削除したのよ」

「第一章：異世界での初めての朝」

其々が豪華な一室に案内されていた。
部屋はとても広くベッドも大きい。

二人で添い寝したとしてもまだ余る程だ。

ここはアルクレス王都にある大神殿の客室である。

ちなみに自分達が呼び出された場所やネルとフィリアからこの世界「エデルカディア」の説明を受けた場所もこの大神殿の施設の一つなのだ。

この扱いに当初優は驚いたが直に後悔した。

（眠れなかった……）

優はあまり寝付けられず目に若干クマを付けていた。

今迄奴隷染みた暮らしをしていた優は突然のVIP待遇に馴れておらず。逆に強い不信感を感じていたのだ。

「だ、大丈夫ですか勇者様？」

迎えに来たらしいブラウンカラーのポニーテールをした白い神官服の女性が不安げに見る。

名前はアイシャ。この神殿で聖魔法士としてではなく修行を積んでいるらしい。

その一環か、それとも偶々人手が相手いたのか少しの間だけ世話係りを命じられたのだそうだ。

「ごめんなさい……」

「え？ いや、何を謝ってるのですか？」

「……いえ、何でもありません」

「はぁ……ではお食事の準備が出来ておりますので……準備が出来たらお呼び下さい」

そう言ってアイシャはイソイソと扉から出て行った。

（あれが勇者……何か使用人が元奴隷見たいな空気を漂わせてたわね）

ドアの横に背を預けハアと息を吹く。

（しかもまだ子供だし……あんなので大丈夫なのかしら）

しかも外見はまだまだ幼く子供見たいだ。こんな奴に国の運命を託すのは思うとどうかしてるんじゃないかと思ってしまうた。

（それに引き換えこっちは……）

隣の部屋の勇者は美形で背も高く、明るくて優しそうだ。付き合いたいなら付き合ってみたいと思う。

（だけど何でアイツが従者に選ばれた訳よ！！??）

従者を任せられたのは同じ聖魔法士の中でも一番人気がある「ミネ」が選ばれた。

（アイツとは同期だけど……だけど……何でこう言う時に限ってミネなのよ……）

まるで王女様の様な気高い顔立ちと紺色のロングヘア。雰囲気と美の女神の様に整ったボディライン。そして穏かな性格。

女性がモテる要素の基本を詰め込んだ様な女性で貴族や王宮の男

性からも求婚の誘いが来ていると言われている。

その上魔法士としての能力も優秀。また近接戦闘も強いとされており王宮の騎士団からスカウトが来ていると言う話まであった。

（……ム力つくけど優秀だからしかたないわよね）

勇者と言う神に近い肩書きを持つ人間の世話係をする人間としては句無しで適任である。

「できました……」

無愛想な声で扉から出てくる。

黒尽くめの制服姿の少年。髪の色も黒で本当に黒一色。しかも目も若干死んでる気がする。

一応聖魔法士は神に仕える人間である。だがこの少年の姿を改めて見た時、勇者の選考基準がどうなっているのか自分が表向き崇拝している神に問い質したくなった。

「どうしたんですか？」

「いえ。何でもありません」

一応神官長直々の命であり、また勇者の肩書きを持っている以上失礼な真似は出来ない。

てかそんな下らない事をして今迄の人生を棒に振りたく無いと言うのが本音だった。

長方形の白いテーブルに並ぶ朝食は豪華。神殿なので質素だと神官長であるフィリアは言っているが普段日本人が朝口にする量を考

えれば十分だった。

スープにパン、卵、骨付き肉、サラダetc……光はまるで修学旅行で目にする朝のバイキング規模の飯を食べられると浮かれていたが優は違った。

（これ全部食べて良いのかな……だけど……いや、けど本当に？）

普段の優の食生活は酷く朝飯はオニギリ一つだけと言うのも何度かあった。何度か野性化してそこら辺に落ちている物を口にした経験もある。

そんな生活を送っていた優からすれば今目の前に広がる食事はもう遠き理想郷にある世界に感じた。

「どうかしたのですかユウ？」

「いえ…何も…」

不審がられた優は急いで目の前の食事を口を含む。

「美味しい……」

ポロツと本音が出る。

〃終〃

ユウ「時間の流れは第一章の第一話〜第二話の間だね。なるべく無駄なシーンを省いて登場キャラを少なくする方針で進めていてから本編では削除されたシーンです」

恵理「ヒーローフォースやアウティエルの教訓に巻き込まれたシーンね……だけどこれは没と言うよりも描かれ無かったサイドストー

リー的な要素が強いわね」

沙耶「第一章はG Iトランスフォーマー並とまでは行かないけどOVAの一話分を意識して作ったらしいわ。まあ最大の原因は新たなキャラを登場でしようけど」

光「しかしこのユウってまだ異世界に来たばかりだからそう言った描写があるな……」

恵理「私から言わせてもらえば藤間君は馴染過ぎだと思っただけ……」

光「うん？ そうかな？」

沙耶「何と云うか九十年代のアニメとかに出て来る主人公みたいな奴ね……」

「第一章：優は分からず屋」

それでも優は変わらなかった。

「……クソ！！ もう知らん！！ 勝手にそこで腐っている！！」

足早にネルは其処から去って行った。

（何時もの事なのに……何だろうこの気持ちは？）

何だかとても切ない気持ちになっていることに気付く。

「……弱い事はいけない事なのかな」

ボソツと呟く優。

「君はもう既に答えに辿り着いている筈だよ。大宮 優……」
「？」

ツカツカと入れ替わりにローブを纏った人物がやって来た。
声色からして女の声だがとても聞き覚えがある声だった。しかも会おうのが初めてでは無いような…そんな不思議な錯覚すら覚える。

「誰？」

「今はまだ知る必要は無いよ……優。確かに君は後悔だらけ、誰も助けてくれない孤独の人生を歩んでいたのかも知れない。だが人には頑張らなきゃいけない時がある。優君！！この夜の全てを超越、神や悪魔にもなれる気なら出来る！！今の君に必要なのは一歩踏み出す勇気だよ！！」

「一歩踏み出す勇気……？」

「そう！！勇者つてのは証じゃない！！困難な道を切り開き、負けない心を持った持つ者に与えられる称号……誰しも、そして君にでもなれる筈だよ……だから……」

ローブの人物は勇の目の前に瞬間移動し、そして胸に手を当てた。

「私は少しだけ後押ししてあげる」

優の目の前が真っ白になる。

気がつくと自分は宇宙空間にいた。

「（終）」

ユウ「第一章第三話のIFパターンだね」

光「ネルさんが優の説得に失敗したパターンか」

ユウ「一応この白いローブの人物はちゃんと正体があるんだけど一つ目博士の失敗による影響で削除したんだよね……」

恵理「またあの作品か」

ユウ「丁度一年前の今ぐらいの時期に掲載されたんだけどかなり不評くらって削除したんだよね……ちなみにモデルは仮面ライダー トロンガーに出て来た敵組織「ブラックサン」の大幹部「一つ目タン」だよ」

光「ちょっと待って……じゃあこれってもしかして平行世界ネタだったりする？」

沙耶「平行世界ネタはスパロとかマブラとかディケイとかでお馴染みだけどアレはどちらかって言うところ……アレは平行世界ネタ云々よりストーリーに問題があると思うんだけどね。てか光君どうして知ってるのかしら……一つ目博士の内容」

光「ソレは……」

ユウ「僕が見せたの」

恵理「意外と鬼ね……」

光「じゃあこの白いローブの人は？」

ユウ「一応設定はあるけど秘密にしとくね」

「撮影を終えて」

恵理「ちよつとまたイラストを描き始めた上に仮面ライダーRXを見始めて更新ペースが一気に遅くなったわね」

ユウ「しかも下手だし……てか何で三度も矢車さん（仮面ライダーカブトより。仮面ライダーザビー キックホッパーの人。地獄兄弟の兄）描いてるの……」

光「ち、ちよつと病んでるんじゃない？」

沙耶「まあ病んでるのは昔からだから」

恵理「そうよね。病んでなかったらアウティエル（ノクターンノベルズ参照）とか書けないわよね」

光「酷い言いようだな……」

「最後に……」

ユウ「さて、三万アクセス記念如何でしたでしょうか？ 今度の記念は何時になるか分かりませんが、今後とも優しき勇者・悲しみの冥王の応援よろしく願います」

光「今回はまだ未定でして、第三章の制作も捗っておりません。ま

たイラスト活動も再開したので著しくはたぶん外伝が続くと思います」

恵理「んじゃあ私はこれで失礼するわ」

沙耶「私も〜ピクシヴで会いましょ？ じゃあね〜」

ユウ「話に出て来た作者のピクシヴ投稿作品は此方です（<http://www.pixiv.net/member.php?id=718848>）。よろしければイラストの方も応援してあげてください」

光「それではご意見・ご感想お待ちしております」

ユウ「次回までさようなら」

三万アクセス突破特別企画

記念雑談会

終り

外伝「第二の終り」

外伝「第二の終り」

デモンズパラダイスを崩壊させた大宮 優。

第二の人生が始まった最初の寒村の村へ立ち寄った後、目的地へ向けて漆黒の夜空を音速で駆け抜ける。

白の貴公子から得た記憶があるので場所の特定は楽だ。

後数分もすれば学園都市「ザードリイ」が見えて来るだろう。

何故優は学園都市を目指すのか？

それは『この世界の優』と『他の世界の優』との望みが一致した結果であった。

優の最大の望みは幸せな人生を送って機能を停止させること。

それが何よりの願いであり、また多くの『優』の悲願でもある。

ちなみにこの世界の危機については二次感覚で考えていた。

関ろうとする気持ちは全く沸かない。

ソレは『自分がこの世界ではイレギュラー』である事と『なるべくこの世界の人間が解決すべき』だと言う優独自の倫理観による判

断だった。

それもこれも生と死を繰り返す優の精神年齢で言うなら既にもうかなりの高齢者であり、まだ幼さが残る少年チックな割にかなりシビアな判断ができる　のが理由だ。

だが根は優しさや慈悲などの塊で『極度な超偽善』とも言えるかも知れない。（そうでなければ白の貴公子はあの時殺している）

そんな優は「手助けするぐらいなら構わない」ぐらいには考えていた。

だがもうすぐ記憶が消去される自分ではそれももう叶わない。

自分は知っている。

神も完全ではない。

個人は所詮個人でしか無いのだ。

「あれ……誰かが戦っている？」

魔法学園と思われる大きな町の明かりが目に入った所で優は誰かが戦闘しているのを感じる。

しかも両者ともかなりの大パワーの持ち主だが片方の陣営はかなり弱っている人々が多く、もう片方は邪悪な気配の持ち主だ。

まだ時間切れまでにはかなり時間があるのでちよつと言ってみようと思いたつ。

ウリエール大陸中央部

魔王王国「ウラシエザーム」

南部地方「神魔文明・古代遺跡第46号」アルヴァ（*発見者の名前）『』。

魔法学園ザードリイーの生徒達が今日ここで実戦経験を積む為に教師同伴の元校外学習に来ていた。

森の中にある古ぼけた遺跡アルヴァ内部やその周辺には低級ながらモンスター（今の優ならゴミか空気同然の存在である）が存在しており、学園都市からはそんなに離れていないのよく演習場代わりに使うのだ。

だが実戦は実戦。

何が起こるか分らないので教師は複数名同伴し、学生の証しであるマントを羽織ったクラスの人間達もグループで行動する事を義務付けている。またギルドの人間も何名か監督官として雇われていた。この実習も予定の肯定が終りに近付き、肩の荷が降りて一安心……しようとした矢先であつた。

「先生！！」

「早く逃げなさい！！ 私が時間を稼いでいる間に……勇者を召喚する様に言いなさい！！」

ソレは突然事だった。

灰色の騎士達。一体一体が高位のモンスターに匹敵する程の防御力を誇る集団。思い足取りでズシン、ズシン、と地響きを立てて進軍して来る。

並大抵の剣や魔法攻撃など物ともせず、じつくりと進軍しながら次々と追い詰めていく。

奴達の名は歴代魔王の中で最強とも言われている魔王『ギアード』

の配下モンスター軍団だ。

一体一体が防御力が高い物質系並の強度を誇り、また圧倒的な軍事力を誇る。主にウリエール大陸の南部地方で猛威を奮っていた軍団がこの大陸中央部に現れたのだ。

まさかのイレギュラーに居合わせた者達は混乱する。

「学生達はすぐに避難させろ！！」

滅多に遭遇しない強敵を前にしながらギルドから派遣された戦士達は的確な指示を飛ばす。

ある程度場数を踏んでいるだけあって冷静だった。

「気をつける！！ 一体ヤバイ奴がいる！！」

この異形な軍団の中で一際目立つ者がいた。身に纏うプレッシャーと言う物だろうか？ ソレが段違いに違う者がいる。

体の各所にUの字のプレートパーツを貼り付け、左側が赤、右側が青と左右で色が違うと言うとても個性的な姿をしていた。そう言う生命体なのか鎧の隙間からは肌が見えない。その変わりに筋肉の繊維の様な物が見えていた。

頭部のUの形状をしたカブト飾りをを夜空に照らしながら彼は名乗る。

『ハッハッハッ！！ 人間にしては中々やるな！！ このマグネードの磁力魔法にここまで太刀打ちできるとは！！』

魔王ギアード。

配下七将の一人、マグネード。

ウリエール大陸では殆ど知られていない『磁力』を操る強力な将

であった。

魔王ギアードと対魔王ギアード連合……通称「南部大陸王国諸国連合同盟軍」との戦いではその能力で多くの兵士や勇敢な戦士の命を奪い去った。

その強さは磁力と言う概念を理解出来ていない人間が数多くいた事。また魔力で生成された磁力フィールドの破り方が全く分らなかった事と本人の元々の実力に起因する。

ある者は自身の武具を磁石の特性を付加され、磁石の様にマグネードの体に引き寄せられて奪い去られた所を殺され、また地面をに変え、周辺の兵士を+に変えて一気に空高く吹き飛ばした事もあった。

『くられこの木々の磁力をマイナス!!』

Uの形状をした物体が張り付いたガントレットを頭上に持ち上げ、自身の怪力で木を数本持ち上げていた。

『磁力散弾!!』

一気に自分自身の磁力を強くし、その反発で木を弾丸の様に吹き飛ばす。

『さらに砂鉄龍舞!!』

マグネード得意技の一つ。

地面にある砂を自らの力で砂鉄に変えてコントロールしそれを使った砂鉄の龍を複数体産み出す大技だ。

空高く伸びる龍の首が複数出来上がり、滅多に見れない大魔法にギルドや教師、生徒達は絶望感に包まれた。

これを使ってギルドや応戦して来る教師に攻撃。ただ砂鉄龍を体

当たりさせただけだがそれだけでも十分良い。

辺り一体に砂が飛び散り、ギルドの冒険者達が砂煙の生き埋めにされて行く。砂の重量は数十トン以上。この世界の異常な身体能力を持つ者でなければ即死。生きていても窒息死だ。

「何て奴だ!!」

「雑魚でも厄介だというのに……」

この地にいる魔王ギアードの部隊はどれだけの規模かは分らないが今の所絶望的な数では無い。

あの大將格さえ倒せば勝機はあるのだが「その将が非常識な強さ」なのでそれが出来ないでいる。

ある意味『負けようが無い部隊』だ。

「でやああああああああ!!」

『ふん? 何かしたか?』

魔力で形成した磁力フィールドで果敢に攻撃して来たギルドの戦士の剣を弾く。

剣は見るからに使い込まれ、幾多の実戦にも耐えて来た一級品の者だがそれがまるで棒切れでも叩いたかの様な結果に終る。

『触れたなあ貴様? 俺の磁力フィールドに触れた物体は自動的に磁力になる……』

「け、剣が!?!」

能力を理解できていない冒険者には何をされたのか一瞬分らなかった。

ただ相手に何らかの方法で奪われたとしか認識できていない。

『そら、返してやる!!』
「がつ!?!」

器用に操作された魔力性磁力により弾丸の様なスピードで男の腹に突き刺さった。

磁力による反発による物で弾道は自分の力で器用にコントロールしている。

「せ、先生……」

「皆は先に行っていないさい。私は時間を稼ぎます」

年若い女性教師が杖をギュツと握り、生徒達の盾になるように立ち塞がった。

腰まで伸ばした大人の落ち着きを感じさせるパープルカラーのロングヘア。顔立ちも大人びている。

短めに生地がカットされている漆黒のマントを羽織い、手には寶石が嵌め込まれた銀色のロッドを白いグローブ越しにギュツと握り締める。

（私では恐らく太刀打ちできないとは思うけど……やるしか無いわね）

魔法学園の教師は元勇者一行のメンバーだっている程のツワモノ揃い。中にはギルド事態に多くの功績を残した者や王宮勤めが出来る程のエリートだっている。

だが不幸にもこの魔法教師「エリス・キャンベル」はどちらかと言えば戦闘向きでは無いタイプの女性で実力は教師陣の中では下から数えた方が早い方だ。

魔力も豊富で魔法戦闘などは強いがソレは悪魔でスポーツの様な試合形式での事。

二十半ばの年齢の今でも実戦は数える程しか経験していない。

『次は女。貴様の番だ』

「ッ！！ ファイアーボール！！」

基本と言われる初級魔法・ファイアボールを自分の周囲に浮かべられるだけ浮かばせる。

初級の魔法だが達人の魔法使いが使えばファイアボールも驚異的な魔法へと変わるのだ。

ある者は巨大な火の玉に、またある者は形を変え、他の属性の魔法と組み合わせる事で強化したファイアボールを放てる。

エリスは物量による一斉攻撃を選択。

空中に浮かび上がった夥しい数の火の玉が周囲を照らし、温度を上げる。

敵はその様子を見て微動だにしなかった。

「一斉攻撃！！」

次々とファイアボールが直撃。

当る度に激しく火の粉が舞い、それが何度も何度も続く。

消えた分は再び形成してまた打ち込んだ。

『……磁力防壁』

だが敵は強かった。瞬時に地面を砂鉄に変えて防護壁を作り出す。欠損した部分は穴を詰める様に補強。

このマグネードの強味は『余程の事が無い限り自分が不利になる環境にはならない』と言う点だ。

先程も解説した通りどんな物でも磁石に変えられる磁石人間。また触れた物やマグネティックフィールドに引っ掛かった物すらも

磁石に変える。

『さて……少しばかり本気を出すか』

この一言で生き残ったギルド、教員達はハツとなる。

「皆避けてー!!」

『もう遅い!! モードデストロイ!! フリーファイア!!』

防御として使われた壁から次々と砂の粒が高速で飛んでくる。

極少の砂粒の荒しは次々とギルドや教員、逃げ遅れた生徒の体の皮膚に当たり体を血達磨に変えていた。

『更にマグネティックフィールド・針地獄!!』

「ギャアアアアアアア!？」

「ウワアアアアアアア!？」

怯んだ冒険者達の体を磁力の砂で形成された刺が次々と貫く。

広域殲滅魔法・マグネティックフィールドの応用技、針地獄。

高密度の磁力砂を敵の真下に作り出し、攻撃する大技。多くの人間の命を刈り取った技の一つであり、マグネードの恐ろしさの片鱗が見え隠れする技だ。

『クソッ……やはり配下を巻き込むでしあうな……』

この能力の弱点は鉄分の塊である味方すらも巻き込んでしまう点である。

生き残っている多くの部下が地面に引っ付くように倒れていた。

中には磁力化した砂のせいで全身砂まみれになっている奴までいる。

『ほう……女、お前は生き残ったか……』
「はぁ……はぁ……」

どうにか生徒を逃す役目を終えた女教師は地面に膝を付けて息を荒くしている。

ギルドの人間が突飛ばしてくれなかったら自分も砂の刺で死んでいた所だ。

だがソレは自分の寿命が延びただけ 戦いが始まってから一方的に此方を虐殺しているこの敵に対して倒す手立ては浮かばない。

『だがそこまでだ。死ね 』

殺される。エリスは両目を瞑った。

『ん？ 何だこの音は？』

その時だった。

聞いた事も無い唸り声が聞えたのは 。

「レヴァイザーブレイク！！」

木々を叩き降りながら彼は現れた。

見た事も無い水色の鎧、ヘルムを身に纏り、前後に車輪が付いた鋼鉄の乗り物に跨った仮面の戦士が現れたのは。

その姿を確認したのは無敵を誇っていたあのマグネードを土煙と供に轢き飛ばした後だった。

「猛くん。怪我人の回復は僕に任して、好きな様に暴れて。僕が癒して回るから」

その後ろから背中から紫色の翼を生やした少女……いや少年だった。

見た事も無い青い衣装を身に纏い、次々と傷付いた人々を回復して行く。衣装もおかしかったが、その回復魔法も異常で致命傷だった者まで直していた。

「あ、あなたは？」

「通り縋りの正義の味方だよ」

そう言っ水色の戦士は鋼鉄の乗り物から降りた。

吹き飛ばされたマグネードは先程までと雰囲気を変えてその戦士に向き合う。

鬼気迫る雰囲気と言えはいだろうか……上手くエリスは言葉で言い表せなかったが一つ分る事がある。

（さっきまで本気じゃなかったんだわ……）

絶望を感じた……その時、立ち塞がる様に水色の戦士はマグネードと向き合う。

『貴様何者だ！？ この俺を轢き飛ばすとは……』

「僕は青き勇者……！ 機甲戦士レヴァイザー……！」

バイクから降り立ち、ビシュ、ビシュと言う音を立てて決めポーズを取る青き鎧を纏った戦士。

今戦いの第二ラウンドが幕を開けた。

（青き勇者『レヴァイザー』……相変わらず強いね……）

優は治して回りながら思う。

今自分が呼び出した戦士、レヴァイザー。

精神とのシンクロにより爆発的な力を発揮する力を持ち、無限大の可能性を秘めた正義の戦士。

最終的にその強さは本気を出した自分に匹敵した。戦い様によつては自分でも負けるかもしれない。

デザインは宇宙刑事寄りのやや古臭いデザインだがそれでも強力な戦士である事には変わりが無い。

（敵は磁力使い……禁書目録で言うならレベル5相当かソレ以上の能力者かな？）

磁力を操り、磁力を生み出す歩く磁石魔神をそう評する優。

レヴァイザー専用マシン『レヴァイザー』時速600キロ以上のエネルギーフィールドを張ったレヴァイザーブレイク不意打ちで先制攻撃を咬ましたが同じ手は二度も通用しないだろう。

それにレヴァイザーは一对一よりも他の仲間との連係プレイでその力を発揮するタイプの戦士だ。

（だけどあの子は負けない）

レヴァイザーの意味はレヴォリューションとイレイザーを掛け合わせた造語、『変革の抹殺者』を意味する。

これを作った今の自分と同じ世界を渡り歩いたトラベラー聖斗博士は一体どう言う願いを込めてこの名前をつけたのかは最初優は分らなかった。

だが最近に分る様になって来た。

（使命だけで行動していた僕とは違う……確かな強さがあるから……）

人の可能性は決まっている方向に向けられ無い。中には悪しき方向に目覚めてしまう者までいる。

そして開発者の聖斗は知っていた。

その悪しき可能性に付け込む悪の存在を。この世界で主に魔王や白の貴公子の様な輩を言うのだろう。レヴァイザーはそう言った『自分を含めた』悪しき存在によって強大な化け物となった存在を破壊する一つの対抗手段として作られたのだ。

『マグネティックフィールド!!』

「レヴァイザードリルキック!!」

大気を捻り斬るように水色の戦士は跳躍。体をドリルの様に大回転して空気を抉る様に蹴り技を放とうとする。

対するマグネードは磁力による壁を作り出す。

『馬鹿な!?!』

自分が張ったフィールドが抉り取られる様に挟られてしまう。

瞬時にマグネットフィールドをマイナス、自分自身をプラスに変えて離脱を判断。

無様に大木へ叩きつけられた。

『マグネティックフィールドを突き破ったか……だがお前は磁力になった!!』

マグネティックフィールドの恐ろしさ。ソレは触れた物を磁力を持たせる事が出来る。

その恐るべき能力がレヴァイザーに対して発動しようとした。

背中にぶつかった大木を引き抜き、磁力を浴びさせて投げつける。

「クッ!？」

磁力に引つ張られて思うように体が動かせず、大木が激突。

このパワードスーツは戦車の砲弾すら用意に凌ぐが中身の人間は衝撃を諸に受けて倒れこむ。

続いて丸い砂の弾が次々と怯んだレヴァイザーに襲い掛かった。

マグネードの能力で磁石人間にされてしまったレヴァイザーは回避困難な参上である。

『止めだ!! マグネティックフィールド・バキューム!! フルパワー!!』

自分自身が持つ能力を最大限に発動。

電磁波でも放出しているのかバチバチと青い雷光が吹き荒れた。

「ならば此方も!!」

ソレに会わせる様に飛び上がった。

同時に右腕を立てに折り曲げ、左腕を内側に向けて右腕の付け根に拳を置き力を込める。

「Jチャージ!!」

胸部の球体部がパカッと開き、周囲に眩いばかりの緑色光が輝き出す。

このJは英語のジャスティスの頭文字を示す文字。正義、友情、愛、努力、根性etc……善き心が極限まで達する時、レヴァイザ

ーの真の力を発揮する。

世の科学者が聞けば「そんな馬鹿な!？」と口を揃えて言うだろうが事実このレヴァイザーの能力はそう言う力。だが逆を言えば精神と言う不安定な物に頼るなど、兵器としては欠陥もいい所だが優は『ヒーローは兵器であつてはならない』と言う開発者の意思が尊重されている様に思えた。

「チャージで放たれるこの光りを眺めていると何だが自分自身の能力で作ри出したレプリ人間（魔力生命体とも言つ）と言うのを忘れてしまいそうだ。

『アースドリル!!!』

「レヴァイザースクリューナックル!!」

お互いの螺旋技が発動。

マグネードは砂をドリルの形状に変え、高速回転。対して猛は先程と同じく回転を加えた最高の一撃をお見舞いする体制を作り上げた。

お互い回転系の技同士の対決　マグネティックフィールド・バキュームで引き寄せられた猛はそのままアースドリルに飛び込む形となる。マグネードもアースドリルをミサイルの様に長けるの方へ打ち込んだ。

「でやあああああああああああああああ!」

『なに!?!』

アースドリルは破裂した水風船の様に砂利を撒き散らしながら破壊された。

マグネードは仮にパワー負けしても直にアースドリルからの派生技アースブリズン……磁力を帯びた砂で相手を包み込んで生き埋めにする技を決めるがその目論見は粉碎されてしまった……

『だが掛かったな!!』

かに見えた。

弾け飛んだ砂の粒が反転。弾丸の様にレヴァイザーへ襲い来る。アースドリルも磁力の塊であり、また何度も言うが現在レヴァイザーはマグネードの力で歩く磁石と化しているのだ。

そしてアースドリルを攻勢しているのは砂。弾け飛んだ砂はすべて磁石の特性を持ち、一旦バラバラになった砂は一定の距離で反転しレヴァイザーへと襲い来る。

これが普通なら蜂の巣にされスプラッタな映像が流れる所だが……

「うおおおおおおおおおおおおお!!」

体を扇風機のように回転させているレヴァイザーは磁力の引き寄せにも負けず、砂を自ら引き起こした風で吹き飛ばす。

そのまま尚も直進!!

マグネッティックフィールドで迎え撃つ覚悟を決めた。マグネッティックフィールドを『引き寄せ』から『押し退け』に変えてレヴァイザーを迎え撃つ。

一瞬レヴァイザーは無重力に捉われたかのような錯覚を覚えたがそのまま振りぬいた。

磁力の壁を突き破り、相手の頬顔面を殴りつける。

『グヌウオオ!?!』

大地を挟りながらまるで猛スピードのトラックに轢き飛ばされたかのように再度ピンボールの様に弾け飛ぶ。木々を2、3本ぶち折りながらマグネードは遥訳止まった。

「凄い……あの化け物相手に互角以上に戦ってる……」

「何なんだアイツは……」

「すげえ……」

この戦いを目撃していた人々は次々と感嘆の息をついた。

大魔法同士の単純なパワーのぶつかり合いには確かに劣るが、技術に裏打ちされた実力者同士の戦いは善悪関係無く心惹かれる物を感じていた。

「これが本当の戦い……」

女教師エリス・キャンベルや生徒達は何故だか悔しい思いが芽生え始めていた。

戦いを見詰める内に嫌が上でも自分の無力さを

『ぐぶお、ゴボオ！？ 力技で俺のマグネティックフィールドを破るとは……』

絶対無敵の力を誇っていた自分の技が破られ、衝撃を受けていた。だがこのマグネードはまだまだ切り札を隠し持っている。その一つが

『マグネティックフィールドの応用を見せてやる！！』

マグネードは何と地面を常に磁石に変え、また自分自身を地面と反発した磁力に変える事による凄まじい機動性を獲得した。

「速い！？」

『クククク。このスピードがお前に見切れるか！？』

目にも止まらぬ超高速移動で死角から次々と攻撃を仕掛け始める。激突する度にレヴァイザーの体にダメージが増えて行く。性質が悪い事に段々とスピードが上がって行き勘で避けるしか方法が無い状態に陥っていた。

レヴァイザーが取った行動は必死に耐える。亀の様にガードして耐え抜く事だった。

『隙を狙っているつもりか……多くのツワモノがその戦法を取り、俺の前で敗れて行った……その理由を教えてやろう!!』

突如動きを止めてレヴァイザーの背後に立ち上がった。

『マグネティックホーンON!!』

頭部に付いたUの字の飾りから青白く光りはじめる。

『さらにマグネティックフィールドON!!』

更に同じUの字の飾りが付けられた腕から青白い光が放ちはじめた。

『左腕で引き寄せえ!!』

「!？」

グイッと引つ張ると操り人形の様にレヴァイザーが引き寄せられた。

『右腕で反発と俺の腕力!!　そして磁力で強化してマグネットパワーを叩きつけるう!!』

思いっきりレヴアイザーを殴り飛ばした。

同時にマグネティックフィールドでレヴアイザの背後に砂の壁を作り出し、その壁に叩き付ける。

壊れそうになっても随時補強するから碎ける心配は無い。

『マッーグマグマグマグマグマグマグマグマグマグマグマグマグマグマグマグ！！』

左腕で引き寄せ、右腕で殴りつけて壁に叩き付ける。

最早將軍と言うより残虐 人が悪魔 人染みた戦法で徹底的に甚振り始めた。徐々に距離を詰めて引き寄せの段階でも拳が当るようになっている。

「た、助けないと！！」

「駄目だよ」

エリスは助けようと思って杖を向けたが優にロッドを握られ、止められてしまう。

力任せに引き離そうとしたがビクともしない。こんな女なのか男なのか分らない年下の子供にこれだけのパワーがあるのも驚きだがそんな事よりもエリスは人間として当たり前の行為をしようとした。

「どうしてですか！？ あなたのお仲間がアレだけ傷付いているのにどうしてそう平気でいられるんですか？」

「まだ戦いは終って無いからだよ」

「戦いは終って無いからって……」

エリスにとっては意味が分らない倫理観だった。だが優にはそれが分る。

人を助けたいという思いは確かに素晴らしいだろう。しかし時と

して助けがその人間を傷付ける場合があるのだ。例えばスポーツで試合続行可能なのに怪我が心配だからと言われて無理矢理スタメンから外されたり、また相手の選手が怪我をしているからと言ってワザと此方も手加減して試合に負け、相手の気持ちに不完全燃焼させてしまったりと言った物。

優はその点を自ら生み出したレプリ人間の記憶を通して理解していた。

『これで止めだ！！』

『何の！！』チャージフルパワー！！』

『ぬっ！？』

マグネットパワーが遮断されマグネードは弾き飛ばされた。

レヴァイザーのヘルメットにマウスガードが現れ、完全密閉となる。そして周囲を吹き飛ばす様に体中から緑色の炎が噴出。

それを鎧の様にして身に纏った。

「あ……アレは一体？」

「僕もよく分らないけど火事場のクソ力と言うか何と言うか……」

根性パワーとか色々あるが一応激しい感情のうねりに反応して発動する超パワーだ。

一体どう言う原理であんなパワーが産み出されるか優も今一よく分かって無い。

『うおおおおおおおおお！！』

『ぐぼがあ！？』

回転しながら綺麗なソバット（蹴り技の一つ。飛びながら回し蹴りの要領で相手の体に足を叩き付ける）を決める。

相手の体を浮かび上がらせた。

『続いてえ！！ ブレーンバスター！！』

そのまま相手の頭部を右脇で首を絞めるようにガッチリとホールド。体を逸らしながら相手を地面に思いっきり叩きつけた。

この反動を利用して車輪の如くブレーンバスターを決める。まるで大地を削っているようだ。

『フィニッシュは！！』

徹底的に痛め付けた後、空中に思いっきり放り上げた。腰のバックルから緑に光る光の剣を取り出す。

『レヴァイザーカッター！！』

空中で相手の胴体に突き刺す。

まるでチーズを両断するかのように軽々と刀身が滑り込み一気に横へスライドさせた。

『この俺が……破れるとは……』

赤く燃える夜空を背景にマグネードは体を二つに二分される。

重力にまかせるままマグネードはゴトッ、ゴトッと言う音を立てて地面に降りる。

遅れて猛もシュタツと地面に降り立つ。

『ギアード様ア！？ 賢者の卵を探し出せずして朽ち果てるこの身の不甲斐なさをお許しく下さい！！』

断末魔と供に青白い閃光が上がった。

「猛君おつかれ」

『め、滅茶苦茶強かったよあの人……』

緑色の炎も消えてよろろと猛と呼ばれた青き戦士は優の元に歩み寄る。まるで力を使い果たしかの様にへろへろになっていた。そして光の粒子となり、胸の中で消えてしまう。

「き、消えた？」

「うん。まああの人は僕の召喚獣の様な物だからね」

「人を召喚して使役する魔法……ですか？」

と、質問したが優はそのまま眠たそうに地面へ倒れた。

「ごめん、頑張り過ぎたみたい……ちょっと寝るね？」

「え……ええ？」

エリスは困り果てたが兎に角色々と状況確認に奔走された。

怪我人は生きている人間、また致命傷に近かった人間も奇跡的に一命を取り留めているが死者はかなり出ている。

戦争は始まる前も最中も終った後も大変なのだ。

そして生徒の安全確認と供にこの課外授業は悪夢と奇跡と供に終り迎えたのであった。

「翌日：学園都市ザードリィー」

「以上報告を終わります」

学園都市内のある一室。

エリスは白いベッドで寝ている優の前で学園長に報告を行う。

「そうか……この少年だが君はどう思うかね？」

「さあ？ 少なくとも悪い子には見えませんが……正直謎が多すぎて何が何やら……突然倒れてしまいますし……」

と黒い紳士服を着た壮年の男性が白い手袋自分の白髭を弄繰り回す。

「……何かの縁だしこの学園に通わせてみようかな？」

「ええ！？」

まさかの判断にエリスは驚く。

彼女も命の恩人を悪く言うつもりは無いのだが余りにも得たいが知れなさ過ぎる。

少年の異常な程の治療魔法もそうだが少年が呼び出したと思われるあのレヴァイザーと言う戦士も凄まじい強さだった。

そんな少年を学び舎に迎え入れるなど女性教諭には一種の賭けに思えた。

「そうした方がいい。私の感がそう告げてるのだよ」

と黒いシルクハットをクイツと挙げて優の顔を覗きこんだ。

女性と見間違っ顔立ち、体付きを持つ少年は今も尚天使の様な微笑と共に眠りに付いている。

目蓋から涙を流しながらずっとずっと……

外伝「第二の終り」END

外伝「第二の終り」（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております

if もう一つの未来

優しき勇者・悲しみの冥王

if もう一つの未来

これはある可能性が実現してしまった最悪の世界

アルクレス王国広場。そこで優の処刑が行われた。

王国は優を制御ができないと判断し、アルクレス教会の総本山がホーリーマウンテンに連絡を取った上で優を邪悪な物として処刑する事を考えた。

だが一つ間違いを犯してしまった。

優が真の力を目覚めさせる方法を　そして我々が知る優とは違い、この優は破壊の化身その物だったと。

「俺を目覚めさせるとは……そんなに死にたいか？」

人々は言葉を失った。なんと処刑された筈の優が生き返った。

体中から魔力を漲らせ、姿を白い仮面を被った紺色の魔神へと変える。

辺りは大パニックとなり、錯乱した兵士が剣で斬りかかって来た。

「失せろ」

ただそう念じただけでこの広間にいた兵士達や、人々は次々と発

火した。

人体の脊髄にイメージを送り込み、相手を発火させる力だ。魔力の流れを感知しそれに合わせて障壁を張るか、もしくはそう言った防御機構がある防具さえあれば防ぎ様があるがこの広間にいた兵士そして一般人に成す術などなかった。

一瞬にして人々だけが燃える地獄絵図と化した広間を後にし、優はある場所へと向った。

その前に

「楽にしてやるか……」

胸の水晶が光り 爆ぜた。

広間にいた人々は焼かれる苦しみから解放され、あの世へと旅立った。

残ったのは魔神と広間だった場所に残されたクレーターのみである。

「さてと……殺す前に少し王へ挨拶しておこう……」

道中兵士が駆けつけて来たが成す術も無く死んで行く。罪も無い市民も片っ端から殺されて行った。

まるで害虫でも駆除する様に。

王の前に辿り着く頃には既に五桁台の人間が殺されていた。

「やあ王よ……。あの世へ旅立つ準備はできたか？」

「貴様……やはり……邪神であつたか!？」

玉座で相対する両者。回りには骸と化した兵士達がいた。

死を覚悟しているのか王は親の仇でも見るかの様に視線を陰しくしてる。自国民が大量虐殺されたのだ。マトモな神経をしているの

ならば怒らないほうがどうかしている。

「ふははははっはははは！！ 違う違う私は冥王だよ。まあ邪神も間違いでは無いがな」

「クッ……もし私が死んだとしても必ずや勇者達の手で貴様は罰せられるであろう！！」

と気丈な振る舞いを見せていた。

「ふふふふ、ならば大サービスだ。死ぬ前に自らの王国の最後を見せてやろう」

手を後ろへ向けて 爆ぜた。凄まじい閃光と轟音だった。だが悲鳴は聞えない。その理由は簡単だ。

悲鳴を挙げる暇すらも挙げるべき人すらもないからだ。王の眼前には自分の城だった荒野が広がっている。

優の前には赤い絨毯が、壁が、そして自分が座る玉座や天井がちやんとあつた。だが何も無かった。

「さてと……後は貴様を殺せば一先ず私の仕事は終わりだ……」

「あっ……ああっ……」

「もしもし？ 聞いてますか……チツ、狂ったか」

衝撃波を打ち込んで王を肉塊に変えた。

「さて……『アルクレス王国の処刑』は終った……」

次の目標は既に決まっている。王の記憶や大臣の記憶は全てコピーした。

自分を殺そうとしたエデルカディア教会。そいつ達を皆殺しにし

なければならぬ。

場所も既にインプット済みだ。

「この世界を破壊し尽くしてやる……クククク……アッーハツハツ
ハツハツハツハツハツハ！」

後にウリエール大陸は優の手で死の世界へと変えられて行く。

全てを破壊し尽くした後、優の姿は役目を終えたかの様に忽然と消えるのであつた

E
N
D

プロローグ（前書き）

二〇一〇年：十二月七日

前・後編に分けるつもりでしたが長くなったので、新章として扱わせて貰います。

BYMrR

プロローグ

優しき勇者・悲しみの冥王

五万ヒット記念「亡者は黙って地獄に堕ちろ!!」

この世界で生きている限り、またあんな目に会うかもしれない

（ソレは分るけど……）

死を繰り返す度に記憶を失う……そんなのはもう嫌でしょ？

（だからって一つになるなんて……）

僕は平気だよ。それに……僕はもう既に死んでるんだよ……君と一緒にになって悲しい時と一緒に歩んで来た。だけどそれをもう終りにしようと思うんだ

（けど、言っただじゃないか!! 強過ぎる力は……自身にも周囲にも災いを齎すって……）

だけどそれやって僕達は大罪人になってしまった……僕も馬鹿だったんだよ

（本当にそれでいいの？）

いいんだよ。僕の役目は本来君の中にあつた『文明抹殺官』と

しての機能を完全に停止させた時に終っていたんだよ……

(……そう)

だから一つになろっか？

そして優は目覚めた。

白いベッドの上で……

魔法王国ウラシェザーム。

現在からおよそ五十年前。

突如として現れた魔王がいた。

名を「ファウマージ」。

邪悪な魔王であり、また強大な魔力を誇る魔法使いと言う側面もあった。

このファウマージもまた勇者の手で倒されたのだが

「旧ファウマージ塔」

ウラシェザームの領地にある魔の大森林に嘗ての居城はあった。

この魔の大森林は凶暴なモンスターが数多く生息し、腕が覚えがある冒険者ですら立ち寄るの止めると言う。

そこには天高く聳える居城が存在した。
五十年と言う年月が経ったにも関わらず、未だに不気味で近寄り難い雰囲気醸し出している。

そして長い放置されていたせいか凶暴なモンスター達が住み着き、
さながら真新しいダンジョンと化してしまう。
異変はその最上階で起きた。

『ファウマージよ。聞こえるか?』

おお、その声は……ルファール様!?

嘗てこの地を恐怖のどん底に陥れたファウマージは漆黒の空間の中で不気味に赤く光る物体へ手を伸ばす。

その手はまるでミイラのように干乾びているが力強く必死に突き出していた。

『如何にも……私の名は暗黒神ルファール……私の力で貴様を蘇らせてやるっ』

な、何と!?! 私のような落伍者に何故これ程の……

真っ先に疑問に思った。悪魔の契約は無慈悲で残酷だ。交した約束は絶対に裏切ってはいけないが同時に裏切らなければ必ず約束を守ってくれる。

特に暗黒神との契約は『無慈悲なまでに絶対』な筈なのだ。

『ファウマージよ……これでしくじるようであるならば、次は無いぞ?』

ハッハー!!

だがファウマージは改めて与えられた千載一遇のチャンスを逃す

つもりは無い。

折角生き返らせてくれるのならば多少の疑問など忘却の彼方に忘れ去っても良いと考えた。

そしてファウマージ塔の最上階……古ぼけた儀式の広間の中央に描かれた魔法陣から這い出る様にファウマージは蘇る。

紫色のローブ。顔面を覆う包帯。ミイラのように痩せ細った体。魔王と言うよりも狂人染みた魔法使いに見えてしまう。

だが体から放たれる魔力が塔全体を捕食するかの様に包み込み、五十年の間放置されていた塔が綺麗にリフォームされて行く。

十分絶つ頃には新築同然の綺麗さと清潔さを誇る塔へと早変わりしていた。

『クックククツ……こうして蘇る事ができるとは……感謝しますぞルファール様！！』

不気味なまでに歓喜の声を挙げた。

翌日。

ウラシエザームの王宮に一つの書状が届いていた。

ウラシエザームの王へ。復活の祝いとして貴様の王女を頂く。ファウマージより。

と書かれていた。

本来なら性質の悪い悪戯として処理する所だが手紙の隅々へ染み渡る陽に込められた強大な闇の魔力に深い不安を覚えてしまう。

念の為王国政府は王都、もとい王女の身边警護を強化するのであった。

こうした情報は学園都市にも伝えられていた……

「五十年前の亡霊ねえ……」

学園都市「ザードリィー」の中枢部。

威厳溢れる高貴な城その物の校舎に学園長専用の執務室がある。

高級そうな絨毯、本棚、洗面所、仮眠室へと続く部屋を備えているという割と豪華な部屋だ。

その反面部屋は質素になっている。

「はい……もう既に学校中では話題になっております……再びギアードの手の物が襲来してくる可能性があると言うのにこれですじゃ……」

教師の一人である老教師が告げた。この学園の創立からずっと支え続けて来たベテランの教師である。

頭の毛は全て抜け落ち、タツプリと白い顎髭を胸部の半ばに届くぐらい伸ばしている。腰も曲がり仙人が持ちそうな先端がグルグル捲きの木製杖を手に持つ。

名はウンカイと言う。

「私は正直ファウマージの事なんて知らないんだけどウンカイ……君は知っているかな？」

「ええ……勿論ですじゃ。あの当時国で生活していた物は忘れませんまい。ワシがこの学園で教鞭を振るおうと思ったのも奴がキツカケじゃ」

当時の事を思い出したのか両目を瞑りとても苦しそうな表情を浮かべる。

「奴は正真正銘悪魔じゃ……それにしても気になる。奴が五十年前と同じ手口を使うとは……」

「王女を狙った事かい？」

「奴は強大な魔力を持つ王族の者をこの手で強奪し、更なる力を手にしようと思いました。当然勇者達はソレを阻止しようしましたが、あるう事が奴は勇者はその一行達の魔力をも我が物にしようと思っておりまして……当時はどうにか阻止できましたが、かなり容易周到な奴ですじゃ。油断はできません」

まるで一度戦った事があるかのような口振りで語った。

「もしかしてウンカイ君……もしかして五十年前メンバーの中に？」

「ええ……内緒ですぞ？ 今更生徒達にチャホヤされるのも虫唾が走りますわい」

苦笑いを浮かべて老教師は悟りきった表情でステンドグラスから溢れる光を直視した。

「それにしても今はあの当時と比べて激動の時代ですじゃ……リベレイターの勇者狩り、南から迫るギアードの脅威……そして裏で暗躍する教会に暗黒大陸から来る実略者達……我々が築いた物が正しいかどうか、試される時かも知れませんか……」

まるで自分に言い聞かせる様にそう言うのであった。

「先生大変です……！」

慌ててローブを身に纏った一人の女教師が入り込んで来る。

「どうした……何かあったのか？」

「そ、それが」

世の中にはギルドと言う物がある。

早い話が便利屋であり、国際ギルド連盟に加盟している国であるならば殆どの町にギルドはあるのだ。

この勇者と魔王が永遠的に殺しあっているウリエル大陸に基本『平穩』と言う二文字は無く、常に危険に晒されている。そんな状況だからか常に町や村が優先的に割を食う。王国の騎士が早々都合良く派遣される訳も無く、だからと言って自警団を築こうにも練度は騎士よりも劣る。

ギルドはそんな不安を解消してくれる一つの抑止力であり、また画期的な試みであつた。

『世の中金』と言う言葉があるがこのギルドは正しくソレ。並大抵の問題は冒険者を金で雇えて金で解決してくれるのだ。

更には傭兵から堕ちた山賊の発生などを防ぐ言わば『仕事の斡旋所』的な顔を持ち、昨今ではすっかり傭兵＝ギルド登録者と言う認識が強い。

「依頼はこれでよろしいでしょうか？」
「うん」

勿論それは学園都市にもある。

だが学園都市の場合、他のギルドと違い多く異なる点があつた。まず利用者が学生が多いこと多いこと。また依頼内容も王国ではなく学園側が出していること。そしてランク規制による依頼の規制が厳格化されていることだ。

「依頼内容は近隣の村に現れたドラゴンの撃退。冒険者だけでなく

腕に覚えがある生徒や教師が派遣されており、また諸事情で王国からの兵派遣は遅れているとのことだ」

「大丈夫だよ」

学生の利用者は多いのは『学園都市だから』で片付くのだが、詳細な理由としては学生が生活費を稼ぐため、また成績に上乘せが来たり……最大の理由はスリルに飢えている者が多いからだろう。中にはデート変わりに使う不届き者までいる始末だ。

依頼内容を学園が出しているのは経費削減、また生徒をあえて危険な目に会わせる事で鍛える必要があるからだ。日本の教育を間逆に行く行為だ。だが魔法学園の目的は酷い言い方をすれば「頭のでっかちだけで仕えない奴を生み出すのではなく悪魔で将来を担う若者を育てるため」である。教育には時として非情さも必要であるB
Y学園長。

またランク規制が厳しいのはやはり生徒の安全を考慮しているからである。まだまだ成長の予知がある未熟な生徒を一人前になるために死なせるのを阻止する為だ。それでも分り難ければ『ひのき棒を装備したレベル1の勇者をラストダンジョンに放り込むのを阻止する制度』と考えてくれればいい。命は一度きり、おかしいのはユウなのだ。

「はぁ……分りました。お氣をつけてください……」

ギルドの本をパタンと閉じた。

「うん言ってくるよ」

不安そうな受付に対して少年は笑って返す。

少年の名はユウ。

この学園都市に入学して一カ月も絶たない内にギルドのランクを

最高段階近くまであげた。

黒髪の東洋系の顔立ちと短い黒髪が特徴的な少年で、詳細は不明だが凄まじい才能と実力を秘めた学園始まって以来の超天才魔導士である。

その実力は教師を遙かに上回っていたがどう言う訳か生徒として通っているが時折教師の代行も務めると言う意味不明な立場だった。容姿はまるで少女その物。実年齢よりも幼く見え、短い黒髪と大きな瞳、そして女の様な体付きは見る物を確実に錯覚させる。身に纏うユニコーンの柄が入った白いショートマントと青いブレザーの制服（女子も何故かブレザーである。妙に地球らしいところがある）が無ければ判別は無理だろう。

そんな容姿で才も実力もあるのだ。有名にならない方がおかしい。だが……やはり心配な物は心配である。

「ドラゴン退治かー定番だけど『今迄』やった事無かったねー」

腰辺りの短い白の学生支給マントを翻し、ユウは目的地へと向かった。

まるでピクニックに出かけるような軽い足取りで。

（ユディ……僕は元気だよ……）

故あってユディとはまだ会えない。

けど何時か会える事を信じて少年はある場所へと向った。

近隣の村に現れたドラゴンは確かにドラゴンであった。

だがソイツは最悪のドラゴンであった。

奴の名はドラゴンゾンビ……創作物の世界でも滅多に扱われる事

が無く、醜悪な化け物である。目撃報告所かその存在すら疑問視され、もはや神話の生物染みた扱いを受けていた。その理由はドラゴンゾンビは『一種の生態兵器』であり、その製造方法からして難易度が高いために作ろうとする奴は『余程頭がイカれた奴』ぐらいしか無い。

突如平和な森に現れるとその腐った体からガスをばら撒き森を腐廃化。大気中にも毒素をばら撒き、自然環境を激変させて行く。

「ドラゴンの討伐と言っていたが……まさかドラゴンゾンビに変化するとは!!」

「何処の誰だ……こんな奴をこの地に運び込んだのは!？」

ただでさえドラゴン退治は危険な仕事である。例えるならば自然災害に立ち向う様な物だ。

このドラゴンゾンビは立派な建造物に匹敵する20mの大きさ（ガンダ より若干大きい）でドラゴンと言う種族で見るとこれでも小型の方だ。（大きい奴になれば50mはいく）

討伐に来た冒険者達は戦い馴れている物が多く、中にはドラゴンと実際戦った物達さえおり、充分できると言う確信と余裕がある。だが最初はただのドラゴンだったが追い詰めて行く内に体は腐り出してドラゴンゾンビへと変化したのだ。

もし王都に送られていた脅迫状を知っている物がいれば『ファウマージを名乗る者』の仕業だと消去法で辿り着けたかも知れないがこの場に居合わせた冒険者はそんな事よりも生き残る事を優先させた。

「炎だ!! 炎で体を焼き尽くせ!!」

「回復魔法を使える奴はすぐに解毒を!!」

流石戦いを生業とする人々である。

並の軍隊以上の対応でどうにか食い止めていた。

「クソッ……再生までしてやがる……！」

「しかも周りの木を取り込んで……一体何の生物だありゃ……！」

攻撃を受け、再生する為に周囲の物質である木や土を取り込む事で徐々にドラゴンゾンビはグロテスクな何かへと変貌して行く。

「うわぁ……エグイね」

風の波に乗るかのような滑らかな動きでユウは空中から「ドラゴンゾンビ」だった怪物に目をやる。

見るからに変なウィルスに犯されていそうでもとても近寄るのが恐く思った。何か自分もゾンビ化しそうだから。

「ここで食い止めないと……変身……！」

レプリ人間の記憶を共有しているせいとその人間が微妙に流れ込んでいるのに気が付きながらもユウの姿を変える。

白い仮面を被ったあの冥王形態に……カラーリングが紫色から白に変更され、其々のパーツが黄色ラインや宝石で彩られていた。

ハデイスに本来変身形態は存在しない。

『ファイアーストーム……！』

先手必勝。

胸部アーマー部に埋め込まれた大きな宝玉から炎の竜巻が発生。全てを焼き尽くさん規模のだ。

ドラゴンゾンビだったモンスターの肉片が徐々に焼かれていき、やがて骨だけになる。信じられないことにそれでも奴は動く。しか

し骨さえも焼き尽されていく。

この手の再生機能を持った化け物は周辺の自然環境を無視してでも細胞一つ残らず焼き尽くすのが一番効率がいい。

普通なら中々できない手段だが優ならできる。

（本当なら火炎光弾とかも良かったんだけどね）

一応トラクターリング（リング内の物体を高速で強制移動させる魔法）で大気圏外に放り出して粉碎したり、「沙耶ドライバー」（ユウが元居た世界のある魔法少女の武器。空間を広げてバトルフィールドを形成する）など色々と手段はあったがまあ結果オーライだ。今度は出来る限り環境に配慮した戦いをやろうと思った。

目の前では木々が燃える所かあまりの高温にグッグツと炭化してしまった。まるでバスター（光線）技を放った後の様に大地が抉れている。空に浮かんでいるせいでその効果範囲が怖くなるぐらい分ってしまう。

自分は生と死を司る破壊神だが自然環境を元通りにする事は充分可能だが……何だか勝った喜びよりも「やっちゃった……」と言う罪悪感が芽生えていた。

「……帰ろ」

そして報酬は「辿り着いたらもう終った」とでも言っただけで受け取らないでおこう。そう心に決めたユウであった。

その頃、水晶玉越しでユウがドラゴンゾンビを撃破する様子をフアウマージは食い詰めるようにじっと眺めていた。

水晶玉でその姿の後を追おうとしたが空の彼方に消えてしまう、

追跡を振り切られてしまった。

遠くの景色を映し出す映写水晶も音速で飛ぶ物体を追跡する機能は無い。

『ドラゴンゾンビを葬るとは侮れぬな……』

ファウマージはチェスで言うのなら歩兵を進める気分でドラゴンゾンビを嚇けたのがこれは思わぬ誤算だった。

五十年前であるならば魔王を討伐するぐらいの気合で無いと倒せない……それこそ勇者ぐらいしか対抗戦力は無い筈である。

ドラゴンへと偽装させるのが大変だったが良い情報が入った。

今の世に生きる者を舐めてはいけない

忠告が頭を過ぎる。

成程。ルファール様の言う通りだ。

だが所詮は一人。

幾らでも対策は練れるし「切り札」はある。切り札が破れても目的を達成できれば自分の勝ちだ。

『計画を進めるとしよう……』

王女を狙うと言うのは実はガセ。

本当の狙いは別にあった。

『質より量……予定通り王国は部隊を王都へ集中させてある……ククッ。私が過去の遺物であるかどうか試してやろう』

後編に続く。

プロローグ（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております。

第一話「急襲」(前書き)

御待たせしました。
第一話の投稿です。

第一話「急襲」

優しき勇者・悲しみの冥王

五万ヒット記念「亡者は黙って地獄に堕ちろ!!」

第一話「急襲」

ウリエール大陸中央部。

そこは魔王の出現率が多い西部地方に比べれば比較的平穏な大地であつた。

しかし南部地方に拠点を置くギアードの脅威。そして国境を無視するかのよう活動するリベレイターなど、決して安全とはいえない地方である。

そして現在……マグネードの一件から警戒レベルを強化していたとはいえ、ファウマージが送り込んだと思われるアンデットモンスターの襲撃がザードリィー各地で多発。

その襲撃ポイントはランダム。

特に王都近隣で発生し、また王女の脅迫文と相俟って軍をその周辺に配置せざる終えない状況になっている。

だがそれにより王都の防衛体制は着々と整い、厳重な警備体制で迎え撃つ準備を完了させた。

そんな情勢下であつてもウラシェザーム魔法王国が誇る学園都市『ザードリィー』は何時もと変わらぬ光景を見せていた。

空は召喚した使い魔や専用の魔道具を使って飛び回る生徒が多く、

地上では魔力動力炉を用いてゴーレムや乗り物が闊歩し、その大地は綺麗に石造りの床になっていた。

夜になると魔力機関を用いた照明が町を照らし出す。他の国から訪れた物からすれば「まるで未来の世界に迷い込んだ様な錯覚に陥る」と言われており、最新鋭の技術を惜しげも無く披露するこの都市のスタイルに誰もが息を飲んだ。

生徒が学ぶ学園の学び舎は巨大な城その物。まるでこの国の首都を思わせる様な壮言さを滲ませている。

更に様々な各種専門の施設が立ち並び、もはや一つの国家とも言える規模であった。

ここでおおよそ四年間、最先端の教育を受けて生徒達は巣立って行くのであった。

そんな魔法学園にも地球の学校で言う部活（サークル、もしくは同好会）に当る物がある。

何故か異世界なのにサッカーがあったりした時はユウも驚いたりした（しかも魔法使用有り。そのせいで異世界版イナズ○イレヴンと化している）が。

他にもデュエルやライドレーシングなどの独自のスポーツの部活などもあり、異世界ならではの部分も多くユウは子供心を思い出していた。

そして現在ユウが所属しているのは冒険同好会と言う学園・国内不思議名所巡り（地獄巡りとも言う）だ。

「楽しく冒険する」と言う名目で作られた同好会だが、その楽しいの基準が部長であるティス・アドベンチャー（二年生の少女。通り名：破壊者）の基準で決められる。その基準は人によらなくてもハードである。

遂先日下水道で大量のスライムと激闘するはめになったのは記憶に新しい。ゲームではなく、現実では一体の生半可に強力なモンスターよりも千体のゴブリンの方が対処に困る。物量は力だ。それを思い知ってしまうような散々な体験だった。酸を撒き散らす巨大なアリとガチでやり合う地球防衛軍の隊員達の気持ちじゃ幾らかよくわかった。その上鬼教師のロウ（犬の獣人）に大目玉を食らうなど散々な目にあった。だが同じ部に所属するビュウ（何か大人しそうな感じがする茶髪の男の子、無理矢理ティスにメンバー登録させられたらしい）は……

「今回はまだマシだ」

と語っている。

最近「賢者の卵を見つけ出す」と言う最終目標が掲げている。

そんなティスにユウは「嫌な予感しかない」と思いつつも何故だか「面白そうだから」と言う理由でユウは所属していた。

何だかんだでユウも充分変人である。

Ⅱ 学園都市北西部・生徒様施設群Ⅱ

冒険同好会の部室は今使われていない旧校舎（改築が進められ、現在はほぼ生徒専用の部室棟となっている）の一室を借りて行われている。

埃っぽくなく、綺麗過ぎてもなく、何だか地球にある普通の学校を連想させる様な内部構造だ。

部屋もわりと広く、室内には本棚や黒板、そして新校舎同様に放送部のスピーカーが壁に取り付けられている（しかも物置部屋付きと言っ良物件）。白いカーテンが取り付けられた窓ガラスをバック

に部長専用席である豪華な横長長方形の机が置かれており、そこがティスの専用スペースとなっている。

自分達部員は長テーブルやパイプ椅子（ここは異世界である筈なのに妙な所で地球臭いと言うギャップに苦しんだがもうユウは馴れた）などの場所が与えられる。これも最強武器精製研究会（釜戸など）や次世代ゴーレム製造部（保存・制作に必要なスペース）の様に専用の設備が必要でない分、部室を選び好みしなかった点が幸運に働いたようだ。

「ねえねえ聞いた！？ ファウマージが復活したって言う話！！」

その運で勝ち取った部室内で今日もティス・アドベンチャーが机を叩き話題を振る。

綺麗に切り揃えられた赤いオカッパヘアを揺らし、まだ幼さが残る顔立ちに笑みを浮かべるその姿は活発そうな元気が取り得の少女と言うイメージを連想させた。

ドラゴンの刺繍がついた（ドラゴンの刺繍はドラゴンクラスを意味する）白いマントを羽織り、この学園の制服である青いブレザーとスカートを身に付け、ブーツは頑丈そうな冒険者専用の靴を履いている。

（あの机大丈夫かな……）

ちなみに今彼女が叩いた机は骨董品屋から安く買い叩いた物らしく、見た目は綺麗だがユウは何時か壊れるんじゃないかと少し心配している。そんな心中など構わずティスは話を続けた。

「ええ。もう学校中で話題になっています……特に貴族階級出身の方は独自の情報網があるようでして……」

セドナ・ホワイトフェザー。

純白の羽を生やし、ブロンド髪のロングヘアを靡かせたその姿はまるで天使か女神の様に写る。ティスと比べれば余計にそう見える。

胸が大きいのが悩みなのか何時も気にしている。制服も窮屈で特注のサイズの物を着ていた。(ユウは元々爆乳やら巨乳だの比率が高い所で生活していたせいか不思議と気にならなかったが)

性格は穏かその物で「無理矢理入れたんだろうな」と言うバックボーンが容易に分る。

そんな少女は今日のクラスの人間の事を思い出しつつも気弱そうに語った。

「私も聞いている。手柄を立てるとか有名になってやるとか……樂觀論もいいところだな」

一見知的そうに見えるお兄さん。

背も高く、金髪で四角いレンズのメガネを掛けており、何だか学歴が高いエリートの人間を思わせる上に。頼りになりそうな雰囲気漂っている。ユウと同じく制服は青いブレザーとマントだがこのお兄さんの方がとてもよく似合っている。

名前はクリス・サバイヴ。

姓もそうだが名前も色々とサバイバリティに長けていそうな(もしくは常時パワーアップしてそうな)名前だが実際そうだったのは流石に驚いた。

ちよつと前に皆で近くの森へ出掛けた時に遭遇したモンスターと素手でガチファイトしていたのも記憶に新しい。

「大丈夫なんでしょうか……」

「本音を言えばこっちから殴り込みに行きたいところ何だけどねえ」

心配の声を練り潰すようにとても物騒な事を言うティス。

たぶんこの少女の脳内では大勢の敵を前にして無双している自分の姿を思い浮かべているに違いない。

こう言う思考回路は大体危険だがティスはまだ十代半ばの人生経験も豊富ではない少女だ。リアリストな思考を持てと言われても無理があるだろう。(しかもティス本人も破壊者と呼ばれるだけあつてかなりの実力者であるため、その傾向がより一掃に強いように思えた)

「なあユウ？ お前はと思う？」

隣に座っていたビュウが呆れながら声を掛けてきた。

「うーん、まあこう言うのは王国にでも任せちゃえばいいんだと思うよ？」

「だよなあ普通。一介の学生がどうこうできる問題じゃねえだろ」
(何かビュウ君って今時の日本の学生みたいな思考パターンだね)

そのせいか妙に浮いてるな〜と思いもした。

この特徴が無い茶髪の冴えない少年、ビュウ・スロウとはこういう人間なのだ。セドナと同じくこの同好会に似つかわしくないメンバーである。

まあ無理矢理入れられた経歴を考えればしかたないと思えるが。

(しかし何この世界が包み込まれているような悪意は……)

まるで気持ち悪い何かを体に塗りたくられる様な物をさつきからユウは感じていた。

気のせいかと思ったが段々とその気配が増大しつつある。

「それにしても何だか外が騒がしいわね」

ふとティスが窓を覗き込んだ。

「あれ？ あれだけ晴れてたのに一体……それに空の様子が何だか変ね」

さっきまで空が青々としていたのに何時の間にか大雨が降りそうなまでに曇っている。

それに空が妙に紫掛っていて気味が悪い。

『生徒の皆さん！！ 緊急事態です！！ 外にいる生徒は直ちに本校舎へ避難を開始してください！！』

考えを続ける前にスピーカーから声が響く。

何時もは教師や生徒の呼び出し、新聞部やら、ラジオドラマなどで賑やかなこの放送も今回ばかりはとても切羽詰った様子だった。

「避難訓練の演技か？」と言う考えすら思いつかない状態だ。

『現在この学園都市は外部から襲撃を受けており、とても危険です！！ 特に中央噴水広場はとても危険です！！』

「襲撃者ですって！？」

「一体何者なんでしょうか……」

女性二人はそれぞれ対照的な反応を見せる。

（襲撃！？ しかももう内部に入り込まれていた！？）

流石にユウも焦った。

確かに噴水広場からはかなりの数が送り込まれていた。
だがここである事実気付く。

（まさかこの結果のせいで自分の探知能力が落ちている！？）

この上空の異変……いや、結界のせいだろう。

モンスターの気配と交じり合って神経を集中させないと探知できない。

そのせいで気付くのが遅れたのだと理解した。

「どうしたんだユウ？」

「いやごめん……何でもない」

クリスに声を掛けられる。

心中が顔や雰囲気に出ていたのだろう。

「ともかくこんな状況だ。冷静に対応しなくてはな……」

クリスは部屋の傍にある物置き部屋へと足を運んだ。

「ちょっと武器を取ってくる」

「武器ってお前戦いにいくつもりか？」

「モンスターに遭遇するかも知れない状況で無防備のままは危険だ。
自衛の手段ぐらいはあった方がいいだろう？」

そう言われると何も反論できず、ビュウはクシャクシャと頭を掻きながら「わかった」とだけ答える。

ビュウは体術に関しては上の方、剣の腕も中々だがそれはクラス
の中だけで学年単位になると普通だ。

一応魔法の素質……珍しい事に学園都市が発見した新属性である

雷である。

新属性とは四大元素である土、風、火、水、相反する光と闇と言った属性とは違う属性。新属性とは氷、雷、磁力、木と言った四大元素の高位や亜種を指す言葉だ。

雷属性を持つビュウもその力の使い方や研鑽を重ねれば学園都市最強……とまでは行かないが（ユウとまでは行かないが反則レベル）上位に組み込める能力者になれる……のだが学校とは基礎的な部分を教え、後は本人の自主性に任せる部分が多い所があるのと、ビュウの性格が相俟って伸びなかった。

（……やっぱ才能や素質があるだけじゃ駄目なんだね）

心底勿体無いな」とユウは思う。

「私は魔法があるから大丈夫」

「だけどティスさんの魔法は破壊力があり過ぎて校舎に被害が……」

「校舎の損害よりも私の命の方が大切だから問題ないわ」

「そ、そう言う問題じゃ……」

日本の政治家が聞いたら卒倒しそうな積極的防御姿勢であった。地球防衛軍ならぬ建造物もろとも敵を吹っ飛ばす地球破壊防衛軍に通ずる物がある。

流石は破壊者。暴力的だ。

「ユウは武器あるの？」

「はい。一応近所の武器屋で買った奴が……一応物置小屋にも魔道具と同じくストックが置いてありますんでそれを使っただけだよ」

こう言う万が一の時に備えてストックしていたのだが今回それが

幸いした。

ちなみに近所の武器屋や云々は嘘。殆ど自分の力で作った代物であるが既製品よりかは強力であると自負している。

「でかした！！ セドナのオツパイを揉んでいいぞ！！」

「ええ！？」

突然の爆弾発言に室内にいた全員が驚く。

クリスでさえ顔を赤らめていた。

「大丈夫、間に合ってますから」

「」「」「ええ！？」「」「」

ユウも「元の世界に居た時のノリ」（と言ってももう一人の方だが……）で返す。

逆にティスが動揺してしまった。

「ちょ、誰よ！？ 誰と付き合ってるの！？ てかそう言う仲なの！？」

「さあゝ本当に誰何だろうねゝ仕方ないねゝ記憶喪失だしゝ」

目を丸くし、体をSD化させてトコトコ歩きながら自分も隣の部屋へ武器を取りに行く（フリ）をする。

（だけどこのままだと本当に不味いね……）

最悪正体を明かさなければならぬ程に危機的なこの状況。

それに結界の正体がもし自分の想像通りなら事態は最悪な方向へと転がる。

(……一旦放送部に行ってみよう)

そこなら通信用の魔道具が置いてあるし外部との連絡も取れる。もしかするとより正確な状況が分るかもしれない。

そう思ったつやいなや、すぐさまユウは皆へ相談しに行くのであった。

「ザードリィー魔法学園・中央部噴水広場」

学園都市全ての区画への交差点と言うだけあってとても広い場所である。

中央に大きな噴水が位置し、上空から見れば円を囲むようにして建造物が立ち並んでいる。平日でも休日でも多くの人々が行き交うこの広場はやつらが現れる前まで活気に満ち溢れていた。

「まさかこんな大胆な手口を使うとは!!」

中央の噴水を中心に東西南北魔法陣が敷かれそこから無尽蔵にモンスターが湧き出していた。

しかも用意周到な事に外部を結界で遮断している。空の色が変なのは実は結界に閉じ込められているせいだ。これでは外部からの応援が来たとして、とても守りきれない。

必死にウンカイは水系統の魔法で応戦するが次々と湧いて来る。駆けつけた教師陣や自警団のも対応に戸惑っており、その場に居合わせた生徒まで戦いに参加してどうにか持ち応えている散々な有様だ。

「これではキリがありません!!」

エリスも必死に火炎系の魔法で応戦する。

ギアード配下のマシーン軍団のように幸い敵モンスターは大した事は無い（下級〜中級アンデット系、中には支配下置いたモンスターも混ざっている）のだが敵の保有戦力が幾らか分らないが確かに長期戦になれば魔力を主体に戦う者達は不利だ。

しかも敵がここにいるだけで全部とは限らない。だからと言ってここから退けば全ての区画に大量のモンスターが広まってしまう。結果で逃げ道が塞がれている以上、ここは引き下がる訳にはいかなかった。

「テオス侯爵の部隊が我々の自警団と合流していたのがせめてもの救いですな」

「ウリエール大陸初の人工ゴーレムを中心とした機動部隊を保有する部隊……噂には聞いてたけど凄まじいわね」

テオス侯爵。

元々は子爵だったが、若くして彼が設立した魔力動力式の搭乗式人工ゴーレム部隊は他国への救援の際に多大な戦果をあげ、爵位を上げた。

またこの学園都市にあるゴーレム関係の技術に対し多大な資金援助を行っている男でもある。

『現在戦況は安定している』

『これならまだ持ち応えられるな』

その男が作り上げた全高6m程のゴーレム部隊は現在も多大な戦果を挙げていた。

実戦を経験しているだけあってか小型のモンスター相手だろうと

落ち着いて対処している。

銅色の戦闘用ゴーレム『ドゥーン改』（戦闘の結果を反映して改良したタイプ）。

典型的な騎士の様な鋭角的なフォルムを持つ三頭身のゴーレムであり、武装も自分の身の桁サイズに合わせて作られた盾と剣を振り回し近寄るモンスターを掃討していた。

「……ふう、どうにか凌げましたね」

「じゃが何時まで持つ事やら」

周りが回復魔法を掛けたり、体制を立て直すために忙しく掛け回る中両教師は一息付いていた。

広場はモンスターの死骸が無残に埋め尽くされており、あの綺麗だった噴水広場は見る影も無い。

「この物量……まさかあの技術を再び使っておるのでは……」
「え？」

ふとウンカイが心辺りがあるのか口を開く。

「あの技術とは？」

それに釣られるように質問した。

「ファウマージは元々人間の魔王じゃ……道を間違えねば間違い無く歴史へ名を残す天才魔道士になれた。この異常な戦力は恐らく魔道具精製で作られた人工モンスターじゃろう」

「人工モンスター！？ モンスターを精製するなんて……そんな魔道具があるんですか！？」

魔道具開発が盛んなこの学園都市でも聞いた事も無い魔道具だ。

「モンスターの誕生プロセスは未だ謎が多い。学者達の多くは魔王達は独自にモンスターを作る能力があると言う説があるとされている。しかしファウマージはそう言う魔道具を開発したのじゃよ」

「初耳です……」

「そりや当然じゃ。文字通り歴史の闇に葬った魔道具だからのう」

モンスターを精製する魔道具。

聞くだけでも恐ろしい代物だ。もしそんな物が実用化されたら？
もう魔王と人間の区別がつかなくなる気がした。

「これはまだマシな方じゃ。中には人間をモンスターに変える魔道具なども開発しておった……ワシはファウマージが開発した魔道具のほぼ全ての研究成果や資料を破壊、そして焼き払った。とてもじやが平和への有効活用など出来るもんでは無かったしのう……それにこの判断は正しかった。暗部の連中に」

ここで老人の顔がハツとなった。

「いかにいかに。年を食うと無駄口が多くなるわい……」

とても気になる内容であったがここは戦場。

此方の事情など気にせず再びモンスターが送り込まれる。

「だからと言って我々も休ませてはくれんようじゃのう……」
「は、はい！！」

再度魔法陣が噴水を囲むように現れ、そこから再びモンスターが追加。アンデット系を中心とした混成モンスター部隊だ。

骸骨剣士に中身が無い鎧の幽霊騎士、幽霊の様に宙に浮かぶ魔導士。

周辺のモンスターを支配下に置いたのがゴブリンやコボルド、ワイルフと言ったモンスターまで混じっている。

そしてゴーレムの方にはトルルやベヒーモス（角を生やした巨獣。大型の上位モンスター）、ワイバーンと言った大型のモンスターが集中投入されるようになっていた。

「どうにかしてこの事態を打開せねばならんと言っのに……一体どうやって転移させて来ているのやら」

「兎も角今は目の前の敵に集中しましょう」

この円形状の絶対防衛線。

包囲殲滅が可能な此方に優位ではあるが相手は絶え間なく戦力を送り込んで来る。

位置関係上、この噴水広場を制圧されてしまえば学園都市全体に大量のモンスターが送り込まれてしまう。

果ての無い戦いはまだ続くのであった……

第一話END

第一話「急襲」（後書き）

Ⅱ 本編解説Ⅱ

この五万ヒット記念シリーズは劇場版、OVAを意識したつもりで制作をおこないました。

そのためか今迄敬遠していたと言つか恐れていた事を進んでやっています。

特に今回の話に出て来る新キャラ達がそれです。

アウティエル、ヒーローフォースなどの経験上、学園と言う舞台になると登場キャラが多くなるために読者が混乱するのでは？と言っ心配がありましたがこのシリーズでは試しに問答無用で放り込みました。

不評なら次回シリーズで改善するつもりです……（ストーリーの都合でまたそうなるかも知れませんが……）

登場キャラが多くなると一人の一人の個性をどうにかして強くないといけないため登場キャラの名前もカッコ良さよりもインパクトとか印象に残り易い方面に走っています。

後折角の学園物ですし生徒を出さなきゃ行けない 友達とか中の良いクラスメイトが必要 だけどクラス単位での紹介は面倒。

そこで誕生したのが冒険同好会です。

つまり物語の引っ張り役にもなれるので何かと便利な存在になってくれました。

（メンバー達が既存のキャラに似過ぎたのが唯一の欠点だな……）

「裏話」

ここまで遅筆だったのは短編を描こうとしても思いつかない、ヒーロー物の小説を考えても中々上手く行かない。

イラストが思うように描けない。

何よりも評価が思うように上がらず自信を無くしてしまったと言うのがあります。

今もかなり引き摺ってますがどうにか頑張って生きたいな〜と思ってます。

「ピクシヴのイラスト」

絵チャを利用して絵を描いてるんですが久し振りの下書きからのペン入れ、取り込み方式でのカラーイラストとなり、ちょっと不安を感じています。

頑張って描いたイラストが思うように評価されないのが続くとはり心に来る物があるからです。

この優しき勇者・悲しみの冥王でもそうでした。

だけど頑張らないと辿り着けないんですね……これが現実ですから。

「次回更新について」

次回更新は来週の終りぐらいを目安に投稿したいと思います。

それでは次回、また会いましょう。

ご意見・ご感想お待ちしております。

第二話「出陣」(前書き)

本当はもっと修正に時間を割きたかったけど、徹夜でもう体が限界です。

前回の予告通り今日中にUPさせて貰います。

第二話「出陣」

優しき勇者・悲しみの冥王

五万ヒット記念「亡者は黙って地獄に堕ちろ!!」

第二話「出陣」

「学園都市東部」

建造物が立ち並ぶこの場所も今では危険地帯と化していた。

市街地において屋根から側面から出て来る敵の対処は高度な訓練を受けたプロの兵士でさえも梃子摺る。

奇襲には絶好のポイントだがそんな襲撃を物ともしない一団がいた。

「ふう……こんな物ね」

学生による雄志の自警団……もとい風紀委員がある。

ギルドで一定の仕事をこなした物だけが入れ、試験を潜り抜けた者だけが入れる自警団。

どうして風紀委員と言う呼び名は分らないが、様々な特権や名声が得られることもあって生徒達の中には進んでこの風紀委員に参加しようとしている者も多い。

その風紀委員の中に【氷の女帝】と称される一人の少女がいた。

「だけどまだムシャクシャするわ……」

氷付けにされた道、モンスターの中央に一人の少女がいた。

スラリとした長身に水色のロングヘアを流し、刀剣の様な鋭い瞳。風紀委員専用の白いカラーの制服を着こなしている。^{ブレザー}

彼女の名は「アイス・ブリザード」

通称【氷の女帝】。

先日ドラゴンゾンの騒ぎで獲物を横取りされた形となり、少々ご立腹だったせいか軽く本気を出して街中を徘徊して生徒や住まう市民を襲い掛かるモンスターを片っ端から氷の彫像に変えて行く。

「流石アイスさんだ……」

「これが魔法学園最強の氷使いのフルパワー……有り得ないくらい強いっすね」

触れようとした傍から氷付けにして行くのだ。相手にする方は堪ったものではない。

同行している風紀委員達は「もうあの人一人でいいんじゃないか？」と思いつつも（恐くて）口には出さずただただその一方的な殺戮に啞然としていた。

「この辺りの見回りは済んだわね？」

「は……はい!!」

突然話掛けられた風紀委員の一人は姿勢を正し、条件反射でビシッと答える。

「敵は中央噴水広場から無尽蔵に転移して来ている様ですがどうやら撃ち漏らしが多いようですね」

あるいは発生源が一つだけじゃないのか。真偽は定かでは無いが自分達の仕事は安全確認だ。

今は気にする必要は無いと考える。

「ええ。だから皆も気を引き締めて……『皆さん報告します!!』」

腕のブレスレットから少女の声が聞える。通信用の水晶玉が埋め込まれた連絡アイテムだ。

これも学園都市ならではの技術であり、風紀委員の中ではリーダー格にしか配られていないアイテムだがとても重宝している。

『学園長によるとこの結界はファウマージが行う何らかの作戦……もしかすると魔力を吸収する巨大な結界である可能性があります』
「それ本当なの!？」

悪魔で可能性の話だがそれが本当だとすれば大事だ。

(そう言えば聞いた事があるわ。元々ファウマージが王族を狙ったのはその高い魔力を狙ったと……)

この国に生まれ育った人間からすれば有名な話だ。
もし狙いが『魔力その物』ならば成る程、確かにこの学園程魔力が多く集う場所は無いだろう。

何せこの都市には国中、また大陸から魔力保有量が多い人間が数多くおり、王女一人狙うよりこの魔法学園の人間を狙った方がいい。
質より量とはよく言った物だ。

『あゝもう皆さん勝手に喋りかけないでください!!』

他の通信用魔道具の保持者にもメッセージを伝えているせいが一斉に相手側の声が届き五月蠅く感じたのだろう。

分り難ければ周囲から一斉に多人数から喋りかけられる所を想像

して欲しい。少なくともアイスは耐えられる自信は無い。口と一緒に氷付けにしてしまいそうだ。

『まだ予測の域は出ませんが可能性はあります。過去ファウマージは五十年前、強大な魔力を持つ王家の者を狙ったそうです。今回のターゲットがもしかして王女ではなく我々を狙った物だとしたらと言う考えは充分に有り得ます！！ だから急いで下さい！！ 何時発動するかは現時点では分かりませんがもし発動されたら……』
「だけどうすれば……」

悔しげに少女は結界で覆われている空を見詰める。

『敵が戦力を送り込んで来る以上、何らかの解除方法がきつとある筈です！！』

「それが分れば苦労はしないわよ」

とは言ってもやるしかない。

「此方一班。私達は周囲を探って見るわ……」

多くの戦力が噴水広場を集っており、また他の避難施設への防衛にも人数が割かれている現状では自由に動けるのは自分達ぐらいだ。万が一相手の目論見がこの結果の完成であり、また魔力の吸収能力があるとしたら？

無理は無理でもやるしか無いのだ。

Ⅱ 旧校舎・放送部部室 Ⅱ

専用の魔道具が置かれた部屋に冒険同好会のメンバーが集まっている。

これはクリスが情報が欲しいと言う意見を採用した上での行動だった。ティスは納得いかない様子だったがユウの説得もあり渋々納得した。

「とりあえず部活棟の皆には自衛手段を持つ様に連絡して置きました。」

放送部員達が慌しく動き回り他の放送機材やユウが部室から持ち込まれた武器を受け取る中、クリスが代表して放送部の女の子と会話をする。

緑髪のお下げで丸メガネをつけた大人しそうで知的な女の子。体は華奢で背丈も普通。今の危機的状況で前線に出るには不安が残りそうだった。

「やはり学園側も生徒の避難で手一杯ですね。自警団も状況は不明です。風紀委員の本部も施設が襲撃されて現在自警団と合同で撃退している様です」

「助かる……」

敵が大量に内部へ入り込んでいる現在、この状況はとても不味い自分の身は自分で守らないといけないのだ。

報告内容から察するに自警団や風紀委員、教師陣は当てにならないと考えた方がいい。

「噴水広場からモンスターが此方に……数は……四十体？」

セドナは普通の魔法使いとしての能力は高い。両目を瞑り、羽を動かしながら危機を知らせる。

特に魔力探知能力はメンバーで随一だ。早くも敵の動きを掴んだらしい。

勿論ユウも掴んでいる。

「……予想より事態が悪化しているな」

「この状況だと校舎の方も安全じゃ無いわね……」

何かを決意したティスは放送部の魔道具へと歩み寄る。

壁へ設置されるように置かれたこの魔道具は地球の放送部が使う機材に酷似していた。

（やっぱり何らかの形で地球と繋がりがあのかな？）

そうでなければおかしい部分がこの学園都市には多いが今はそんな事に頭を測らせている場合ではない。

ともかくアクションを起こさねば……と思った矢先のことであった。

「マイク借りるわよ」

「え？」

何処で動かし方を覚えたのかティスが魔道具をON。

マイクに向って口を開いた。

『私冒険同好会のティス・アドベンチャーはこれより活動を開始します……今回の目的はただ一つ！！ この馬鹿げた事態を粉碎する！！ 以上よ……！』

と宣言した。

室内がシーンと静まり返る。

報道部の人達は何かいいたげだったがその言葉が出ないのかただ目を丸くして仰天していた。

『ゴーレム研究部！！ 直に使えるゴーレムの出動準備お願い！！ 最強武器防具研究会は直に戦闘準備！！』

その他この学園棟にいる部、同好会に次々と司令を下して行く。

「アイツ全部部活を把握してんのかよ……てか正気なのか？」

と、ビュウが呆れていた時……

『私達は打って出るわ！！ 暴れたい奴はついてきなさい！！』
「おい！？ 色々と待て！！」

そう言い終わると勢いよく窓の方へ走って行く。

「てっここ四階ですよ！？」

「問題なし！！」

ふと窓の傍につっただっていたビュウを目にやり

「あんたもついてくる！！」

「うわおおおおおお！！？」

肩を掴んで窓から飛び降りて行く。

「んじゃあ僕も行つて来ます」

ユウも別れを告げるように

「セドナ。俺達も行くぞ」

「く、空中に浮かべるんですか？」

「まあな」

残された二人も後へ続いた。

「め……メチャクチャですね」

報道部員達はまるで台風が去って行くのを眺めるように呆然と開いた窓を見詰めていた。

ティスはビュウを抱えながら空中に飛び出た瞬間。

足から炎をジェットブースターの様に噴かし、空中を滑空。宙返りを一回点を決めて上空に滞空して様子を探る。

他の炎系魔法使いもビックリな応用法だ。

「いたわね」

迫りつつある異形の軍団を発見。

固まっているから見付け安かった。

どいつもこいつも醜悪なアンデッドやモンスター。話し合いなど通じる気配が全く感じられない。二度見したくないほどに恐ろしい上に異臭さえ放っていきそうだ。

できるならばお近づきにもなりたくないが状況がそれを許さなかった。

「派手に行くわよ!!」

「バカバカ！？ 敵の集団に突っ込む気が！？」

「先手必勝！！」

「ギャー止めるオオオオオオオオ！！ 殺す気かあああああああ
ああ！？」

砲弾の様に一気に加速。敵陣中央目掛けて突入。

爆弾が炸裂したかの様な勢いがある轟音と暴風が吹き荒れ、モンスターが片っ端から吹き飛ばされて行く。

続いて火炎呪文が煙の中から続け様に連発。その玉に当たった途端、弾け飛ぶ様に爆発が巻き起こる。

「俺の傍でぶっ放すな！！ 危ないだろ！？」

「聞こえない」

ティスの火炎呪文の特徴は『燃やす』のでは無く爆弾の様に『直撃したら吹っ飛ばす』と言う点にあった。

それ故に相手がどんなモンスターだろうと一撃即死。もしくは大ダメージを与えられる。

勿論本人の意思で高温による焼却も可能であるのだが、爆殺させて行く方が気持ちいいのか基本爆発タイプで殲滅していく。

「さっさとこいつ達片付けて親玉を潰しに行くわよ！！」

「そう言う発想しかできないのかお前は！？」

それからもう一方的な虐殺だった。

目に入れた端から火炎魔法をぶっ放して速・殺しているからだ。正に歩く人間兵器。無詠唱で手を向けるだけ。

しかも「汚物は消毒だ！！」だとか「おいアンデット！！ 生き返って掛ってみろ！！ また焼却してやる！！」などと挑発をしながら。

前々からこの少女は下手すると教師陣がそれ以上に強い気もする。この作品のキャラクターのパワーバランスは一体全体どうなっているのだろうか？

「お前達の相手は俺じゃねえ。ケンカ売ってきたこの女だろ！！」

その傍ら悲鳴を挙げつつもビュウは剣で骸骨の剣で殴り倒す。何だかんだで同好会の活動で鍛えられてしまっている自分がとても悲しい。

言ってる事は最悪だが正直このティスと言う女はドラゴンを数十匹単位でぶつけても勝ってしまいそうだ。だからこんなヘタレな自分を許して欲しい。

（それにしてもこの剣メチャクチャ使いやすいな）

今ビュウが使っているこのロングソード。とても軽い上に切れ味が抜群で何だか頼もしいと言うよりも恐さすら感じる。

刀身がとても綺麗で金色の柄は豪華な装飾が施され、中央には赤い宝玉がはめ込まれていた。しかも持ち易い。ユウが仕入れた武具なのだろうかと疑問に思いながら力強く剣を振る。

別に力を入れる必要が無いのは分っているがそれでもそうせざるいられない。四方八方を醜いアンデッドに囲まれればそうしたくなる。

ティスは全方位に炎を噴射させるなどして撃退できるが自分はそんな事はできない。この体から出てくるバチバチ（幼い頃ビュウは自分の力をそう言っていた）……もとい雷属性の力は上手く使いこなせていない。

（使いこなせれば学園都市最強は無理かも知れ無いけどレベル5の第三位ぐらいにはなれるよ！！）

とユウに言われたが、メンドくさそうなので断ってしまった事を今激しく後悔している。

その悔しいのか悲しいのか自分でもよく分らない気持ちをぶつける様に剣を振った。

と言うかレベル5って何なんだ？ 凄いのかそれは？

「危ない！！」

「なっ！？」

聞き覚えるのある少女の声が、後ろを振り向くと骸骨の兵士が剣を思いっきり振り下ろそうとしていた。

時間がスローになり、恐怖のあまり目を瞑ってしまう。

できれば今度は平和な人生を歩みたい。

そう願わずにはいられなかった。

「シャインブレット！！」

……毎度の事ながら自分の悪運は強いなあと少年は思った。

聞き覚えのある声が目の前のアンデッドの頭蓋骨を吹き飛ばす。

それからたてつけに光の弾丸がシャワーの様に掃射。周囲にいたモンスターを次々と光の粒子が弾丸となって吹き飛ばして行く。

アンデットは闇属性…… 反対属性である光とは相反し、打ち消し合う関係にある。

この場合勝つのはより属性として強い方が勝つ。低級の闇しか内包しないアンデット達はこの洗礼の前に成す術もなく常会されていく。

「大丈夫ですか！？」

「セドナか！？ 助かった！！」

セドナは光属性の魔法使い。それかなり高い位に位置すると聞く。

アンデットを中心に構成されたモンスター相手ならばとても心強い戦力になる。

「無事か？」

続いてショートマントを靡かせながらクリスが着地し、黒光りするトマホークを構える。

此方も豪華な装飾と宝玉が付けられており、刃は真っ黒だが目に優しくない色になっている今の空でも不気味な光を放っていた。

何処に手に入れたかは分らないが素人目から見ても中々の業物である事が伺える。クリス・サバイブはそれを両手に持って果敢にモンスターへ斬りかかる。

その光景にビュウはもしかすると強力な魔道具を持ったカードか何かで身体能力でも強化しているんじゃないかと言う予測が頭を過ぎった。

「……前々から思いましたけど見掛けによらずアグレッシブなんですな」

「まあな！！」

そう言ってトマホークで一閃。

例に盛らず中々切れ味が鋭い。ビュンと言う大気すら綺麗に切り裂いている音だけが聞え次々とけ散らして行く。

ビュウも以前よりかは鍛えられているがそれでも遠く及ばないだろう。

本当にこの人の選考は博士学科（要するに小難しくて頭の痛くないそんな学問を専門的に学ぶ課B y ビュウ）なのだろうか？

戦闘の最中ながらもに気になるところだ。

「この程度なら楽勝だけど校舎守りながらになるとキツイね」

と言いつつユウは無詠唱で自分の体の影から鞭を作り出し次々と敵を薙ぎ払っていく。闇の魔法使いらしい攻撃方法だ。

だが時折殴り飛ばしたり、蹴り飛ばしたりするのは魔法使いらしくない。

そもそもユウは変身形態抜きでも弱肉強食の世界だったデモンズパライスの闘技場にてチャンピオンになった経歴を持つ。並大抵のモンスター軍団や冒険者の集団程度なら話にならない。

しかし今回は校舎の防衛と仲間の援護と言う難題があるがマグネードの時と違い味方である生徒が頼りになるのでとても楽だった。

「倒しても倒してもキリが無い状態だな」

「そうね!!」

炎を絨毯を広げるように噴射させて一気に広範囲を焼払う。

高温の炎に包まれたアンデット達はそれでも動こうとしたが、やがて力尽きるようにその場へ崩れ落ちた。

「と、飛ばしすぎですティスさん!! 何時もと違うんですよ!？」

セドナの忠告が飛ぶ。

確かに今迄と違い敵の戦力が多い。

これまでの災難の中でも最悪……自警団や風紀委員、だけでなく教師陣も動いているのにここまでモンスターが現れているのである。

「確かにこのまま戦い続ければ倒れるのは我々だな」

幸いティスが数を減らしてくれているが魔力は無限ではない。学校の授業で習ったが魔法使いの戦いが魔力に依存するため、どうしても長期戦に弱くなると言う弱点を持つ。

敵の戦力はどれだけいるかは分らないがこの学園都市を制圧できる程の戦力と考えた場合、このまま戦いが続けばやがて力尽きるのは此方だ。

「おいおい……また来たぞ!!」

再び敵の部隊が出現。しかも数がさつきよりも多い。

「あ、あれだけの数を相手するんですか？」

「籠城戦に持ち込んでもアレは耐えられんな……」

「じゃあ私が全部纏めて吹っ飛ばすわ!!」

ティスはヤル気だった。

『待たせたなこつちも準備完了だ!!』

校舎の方からゴーレムや武装した生徒がやって来る。

皆戦闘体制だ。

中には近くの運動場から掛け付けて来たのかスポーツ用の騎士甲冑を纏った生徒までいる。また一見暗い雰囲気を漂わせた見るからに怪しげな一団も現れていた。(間違えて攻撃してしまいそうだ)

兎に角援軍は援軍だ。

助けてくれるのならば選り好みしている場合では無いと思いなおす。

「おお来た来た!!」

「普通逃げるだろ……」

「文系でも部費を稼ぐ為にギルドへ参加している奴も多いからな。下手な生徒より頼れるぞ」

「遅しいな……」

どんな感想を持てばいいか一瞬分らなくなったビュウであった。

「そう言えば空が暗く無いか？」

「言われて見れば……」

ふと視線を上にとると……

「闇の魔力を腕に集中させて……一気に増大!!」

「「「「「ユウ!」「」「」」」」

そこにいたのはユウ。

両腕から莫大なエネルギーの闇魔法を両腕に纏い、巨大な腕を形成。

並大抵の城門を力任せにぶち破れそうな程の大きさになる。

「そして一気に叩き付ける!!」

変身形態にならないと他の属性は使えないがそれでも優の魔力は莫大なレベルだ。多少の無茶は利く。

両腕を巨大な闇の魔力の塊である腕に変え、両手を握りそのままハンマーの様に空中から振り落とす。

それを見た生徒達はド肝を抜かれた。

「あんなデカイ腕を振り落すつもりか!？」

「うっそ!! 凄いじゃないユウ!!」

「早く下がるぞ」

「は、はい！！ 皆も早く！！」

悲鳴が上がりながら皆退避を始めた。

「巨人の鉄槌！！」

巨獣の様な唸りとともに振り落されたソレは地面もろともモンスターを砕き、風圧と大地震の様な地響きと共に幾多のモンスターを吹き飛ばす。

硬い大地は抉れて散弾となり、次々と破片がモンスター達に襲い掛かる。

攻撃は終わった後には辺りに土煙が充満した。

「ウガアアアアア……」

「オオオオオ……」

しかし流石はモンスター！。

生命力は人間の比ではない。

体が半分になっても、下半身と泣き別れしようとも向かって来る。そして背後から新たにモンスターが追加投入され再び規模は大軍となる。

普通の人間であるならば絶望すら覚えそうな状況だが……

「魔法剣二刀流……」

両手に魔法の剣を形成。

片手剣で刀身は細長い。さながら十字架の上部分が極端に長い様な感じだ。

それを魔力で両手に作り出す。実剣なら耐久力に不安があるが、『ホースの口を閉じたら勢いは強くなる理論』の元に魔力の密度を

極端に圧縮させ、また刃も出来る限り斬れ味を追求した形にしている。

その斬れ味はさながら異世界版ビームサーベルと言った所だろうか。

（自分がやらかしたとは言え……皆が体制を立て直すまで時間を稼がないと）

一人で戦って来た強者としての経験がここで裏目に出た事を自覚した。

あんな派手な技を使わずともティスの様な広範囲魔法殲滅魔法を放てば良かったのだ。

だが自分はある土煙や地響きと派手な魔法を使って一気に叩き潰す事を考えてしまったのだ。

理想では自分が放った攻撃の後、皆の一斉攻撃で一気に殲滅する筈だった。

これは明らかにミスだ。

（……悔やんでも仕方が無い）

そう思い立ち、ユウは魔法剣を構えた。

『アレがブレイヴイーター（*勇者喰いと言う意味。ユウがデモンズパラダイスの闘技場にいた頃のリングネームでもある）か』

各地の至る所で激戦が繰り広げられているが、この人物はユウの姿をじっと赤い目を光らせながら捉えていた。

ユウの戦い振りを遠くから眺める人物が一人。体全身を漆黒の口

ーブを纏っており全体像は把握できないがローブの奥底で不気味に光る赤い単眼の様な物が見え隠れしている。

そんな不気味なさを醸し出す怪人物が手短な高い建造物の屋上から周囲一体の風景を見渡せる場所に陣取っている。ユウの姿はここから数キロ程離れているが問題なくその姿を追っていた。

『ふん！！』

背後から襲い掛かって来たモンスターをクリーパーで一刀両断。

目もくれずにじつと視線をユウへ留める。

まるで面白い劇を目の前にした子供の様にこの怪人物はユウの戦いに熱中していた。

『荒々しい太刀筋かと思えば存外美しい剣を振るうでは無いか』

見る物を魅了する一つの完成された剣がそこにあった。

漆黒の魔法剣を円を描く様に振り回し、体もそれに合わせて舞うように動かしている。

無駄が無くとても洗練されている。

両手に形成された闇の魔法剣が粒子を撒き散らし、より剣舞にアクセントを加えていた。

『丁度いい』

このクリーパーで戦いを挑みたくなくて来た。

見ている内にそんな衝動に駆られてくる。

彼なら死から遠く離れた自分に熱く燃え滾る戦いの炎を満たしてくれるかもしれない。

この魔力殺しの装甲で覆われた仮面、鎧。

暗黒大陸とウリエール大陸の技術を組み合わせ、白の貴公子が持

つもてる技術を投入して誕生した自分に

「そんなに戦いたいかね？」

卵状のボディに魔導師のローブ。

この学園の学園長と同じくシルクハット。

両目が のマーク。

片手には大きなペロペロキャンディを握っており、それを定期的に大きな舌で舐めている。

生物学的に何なのか分らない生物がそこにいた。

『参謀殿がどうしてここに……』

「計画の発動待ちになったのでねえ、暇だから様子を見に来たんだよ」

とおちゃらけた調子で語りかける。

『ふん。止めに来たのなら最初からそう言え』

道化を気取っているがこの不思議生命体は策略家である。

態々様子を見に来たと言うより何かしらの事情で止めに来たのは明白だ。

「はははは……デモンズパラダイスが陥落して組織力は大幅に削がれちゃったからねえ、白の貴公子がいなくなったのはとても残念に思うよ」

確かにあれは計算外だった。

あの冷徹を地で行く白の貴公子がしくじるとは本気で思わず耳を疑ったが事実である。

今尚行方不明だが間違い無く消されているだろう。奴隷の制御を
違えた主の末路は例え女であつても悲惨な物であるのは容易に想像
できる。

「まあ早い話、君とあの子が激突した場合どちらかが必ず死ぬだろ
うね。だから態々あの子を狙わずに他の勇者を狙つて欲しいって言
うのが僕の本音かな」

『ふん。ハッキリと言つてくれる』

「それにね？ もうそろそろ世界の命運を賭けた戦争が始まるん
だ。それをベッドの上で寝て過ごすのは嫌でしょ？」

暫くの沈黙が流れ、返答は……

『……いいだろう。だが時がくれば戦わせて貰うぞ？』

この時、第三勢力である彼達は陣営は介入せず立ち去って行く。
自分達が目指す真の目的を果すために

ユウが生徒陣営の体制を立て直す事に成功すると、呆気なく勝負
はつく。

高火力魔法の一斉者から突撃と言う理想的かつ堅実な流れの後
は早かった。

この辺りは流石魔法学園と言つべきだろう。

「どうにか防げたわね……」

「だけどまた敵が来たら防げるんでしょうか？」

少女二人は汗を拭い一息つく。

セドナだけでなくティスも流石に応えた様子である。

他の生徒も馴れない修羅場を潜り抜けたせいか皆予想以上に疲弊している者が数多くいた。

「それも心配だけどこの結界をどうにかしないと……たぶんこれ魔力を吸い取るための物だよ」

「分るのかユウ？」

前々から疑問に思っていたがユウは分析……特に魔法関係になると凄まじい。魔力の保有量や魔道具を動かす際の魔力量をピタリと当ててみせるほどに。

だからビュウはすんなりと信じられた。

「うん。だけど大掛かりな結界は少しでも構造に不具合が生じると一気に効果が弱まるからそこを突けば……」

「それ本当なの！？」

目を子供の様にキラキラ輝かせたティスが話に食いついた。

「巨大な結界を作っている程度の時間維持する事は可能だけど魔力吸収効果も付けて発動してなると色々と無理が出るんだよ」

「はあはあ……え」と冒険同好会の皆様ですね」

と、グルグルメガネを付けたヒョロ高い男がやって来た。

いっちょ前に白衣までつけている。服装からして生徒なのだろうが。

先程まで一緒に一暴れしていたのか立派な白衣もシワクチャになり体から汗を流してしんどそうにしていた。

呼吸も荒いせいかその外見と相俟って薄気味悪さが漂っている。

「私は博士学科で創作魔法研究部を立ち上げている物です」

と、自己紹介した。

「で、何の様なかしら？」

「この件がファウマージの一派でしょう？」

「まあこれだけ派手な規模でやってるんなら信じざるおえないわね」

状況証拠は揃っている。

まず間違いない。

「脅迫文の内容って確か王女の命でしょ？」

「だが他の者には手を出さないとは一行も描いていない。アンデットモンスターの連続出現騒ぎがソレだ」

まるで詐欺だ。それにしてやられ、こうして巻き込まれた以上は

「だけどうして？ 狙ったのかしら？」

「さっき報道部の方から情報が来たのですが……」

そこで話されたのはこの事件の首謀者がファウマージであること。

この結果は（推測だが）外部の遮断と魔力吸収能力があること。

だが魔力吸収能力発動までに時間が掛かること。

この三点だった。

「よくそんな情報掴めたわね」

「報道部には緊急時の際に連絡用の魔道具も置いてありますがそこら辺の話は後で幾らでも……ここからが本題ですがある問題点があるのです」

「問題点ですって？」

「この莫大な結界を維持し、また魔力吸収するために必要とされる魔力です」

「だけどこの魔力吸収結界で充分元は取れるんじゃないの？」

「いや、それは無いだろう」

ここでクリスが説明を轢き継ぐ。

「私も博士学科の人間だ。結界を精製、維持するのに必要な魔力の量はある程度分るつもりだ。正直効率が悪すぎる」

続け様にクリスは解説を引き継ぎ、答えを出した。

「あなたの言う通りです。仮に王女、勇者が持つ莫大な魔力を使用したとしてもではありませんが学園都市全体の結界を維持するのは不可能です。しかもこれは『発動するだけの話』です。『維持する』となれば更に魔力消費が激しい物となります。しかもこの規模となれば王女を狙った方がまだ効率的なのです」

「だから例えこの学園都市にいる生徒全員の魔力を得たとしても採算が取れるかどうかは微妙なラインだ」

「早い話、元を取るならまだ王女なり勇者の魔力でも狙った方が効率的なんだよ」

とユウが話を纏める。自分の変わりに説明してくれて有り難かった。

「もしかしてファウマージって馬鹿なの？」

「いや、ファウマージはかなり狡猾な魔王として知られている。計画段階でこの程度の問題点を無視する筈が無い」

顎に手を当てて考え込む。駆けつけた皆もアレコレと議論を始め

た。

「だけど一つだけ手段があるんですよ」

だがここで研究部の男が再び話に割って入る。

「あのゴーレムの様に予め術式を組み込んだ魔力動力を持つ魔道具を使い、更に陣を敷き合体魔法で起こる相乗効果を考えれば」

「まさか……陣形魔法を魔道具で行ったって言うの!？」

陣形魔法。

合体魔法の中でも高等な部類に入る魔法であるが発動条件の厳しさもあり、とても実戦向きでは無い為に儀式魔法とも呼ばれていた。

この陣形魔法の最大の特徴は相乗効果と呼ばれる物を従来の合体魔法よりも爆発的に効果を挙げることができるのだ。だがその難しさゆえに使い所が限られているとされる。

ティス是一件馬鹿っぽいが成績は優秀な部類だ。すぐにその可能性へと辿り着いた。

「魔道具を使った陣形魔法……成る程、確かにその方法なら可能かもしれない」

「だがこれだけの規模を発生させるにしても魔道具なら複数……それも広範囲に渡離れ離れに配置されているのでは無いのでしょうか？ 後は人目につかないところか、モンスターの防御が厚く、また装置を隠せるスペースにあるのでは？」

不可解な部分があるが確かにその線なら可能だ。

「この事は教師陣や風紀委員達は気付いているのか？」

「じゃあ私が報道部の人に伝えて来ますね」

女子生徒の一人がそう言って校舎へ戻って行く。

「急いだ方がいいよ。たぶんタイムリミットは後一時間ぐらいだと思う」

「時間があるのかどうか分らないわね」

「少ないですよ……その……学園都市はとても広いですし……」

セドナの言う通り学園都市は広い。ハデイス形態のユウでも一人で全部探し出して破壊するのは至難の技である。

魔力探知は既にやったが上空の結界から滲み出る魔力が上手い具合に妨害しているせいで精確な位置が掴め無いのだ。

（どうにかして発見方法があればいいんだけど……）

内心焦りを覚えていたその時だった。

『もしかしてその魔道具ってこれじゃ無いのか？』

騎士を模した外見の搭乗型ゴーレムが大型の車輪籠を引っ張り出して来る。

ゴーレムは全高6m程度程度で横幅も広くは無い作りだ。それに対して車輪籠は大型の貨物もそれ程もある。

恐らく大型のモンスターか、あるいは複数の馬で運び込まれたのだろうと思われた。

「何この馬車？ 一見古臭いけど魔力が込められているわね。しかも強化形オンリー」

『さっきの戦闘で偶然みつけたんだ』

慌てて周囲の生徒も馬車へと群がる。

「これがそうなの？」

場所の後部を覗き込むとそこには禍々しい装飾が施された台座の上に釜戸を組み込んだ大型の魔道具があった。

「周囲からは魔力の探知が阻害されている様になっている……しかも発動を阻害せずにだ……こんな大規模な結界にも関わらず位置が特定できない訳だ」

この車輪籠に其処までの工夫を詰め込むとは……ファウマージも中々に頭が回る奴である。五十年前の亡霊とは思えない程に。

だが逆にこれで探知の仕方が分ったからよしとしよう。ポツカリと魔力の反応が空いている場所を探し当てればいいのだから。

それに陣形魔法の弱点は術式やその位置が物を言う。建造物の建築と同じだ。それを崩されたら一気に効果は弱まる。

そう一人ユウは納得していた。

「よくこんな大きい馬車を誰も怪しまずに運び込めたわね」

「商人が馬車に魔力を込めて強化するのは当然の事だからな。それにここは学園都市だ。学生目当てに商売しようと思えるのは多い」

「だけど厳戒態勢だったんだぜ？ 自警団や風紀委員は何やってたんだよ？」

「学園内にモンスターを転移させて送り込むような奴だ。手段は幾らでも考えられる。今はそれよりもこれを破壊する事が先決だ」

と、強引に話を打ち切った。

「報道部の魔道具を使って誰か報せに言ってくれないか？ 次にと

「うするかだが……先程の敵襲から察するに校舎も安全とは言えないな。……下手に動かず、ここで立て籠もった方が懸命だろう」

「だけど校舎の方には教師の人がいるから……」

「それに生徒も大勢居るし、ここよりかは防備もしっかりしてるし安全だと思う」

クリスの提案に異論が出たが冷静に返した。

「道中敵の部隊と遭遇するかも知れんのだぞ？ それに敵の戦力は未知数だ。一緒に行くとしてもこれだけの人数……必ずモンスター」の標的にされる」

「けど……」

「念の為釘を差しておくがこの状況下では何処も安全地帯は無い。何故なら我々は閉じ込められ、退路が断たれた状態に陥らず相手は無尽蔵に戦力を送り込んで来る。もう籠城戦と言うより城内戦と言っているだろう」

有無を言わず一氣に自分の理論で捲くし立てる。

「ちなみに城内戦では単純に戦力が多い方が勝つと言う事だ」

「じゃあどうすればいいんだよ!？」

「皆で力を合わせてこの状況を打破するしかあるまい。この建物を拠点に周囲を探索する……最悪の場合は校舎か風紀委員の本部へ避難するんだ」

不安がる生徒に向けてプランを提示した。

ザワメキが広がる。

「しかし顧問の教師とかはどうしていいのかしら？ 確かに」

「たぶん噴水広場の方へ向ったんだろう。噴水広場のモンスターは

我々の眼を逸らす陽動だ。また広範囲に戦力を分散させ、此方も戦力を分散させる終えない状況を作り出し、その隙に目的を達成させて学園都市を占拠する……考えられた戦略だ」

メガネをクイツと上げてそう評価した。

「取りあえずこの結界をぶっ壊して回りましょ？」

「やっぱそうなるのか……」

トントン拍子に話が進んでいく中ユウはある不安を感じていた。

（敵はどう出る？ もし自分なら全力で妨害するか、もしくは……）

ぶち壊される魔道具を目に焼き付けながら優はある種の不安を感じていた。

『むっ仕掛けに気付いた者が現れたか……』

魔道具一つ破壊されてしまった。一つや二つ程度で結界が弱まる程軟弱には出来ていないが黙って傍観するべきでは無いだろう。

『仕方あるまい。多少発動は遅れるが自衛手段を使うか』

もう種が明かされた以上は隠す必要もない。

発見され次第、魔道具その者を迎撃に参加させる必要がある。

『さて……お前達にも働いて貰うのでしょうか』

背後には騎士甲冑を身に付けたおよそ百人近くの騎士がいた。

共通する要素は顔が分らず、体のところ所を包帯を巻き、手にはそれぞれ違った獲物を持っているところ。トマホーク、大剣、メイス、ハンマー、モーニングスター、クラブ、弓矢 e t c …… 現存する武器が全て揃っているかのようであった。それらを携えた騎士達 はみな熟練の実力者が持ちえる気迫を滲ませていた。

『出番だゴーストナイツ………』

ファウマージは切り札の投入を決めた。

対勇者戦力であり、またあの白いイレギュラーの為に温存していたのだがやむ終えまい。

数に限りがあり補充が利かないのが難点だがこのまま放置すれば計画失敗の恐れも出て来る。

時間との戦いになった以上今投入すべきだと考えた。

『クツクツクツ………され、我も動くのでしょうか………』

戦いは一気に佳境へと動き出す

第二話 E N D

第二話「出陣」（後書き）

*これ書いている時徹夜してるので出来るなら暖かい目で見守ってね（汗）

どうも〜ピクシヴで遂に投稿枚数が200枚突破しました・

それと何時の間にかこの小説7万アクセス突破している事に驚きました〜Rです。

いや〜10万アクセス到達したらどうしようかな？

今度はシリーズ物じゃなくて読者リクエストの短編とかにしたいな〜と思ってます。

何か案があったら感想欄までよろしくね〜。

〓 本分 〓

今回も色々と実験的要素を放り込んで見ました。

冒頭の新キャラは「ちゃんとこう言う人達もいるんだぞ」と言う紹介みたいなものです。

風紀委員と言う名称はワンピースの海軍やアクワイアの剣と魔法と学園物3。などの影響です。

一応生徒会なども存在しますが本シリーズ中では話の都合上、チラッと出るか、出ないになると思います。

〓 キャラクターについて 〓

魔法学園編はとにかくとある魔術シリーズと被らないように気を使っています。

次回シリーズでもお世話になる予定ですから尚更です。
後悔している点があるとすればちょっと強くし過ぎたかな～と思う点ですかね？

〓 今後の展開に着いて〓

ファウマージとの決着がついたら遥訳魔法学園編本編へ突入予定です。

今迄のシリーズと一変して明るい雰囲気が出始めている本作ですが(デモンズパラダイスはやり過ぎたと言っより展開的に飛ばし過ぎたかも知れ無いなあ……)なるべくシリアスやハードな要素も入れたいと考えています。

〓 イラスト活動〓

200枚記念はヒーローフォースのノーベルフェアリー(今は改名してリズムックフェアリー)を描きましたが今はユディとティスのサンタコスチューム描いてます。

一度PCに取り込んだけど途中でまた下書きからやり直して再びPCでの作業になっています。

完成次第本作中でUP予定です。

〓 最後に……〓

次回も出来るだけ来週の土曜日深夜までにお届けできたらいいな～と思っています。(だけど次回分まだあんまり出来て無いんだけど大丈夫かな……(汗))

それでは皆さん次回までごきげんよう。

ご意見ご感想お待ちしております。

クリスマスイラスト

どうもクリスマスは楽しめましたか？

私は何故か修羅場みたいな感じでした。

さて……今回は突然ですがクリスマスプレゼントがてらイラストを掲載したいと思います。

> i 1 5 6 1 8 — 2 4 2 <

第二章から登場したユディ。

五万ヒット記念から登場したティス・アドベンチャーの両名。

ユディは胸。

ティスは尻を意識して描きました。

胸はけっこう描いてるんだけど尻はあんまり描いた事がなくて苦労しました……って何の話をしてるんだ俺は（汗）

〓 オマケ 〓

> i 1 5 7 5 8 — 2 4 2 <

PIXIVや小説家になろうのヒーローフォースに登場した森口沙耶。

優しき勇者・悲しみの冥王本編にゲスト出演するかどうかなどは未だ不明。

クリスマスイラスト（後書き）

実はと言うとクリスマスイラストに力入れたのと最新話が予想以上に難航していて明日へ纏れ込んでしまう可能性が出ております（汗）

ご意見ご感想お待ちしております。

第三話「解き放たれた切り札」(前書き)

すいません。

今回は第一シリーズ、第二シリーズ中の一話ぐらいの分量です。
延長までしといてこれかよって言う意見もあります。

第三話「解き放たれた切り札」

優しき勇者・悲しみの冥王

五万ヒット記念「亡者は黙って地獄に堕ちろ!!」

第三話「解き放たれた切り札」

「学園都市頭部・図書館周辺区域」

大きな屋敷の様な建造物。

周りには木々が植えられ、芝生の上に絨毯を敷くように赤いレンガの道が敷き詰められている。

普段なら多くの学生から教師まで利用している場所なのだが……辺り一体氷付けになっていた。

「ふう……どうにかなったわね」

『野性のゴーレム』を氷付けにして砕いた後、ついでに魔道具を破壊する。

氷河地帯に生息するゴーレムなので氷に抵抗があり、手間取ったがどうにか勝利できた。

相手を全て凍らせようとせず、氷塊を作って叩きつけたり、足首を拘束するように固めて凍らせたり、地面に氷付けにして不安定にさせたり。

氷使いとしてフルに頭脳を働かせた戦いだった。

先程までと違い多少疲労を感じるがまだ戦闘続行は可能。

『こちら風紀委員、紅の騎士団。それらしき馬車を発見したが現在一つ目の亜人種と思われるモンスターと交戦中！！ 形成は有利だが破壊に時間が掛かる模様！！』

『こちら自警団！！ 馬車を確認した！！ 我々では手に終えない！！ できれば教師陣の派遣か援軍を求める！！』

腕輪の通信魔道具から声が混じる。

どうやら苦戦している所は此処だけでは無いらしい。

「あの報道部から報告があつてから急に強力なモンスターが出始めたわね…… しかも魔道具周辺……」

アドバース通り魔力が不自然に感じられない場所を探せと言われたらピンポイントで見つけられた。

高濃度の魔力が充満している時にまるで大きな穴が開いてるようにポツカリと開いている場所。そこに足を向けたら例の馬車があった。

だが驚くべき事に近付いた途端突然ゴーレムが現れ始めたのだ。

「だけどあのモンスター魔道具で精製されたとすれば……その消費分時間が掛かるんじゃない」

「時間を掛るけどガードを置いてその穴を埋めると、無防備のまま黙って壊されるのなら私は前者を選ぶけど対応が素早いわね」

そうアイスは評価を下した。

「そう言えば他の四天王はどうしてるんですか？」

「そうですよ。先輩以外の四天王が動いてくれれば楽になるのに……」

口々に風紀委員の生徒から四天王と言う言葉が出る。

「四天王って言うけど何時の間にかそう呼ばれてただけで、他のメンツと全く面識無いわよ……」

風紀委員やギルドなどで活躍している内に何時の間にか自分は氷の女帝と言う二つ名と四天王の一角と呼ばれるまでに至った。

四天王と言うのは学生が勝手に呼ぶ物であり具体的な決め方さえも曖昧である。アイスは基本何をやらかしたかで決まる実績主義で決まる物だと考えていた。

一体何処の誰がそう言うシステムを作ったのか疑問に思う時さえある。

大体四天王だからと言って定期的に会合でも開いたりはない。

「確かティス、アイス、ロック、ハーケン……でその四人すら凌駕するのが最強のメデュウだったかしら？」

だが生徒の噂になるぐらいだから有名人である。風紀委員と言う肩書き上嫌が上でも耳が入る。

中でもメデュウの知名度と実力は頭一つ飛び抜けている。アイスでさえもこの学園都市で学ぶ事など無いのではと思う時さえあった。それぐらい実力が隔絶している。

何より奴は性格がヤバイ。そのヤバさは一時期危うく国際問題に発展しかけた事もある程だ。

アレに比べればまだティスなど可愛いもんである。

「まあこの状況下ならたぶん必死こいて働いてくれてるわよ」

特にティスは間違い無くこの事態の中心部を目指して爆走してくれているだろう。

仕事柄よく顔を合わせるが大体学園内で起きる騒動の中心には彼女の影がある。

あの少女はほっといても何だか生きている気がした。死んだと言われても冗談としか思えない。

「ともかくここにいる教師陣で避難している生徒がいればどうにか現状は維持できると思うから……皆、他の場所に向うわよ」

図書館には避難したした生徒や職員がいる。

一応戦う術ぐらいはあるだろう。

魔法学園に居る生徒は皆下手な一般人よりは強い。余程油断しているか強いモンスターにでも襲撃を食らわない限り大丈夫だ。

一時間後にはどうなるかは分らない今の現状では自分の身が守れるんなら自分の身で守った方がいいだろう。

『そうはいかん』

重低音の声と底冷えする殺気が上から聞える。

「誰？」

視線を図書館の屋根に目をやるとそこに二人の騎士がいた。

一瞬紅の騎士団かと思ったが違うようだ。

紅の騎士団とは早い話学生による騎士ゴッコ。装備は一流、腕は二流、人は三流と言う感じ。

全身を赤い全身鎧で覆っている分隊規模（十人）の連中である。先程通信用魔道具で様子が垣間見れたが苦戦しているようだ。

だがこいつらは明らかに違う。

少なくとも鎧の至る所に傷があったり包帯を巻いたり、水色のカラーをしている……何より人目見て恐怖を感じる連中ではない。

『我が主、ファウマージに仕える騎士団ゴーストナイツ』

『色々と不本意だがこうして戦いの場を与えてくれたのを感謝せねばなるまい』

体全身を覆う鎧に大量の包帯を巻きつけた赤と青の騎士がそれぞれ槍を向けた。

芝居掛っているがとても自然体で言い放っている。

この口上の時に攻撃を仕掛ける事も出来たが……出来なかった。

「下がって……こいつ達、只者じゃないわ……」

伊達に何度も修羅場は潜ってはいない。

威圧感ぐらいは分る。

それに相手の実力も。

『ファイアーランス!!』

『ブリザードランス!!』

先手はあちら。早い。

空中へ左右に別れるように飛び上がり、火と氷の魔法を放つ。

しかも相手が放った魔法の速度が速い。咄嗟にアイスは氷の障壁を展開する。

「そんなっ!?!」

だが結脆くも崩れ去った。

一瞬にして氷の障壁は無くなってしまう。

そのまま数メートル程吹き飛ばされた。

危つく木へ激突する所だったが背中から冷気をジェット噴射の様

に噴出。

背後にあつた木を凍らて姿勢を整える。

「一撃で碎かれるなんて……いや、今のは反対属性による反発を利用した合体魔法？」

『その通りだ』

『我々』

合体魔法は幾つか種類はある。

単純なのは同じ属性を組み合わせたリ、相性の良い属性同士を組み合わせたリする方法。

この方が一番効果的で簡単、何より実践向けだ。態々複雑で成功率が低い方法をやるのは死を招く。しかし相手はそれをいとも簡単にやってのけた。

『氷だから冷たいと言う認識は間違いだ』

『氷でも炎で解けない程の質量が伴えば熱い氷を作り出す事は可能なのだよ』

アイスは一瞬理解出来なかったがこれは事実だ。

広い宇宙に広がる惑星の中に百度以上の高熱を帯びた氷があるように炎天下に晒されても凍りはより巨大であれば解けにくいのだ。

それこそ南極から遠く離れた国へ船の様に動かす事で運ぶのが可能なほどに。

「成る程ね。いい論文が出来そうだわ……だけど私も負けられないのよ……皆……」

「は、はい……」

「りよ、了解……」

アイスの回りを白い制服を見に包んだ風紀委員達が固める。
リーダーの人望が成せる技か、それとも規律がしっかりしているのかすぐに陣形を整えた。

『一人で敵わぬと見て複数人で挑むか』
「今は一刻も時間が争う状況なの！！ 手段は選んでられないわ！
！」

早期決着を優先し、二対一の戦いから瞬時に組織戦へと切り替える。

試合ならともかくこれは学園全土を巻き込んだ戦争なのだ。正々堂々と言う訳にはいかない。卑怯と言われても学校は守るつもりだった。

（早く決着付けて次の所へ向いたいんだけど……）

悔しく思いつつもアイスは指示を飛ばした。

Ⅱ 学園都市北西部・スポーツ様多目的運動場Ⅱ

主に学園都市の運動部が使用する施設で授業でも使われる場所である。

芝生が生い茂り、中央には四角い長方形の箱の様にラインが敷かれ、そのラインの内側はどうやったのか綺麗に平らで舗装されていた。

地球の感覚で例えるならば運動場と言うよりちよつとした試合会場みたいだ。

だが今はそこもまたバトルフィールドと化している。

「炎の鉄拳！！」

大きな炎の塊を作り、それで殴りつける様に出現した大型昆虫モンスターにぶち込む。

ティスの実力の高さか、それとも相性が良かったのか呆気なく勝負はついた。（まあユウも居る事を考えればどの道似た様な結末にはなっただろう）

「ムシも焼却じゃああああああああああああ！！」

「これで3つ！！ 大分薄まって来た！！」

元々陣形魔法はデリケートだ。

一つ崩されただけでも効果は大幅に薄まる。

この分で行くと大幅に効果を減退できるだろう。

（だけど……もう既に失敗したと言うのに何故まだ抵抗を続ける？）

紫味掛っていた空も大分戻りつつある。効果が薄れている証拠だ。正直一つ目を破壊された時点で計画は頓挫と言っても良いのに敵は未だ抵抗を続ける。

何故だ？

もしかするとこの魔道具にはまだ何か理由があるのかも知れ無いがそれを調べている余裕は無かった。

『ど、どうも風紀委員のソプラです。北西部エリアはそれで最後だと思われます。現在報道部や風紀委員は目撃報告を募っております。確認されている数は最低でも三十台以上……』

「よくもまあそんな数を素通りさせた者ね」

風紀委員の本部から借りて来た通信魔道具で担当に愚痴を漏らす。

『これは推測ですが催眠系の魔法を使用したのでは無いかと思われます。それで警備団の方も侵入を許したのでは無いかと』

「警備体制見直した方がいいわよ」

『この事件が解決すればどうにかなるでしょう』

苦笑交じりに担当は返した。

「急いだ方がいい。敵が指を加えて阻止されるのを待っているとは思えん」

「教師陣も学園の防衛で一杯みたいだしね……自由に動けるのは生徒ぐらいだよ」

それにしてもマグネードの時とは段違いに頼もしく感じるなあとユウは疑問に思っていた。

まあ実際想定外の事態でパニックになったのもあったんだろう。

『と言うか皆さんこんな事して大丈夫なんですか？ 後で絶対大目玉を食らうと思うんですけど……』

「ようは手柄を立てりゃいいのよ……!」

『いやそうじゃなくて……』

「勝てば正義!! 負ければ負け犬!! 世の中そんなもんよ!!」
(相変わらず凄い倫理だ……)

頼もしく聞えるが言ってる事はまるで出世欲を漲らせた将校みたいな物言いだ。

『こちら風紀委員、紅の騎士団。それらしき馬車を発見したが現在一つ目の亜人種と思われるモンスターと交戦中!! 形成は有利だ

が破壊に時間が掛かる模様！！」

『こちら自警団！！ 馬車を確認した！！ 我々では手に終えない！！ 教師陣の派遣を求める！！』

ここで通信用魔道具を通して他の状況が伝わる。

「状況は優勢とはいい難いわね」

「対応力が早い……」

どうやら作戦を切り替えたらしい。

（実力行使による制圧に切り替えた？ だけどそれを行えば制圧は不可能だ…… できても一週間も持たないだろう）

かなりの大部隊を送り込んでいるがこの学園都市全域を制圧するのには戦力不足だ。

それに此方も援軍が駆けつけて来る。

（後は時間の問題だけ……）

学園の各所でかなりの実力者が現れている事を感じ取ったが（結界が薄まるに連れて段々と周辺の把握が鮮明に出来る様になった）一番激しいのは中央広場。次に激しいのは校舎、自警団の施設周辺。各地に小規模な戦闘が頻発しており小局面が乱立している紛争地帯みたいな状況だ。

「そう言えばどうして敵は直接校舎とかにモンスターを転移させたりしないのかしら？」

「大方それも魔道具を利用してるんだろう」

「何でもかんでも魔道具って考えが単純過ぎないか？」

強引過ぎるにも程がある気がする。

まあこの少女の場合今に始まった事ではないが。

「一応説明しておくか…… 転移魔法はかなり欠点があつてな。成功させるには転移先への使用者のイメージがとても重要になるのだ」
「つまり一度行った場所じゃないと無理だつてことか？」

「暴論だがその通りだ。だが口で言う程簡単では無い。部隊を何処から送り込んでいるか分らんがこれだけの部隊を一斉投入するのは従来の方法では不可能だ」

「よくそんなこと言い切れるな？」

皆の気持ちを代弁するかのようにビュウが疑問を口にする。

「転移魔法は高度な魔法だからな。この学園都市でもいるにはいるが使えるのは教師陣含めて二桁もおらん。王宮に仕える人間を探してもどれだけのいる事やら……」

「だけど魔王なら可能じゃないのか？」

「魔王に使えるのならばとつくの昔にウリエール大陸は滅亡している。勇者と言っても所詮どう足掻いても一戦力だ。俺が魔王なら勇者を狙わず他の重要目標へ戦力を回すさ」

と、メガネをクイツと指で挙げて決めてみせる。

「お前博士学科よりも仕官学科とかの方が良かったんじゃないのか？」

「僕もそう思うよ」

ふとビュウは空に目をやった。

「空も騒がしいな……」

「自警団の飛行部隊と敵の飛行型モンスターとの空中戦だな」

「ああ。派手なもんだな……こんな状況じゃなきゃ大人しく観戦したかったぜ」

男二人は派手な空戦に目をやる。

それに釣られてユウやティスも目を向けた。

「そうだ！！ 私達も乗り物に乗って回ればいいのよ！！」

「いや、それは名案だが何に乗るつもりだ？」

皆は何だかとても嫌な予感がした。

第三話END

第三話「解き放たれた切り札」（後書き）

〓 謝罪会見 〓

早い話、クリスマスイラストの制作に力を入れ過ぎたのが原因です。

特に一枚目の方はPCでの作業から途中で書き直しました。

そして二枚目の方が決定打でして……無計画に作業を進めた結果
+ 作者のサボり癖（自分の場合は鬱とも言っ……回りの作品と比べて自分のは〜と思うと特になり易い）などが発症してしまい、本編進行に支障が出る形となりました。

本当すみマセンでした。

次回はスケジュールの帳尻合わせも兼ねて今週末に予定しております。

ご意見・ご感想お待ちしております。

第四話「終曲開幕」

優しき勇者・悲しみの冥王

五万ヒット記念「亡者は黙って地獄に堕ちろ!!」

第四話「終曲開幕」

〃中央噴水広場〃

最も激戦区とされるここ中央噴水広場。

あるゴーストナイツの出現で戦局に変化が訪れようとしている。

この場にも一応ゴーストナイツは現れたが大火力で他のモンスターもろとも吹き飛ばされたりしていた。

ここには教師陣が大勢駆けつけているのだ。

また中にはギルドの人間だっている魔法の素質的な要素を除けば学生よりも強い実力者が多く、また軍用の人造ゴーレムが猛威を振るっている場所では多勢に無勢だった。

『何だコイツは!?!』

何時の間にかゴーレムの懷に潜り込んでいた一体のゴーストナイツが自分よりも大きな胴体にランスを突き立て、爆発。

そのまま仰向けに倒れ込んだ。

『早い!?!』

続け様に二体目。

頭部にランスを突き立てられ、爆発する。

『そんな馬鹿な！！　こつも簡単に……』

三体目も撃破。

煙上げて沈黙する。

一瞬にして三体のゴーレムが撃破された形だ。

「何なんですか!？」

慌ててエリスがそちらの方に振り向く。

他の人間も同様だった。

「まさか……御主は……」

ウンカイは絶望と驚愕に似た眼差しでその燃えるように赤い騎士をみた。

体中から紅蓮の炎を常に噴出しており、手には自身の背丈以上の紅に染まったランスを持っている。

足元には自分が破壊した人造ゴーレムが転がっていた。破壊したのはあつと言う間の出来事だった。

強力な戦力が倒され、一気に戦況が覆されて騒がしくなりつつある今この二人だけは重苦しい雰囲気を纏わせている。まるで別の次元に身を置いているようだった。

『久しいなウンカイ……もう何年振りの事か……』

「どうしてじゃ！！　御主は確かに死んだ筈じゃ!!」

このゴーストナイトの事をウンカイは一目見た時から激しく記憶

を揺さぶれた。

そして言葉を交す事により確信を得た。五十年以上経つが忘れられる筈もない。

「エリス……無事な者を引き連れて逃げよ」

しかし、これが事実であるのならと考えた時……老人は決断した。

「ですが……」

「逃げると言っておるのが分らんのかたわけ!!」

エリスは体をビクツとさせた。

マグネードとレヴアイザー。

両者の戦いの時を思い出させる。またあの悔しい思いをしなければならぬのかと。

だが今のウンカイは誰をも寄せ付けない鬼気迫る何かがある。常に優しい老人が初めて見せた姿だ。

「……分りました」

少しの沈黙の後、エリスは他の物と一緒に退避を始める。

本当はこの場に残りたかった。

だがこのまま戦い続けられ全滅してしまうのは必死。態勢を立て直す必要がある。その為には誰かが捨石になった方が効率的な事も。

「すまん」

「いえ……」

ウンカイは温存していた魔力を使いきるように広範囲、高火力の魔法を連発。遅い来るモンスターの群れを押し留める。

だがそれも短い間だった。

「……優しい事じゃな」

煙が晴れると絶望的な数のモンスターの群れ。

そして先程からずっと手を出さなかった敵に対して皮肉混じりの感謝を述べる。

『お前こそ長い年月が経つ内に無謀になったな……少なくともあの当時のお前なら考えられん行動だ』

やはりそうだった。

この紅蓮の様な炎をから噴出すこのゴーストナイツにウンカイは心当たりがあった。

数十年経とうと忘れられる筈がない。

厳しいながらも優しさに満ち溢れたこの声を聞けば尚更だ。今でも昔の事を思い出す。

自分の様な弱虫をパーティーに迎えてくれたあの日を。

当時のウンカイは魔法使いの修行と称して碌に修練もせず遊びばかり。そのくせ見栄っ張りで自分を大きく見せようとする。

そんな人間だったのにも関わらず仲間として迎えてくれた。

「フレム……まさか御主が蘇るとは……」

勇者フレムとの出会いはその時だった。

まるで走馬灯の様なあの日々を思い出す。

どれもこれも忘れられない大切な思い出だ。

『ファウマージが蘇らせたんだよ。意思はあるが体が言う事を聞かない』

「悪夢の続きじゃな……」

フレムは死んだ。

ファウマージを道連れにして。

その時の光景は年老いて尚見る程に衝撃的だった。

また幅広く知られた事実だ。だが五十年の時を経て悪夢と供に最も最悪な形で蘇ったのだ。

「スマンが御主にはこのまま死んで貰おう」

『そうだ。それでいい。フレムは死んだ。ここにいるのはただ魂を束縛された哀れな人形だ』

英雄は英雄のまま死んで欲しい。身勝手ながらウンカイはそう思っていた。

フレムと言う人物の英雄譚がこんな続きであって欲しくない。

「では他の連中も御主と同じ……」

『その通りだよウンカイ。ゴーストナイツはこのフレムを含めて全員が魂を束縛された人形なのだよ』

唐突に声色が変わる。

どす黒く底冷えする様な邪悪なこの気配。

見に覚えがありすぎる。

「その声はファウマージ!!」

『やあウンカイ。少しフレムの体を通して会話させて貰っているよ』

ここでまさかの宿敵と御対面。

このタイミングは内心とても答えた。

『予想以上にこの学園の生徒が手強くて正直驚いている。どうしてこんな学び舎なんぞに未来を託す気になったかは分らなかったが……考えを改めなければなるまい』

そう評価している割にはとても流暢に語っている。

その間にもウンカイの周囲をモンスターが固める。

どうやらファウマージの指示で一気に包囲殲滅する腹積もりだ。

『それにしても無謀だな。一人踏み止まるとは。フレムが言う通り嘗ての君ならばこんな無謀な真似はしなかっただろう、あの時は。ただの単なる臆病者かと思っていた』

「フツ……油断大敵と言う言葉をちっとも学んでおらんようじゃな」

『確かにこの学園の底力は計算外だった。だがここを橋頭堡に一気に制圧させて貰う。魔道具の破壊を優先し、戦力を分散させたのが君達の敗因だ。長期戦になれば此方の有利……既に王都にも大型モンスターを数十体喚んでいる。増援も間に合うまい』

と舞台裏を語ってみせるがこれも本当なのかどうかは分からない。
真実かそれとも単なるハッタリか……

(いや、もうでもよいか)

自分の役割は既に決まっている。
後はそれを果すだけだ。

『こうして手を下す機会がこうとは……ここは』五十年の間私に殺されるために生きてくれてありがとう』と言っておこつ』

既にもう勝ちを確信しているようである。

まあ仕方ない。今この状況で逆転できる筈も無い。

そうこうしている内に他のゴーストナイツも現れる。念には念を入れて処刑するつもりである。

だがそれはこちらとしてもとても好都合だ。

『聞えているかね？ ウンカイ君』

「おやおや学園長殿。老い先短い老人に何か様ですかな？」

唐突に通信用魔道具から初老の紳士の声が聞こえて来た。自分の耳が狂っていないければトリックの声である。

『死ぬつもり』『ガハッ！？』かね？』

時折誰かの悲鳴が聞えるが、たぶん通信用魔道具片手に此方へ連絡しているのだろう。

相も変わらず器用なお方だ。

「この絶望的状况下で死ぬなどは言葉が悪い……」

『ユウは『グベバツ！？』悲しむと思うよ？』『ゴハッ！？』』

「ホッホッホッ。ワシはもう長くはない。そしてどう言っ訳かこうして相応しい死に場所ができた」

ウンカイから凄まじい魔力が放出。

吹き飛ばされる程の量だ。

それが尋常ではない勢いで高まっていく。

大気を震わせ、地面をも揺るがす程に。

『貴様……自爆するつもりか！？』

ファウマージは一瞬で何をやらかすか悟り、フレムを動かして止めを刺そうとしたが

『クソ！？ フレムめえ！！ 体の主導権が……クッオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！？』

「フレム……御主意識が戻ったのか？？」

『速くしろウンカイ……もう長くはもたん……』

一斉にモンスターが襲い掛かって来る。

ウンカイを守りながら嘗てのフレムの様に烈火の如くモンスターの波を食い止めていた。

『この広場には転移魔法の為に必要な魔道具が存在する……自爆するのなら広場諸共吹き飛ばすしかない』

「それは良い事を聞いたな」

『自分の意思で戦う事を放棄すらできん……現世に舞い戻ったと思えばこんな恥辱を味わう事になるうとは……ならばいつそ……』

今も尚、ファウマージの支配に抗ってくれているらしい。

死んでも尚自分の戦友はあの時と変わらず頼もしい男であった。その事をとても誇らしく思える。

そして自分の最後が最高の仲間と供に戦える形であった事を。

その御陰で友を直接埋葬する機会と自分自身最後の晴れ舞台に幕を降ろす準備、そしてこの広場のモンスターを一掃する準備は整った。

「ふふ……今の今迄死に損ねた甲斐があったわい……」

ウンカイの体が最大限に発光。

広場を埋め尽くし、放出される魔力の余波でモンスターが消滅する。

『すまん……俺が不甲斐ないばかりに……』
「いいえ。やっと恩を返せました」

一際大きな大爆発が起きる。
その爆発は都市全土を揺るがし、噴水広場にあつた全てを道連れにした。

「男の覚悟に水を指すなどとは言うけどねえ……見てる方は辛いんだ
よウンカイ君」

多数のゴーストナイツの残骸に囲まれながら学園長は遠くからウンカイの最後を看取った。

Ⅱ 学園都市・南西部エリアⅡ

ゴーレムと言っても様々な種類がある。

野性に存在する鉱物で形成された魔力生命体と言うカテゴリーに位置するモンスター。

その上位種族であり、強大な力を持つ古代文明の守護者ガーディアン。

魔法使いが生み出すゴーレム。

そして人の技術で生み出された人工ゴーレム（サイエンのアイアンゴーレム含む）

今ユウが乗っているのは人工のゴーレムだ。先にも語ったとおりこの魔法学園にも様々なゴーレムが存在する。

魔力を発生させる特性の魔道具を動力炉とし、様々な形状のゴーレムが存在する。

「いつけえー！！ ランドシャーク号！！」

今回搭乗しているのは地球の自動車を連想させる車輪型ゴーレム卵状の頑丈そうな車体。

オフロード仕様車を連想させる三対の大型タイヤ。

オープンカー方式で座席は運転席しか無く、トラックの様に荷台スペースが平に広がっている。

北西部エリアにあったゴーレム学科共用のゴーレム専用格納私設から拝借した物だ。

そこにいるドワーフの管理人に手早く話をつけて借り付けたのがこのゴーレム。

用途は不明だが学園内や国内で運用されている輸送様ゴーレムの試作型らしい。

いっちょ前に車体前部に威嚇効果がありそうなシャークペイントが施されている。

六人が乗ってちょっと狭く感じられたが特に問題は無かった。

「自警団周辺の敵も攻略完了。チェックメイトだな……」

クリスの推理。

ユウの広域探知能力。

セドナの周辺探知。（ユウは魔道具の発見に能力を）

ティスの（クレイジーな）ドライビングテクニクが合さり、破竹の勢いで魔道具を破壊して回る。

魔道具を守護していた大型モンスターをランドシャーク号で轢き飛ばした後、止めを刺したのはもういい思い出だ。

返り血の掃除が大変そうだがティスはハイになっている。まるでサイコパスの殺人鬼みたいだ。

それはともかくクリスの言う通りもうチェックメイトに近い。

ゴーストナイトと言われる物の出現は聞くがもうその敵との決着はつけなくても勝ち揺ぎ無い状態とも言える。

「ゴーストナイツがどれ程の戦力かは分らんが温存したのが仇になつたな……」

だそうだ。

確かにクリスの言う通り最初から投入していれば勝ち揺ぎ無かつただろうに。

やはり五十年前の感覚で計画を推し進めたのか、それともたかが学生と油断したのが敗因となつたのだろうか？

「それよか敵さんがこつちに狙いを定めてるんだが……」

呆れながら後ろから追つて来る敵を眺めるビュウ。

何時の間にやら空中のモンスターまで加わっている。

「それよりも広場で物凄い魔力の高まりを感じるよ……」

「うん……どんどん大きくなってる。信じられません！！　まだ上がっています！！」

セドナが悲鳴を挙げる。

「何だこの量は……広場から感じるがこの魔法量が解き放たれたら」
「まさか……今直ぐ広場へ向つて！！」

ユウがそれを感じ取った時にはもう遅かった。

一際大きな大爆発が起きる。方向は激戦区の噴水広場だ。

その爆発は都市全土を揺るがす程に。

衝撃波で空中に浮いていたモンスターが一部墜落し建造物へ激突していく。

ユウは一瞬核爆弾でも起爆したのかと思つた程だ。

「何今の爆発!？」

「ちよつと何があつたの!？」

『……あゝ聞えるか? 冒険同好会の諸君?』

通信用魔道具から唐突に声が聞える。

ソプラではなく、親しみが感じられる初老の男の声だ。

「この声はトリック学園長!？」

『本来ならここでどうしてこんな危険な真似をしたんだと叱らなきゃいけないところなんだけど校舎へ戻ってくれるかな?』

「校舎へ?」

一同は疑問に感じた。

『そうだ。魔道具の破壊により空は青々としている。もう勝ったも同然だが……敵は諦めが悪いらしい』

「ゴーストナイツですね?」

『そうだ。一応十人ぐらいは倒したけど一人一人がメチャクチャ強くてどうにもならないのよね』

(((((メチャクチャつえ……)))

流石学園長。サラッと凄まじい戦果をいつてのける。

二度とアンタは敵には回したくはねえ。

「それでさっきの爆発は?」

『……辿り着いたら話す』

ユウの質問で一気に声の調子が変わる。

容易に「何か良く無い事が起きた」と分る程にだ。

「まさかとは思うけど……ウンカイ先生……」

「どうしたのよユウ？」

心配そうにティスが声を掛ける。

「うっん……なんでもない」

笑みを浮かべているが内心ではとても不安だった。

あの人が死んだと思うと特に……

「どうせ通る道なんだし、噴水広場へ向うわよ」

ティスはランドシャーク号を走らせる。

その間、学園内は不気味に静まりかえっていた。

まるでゴーストタウンに迷い込んだ様な気持ちになる程に。

広場に辿り着いたのは五分と時間は掛からなかったが、とても長い時間を過ごした様な錯覚を覚えた。

「何よこれ……」

まるで巨大な爆弾でも爆発したかの様な酷い惨状だった。

黒く焦げた肉片が辺りに散乱し、酷い異臭が鼻に来る。焦げたモンスター の遺体から発せられているのだろ うと思うに至るのはそう時間は掛からなかった。

噴水だった場所からは今もポタポタと水を周囲に撒き散らしており、その音が虚しい音色となつて心に響き渡る。

できれば一刻も早く通り過ぎたかったが……

「あれ？ ウンカイ先生の石像？」

見慣れた老教師の石像を発見した。
とても見事で精巧な作りだ。
今にも動かせそうなくらい。

「そう。ウンカイ先生が自爆したんだと思う」

アッサリとユウは真実を告げた。

「じゃあこの石像って!？」

「抜け殻だよ」

誰もが驚愕を露にする中、ユウは不自然なまでに冷静な自分に対して疑問を抱く。

そんな自分がとても不自然に思えてならなかった。

「魔力と生命力は密接に関っている要素だと聞いた事がある。本来は有り得ないが、万が一自分の限界以上の魔力を使用し発動した場合……恐らくこうなるのだろう」

「じゃ、じゃあ……さっきの爆発は……」

「だろうな……」

それだけでビュウはこの物言わぬ石像が何を意味するのか分った。

『チツ!! ガキどもと出くわしたか!!』

『だが獲物には違いねえ!! 帰るついでにぶっ殺してやる!!』

両者とも目に痛いパープルカラーの大柄な鎧。

大型のバトルアックスやモーニングスター（鎖鉄球）と言う見ただけで戦意を削ぎそうな凶悪な武装をしている。

帰るついでに〜と言う事から撤退中に自分達は運悪く遭遇してしまつたらしい。

「なにこいつ達!？」

「たぶん通信で言つていたゴーストナイツだろう……今の今迄よく遭遇しなかったものだな」

何時もの調子でクリスはそうに言うが人が死んだのを見て若干気分が悪そうであった。

「それにしてもナイツの名に恥じる程の凶悪な奴が現れたな」

『これでも生きていた頃は指名手配を食らう程の犯罪者でよお、フアウマージ様がそんな俺達にもこうして暴れられる機会を作つて貰つたつて訳さ』

「ご丁寧に解説してくれた。

早い話が元犯罪者らしい。

「つまり手加減しなくてもいいって事ね？」

「らしいな」

容易に交渉の余地なしと判断。戦闘準備に掛つたその時だった。

「ねえお願いがあるんだけど……退いてくれないかなあ?」

ユウがそんな提案をしたのは。明らかに無駄な徒労に終るような内容だがそれを言っているユウの雰囲気が違う。

『ああん? 命乞いかあ?』

「今ね。とっても変な気分なんだ。悲しんでいいのか、怒っていい

のか分らない。そんな気持ちなんだ。だからお願い。退いて。退かないとたぶん殺してしまうから」

淡々と語る。

ユウの表情はとても清々しかった。それが逆に恐かった。ティスでさえも息を飲み、クリスは冷たい汗を流し、ビュウは激しい嫌な予感を覚え、セドナは理由が分らない恐怖を感じとっていた。

『それは無理な話だな!!』

しかし敵は愚かであった。ビビらせるつもりだったのだろうか。あろう事かウンカイの石像にハンマーが振り落とした。

「あなた何をやったか分ってるの!？」

非常識人である筈のティスも怒りを覚えた。
何故死者に鞭を打つ様な真似をと。

『ああん!？ ただジジイの石像ぶっ壊しただけだろう』
『違いねえ!! あんな石像がそんなに大切だったのか?』

帰って来たのはそんな言い分だ。

「テメエら……これは流石に俺でもきれたぜ……」

「同感だ。久し振りだな。ここまで怒りが体中に滾るのは……」

温厚なビュウも、クリスも体から湧き上がる怒りと殺意を自覚した。
その時だった。

『え？』

モーニングスターを持っていた方が両腕を切り裂かれていたのは、何時の間にかユウはマジックソードを二本形成し、そして相手の背後に回って上からギロチンの様に振り落したのだ。

もし痛覚があれば悲鳴を挙げて戦意喪失し、泣き叫んでいただろう。

『貴様あー！！』

怒りの目を向けるが直後にティスが拳に炎を宿し、殴りつけた。甲高い音と共に鉄が焼ける何とも言えない匂いがする。

『あつつう……』

無言でティスは何度も殴る、殴る、殴る。淡々とした機械染みたこの作業を繰り返す。

『雑魚が調子に乗りやがってえ！』

もう片方力任せにトマホークを振りかざす。クリス、ビュウは左右に別れた。

怒りによる物なのか、それとも相手の実力がゴーストナイツにしては低いせいか、簡単に回避できた。

『チッ！』

待機していたセドナが光魔法を連射、連射、連射。光弾が体全体に着弾。弾かれるが動きが止まる。

『うお！？』

クリスのハルバードが捕らえた。

横一線。

トマホークの棒諸共胴体を切り裂いた。

「いけビュウ！」

「うおおおおっりやあああああああああ！！！」

続いて二つに割れた相手を唐竹割りの要領で思いつきり縦に切り裂く。

中身がスカスカであるせいか、もしくはユウが用意した剣の性能が良すぎるせいか、人を斬ると言うよりまるでチーズを斬り割いている様な感覚である。

罪悪感の様な物は感じなかった。しかしそれでも怒りは収まらない。何度も振るう。何度も、何度も微塵切りするように。

「そりや何度も怒られてムカついたよ！？ 俺は関係ないのに！！ 何時も何時も！！ テイスと一緒にさ！！！」

その間にもビュウは解体作業を続ける。

「理不尽だっと思ってたよ！！！」

やがて息が着れて、少年は鉄屑だらけになった地面に平伏す。

「だけどさあ……死体が碎かれるのが許される様な極悪人じゃ無いだろう……」

皆の気持ちを代弁する様にビュウは語った。

「貴方達……」

「風紀委員のアイスさん……」

唐突にアイスが現れた。

「こっちはゴーストナイツって言う連中に襲撃されただけど、あの大爆発の御陰でどうにか隙を作れてね……」

ウンカイが起こした大爆発により、均衡していた戦いが一気に変化が起きた。

本当に運が良かった。

自分を襲撃していた騎士の二体が爆発の衝撃波で態勢を崩し、そこで一気に勝負を賭けた。

あの決断は条件反射に近い物がある。

（僅かな勝機を掴むとは……）

（優秀な戦士だ……）

氷の柱で貫いた二人の騎士からそんな称賛の言葉を頂戴した。
生涯忘れられないであろう。

「んで面倒を後輩に押し付けたんだけど、ここで何があったの？」

質問をした。

「ウンカイ先生の死体を発見した……けど……こいつ達に碎かれて頭に来て……」

「そう……」

それだけで何があったのかアイスは充分に理解した。

「兎も角学園に戻ろう……」

一向は無言のまま本来の場所へ戻ろうとランドシャーク号へ歩を進めようとした。

『おっと。君達が向うステージは其方ではない』

「なにこの声!？」

突然自分達の頭の中に声がする。比喻とか例えとかではなくまさにそんな感じなのだ。だからかとてもハッキリと聞えた。

『君達の行き先はもつとも死地に近い場所が相応しい』

自分達を包み込む規模の魔法陣が現れた。
しかも広場全体にだ。

「まさか術者が近くににいるのか!？」

「それにしても早過ぎるわ!!　こんな一瞬で転移魔法を組むなんて……」

クリス、アイスがその事実には驚愕する。

「違う……これは転移魔法じゃなくて……」

ユウが何か言おうとしたが自分達が光に包まれたのが早かった。

「ハデイス……見せて貰うぞ……」

ユウ達が消えたのを見届けた漆黒の影は笑う。

第四話 E N D

第五話「決戦ファウマージ」

優しき勇者・悲しみの冥王

五万ヒット記念「亡者は黙って地獄に堕ちろ！」

第五話「決戦ファウマージ」

クレーターだけが残る噴水広場。

騒がしい学園の中でもここだけは不気味なぐらい静かだった。

「まさか君が動くとはね」

唐突に背後にトリックが現れた。ステッキで地を置き、左でシルクハットの鍔を下げるポーズを取る。

「おやおや。学園長殿……ウンカイ殿が亡くなった事をお悔やみ申し上げる。老い先は短いと言うのに酷使なさるとはいやはや学園長殿も人が悪い」

「……彼自身が選んだ選択だ。私がとやかく言う義務は無い。そして君にどうこう言われるほどの事ではない」

淡々と語るが明確な殺意の様な物が口から漏れている。殺せたら殺すだろうがそれは出来ないでいた。

何故なら今この老紳士は初めて経験する殺意を体に浴びていたからだ。姿は見えない。だがワザと気配を晒すかの様に殺意をぶつけてくるのだ。しかもその殺意はとても爽やかで美しい水のように透通ったかの様な……それ以上に表現しようが無い類の物だ。

ドラゴンに睨まれた様なとかそう言う類の物は何度も経験したがこれ程までの異質な物は初めてだ。久しい恐怖を感じている。

「君は私を殺す事はできない。ハデイス……いや、今はユウと名乗っているのかね？ 私の力はそれ以上だ」

「そして君の護衛もいるのだろうか？」

先程から感じえた事を言うと言は口元で笑みを浮かべる。

「流石トリックだ。私には殺気を感じると言う不確かな事はできないが……相応の実力者なら気配を察知できるというのか。いやはや勉強になった」

まるで感心した素振りと言う内容を演技して見せるかのようであった。

その態度を老紳士は黙って見届ける。

「……この事件を仕組んだのはもしや」

「ふふふ。何を証拠に？ まさか私が全ての魔王を背後から操っているようでは無いか？ そもそも私に聞く必要があるのかね？ 賢者の卵は君が持っているのだろうか？ なら聞けばいい」

まるで「最初から分っているのだろうか？」と問い掛けるように影は丁寧に対応する。

最早挑発に近い。

「言いたい事はそれだけかね？」

「……ハッキリ言おう」

何かの決意を固めるように沈黙。そして

「トリック。私の部下になれ」

影は振り向き、トリックに問うた。

「私の理想は世界平和。君の理想も世界の平和であるのなら……」

「その平和のためにこの事件を引き起こしたと言っのなら私は君と敵対する立場にある」

「まだ言っかね？」

影は再び嘲笑う。

「君の理想は傲慢だ」

「私が傲慢なら君とハデイスは夢想家だ。君は心の可能性と言う物の綺麗な部分しか見ていない」

「その可能性を否定するのなら私は学園長などやってはいない」
「成る程……」

影の足元に魔法陣が展開。転移魔法である事は容易に察し出来た。

「殺さないのかね？」

「君のスカウトはついでの様な物だ。私は特等席で君の教え子の勇士を焼き付けるよ」

軽い口調でそう言い残すと影は光の粒子となって何処かへと消える。

「まさかこの戦いは……」

この時、学園長は全ての答えを理解した。

「で？ 私達どうして空中にいるわけ？ しかも目の前は何か魔王城と来ているわ？」

その頃、ティス達は空中大陸にいた。

冗談ではなく本当にそうなのである。

地面が途中で無くなっており、下には遠い地面が見えていた。

そして何より雲が限り無く近く、とても寒くて風がビュービューと吹いている。

背後には禍々しく天高く突き出た塔があつた。

クリスがメガネをクイツと直しながら「魔王城だな・・・」と判断するのはそう時間は掛からなかった。

「これだけの魔力があるのなら……俺の推理は外れていたかもしれない」

「確か魔法学園の生徒から魔力を……って言う話だよな？」

まるで数ヶ月前の話題の様に頭から捻り出す。

「じゃあそれが外れいたとしたら？」

「……魔法学園その物を占拠するつもりなのだろう。あそこまで大掛かりな仕掛けを、そして戦力を投入したんだ。それ相応の価値がある何か……」

「賢者の卵ね」

ティスの一言で皆がハツとなる。

「魔力が目当て……いやついでだとしても、それぐらいの秘宝が無

ければこんな馬鹿でかい塔を浮かべて侵攻する必要は無いわよね？」

納得したようにアイスがその推理を肯定した。

「それよりもどうする？ ランドシャーク号は一応動かせるけど」

「じゃあそれに乗って行きましょう」

「何処へ？」

言い出しっぺであるビュウは向う場所を確信しながらも場所を尋ねた。

「勿論ファウマージの元へ。ジャマする奴は轢き殺すつもりで」

「そう言うと思った……だけど今回ばかりは付き合うよ」

そう言ってランドシャーク号の元へと歩み寄る。

「ただだ、けど……ああ、相手は魔王ですよ!？」

「議論している時間は無さそうだぞ」

セドナの声へ反応したかの様に塔の内部から次々と敵が出てくる。

「チツ!! ゴーストナイツも現れてる!!」

「このまま挟み撃ちになったら……」

ここは敵の本拠地でしかも空中。

危機的状況になった場合誰かがタイミングよく駆けつけて来ると言っご都合主義はまず考えられない。

「僕が食い止める!!」

すかさずユウが皆を守る様に立ち塞ぐ。
皆が止めようとするがすぐに戦闘へ突入。

ユウは魔法による猛烈な弾幕を張って敵を撃ち落して行く。

「ユウ!!」

「大丈夫！！
ある程度引き付けたら追いつくから！！」

そこまで聞くとティスはランドシャーク号を石畳の道の上に寄せ、全速力で走らせた。

幸か不幸か、ドラゴンが入れそうな程に大きなゲートからはモンスターが大勢出現している。

全部轢き飛ばすには色々と無理がありそうだった。

「ハンドル操作頼むわよビュウ！」

「行き成りかよ!!」

突然運転を隣に座っていたビュウに任せる。

そしてティスは立ち上がって攻撃の体制を整えた。

[illegible]

殴り付ける様に炎の弾を敵の部隊にぶつけ爆ぜた。

大地の鎖を引き千切り、塔を空中へ浮かべたファウマージは最上階の玉座で現状把握に努めていた。

凄まじい振動音と爆音。

（まさか転移して来るとは！！）

塔の外部を遮断するように強固な結界は張つてある。

それにここは空中の上。

あらゆる可能性を考えた上でそうとしか考えられなかった。

（だが敵はたかが学生数人……支障はでんだろう……）

本来の目的はあの学園に眠る秘宝。

そのため、学園都市を占拠するためにあの大部隊を送り込んだのだ。

あの結界は本来の目的を逸らす為の罠でもあり、持ち出しを防ぐ為の檻でもあった。（あの学園から得られる魔力も確かに魅力的だったがこれは二の次）

魔法学園である以上、必ずあの結界の性質に気付く物は現れるだろう。

そして戦力を割いて破壊するグループと防衛するグループが出来る上がる。

後は臨機応変に部隊を動かせば此方の勝ちだった。

ゴーストナイツは実力者を優先的に狙うためでもあり、中央広間へ戦力を数多く送り込んだりのは橋頭堡を確保する狙いであったがウンカイのせいでその段取りが狂った。

此方の保有戦力は未だ充分にあるし、一日もすれば元通りになる。

だがファウマージには時間が無かった。

（万が一運び出されたら申し訳がたたぬ……）

賢者の卵を手に入れるために。

自分自信を蘇らせてくれたルファールがあると言った以上、ファウマージはそれを確信し、

ファウマージにとってルファールの言葉は神の言葉。疑いも欠片も感じなかった。

この塔による強行急襲はできれば使いたくは無かったが時間との勝負になった以上、使わざるおえなかった。

（その為には侵入者を……）

予想以上に侵入者が手強い。既にもうかなりの数のモンスターが倒されている。

すぐさま部隊編成をと……考えた時だった。

『ッ！？』

魔神へと姿を変えたユウ（*ファウマージは正体は知らない）が水晶に現れた。

空中に浮かび此方の防衛部隊と激しい戦闘を繰り返している。

『そうか……貴様の仕業か……』

その姿を捉えた時、ファウマージはもう説明はいらなかった。

『だがもう遅い！！ この塔の力とルファール様から頂いた魔力さえあれば貴様なんぞ！！』

塔の頂上、各所から暗い閃光が飛び出る。
迎撃魔法が飛ぶ。

しかしユウは塔の各所から飛び出る迎撃魔法に驚きつつも回避していた。

魔法は全て誘導弾だがこちらへ向かって来たスピードはミサイル程ではなくユウの能力を持ってすれば充分に回避出来る。

『VHS強制起動!!』

水晶に映し出されたユウがそう言うのと体を真赤に光らせ、ガントレットを眼前に突き出し、背中から赤色に光る羽を羽ばたかせる。羽から数え切れない程の閃光。それ達が次々と塔に突き刺さって行き、爆発を引き起こしていく。

『ぬう!? ゴーストナイツ及び飛行可能なモンスターはすぐさま迎撃に移れ!!』

常識外れの瞬間殲滅能力を目の当りにしてファウマージはすぐさま総力戦に移行する。

『うおおおおおおおおお!!』

ユウは魔力で形成した光の羽からビームを針鼠の様に乱射。塔全体に次々と爆発が巻き起こる。

この理不尽な破壊力、殲滅力こそが自分の真の力である。小手先も戦略も戦術もいらない。ただ大火力で押し切る。塔から出動したモンスターも次々と爆発と閃光の中に消えて行く。

(たぶん皆心配しているだろうけど……)

申し訳なく思いながらユウは攻撃の手を緩めない。
一応塔の内部へ侵入した仲魔達には当てない様にはしてある。
このまま一気にファウマージを火力で押し潰したいところだが…

…

『一人で来るか……』

『この数相手に臆さない度胸は誉めてやろう』

空中を飛びながらゴーストナイツが一斉にやって来る。
数は十体。

武装も形状もそれぞれ違う。
だがやるしかない。

『久し振りの全力戦闘……』

体がパープルを基調としたカラーへ変更。
アーマーも、聖帽も、ガントレットまでも。
自分が冥王に戻る瞬間だった。

『一気に片をつける!!』

魔力誘導弾・フェザーミサイルを発射。魔力に反応し、追尾する
誘導性の羽。使い易く何かと重宝する攻撃方法だ。

それで敵部隊を牽制。

全てのゴーストナイツが回避行動を取る。

『くっ!!』

『先ず一人!!』

大鎌を形成。

魔力の刃で形成されたビームサイズだ。

それを手に一気に近付き、フェザーミサイルで怯んだ一体を両断する。

『続いて!!』

すかさず左腕にガトリング砲を形成。

ドラムに六つの穴を開けた様な良く形状だ。

そこから魔力弾を近くのゴーストナイツへ乱射。

ガトリング砲の機構は軍艦の迎撃システムなどにも採用されている程に一瞬で多数の弾丸をばら撒く。

この至近距離では取り回し辛いが目の前の敵を駆逐するだけなら充分だ。

デカイ肉塊をミキサーで削り取る様な発射音と共に乱射、乱射。バラバラになって吹き飛んで行く。

『狙い撃つ!!』

弓矢を装備したゴーストナイツの一体がユウを狙う。

『ミラージュフレイム展開!!』

それを事前に察知したのか、ユウの体が蜃気楼の様に歪み、飛んで来た魔法の矢を回避する。

この技は元々自分の知り合いを再現した物だ。

自身の姿を分身を炎で生み出すだけでなくジェット噴射の様に押し出す事で相手の攻撃を逸らし姿を消す事もできるし分身を貫いて相手を攻撃するトリッキーな使い方もできる。

魔力で形成された矢「マジックアロー」は的確に幻影を貫いて行

くが本体は無傷だ。

次々と生み出され、接近してくる分身に翻弄されている。視覚的な探知と魔力探知も防ぎ、また自分自身を守る盾にもなるのだ。これ程使い易い防御技の発案者は天才と言っていいいだろう。

『ええい舐めるな!!』

背後から現われたユウを狙い打つ。しかし外れ、虚しく矢が突き抜けて行く。

『何!?!』

驚いたのはそこからだった。幻影の腹を切り裂く様にして両断。そのまま自分自身も切り裂かれた。

『これで四人!!』

残りは六人。

本当ならファウマージ一点狙いと洒落込みたかったが不安要素があるため、出来る限り相手の戦力は削っておきたい。なので非情ながらこの場で全員倒すつもりだ。

『ふん。神様もとんだ土産物をプレゼントしてくれたぜ』

『個人的にはもっとカワイイ女の子が良かったよ』

『学生の相手をやらされるよりかはマシだろう』

死闘の間であるにも関わらず、軽口が聞えた。

(そうか。ファウマージの精神コントロールのせいで自我はあっても体の言う事は殆ど利かない……だからせめて……)

とてもよく分る感情だった。
自分自身がそうだったのだから。

（ああ……皆もこんな気持ちだったんだね……）

遥訳もつ一人のユウを殺した人達の気持ちを理解出来た気がした。

（こんな時にどうして僕は……）

このゴーストナイツは自分と同じだった。

身勝手に生み出され、身勝手な使命を背負わされて生きて……死ぬ。

ファウマージを恨むよりも自分の心が決られて行く感触がとても辛い。

仮面の下は既に涙で溢れている。

（仮面をつけてて本当に良かった……）

こんな姿を見せるのは失礼だ。

責めて悔いが無いように

「ウオオオオオオオオオオオオ！」

倒す。

両腕にマジックソードを形成。烈火の如く燃える様な赤い剣だ。それを重ね合わせて相手の武装ごと切り裂く。

赤く燃えるようなオーラと供に敵を打ち倒すその姿はまるで阿修羅のようであつた。

（ああっ……ああ……）

あの時の光景がフラッシュバックする。

今の今迄自分を殺した人間の気持ちが一理解していたつもりになっていた。

その事を深く痛感させられた。

（本当に僕は馬鹿だった……）

こんな思いを皆にさせたのだ……元の世界に帰りたい。皆に謝りたい。

そんな気持ちすら湧いて来る。

だけどこの記憶も思いも悪魔で前の世界のユウの物だ。
今のユウの物ではない。

（僕は……僕なんだ……！）

マントを硬質化。

さらに背中に展開した魔力の翼で叩き付け、手に持ったマジックソードを投げつける。

叫びたい衝動に駆られたがグツと堪えた。

久し振りであった

ここまで死にたくなる程の気持ちになるのは……

『八人……！』

残り二人。

ここで暫し膠着状態になる。

その間にユウはふと考えた。

これはオリジナルの優（時間が経つに連れてもう判別が付かなく

なつてきてしまっているが）の知識だがレプリ人間を生み出す際、記憶や経験すら取り込んでしまうらしい。

まるでラスボスの様なチート能力だ。

だがこれには欠点があったようだ。

それは個人の記憶や経験が人格にまで影響を及ぼすらしい。

その個人の悲しい記憶まで。

悲しい記憶と言っても様々だ。

彼女にふられたり。テストの点数が悪くて母親に叱られたり。

個人に取ってはキツイ物だが他人からすればくだらなかつたり面白く感じたり、自業自得だろうと思える物が多い。

だがオリジナルのユウの周りの人間は創作物の世界の人間の様にハードな人生を歩んでいた。

陵辱され、人体改造を受けた記憶。

親や親友を人質に取られて仲間を敵に回した記憶。

自分と関わりを持った女性が次々と死んでいく少年の記憶。

中には原子爆弾が投下されて間もない広島、長崎の地獄を見た記憶と言う物もあった。

臆病で独り善がりで身勝手な人生を歩んでいた少年にはキツかっただろう。

現に前のユウはこれ達の記憶を取り込む過程で何度も自分の体験として捕らえて何度も何度も涙を流したようである。

そうして辿り着いた答えはよりにもよって他者を巻き込んだの派手で傍迷惑な自殺で助かろうと言う身勝手な決断だった。

（そうか……だからなのか……）

今の自分のおかしな精神状況は恐らく戦闘モードになった事で一気ソレがに表面化したのだろう。（記憶と言う押入れから引っ張り出されたとも言える）

リスクが減ったと思ったら思い掛けないリスクが出現した。

『ハアハアハア……』

だがその御陰か自分の足りない部分が心の苦しみと共に急激に補われて行く感覚が起きる。

自分自身の記憶では無いと言うのにまるで実体験して来たかの様に感じてしまうのはとても奇妙だった。

『頑張ったな少年……』

『え……』

ユウはハッとなった。

何時の間にか自分は全滅させていたらしい。

赤いオーラも収まり、バラバラになって鎧の騎士が落ちていく様が見えた。

『まだ敵が来る！？』

通常型のモンスター。

気色悪い骨だけのドラゴンらしき生物から毒々しい紫色の鳥が襲い掛かったりしてくる。

『クソッ……だがモンスターの製造プラントなどは無傷……塔のコントロールさえできれば後は……』

水晶から送られて来る情報を頭の中に叩き込みながらも外で起きている状況に舌を巻いている。

十分もしない内に被害が予想以上に拡大しているからだ。

幸いモンスターの製造プラントは無事なため、物量による完全占拠は可能である。

だがそれは白い魔神が現れる前の話。

目的の遂行をするにはどうにかして一旦塔を学園都市まで着陸させ、自分の手で決着をつける必要が出て来た。

奴を倒せねば着陸させても最悪学園の敷地もろとも吹き飛ばされるのがオチだ。虎の子のゴーストナイツが齒が立たない以上嫌が上でも相手せねばならない。

「たく！！ 何処の誰よ！！ 私達を吹き飛ばすつもり！？」

唐突にドアから突き破る様にしてゴーレムが現れる。ティス達だ。強固な結界が張られていたが先程の攻撃で抗力が弱まっていたため、楽に突入できた。

先程ユウが行った殲滅攻撃も加わり被害らしい被害を受けずに辿り着けたのである。

もともと本人達からすれば敵よりもユウの攻撃が脅威だったのだが。（勿論塔への攻撃がユウだとは知らずそれが仕掛けだと考えていた。またユウは攻撃する際、ちゃんと位置を確認した上でやっている）

『ええいこんな時に！！』

ファウマージは侵入者を見るや否やこの広間にある迎撃機構を起動。

『クソ！！ さっきの攻撃でイカれたか！？』

状態以上を引き起こす結界などが作動する筈であったが、発動したのは地下ブロックにあるモンスター生産プラントからの直接転送だけであった。

次々とモンスターが玉座の周りに配置された魔法陣から出現する。それだけであったが事情を知らないティス達からすれば立派な仕掛けだがファウマージからすれば不完全な防備である。

「あの全身火傷だらけの小汚いクソジジイがファウマージなの？」

「ここが玉座であるの守りから見れば間違い無いだろう……」

「信じられないわ…… 本当にこのゴーレムだけでここまで来ちゃった……」

「わわわわ、私も正直夢見たいです」

ティス達はそれぞれの感想を述べている中、ビュウだけが真っ先に降り立った。

「で？ どうしますか部長？ 当然このままぶちのめしますよね？」

普段の彼からは信じられない言葉をティスに向けた。

「それにユウなら大丈夫だと思います……俺達何かより一人の方が返って都合がいいかも知れません」

そう言つて剣を構える。

『まさかここに来て私の目的を邪魔するのがこんなガキ供とは！』

ファウマージはその事実に激しい怒りを覚えていた。
体中から魔力を漲らせ、目をより鋭く光らせる。

「そうね……ユウなら大丈夫でしょ。だったらコイツをさっさとぶちのめして帰るわよ」

高く跳躍。

空気を読まずに襲い掛かる敵を魔法で一気に焼払う。
これを合図に両者の間で激しい戦闘が始まった。

「行くわよ！！あのクソジジイ二度と蘇らないように焼却してやらあー！！」

「今回は同感だー！！」

二人は楽しく会話しながら息の合ったコンビネーションで敵の海を掻き分ける。

「こ……ここ、こんな時に何やってるんですか先輩！？」

「いや、確かランドシャーク号には自衛手段が……あるらしく……確かここをこうやって……」

激戦の最中。クリスは運転席を調べつつあるスイッチを探し当てた。

それをピツと押してしまう。

するとゴーレムの車体全部が上下に分かれてそこからジャキツと言葉と共に砲身が伸びてた。

「ちょっとこれって！？」

「ふふふ、二人ともおー！！避けてくださあーい！？」

伸び出た砲身から大砲の弾が飛び出た。

丸っこい昔ながらのなんとも味がある弾がモンスターの群れに飛び込み、炸裂。

直撃弾を受けた物はバラバラとなり、爆発の衝撃波でモンスターは吹き飛ぶ。

「まだ弾はあるぞ」

クリスは器用に車体の向きを変えてスイッチを押す。

次々と砲弾が打ち出され、モンスターがバラバラに吹き飛んで行く。

数が多い低級モンスターだけでなく頑丈な中級〜上級のモンスターですらかなりのダメージを受ける始末であった。

「今の内よ！！ 私が道を作るわ！！」

アイスは両手を硬い地面の床に置き、氷の道を作り出す。

その道は道中のモンスターを氷付けにしていき、やがて魔王すら飲み込もうとした。

『この程度で！！』

右手を突き出し障壁を張る。

氷の濁流はまるでダムに塞き止められたかの様に左右へ分かれるようにしてストップした。

『塔を学園へ着陸させる前に貴様達を始末せねばならぬようだ……』

ファウマージは戦闘行動へと移る。

今の今迄戦闘行動が出来なかったのは塔のコントロールが必要だったからだ。

この塔は言わば巨大な魔道具であり、その全てをファウマージが一人で全管理運営している。

今の浮遊形態で大きなダメージを負った塔ではより繊細なコントロールが必要であつたがそうは言つてはられなかった。

『キエエエエエエエエエ！！』

ファウマージが奇声を発した途端、ティス達はまるで何かに縛られたかの様に動かなくなった。

「何なのこれ！？」

「クソ……体が動かない！！」

二人はどうかして体を動かそうとするも言う事を聞いてくれなかった。

「金縛りか……しかしこれ程の物は初めてだ……」

「冷静に観察しているとこ悪いけど打開策はあるのかしら？」

「無いな」

「えええええええ……そそそそ、そんなあ……」

この状況を見てファウマージは獰猛な笑みを浮かべ指示を下した。

『いけえモンスター達よ！！そのまま八つ裂きに……』

言い終わる前に今度は激しい揺れが塔全体を襲つた。

『ナニイ！？ この振動は！？』

同時にモンスターを送り込んで来る魔法陣が作動。
そこからユウが現れた。

「モンスターを製造するための魔道具だけど全部ぶっ潰したよ……
後はファウマージ……君を倒せばもう一件落着だね」

透通る程に穏かな表情でユウはチェックメイトを宣告する。

「ファウマージ……あなたってもしかすると一度計算が崩れると一
気に脆くなるタイプなのかな？ もう八方塞がりだよ」

『だ、黙れ!!』

「覚悟は出来たかな？」

『黙れと言っている!!』

ファウマージは両手をユウの方へ突き出す。

ユウは微動だにしなかった。

「余所見は禁物よ!!」

『ッ!?!』

ティスが炎の弾丸をファウマージに叩き付けるが流石魔王と言っ
べきか対応が早かった。

片手を向けて障壁を張り、アイスの時の様に容易に防がれる。

「見え見えだぜ!!」

『小童があ!?!』

その隙を付いてビュウが懷に潜り込もうとしたがファウマージは
視線だけを向ける。

ローブの奥底で不気味に輝く紅の瞳が発光。見えない力に襲われた壁に叩きつけられる。

「もう一発!!」

「合わせるわ!!」

「私も行きます!!」

すかさずティス、アイス、セドナの三人が攻撃魔法を放つ。

三人とも得意とする魔法の特性が違うため射線が被らないように気を付けて魔法攻撃を発動。

炎の渦、氷の波、閃光がファウマージを襲った。

『チイツ!?!』

ファウマージはその場から掻き消えた。

「消えた!?!」

「違う!! テレポートだ!!」

クリスが瞬時に正体を見破るとティスの背後にファウマージが現れた。

『先ずはお前からだ!!』

ファウマージは包帯が巻かれた腕を振り下ろそうとする。

流石のティスも突然の事に反応ができないでいた。

皆誰もが最悪の事態を連想した中で、ある二人の少年のみが動いていた。

（嘘だろ……アイツこのままじゃ……）

まだ抜けきつてない体の痛みを起こしながら目の前で起きるであ
ろう惨劇へ目をやる。

（ふざけんなよ……）

ビュウは目尻に滴を流しながら駆け出した。

「ウオオオオオオオオオオオオ！！」

ビュウが体中から電気をバチバチと響かせながら特攻。

常人はおるか、鍛え抜かれた戦士ですら出せない速度を出す。

この時、ビュウには何もかもが遅く感じられた。

（テイスに振り回されんのはゴメンだけど、だからって死んでも言
い訳はねえよなあ！？）

その事実には戸惑う事なくビュウは加速魔法を使っても成し遂げら
れない何倍ものスピードで駆け抜ける。

「遅えんだよ！！ 何もかも！！」

ファウマージが此方を視界に捉えた時にはユウから借りた剣で思
いつきり切り裂かされる。

ユウから借りたロングソードは勇者の武器かそれ以上の性能を
持ち、仮にファウマージが防御障壁を張ったとしても、結果だけは
変わらなかっただろう。

『ギヤアアアアアアアアアアアア！?』

遅れてファウマージの体がまるで落雷に撃たれたかのように激しい火花が響き渡る。

「大丈夫ティスさん？」

「え？ え？」

何時の間にかティスはユウの後ろにいた。魔法陣を張り、眼前で起きるスパークショーの二次的被害を防いでる。

それにしてもユウでさえ驚いていた。

まさかビュウがこんな土壇場で美味しいところを搔っ攫って行くとは。

「はあはあ……どうだクソ野郎……」

その場にヘタレ込み、息を絶え絶えに言い放つ。

「もしかして……倒しちゃったの!? ビュウが!？」

「……………信じられんがその通りだな」

「え……………ええ、ええ?」

その事実にも誰もが飲み込めないでいた。

「兎も角この塔を止めるわよ!! 後脱出!! 学園に突入したら大惨事になるわ!!」

「どうにかして魔道炉を破壊しないと……」

アイスの一言でハっとなる。

そう、まだ仕事が残っていた。

進路は既に魔法学園になっており、着陸のコントロールをする筈のファウマージを倒れた今この塔は巨大な砲弾と化している。

もし激突すれば大惨事になるだろう。

「塔のコントロールは僕がやるよ」

そう言つてユウは部屋の中央にある玉座へ置かれた水晶へ向つた。確かあれでコントロールしていた筈である。

「あなた操作できるの？」

「分らないけど方法はこれしかないでしょ」

ユウがその気になれば転送して冥王形態からの完全破壊と言う選択肢も取れたが上空で破壊した場合破片が降り注いでどの様な被害が出るかは分らないためこのまま着陸させる事にした。

水晶に触れる。プロテクトが掛っていたが強引にハックする感覚でコントロールを奪取した。

「危なかった……後数分もすれば学園に突入してたよ……」

「ギリギリじゃないそれ……」

皆ホッと胸を撫で下ろす。

「取り合えずこの塔を迷惑が掛らない場所へ着陸させるよ。流石に道のご真中へ置く訳にも行かないし……」

「そうね。何処か迷惑を掛けない場所へ……」

この塔をどうにかすれば後はもう事件は解決……とまでは行かな

いが学園壊滅の危機は去る事になる。

取り合えず何処へ着陸させるかを考えようとした。

『このままでは……済まさんぞお……』

その時だった。

「ッ！？ まだ生きてたの！？」

ここで再びファウマージが息を吹き返す。

黒焦げになったローブ、包帯からは焼け焦げた異臭を漂わせている姿は魔王と言うより冒険小説に出て来る怪人的な気色悪さを漂わせていた。

だからかティスは反射的に炎魔法を放つがまた一瞬にしてその場から掻き消える。

『既にもう人間としての体は最早器に過ぎぬ。魔力ある限り私は死なぬわ』

玉座の真後ろ側に現れ、丁寧に解説した。

「つつ、つまり魔力が尽きない限り何度でも蘇るってことですか！？」

「正に化け物だな……」

セドナの説明にクリスは魔王が恐るべき存在だと言う事を再認識させられた。

「なら何度でもぶちのめせばいいだろ！！」

「頭いいいわね。私も同じ事考えてた」

「それは脳筋って言うのよ……闇雲に倒してもこっちがジリ貧になるわ」

二人のパワープレイに呆れながらもアイスはどうしたものかと考えていた。

「そうだね。少し無茶苦茶だけど。倒す方法があるよ」

「えっ？　ちよつと何！？」

突然体が上へ引つ張られるような感覚になり戸惑った。

だがそれはほんの少しの間だけ。

激しい揺れが塔全体を通じてティス達を襲った。

『塔を着陸させたのか？』

「そうだよ」

元々学園の急襲上陸を前提としていたのか予想以上に安定した着陸が出来た。

ちなみにティス達は知らぬ事だが（ユウは空中戦をしていたので、外観を知る事が出来た）塔の地下部分は巨大な針（もしくは釘）の様になっており、その針を中心として12の針が円陣を組むようにして斜め下に取り付けられている。

この針は地上への迎撃機構でもあるが着陸の際塔を安定させる装置の役割を持っていた。

モンスター生産様の魔道具を完全破壊はしたが動力炉である魔導炉事態は未だ生きている（ティス達をぶっ飛ばす訳にはいかないの破壊できなかった）ので作動させる事は簡単だった。

「後魔導炉も臨界点に暴走させておいたよ」
『なっ！？』

すかさずユウはある魔法を発動した。

『これは結界！？』

その結界は相手の魔法を完全に遮断するだけでなく魔法の発動すら無効化する代物だ。

詳しい説明は省くが転移魔法すら行えなく出来てしまう。

それがファウマージを包み込むように張られた。

「さつさと逃げるよ！！ この塔はもうそろそろ爆発する！！」

「何ですって！？」

「だから皆急いでランドシャーク号に乗って！！」

同時に各所で爆発音が響き渡り、その爆発による振動で塔が決壊してゆく。

これは魔力を塔全体へ、それこそ現代で言う電源変わりに仕掛けを作動させる仕組みであつたせいだ。

仕掛け自体が送られて来る魔力に耐え切れず崩壊して行き、今この瞬間もそれが延々と行われているせいである。

やがて全ての行き場を無くした魔力は崩壊するのみだ。

「大丈夫なのかよ！？」

「大丈夫じゃないわ！！ 決壊寸前のダムから走って逃げるような物よ！！ 本当に大丈夫何でしょうねユウ！？」

「しし、死ぬんですか！？ 死んじゃうんですか！？」

「まあ普通は死ぬな」

「……これで生き残つたらもう金輪際貴方達に関わら無いわ」

そう口々に言いながらランドシャーク号に乗り込むメンバー。

『て、転移が間に合わ……ウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！？』

ファウマージは断末魔と共に塔の爆発に消えていく。

塔の爆発はその本体すら乗り込み、ウンカイの自爆とは比べ物にならない規模の閃光が天へと昇り、衝撃波が大気を駆け抜けていった。

「な……何が起きてるのかしら？」

空中に浮かぶ塔の接近は遠方からでも確認はできる。

全結界の破壊はしたがとても絶望的な光景であったのだ。

だがある距離まで近付いた所で突如着陸。

そして空を切り裂く程の閃光と共に大爆発を引き起こしたのだ。

エリスは避難して来た生徒達と共に本校舎でその光景を目に焼き付けていた。

「あ、アレ！！ 何かが飛んで来る！！」

生徒の一人がそう言った。

「本当だ……グングンと近付いて来て……」

「アレってゴーレムかな？」

そのゴーレムは車輪が付いていた。

魔力の障壁で覆われており、中には複数人が乗っている。

勿論このゴーレムはユウ達であった。

「ユウ！！ あんた変わったキャラだと思ってたけど私よりイカれてるわ！！ 結界を殻の様に展開して塔の大爆発を推進力に変えて脱出とか！！ 普通の人間は考え付かないわよ！！」

「本当は転移したかったんだけどファウマージを閉じ込めなきゃいけないかったから……」

「言い訳はよろしい！！ これで生き残ったら覚悟しなさい！！」

「てかこれ何処まで飛ぶのよ！？ 今学校の塀越えたわよ！？」

ユウが塔から脱出した方法は実にシンプルである。

ただ一部分の結界を受け止める様にしたのだが。

本来はユウが語ったとおり転移魔法の同時発動と言う形に収めなかったのだが、咄嗟に発動した結界のせいでこんな形になっている。例えるならば「何かしらの強大な力で空高く射出された大玉の内側の様な惨状」になっていた。

（ああ、このノリ何か懐かしく感じるなあ……経験した事無いけどなんでだろう……）

記憶共有のせいか経験した事も無いのに何故だか懐かしく感じていたユウであった。

既にランドシャーク号は学校の敷地上空へ突入。

飛龍やペガサスに乗った生徒や教員達を横切りつつ、地面にいる生徒達の注目を集めてそのまま猛スピードで滑空（最早飛行ではない）。

何時しかユウ達の目の前には学び舎が広がっている。

まるで城か、それとも大聖堂のようなデザインでとても学び屋とは思えない風貌だった。

「キヤアアアアアアアアアア！？ こっちに来る！！」

「逃げろ！！」

「退避退避！」

そのまま校舎前の広場へグングン迫って来る。

[illegible]

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「死ぬ死ぬ死ぬ！！　死んじゃいますぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ」

「うっうっうっ！？」

「流石にコレは……」

「こんな死に方はいやあ ああああああああああああああ
ああ!？」

そのまま地面へ激突。

クレーターを作り、土煙を上げた。

「俺……生きてるのか？」

「酷い目に会ったわ……」

「おひさし？」

「信じられん。無傷だ……」

「夢じゃないのよね」

喧騒が聞こえる中、皆誰もが生きている事に奇跡と言つ物を実感した。

ただ一人を除いて。

「ぶ、無事で何よりだね？」

ティスの攻撃。

ドロップキックが顔面に突き刺さった。

「危うく死ぬ所だったわ!!」

「キユウ!？」

ユウの顔面に直撃。

クレーターで固められた硬い地面を滑りこけた。

「……なあクリス？ 終わったのか？」

「ああ。不可解な部分や謎な点は数多くあるが、騒ぎの首謀者を倒し企みを阻止出来たと言うのなら終わったのだろっな」

「こ、腰が抜けましたぁ……」

「何だか実感沸かないわね……」

それぞれが思った事を口にして行く。

それは兎も角、遥訳危機は去ったのだと思い、誰もが力を抜かしていた。

「皆無事だったかね？」

「学園長!？」

唐突に学園長が現れる。

あんな事があつたと言うのに未だ愛想笑いを浮かべていた。

「あの……学園長……」

「言わなくてもいい。兎も角今はユツクリと休んでくれ……」

ユウが言わんとしている事は分っているのか、トリックは制した。

「皆それぞれが困難状況でベストを尽くした。そしてこうなったんだ。過去を悔いるより先の未来を考えて欲しい」

「だけど……」

「ユウ。人には限界がある。例えばそれが神の力を持っていたとしてもだ……」

まるで諭すようにユウを落ち着かせる。

「……はい」

ただ力なくそう言った。

（これで……よかったんだよね？）

とてもめでたし、めでたしと言える状況ではなかったが、兎も角戦いは一先ず終結したのであった。

第五話END

エピローグ

優しき勇者・悲しみの冥王

五万ヒット記念「亡者は黙って地獄に堕ちろ！」

エピローグ

アレから数日後。

この戦いで亡くなった人々の盛大な葬式が行われていた。
皆黒い喪服に身を包み、噴水広場だった場所の記念碑に大勢の人間が詰め掛けている。

この記念碑にはあのファウマージとの戦いで亡くなった者達の名が刻まれていた。

主に前線で戦った教員や警備の人間。

中にはギルドの人間も含まれていた。

生徒も少ないながらも犠牲者を出していたがたったの数名と言う奇跡的な数字だった。

「テオス侯爵。お忍びで参加してくれたとはねえ」

「私も貴族の端くれです。それにこの学び舎には私も世話にもなりました。我々の手配が……」

何時も通り黒い紳士服を着たトリックの横に同じく黒い喪服を着た若い男がいる。

背も高く、顔も凛々しく整っており、手入れが行き届いたブラウンの髪の毛、繊細そうな穏かな瞳。

ただ直立姿勢だと言うのに気品が滲み出していた。

そんな男が学園長に対して詫びを入れている。

こう言う状況でなければこの二人の邂逅に周りから注目を浴びていただろう。

「失敗を悔やむとは言わない。だけど悔やみ過ぎるのは体に毒だ…… 第一こう言う場所でそう言うのは似合わない。この学園で起きた事は全て私の責任なのだ…… だから君には責任は無い……」

その後、トリック学園長は警備体制などを調べて見たが予測どおり警備の人間（それも学園と外を結ぶゲートを管理する兵士を中心）、そして学園内をパトロール、各設備の点検を請け負う人間などに催眠魔法が掛けられていたと思われる痕跡があった。

その事実はある事実を予測させた。

（これは悪魔で推測だが）ファウマージは催眠魔法を使っただけでなく、内部へ魔導具を運び、そして設置する人間にも同様の仕掛けを施していたのだらうと思われる。

阻害魔法の存在もあったであろうが、これで常識的に不可能と思われる驚異的な速さで仕掛けの準備が完了したと思われる。

催眠魔法は魔法使いによって効果や範囲は様々だが魔王クラスともなれば抗うのは至難の技だったのは容易に想像できた。

更に今回の一件には過去の上司が何かしらの形で絡んでいる。

それを考えた場合、これでは仮に万全だったとしても防ぎようにも無かつただろう。

「……分りました。ですが自分を責め過ぎるのもどうかと」

「……ふう。私ももう年かねえ」

トリックは亡きウンカイの事を思いながらもこの学園の未来を案じていた。

そしてこの場には彼達の姿もあった……

「……まるであの地獄が嘘の様だ」

ビュウは心底そう思った。

「ああ。俺もまるで実感が湧かない……夢の様だった」

クリスも同意する。

だが彼達がどう思おうと現実だったのだ。その証拠に体中が筋肉痛でとても痛い。

遂先日まで自分達は諸々な事情で復旧作業と言う重労働をやらされていたのだ。やはり無断で暴れまわったのが不味かったらしい。

だがこの場を支配するブラックな気分を紛らわせるには丁度良かったかも知れない。

「流石のティスも今回は大人しいな。テツキリ血も涙もない人間だと思ってたぜ」

ふと横に目を向ける傍にはセドナもいたか大人しすぎて気味が悪いくらいだった。

「ビュウ。どうしてティスが冒険同好会に入っただのか分かるか？」

「え？」

突然話題を変えるクリス。

「ただ純粹にこの世界を見て回りたいと思っているんだ。だから今出来る精一杯の事をやるうとした。だから……」

「おい、その口振りだと……何かお前が立ち上げたみたいな言い方何だが」

悲しみにくれている人々のだ真中でやる話題では無いのは分るがどうも気になってしまった。

ティスが入ったと言う事はつまり冒険同好会は元々クリスが立ち上げたと言う事になる。

こんな事言うのも何だかとても気になった。

「元々俺は「暗黒大陸研究会」を作ろうとしていたがどうも集まりが悪くてな。それでティスが入って来て……」

「つまり乗っ取られたのか」

「ああ。その時に名前を変更された」

あいつらしいとビュウは思った。

「こんな場面でそんな真実聞けるとは思ひもしなかったよ……」

「こんな場所だからこそだ」

メガネのズレを直してキザな態度を取る。

（不謹慎だとは思うが）クリスなりに気を利かせたようだ。

「で？ どうしてそれが賢者の卵に路線変更したんだ？」

「さあな。好奇心と言う奴だろう……だが、「今のティスは」明確な目的で探そうとしている」

「……そうか」

その理由は聞くまでも無く分るため、ビュウは話題を変えた。

「そう言えばユウは？」

「ウンカイ先生の墓地へ向ったよ。一人でな……」

そう言つてクリスは視線をその場所がある方へ向けた。

ユウは学園の静かな墓地に来ていた。

学園の外れと言っただけあつてとても静かである。

眼前にはウンカイの墓があつた。

もう個別の葬儀が終わつたため近寄る人はいない。

学園長が気を利かせたのか、それともウンカイの趣味か日本風の角ばつてゐる綺麗な墓だつた。

鋭利な刃物で切り刻んだかの様に日本語でウンカイと言つ名前まである。

「死んだつて言つのに実感が湧かないね……」

その場に座り込み、語りかける。

「まるでさ……実はまだ生きてるんじゃないかつて思う時があるんだ」

まるで子供が自分の頑張りを父に伝えるかのように……

「覚えてるかな？ 初めて会つた時の事？ あなたはトリック学園長と同じく僕の過去を知つた上で接してくれた……」

その時の事を思い出し、目から暖かい滴を流し

「僕にとってあなたは肉親と同じぐらい……」
『ユウ……』

ファウマージだ。どうやらまだしつこく生き延びていたらしい。
体はボロボロだがこの場へ隠れてコソコソと現れるぐらいの余力
は残っていたようだ。
恐らく今回の

「消えうせて。今は相手したくない気分だから……」
『お前だけは……』

そう言っただ束無足取りで一歩、一歩大地を踏み締めてやって
来る。

『お前だけはこの手で……』

どうやらマトモに考えられない程に疲弊しているらしい。

『お前だけはこの手で始末してくれる……！』

しかしユウにはどうでもいいことだった。

「亡者は黙って……！」

血走った目を向けてユウは顎を蹴り上げ、そのまま頭蓋骨もと
も蹴り碎くように力カト落しを決める。

魔力による身体強化を組み合わせた蹴りだ。

『あああ……あああああ……』

「地獄に!!」

駄目押しにもう一発。

思いつきりカカト落しをギロチンの様に振り落す。

『ブボゲエ!?』

ファウマージは溜まらず潰れたカエルのような呻き声を挙げた。

「落ちろ!!」

構わずユウは踏み付け続けた。肉体が完全に消滅するまで思いつきり何度も何度も。

その度に大きな地響きが響き渡る。

「ハアハア……」

やがてファウマージの肉体は消滅し、ユウはウンカイの墓地を後にする。

軽くクレーターを作ってしまったが……

「終わった……」

ユウはその場にへたり込む。

「……帰ろう」

復讐は虚しいとよく聞くがそれは本当だった。
ポツカリ空いた穴が全く塞がらない。

(ユウ)

「え？」

どう言う訳かウンカイの姿が見える。

死んだ筈の人間がこうして……一瞬ファウマージの策略かと思えたが……

(おぬしはまだ何かとんでも無い隠し事をしておるようじゃが……それでもワシはユウと出会えて本当に良かったと思っておる。まるで可愛い孫が出来た様じゃった)

考えるまもなく優しく語り掛けてきた。

(人は何れ老いて死ぬ……じゃがその日が来る迄に人は一生懸命生きねばなんのじゃ……例えどんな過去を持つとも……)

その間何も考えられなかった。

(だからその日が来るまでワシの元へ来るんじゃないぞ?)

そして光と共にウンカイは消えていった。

「何だっ たんだ…… 今のは……」

幻覚か？

ありとあらゆる可能性を考えてみたが分らなかった。
もしかすると……

(いや止めておこう)

野暮なことは考えないでおいた。

「分った。僕は行くよ……」

そう誓い、ユウは学び舎へと戻って行く。

新たな物語が始めるために。

五万ヒット記念「亡者は黙って地獄に堕ちろ!!」

〓 完 〓

第三章：プロローグ

*ユウ「この第三章は色々と注意点があります。

プロローグは五万ヒット記念であるファウマージ編より以前のお話。著しくはあの時期に至るまでの経緯を描く物語です。

ちなみに光君はルトバ王国へ向っている最中です。

第三章プロローグ

ユウは人の良さそうな笑みを浮かべる初老の紳士……トリック学園長の前に来ていた。

観葉植物に囲まれたベランダの中心に置かれた丸く白いテーブル。シルクハットとステッキ、生え揃った髭、紳士服がよく似合う。見ているだけで何だか安らぎが生まれてしまう程に。

大体の人間ならこの人物に警戒心を解いてしまっただろう。それほどまでにこの学園長は柔らかい雰囲気醸し出していた。

流石はこの広い学園の長と言っべきか……

「少し辛そうな表情をしているが大丈夫かね？」

「ええ何とか」

短い黒髪を揺らし女顔の表情で笑みを返して差し出された暖かいコーヒーを口に含む。

ちなみに今のユウの服装は青を基調とした学ラン。
一番思い入れのある服装である。一応平静を装っているつもりで

いるが、今のユウは内心もうグチャグチャだ。
まだ涙を流していないのが不思議なぐらいである。

（確かに嬉しいけどさ……）

本当に唐突な決断だった。

もう一人のユウとの完全な融合により記憶喪失は間逃れた……本来は喜ばなければならないが色々辛い問題と直面せざる終えなくなった……いや、これも身勝手な考えなのだろうと思う。

また記憶喪失になってデモンズパラダイスの時の様になれば目も当てられない。

白の貴公子から得た（正確には記憶を全部コピーした）情報から察するにまたあなる可能性が高いのだ。

感謝すべきなのだろうが凄まじい戸惑いを覚えている。

「で？ 君はこれからどうするつもりかね？」

この話から読み始めた読者の為に軽く解説しよう。

デモンズパラダイスを去った後、ユウはこの学園都市に辿り着いた。そこでギアード配下七将の一人「マグネード」を間接的に撃破（自分が生み出したレプリ人間だが、ここではそう言う風に表記させて頂く。詳しくは外伝シリーズ「第二の終り」参照）を打ち倒したのだ。

そこでエリス・キャンベル先生を仲介し、こうして面談の機会を得たのだが正直いっぱいっぱいだ。

「……本当はこの学園の生徒になろうかなと思っていましたが、正直今は分らないんです」

「分らないとは？」

「僕は……とても薄汚れた人間です」

それからユウは今迄の経験を淡々と語り始めた。

この世界に來た経緯。

記憶喪失になったこと。

デモンズパラダイスでの出来事。

そしてこの学園に來た経緯。

何も言わず学園長は全部黙って聞いてくれていた。

「そうか……君の人生はまるで人の悲しみを体現しているようだ」

「人は誰しも幸せを求める。好きな人と結婚したい。楽して生きたい。金儲けしたい。出世したい。君の行為は人として当然なんだよ」
「人として……当然？」

何だか懐かしい気持ちがフラッシュバックしていく。

暖かい想いと共に……次々と頭の中でスパークが走るのを感じた。以前の世界で過ごした時間はとても辛い事も多かったが自分の存在について、そして断罪するべき人類についても色々と考えさせられた。

ある者は自分を傲慢だと言った。

ある者は自分を哀れな人形だと言った。

ある者は壊れた機械だと言った。

全部自分に当て嵌まる事柄だ。言い返せない。

「何故この学園に來るのが幸せになる事に帰結するのは分らない」

「それは……もう一人のハデイスの……願いでもあるし、そして確かめたいこともあるから」

「願い？」

トリックは疑問を投げかけた。

「はい。人の心が持つ可能性を……確かめることと、知りたいんです」

それはユウの本心である。

ユウが元いた世界を救ったのは正しくその心だったからだ。

（まあ色々と超科学的な補佐もあったが）

「だけど心の内では別世界のハデイスが未来を託した人達のような人と出会える様な予感がしたからです」

続いて願望をも打ち明けた。

どんな理不尽をも力尽くでぶち壊せる。

彼達のような人達との出会いを……

「こんな事言うのも何だけどそれは買い被りじゃあ無いのかな？」

トリックも何を行っているのか笑っているのか自嘲染みた栄美を浮かべていた。

「悪魔で予感ですから……」

それはユウも自覚しているので一応付け加えておいた。

確かにあんな奴達がそう沢山いてたまるかと自分自身へ突っ込んでおく。

「まあ内の生徒達の命の恩人だ。恩を仇で返す様な真似はしたくないしなあ……とりあえず内の生徒になつてみない？」

これはユウも驚いた。

自分で言うのもなんだが得体の知れない奴をよく生徒にする気に

なつた物である。

「……軽く決めちゃうんですね。あなたと言う人は」
「よく言われるよ」

ユウはこの学園への転入が決まった。

どんな思惑があるのかは分らなかったがユウは一先ず学園長を信じてみる事にする。

人を疑う事に疲れたからでもあるが何故だか信じられる様な気がしていた。

（ユディさんとか光君とか今どうしてるかなあ？）

そして新たな物語が始まる

第三章：プロローグEND

第三章：プロローグ（後書き）

2010年1月29日

かなり時間が経ってしまいました但明けておめでとう。

Mr Rです。

PIXIVで知っている方もいるとは思いますが精神的に色々ありました。

だけどまたヒーローフォース見たいになるのは嫌で、こうして舞い戻って来た次第です。

作業の遅れなどもありまして五万ヒット記念と本編の進行を同時に行うと言う決断に踏み切りました。

これからの執筆作業はなるべく自分自身の精神に合わせ、自分のペースで進めて行きたいと思います。

第一話「入学演習」

優しき勇者・悲しみの冥王

第三章：魔法学園

第一話：入学演習

魔法学園入学にあたり、ユウは入学試験事態は免除されている。

マグネードの一件で目撃者が多く居るため、その実力は既に知らしめているので（まあ医療方面でだが……）やる必要が無いからである。

エリート待遇のユウは学生寮の部屋も特別に個室が与えられていたがちよつと見ない間にとてもカスタマイズされていた。

部屋には昭和臭が漂う箱型テレビ。

日本のゲーム開発初期時代のハードとカセット。

次元間でも接続可能なインターネット。

ソファア！。

何か言われたら『魔法の最新鋭技術です』と答えるつもりだ。十人に五人位は半信半疑に思うだろうがまさか異世界から持ち込んだ物だとは思うまい。

ちなみに地球の秋葉原で全部買い揃えた。

ユウの力を使えば次元間の行き来など自由にできる。

尚バッテリーは自分から発せられる魔力の電力を変換して使用する予定だ。

「これでよし……」

ユウは青い制服へ着替える。より正確に言えばブルーのブレザーと水色で縁取られた白いユニコーンの柄がつけられた純白のショートマントだ。

続いて赤いネクタイを身に付ける。この世界の文明からすればかなり特異である事は間違いない。

女子の制服もブレザーとスカート。これが風紀委員になると白い制服になるらしい。

もう何かしらの形で地球との関わりがあるのは疑い様が無い事実だろう。（てか何だ風紀委員って……）

ちなみに筆記用具などは一応自分の力で精製できる。だけど秋葉原に行った時についてに買った。

不審がられるかも知れ無いがここは魔法学園。最悪『魔法の力で』と言う魔法（詐欺とも言う）の言葉で通すつもりだ。

お下げ式のカバンに詰め込む。

尚、資金はちゃんと合法的な手段で手に入れた。

所為、物々交換である。

金（自分の力を使えば余裕）が入ったトランクケースでちよいとその手の店に行つて換金する。

不審がられるかも知れ無いがまああんまり帰らない世界なので別にどうでもいいかと思つた。

（それにしても驚いたな）まさか地球じゃあんな事になってるなんて）

自分が通つていた学園に顔を出してみたが暫く見ない間にかかなり荒れ果てていた。

何でも自分が行方不明になったせいでイジメが明るみになり、推

薦や大学入試などを控えた先輩達がユウをいじめていた後輩に憎しみを抱き、上級生と下級生で連日抗争が繰り広げられているらしい。因果応報と言う奴だろう。

また教師も親からの苦情やマスコミからの報道などでいっぱいいっぱいになっていた。

ご愁傷様と言う奴である。

家にも顔を出したがもぬけの殻。どうやら引越したらしい。どうして引越したかは想像するに容易いが止めて置いた。

正直学校の方は心が痛んだが、今更顔を出してもまた騒ぎが起きるだけだ。

（それに僕はもうある意味死んでるかね……）

他の世界のユウとこの世界のユウが混ざり合い、第三のユウとも言える存在となっていた。

ある意味間違いではないだろう。

「ふう……」

考えを打ち切り、思考を学園の事に切り替える。

（何だか不安だなあ）

もう一人のユウの記憶によると魔法学園に召喚されて編入と言う王道パターンがあるらしい。

そして主人公は何かしらの特種能力があつてリア充染みた生活を送るというのもテンプレだそうだ。

まあ自分の場合は処刑されそうになったり、脱走したら殺されて、隠居決め込もうかなと思つたら奴隷になったり、性奴隷と一緒に同居生活して人殺しとか相手選手の陵辱を共用されたり……ダーク

ファンタジーもいいところだ。

しかもそれがまだまだ続きそうな気配があると言つ。入学初日だと言つのに何だか暗い気持ちになって来ていた。

出来る事ならばもうちょっと萌え系のラノベの様な……

（あれ？ 何か獣に襲われる小動物の様な気分……）

体がプルプルと震える。

何かおかしい。

そう言えば似た様な現象を自分とキャラが被っているあの少年も引き起こしていたがまさか……

（考えるのは止めにしよう）

ユウは荷造りの準備を始めた。

思考を打ち切ると奇妙な事に震えが止まったが……その理由はあまり考えないようにしていた。

その頃ユディは……

「えーとユディさん？ どうかしたんですか？」

「いえ。ちよつと夢の中で会得し技能を使つてちよつと……」
「？」

ルトバ王国での武道大会へ向けて鍛錬を続ける光は首を捻るばかりであった。

「で？ どうして僕は演習施設にいるんですか？」

思考を現実の光景に引き戻してユウは案内してくれた女性教諭に問い掛けた。

確か免除とか言っていた気がするが何時の間にやら後悔試験

この演習施設はローマのコロッセオみたいになっており、観客席には多くの生徒などで埋まっている。

「学園長の配慮だ」

「成る程」

黒髪を三つ編みに結んだ二十代半ばの女教諭が言う。

綺麗な女性ではあるのだが目が鋭くて背が高く、体育会系と言う言葉が似合いそうだ。

地球の学校なら間違い無く保健体育とか体育を担当してそうだ。

服装は黒いズボンに白いシャツの上からベストを着ており、その上からも分るぐらいスタイルが良い。

何だか異世界人らしくない衣装にユウは戸惑いの様な物を覚えていた。

（トリック学園長もどう言う意図でこんな事をやったのやら……）

授業を免除させて見学を許可させているのは恐らく向上心を図るためなのだろう。

人は誰しも優れた人間に憧れたりする物だ。嫉妬、妬みなどはそれを認めたく無いがための態度だ。

それがどう言う形であれ生徒達にプラスになるかも知れないと思っただろう。

教育において大切なのは本人の向上心だ。教え方が上手い教師と

は向上心を維持し、それを持続させる事ができる事である。

最も中には軍隊レベルの指導な馬鹿な輩も親を含めて大勢居るわけだが……

「アレが噂のレヴァイザ？」

「ただ聞いた話じゃレヴァイザは」

「そうなのか？」

ハハハと優は苦笑いする。

地球でもそうだが学び舎という閉鎖空間では情報の広まりが早いのだろ。広まっている情報とは勿論マグネードの一件だ。

後から知ったが自分が呼び出したレヴァイザについて色々噂になっているらしく、それ目当てに来ている奴が多かったのだとか。何でもレヴァイザは王国が開発した最新鋭の魔道具を身に纏った戦士なのとか。他にも色々ある。

根も葉もない情報ソースとは信頼性が欠落している様な物が多数を占めるが噂とはそういう物だ。

ちなみにレヴァイザの能力は装着者のポテンシャルを含めてかなり高い。本物であれば単独でも自分を破壊できる可能性を持つ存在だ。

「で、対戦相手は誰？」

生半可な相手なら四回戦ボクサーとヘビー級の世界チャンピオンボクサーが相手するぐらいの悲惨な末路になるのだが。

できればある程度演出が効くぐらい強い相手を所望したい。

「新入生から選り抜いた精鋭達だ」

「ふえ？」

向い側のゲートから大量に生徒が流れ込んで来た。
自分と同じ青を基調とした制服を身に纏っている。

「模擬戦のルールは簡単。首にぶら下げた魔道具は全ての攻撃を代替してくれる。その抗力が切れた者は即失格。場外へ自動的に退場となる」

簡潔に教諭がルールを説明した。

「尚、ユウ。お前にもこのルールは適用される」

当然だろうと思った。

そうでなきゃ戦いは成り立たない。

「ようは当らなきゃいいんですね？」

「そうだ。だがそれが最も難しい……お前の力は聞いている。回復魔法などは既に知っている。知りたいのはお前自身が持つ真の力だ」

簡潔に女教諭は腕を組み、キツい口調でハッキリと答えた。

「戦闘開始は私が合図を送る」

「分りました」

ふとどうするか考える。

これはとある物語に出てくる傭兵だが、真の傭兵は依頼主の気持ちになって依頼に挑むと言う。

依頼主の願いは自分の入学を力で認めさせる事。そして対戦相手の成長を促す事。この二つだ。

つまり全力で一気に殲滅するのではなく、最大限に相手の実力を引き出してそれを打ち倒す方針がいいだろう。

かつてに難易度を挙げている気もするがちょっと面白くなって来たと内思い始めていた。

「五十人相手に一人で戦えだつてさ」

「勝負になるのかこれ？」

ザワザワと相手の言う事が耳に入る。

ルールの性質上、相手側にも勝算はあるのだがあのムードでは連携は無理だろう。

開幕に魔法ぶつ放す準備をしている者もいれば、剣で斬りかかる準備をしている者もいる。

だが大半は油断しきつたムードを漂わせていた。

「お前達！！　しっかり準備をせんか！！」

会場全体に響き渡る声で自分をここまで案内した教師が一括。

一瞬で会場内がシーンと静まり返り、先程まで慌しく準備をした。以前学校生活をしていた時の様にユウも一瞬体をビクツと硬直させる。

「開始五秒前！！　5、4、3、2、1……」

カウントが刻まれる度に緊張する

「はじめ！！」

予測通り開幕魔法の一斉掃射が始まる。

種類は様々だ。

炎魔法、水魔法、風魔法、稲妻まで飛んで来る。後ろではゴーレムの製造に取り掛かっている奴や、何やらモンスターを召喚を始め

ている奴までいる。

だが今は自分に接近してくる攻撃魔法だ。

まず若干自分の体を浮かせ、滑るように移動する。風魔法の一つ、エアークラフトだ。これで直撃コースの魔法だけを的確に避ける。

煙が視界を包み、攻撃がやんだ所で再びユウは行動を開始。

（一応非殺傷設定でと……）

どこぞの白い魔王みたいに開幕スターライトブレイーとかは流石に可哀想なので脳内の段取り通り普通に相手をする事にする。

煙の中、地面の上を滑空しつつ壁際に移動。観客席とは段差があり、丈夫な壁で区切られており、観客席も丈夫な障壁で守られているので流れ弾が当たって惨事になる事は無いだろう。

「これでよしとー!」

ユウは一旦ジャンプ。体を横向きにし、壁に吸い付く様に高速で移動。

魔法があるこの世界でもこれには誰もがド肝を抜かれていた。

まさか魔法障壁へ吸い付くように行動するなど、想いもよらなかった。

「嘘でしょ!？」

「あんなのアリかよ!」

その間にもユウは武器を転送。

M-60 軽機関銃を出現させ、フルオート射撃。

前以って準備していた物だ。

秋葉原のガンショップで購入し、魔改造を施したのがこれ。

何故M-60なのかは自分の好みでテキトーに選んだからだ。そ

れ以外の理由はない。

弾はBB弾ではなく自分の魔力を込めた魔力弾を発射。非殺傷設定なので良い子は真似しないでください。

五十人が殆ど一塊に密集しているので碌に狙いをつけなくてもガン当る。あんまり銃は使った事は無いがこれは気持ちいい。

シールドを削られて次々と強制転送されて行く生徒達。学園のよく出来た模擬戦のシステムに感謝する。

「調子に乗るな!!」

空中を飛行しながら生徒が数名飛んで来る。

先頭の奴は赤服の男の子だ。

手持ち武器は剣、槍など。

慌てず騒がず発砲。

その生徒達に弾をばら撒いたが回避。その隙を狙って剣を奮う。

これは実戦ではなく訓練だ。死の恐怖が無い分ある程度大胆な行動を行えるのだろう。

「流石だ今回のために集められた精鋭達……」

ユウは独楽の様に横回転を決めながら飛翔。

そのまま前回転を決めながら向い側の魔法障壁を蹴り、地面に着地。

無駄に見える無駄の無い無駄な動作を決める。

この時点で既に相手の数は二十名。

こっちは未だ無傷だ。

「そろそろ本気で行くよ」

M-60を仕舞う（魔法の力です）。次やる時はヒトラーの電動

ノコギリでも使ってみようと心に決める

今度は漆黒のマジックソード（魔力剣）を両手に生み出し、中二病よろしく背中から魔力で形成した悪魔の羽を生やす。

悪ノリして目を赤く光らせる。今のユウはノリノリだった。

もう一人のユウの影響もある。

それを知ってか知らずか教師だけでなく生徒達も息を飲んだ。

「いただき!!」

女性徒の一人が杖を持って魔法攻撃を放る。

ファイアボール。

迫り来る火の玉に対してユウが取った行動は切り払いだった。

「剣で魔法を切り裂いて……」

驚く暇も無く、ユウは一気に近付き、袈裟斬りで切りつけ退場させた。

これが合図となり再び攻撃が始まる。

「別方向から一斉に仕掛けろ!!」

「分った!!」

空中に飛んだ生徒が矢の様に一斉に飛び掛る。

有効な手段だがタイミングも動作もバラバラで熟練者なら容易に対応できるだろう。

これはいただけない。

スペインの闘牛士のように相手の攻撃を引き付けてカウンターをお見舞いする。

数々の修羅場（主にデモンズパラダイス）を潜り抜けたユウならこれぐらいは容易い。

続いて召喚されて来たらしいドラゴン。上には小柄な生徒が乗っている。召喚されたドラゴンは小型の部類だがゾウ並の大きさはある。

普通の人間からすればこれだけでも充分に脅威だ。流石魔法の世界。一々科学的考察をするのがバカらしくなってくる。

「だが!!」

「ヒイ!?!」

相手の振り落しを見切って跳躍。操縦者の眼前に降り立ち切り裂く。

この召喚者は接近戦になる事は全く想定していなかったのだろう。呆気なく倒せた。

「次はゴーレムか……」

続いてゴーレム。この世界に来てから何かとゴーレムと縁がある。今回現れたのは砂を媒介にしたアースゴーレム。大きさは4m。ボトム のATかコードギア のKMFぐらいの大きさだ。まだ未熟なのか、それともそう言うデザインなのか無骨でこれと言った特徴も無い形状だ。

中には馬のゴーレムを作り出してそれに跨り、襲い掛かって来る女剣士もいた。

流石魔法学園と思いながら加速魔法を掛けて襲撃して来た剣士を一閃。

「死角に回り込めば!!」

「クッ!?!」

剣を持っていない方に回り込み、切り裂く。

これも呆気なく片がついた。

「ラスト2!!」

降り掛かって来るゴーレムの腕を斬り飛ばし、怯んだ所を一気に詰め寄り縦一閃。
退場。

「これでラスト!!」

最後に残った相手に向き直る。
相手は赤服の女剣士。

左右に伸びたブラウンのショートカット。大きな瞳に気高さを宿し、絶望的な状況でありながら未だに闘士を欠けている様子は無い。ラノベなら充分ヒロインの一角張れそうだ。
手に持っているのはロングソード。使い込まれている形跡がある。
お世辞にも綺麗とは言えないが良い剣である事は分った。

「せめて一矢報いる!!」

実力差が分り、勝ちを諦めているらしい。
意地だけで勝負を挑んでいる破れかぶれのような感じる。
個人的には最後まで勝負は分らないぐらいは言っただけだった。

「貰った!!」

猛スピードで一気に距離を詰める。

「クッ!」

魔法剣に反応。

危なっかしいが受け止めやがった。

続いて二連撃目。これも受け止めてみせる。

何なんだこの少女は？

「これを受け止めるとは……君は一体！？」

続けて、二連三連振るうが回避。追い詰めてはいるがそれにユウは驚きを感じる。

手は抜いているが恐ろしいセンスだ。

これでも数多くの剣術使いと戦って来たが……この子には何か片鱗の様な物を感じ取った。

（ッ！？ また寒気が！？）

本日二回目。

また遠くから獲物を狙う野獣の様な感覚が。

しかも今回は軽く殺意の様な物が……おかしいな、ユディさんは
そう言う能力者じゃ無い筈何だが。

「だがこれで決める！！」

「ッ！？」

一撃目で想いつきり相手の剣を攻撃し、ガードを崩す。

そして二撃目で相手に止めを刺そうと……した所で体当たりして
来た。

「なんと！？」

バランスを崩している間に相手は態勢を整える。

こちらも一旦距離を離す。

「はあ……はあ……」

休んではいるが攻撃続行。

作戦を立てる暇すら与えない。

「でやあああああああ！！」

気合一閃。

剣を縦に振るう。力が入り過ぎて動作が大きい。

滑り込むようにユウは再度に回り込む。だが今度は足が飛んだ。

スカートの下が丸見えになったが……誰だ、遠方から殺気は飛ばしているのは（一人しか心当たり無いが）。

「これで！！」

今度は被弾覚悟なのか、至近距離で魔法を打ち込もうとしてくる。属性は炎、ファイアボール。

即興で作り上げたのだらう。威力よりもその場凌ぎで作ったのが見え見えの状態だ。

「なっ！？」

片足を軸にして独楽の様に回避。無駄に見える無駄の（ry）を決めながら斬りつける。

そして退場。

名前ぐらい聞いた方が良かったかなと思った。

「勝者ユウ・オオミヤ！！」

勝利宣言が響いた後、弾ける様にして歓声が響き渡った。

「いやゝやりまくったねゝ」

「学園長殿……」

何時の間にやら学園長がやって来る。

大方どこかで観戦していたのだろうが何か出現が早過ぎる気がする。

「しかしこれじゃあまた別の意味で明日から大変な事になるね」

「学園長……自分でセッティングしておいてそれはどうかな」と思っています」

舐められるよりかはマシだろうが……許容範囲とするしか無いかと思った。

「ユウ・オオミヤ。君の实力は認めよう。だが学生となった以上、授業での手抜きは許さんぞ。以上だ」

「あ、はい」

そう言い残して黒髪の女教諭は去って行く。

この人の担任にはなりたくないなあゝとか考えつつユウはハアと溜め息をついた。

（明日から何だか大変な事になりそうだなあ……）

第一話 END

第二話「レナ・バートネット」(前書き)

お待たせしました第二話です。

第二話「レナ・バートネット」

優しき勇者・悲しみの冥王

第三章：魔法学園

第二話「レナ・バートネット」

この学園は四年生で様々なクラスがある。

ドラゴン、ウンディーネ、グリフォン、ユニコーン、ゴーレム。碌に見学もしていなかったので入るクラスは学園長にお任せにしておいた。

そうして入ったのはユニコーンクラスである。

「噂になっているとは思うが転入生を紹介する」

合図と共に教室のドア（横へのスライド式）を空ける。

昨日、あのバトルフィールドに案内したあのキツそうな黒髪の女性がいた。

相変わらずシャツに黒いベスト、ネクタイ、硬そうなズボンと世界観をシカトしている様な服装をしている。

そしてユウは緊張を覚えながらも黒板の前に立った。

「アイツが……」

「本当に男なのかアレ？」

教室はおよそ三十人。種族も様々だがやはり人が割合的に多い。人種とかの制限などは基本設けていないのだろう。

中には竜の翼膜を頭部から生やした人間やまんま外見が犬な種族までいた。

また教室は日本とは違い、机が一行ごとに段差があるタイプである。

だから皆を見渡す為に顔を挙げなければならなかった。

「もう知っていると思うが特例で編入したユウ・オオミヤだ」

「皆さんよろしく願います」

と軽く挨拶した後、自己紹介を始める。

「この学園に来る前は色々と旅をして来ました。この学園に来た理由はちよつと皆と一緒に魔法を学ぶ場に関して憧れがあったからです。色々はまだ不慣れな点がありますが皆さんよろしく願います」

軽くハキハキとした声で説明を終えた。

内心ふう々となる。

ちなみにユウの紹介の内容は一応嘘はついていない。

旅はしていたし、動機も打算的な部分があったと言え本音である。

(……何か罪悪感が)

そう思わずにはいられないユウであった。

「さて、席はビュウの隣が空いてるな」

「あ、はい」

勉強道具が入ったバッグと共に席へと向った。

「あ、お隣いいですか？」

「ああ……」

隣には芝生の様に短い茶髪のショートヘアをした平凡で頼り無さそうな少年がいた。

無気力そうな感じである。

この生徒の名はビユウ・スロウ。この男と妙な関係が続ける事になるなど、両者とも思いもしなかった。

「気軽にユウって呼んでね？」

「ああ……じゃあ俺もビユウでよろしく」

軽く挨拶して席へと座る。

「あれ？ あの子は確か……」

「ああ最後にユウと斬り合ってちょっとした英雄だよ。名前は確かレナ・バートネット」

ふと目を前に向けると昨日、最後に自分と斬り合った女剣士がいた。

左右に伸びた茶色の短髪。可愛らしい大きな瞳。綺麗に整った顔立ち。

そんな容姿でもとても男勝りで勝気な雰囲気漂っている。

見間違える筈が無かった。

名前はレナ・バートネットと言っらしい。

（あつ目があった）

一瞬視線が重なったが相手は機嫌が悪そうにフンツと目を逸らした。

どう言う理由があるのか分らないが不満があるらしい。

「赤服になる奴は大概貴族様の出か余程魔法の腕が良い奴か。もしくはこの学校に来る前にある程度英才教育を受けた奴だ」

「へえ」

貴族と言う単語で少しデモンズパライスの嫌な記憶が蘇ったがスグに頭から振り払う。

（勉強かゝ久し振りだな）

ちなみにユウは元々頭がいい。
特に暗記能力はずば抜けている。

（……この能力つてもしかして）

そこまで考えておいてユウは一旦思考をポジティブに切り替える。
折角の初授業だ。
明るく行きたい。

（思えば本当に苦勞の道則だったね……）

地球でもいじめられてばかりでこの世界に来てからは呪われているかの様に戦いの連続だったからだ。

恥ずかしながらちよつとワクワクしている。

「ちなみにレナはクラス委員長だから団体戦ではリーダーになる」
（……く、クラス委員長って本当にここ魔法学園だよね？）

ユウは心の中で何度かめのツツコミを行った。

さて授業内容だが日本の学校を元にして独自のアレンジを加えた様な内容になっている。

魔法を学ぶだけでなく実践的な体術関連の教育を行っており、実技試験も多いのも特徴だ。

少々歴史や文法に関して梃子摺っているが別にスーパー転校生を気取るつもりも無いので素直に欠点を認めてクラスに強力を求める事にする。

（それにしても人が沢山声を掛けてくるね……）

昨日流石にやり過ぎたせいか色々声を掛けてくる。

特に実力面が気になる様子で一応旅を続けて行く内に得た独学だと言う事にしてあった。

まさか自分が世界の破壊者（未遂）でデモンズパラダイスからの脱走者だとかクソ真面目に答えるのは止めておいた。

尚、デモンズパラダイスに関してさり気無く聞いて見たが学生の間でもかなり有名ならしい。

評価は一貫して「人が近付いてはならない場所」だと言う事になっている。

話を聞いて行く内に自分は飛んでも無い場所で生活していたんだなと改めて思った。

「それでは訓練を始める」

担任は校舎（城）の敷地内にある広い運動場のど真ん中、何時の

間にか白いジャージに着替えて仁王立ちしていた。

生徒達は訓練を受けた軍隊の様にビシッと整列している。

ユウも同じく礼に習って木剣を握り締めていた。

「いいか。私の授業を受ける以上お前達には最大限の努力を要求する。特にユウ、お前もだ」

「え？ あはい……」

突然話を振られて戸惑いながらも答える。

「戦いの基本は人によって様々だ。だが中には魔法さえ使えば何もいらなとか言う甘ったれた根性を持つ物があまりにも多い……」

まるで説教でもするかのように生徒達へ言い聞かせる。

「だが魔力が無くなればそれまで。兵士……最悪村人A以下だ。そんな事態を避ける為に私は貴様達を鍛え上げる」

ユウはこの意見については肯定派だ。

確かに魔法は便利だ。上手くマスターして行けば卒業までに地球の軍隊とすら渡り合える様になるだろう。

それぐらい強力な力を持つが逆に魔力が無くなればそれまでだ。

だから魔力の節約や効率化、応用、保有量の増加……そしてより高見に目指すにはどうしても基礎的な体力、肉体作りや戦い方もマスターしなければならない。

皮肉にもユウはその重要性を前世とデモンズパラダイスで身を持って学ぶ事になった。

「魔法学校だったのに何で体術トレーニングなんかあるんだか……」
「ほお、不満そうだなあビュウ。丁度いい、この時間お前は直々私

の手で鍛えてやろう」

「ウエエエエエエエエエエ！？」

（口は災いの元だね……）

生徒達から笑に混じってビュウの悲鳴が聞こえた。

「お前は入学したから何時もそうだ。何でお前は魔法学園に来たのだと思えるぐらいにヤル気の欠片が感じられん」

「で、でも……」

「そうか。ウンカイ先生か、それともロウ先生の個人授業どちらがいいか選ばせてやろう」

「あり難く個人指導をお願いします」

「ふん……最近の子供はこれだから困る」

土下座して頼み込むビュウ。

そこには男の尊厳も何も微塵も無い。

プライドを捨てて保身に走る男の姿がそこにあった。

「いやあ、流石ビュウ君。期待を裏切らないね」

隣にいた女子生徒　首筋まで伸びた茶髪の頭から竜の翼膜を生やし、褐色肌の大人びた印象の少女が笑いながらそんなセリフを言っていた。

外見だけ見れば近寄り難く、レナと同じく男勝りなイメージがあるが性格はまるで間逆だ。

名前はアニニューネ（愛称はアニニュー）時間で行われた一斉自己紹介の際にユウは一つ残らず全て記憶していた名前の一つ。

竜人族の人間で姓に当る「ランドイッド」と言う名称は部族名……

…と丁寧に解説してくれた。

「ビュウ君はあんな感じなの？」

「自分がミスを犯すのは珍しいケースだよ？　まあ不幸体質なのは変わり無いけどね」

「……」

ユウは聞かなかった事にして置いた。

「それぞれペアを組め。追ってやる事を伝える」

担任の指示の元、ユウはペアを探した。

「ビュウ。逃げるなよ」

「いやゝそんな事なんてある筈が……」

（だったら目を泳がせない方が……）

と思った矢先の事だ。

「私とやって貰うぞ」

「君は……」

レナだった。

何故か目を鋭くさせ、声には怒気のような物が含まれている。

（これは……妬み？　嫉妬？　どうして？）

ユウは戸惑いを覚えていたが……

（記憶を探ればスグに解決すると思うけどそんな事したら駄目だよ
ね……）

相手の記憶を読む事も出来たがユウはソレを何よりも禁じている。親しき仲にも礼儀ありと言う言葉がある通り、信頼や友情と言った物を築き上げるには人のプライベート……ましてや考えている事を覗き見るのは言語道断だ。

この関係はそう言った事をし無いと言う前提があるからこそ成り立つ物なのだ。

「ちゃんと魔封じの腕輪は付けてるな？」

「うん」

そう言つて制服の裾から腕輪の魔導具「魔封じの腕輪」を見せる。デモンズパラダイスにいた時は「魔力殺し」と言う首輪を付けられたがこれは付けた人間の魔力使用を出来なくする代物だとユウは説明を受けていた。

元々犯罪者の魔力使用による脱走、脱出などを封じる為の枷として開発された。

この学園でも風紀委員や警備の人間に幅広く配布されている。

今ユウ達が使用しているのはこの授業用に開発された代物だ。（

早い話がズル防止用）

（まあ今の僕ならどうにでもなるんだけどね）

この魔封じの腕輪は封じ込められる魔力の許容量と言う物があり、普通の魔法使いであれば一つも付ければ完全に魔法の発動が出来なくなるが想定外以上の魔力を込められればバラバラに碎け散る。

当然ユウはそれが出来るし、担任はソレは承知しているだろう。

だが担任はユウを信頼してくれているのか、それとも魔法を使えばスグに碎け散るのが分っているのか特に何も言わなかった。

最も忘れていたとしてもそんな事ズルしようなど、微塵も考えてはいないのだが……

（純粋な剣術勝負は別に問題無いんだけど……）

読者の中には随分前の様に感じられると思う方もおられると思うが（外伝や五万アクセス記念、更新ペースの低下など）、時空系列上は数日前までデモンズパライズにいたのだ。

早々剣の技能が錆び付く訳が無い。

また（一応）転生主人公らしく（やっと）チート技能が解放されている状態なのでデモンズパライズ時代よりは総合戦闘能力は上だ。

「ねえ？ どうして怒ってるのかな？ 何か悪い事した？」
「別に」

素っ気無い態度で返される。
自分で不機嫌だと言っている様な物だ。

「……どうして僕と組んだの？」
「悪いか？」
「だって気になるんだもん」

あっけらかんとした表情で答える。
笑顔を作り、体を傾け、漫画ならばニコツと擬音が入るであろうポーキングを取った。

「さて、大体決まったな」

返事が来る前に担任から大きな声が出る。

「先生……俺、この授業が終わったら田舎へ……」

「誰が帰すか」

「ですよ〜」

「何叩かれながら爽やかな顔をしてとんだお前は……たく」

軽く現実逃避したビュウとの軽い漫才を挟んだ後、咳払いした。

「各自、剣の打ち合い練習を行う。セツトメニューをこなした人間から各自模擬戦を開始しろ」

「セツトメニュー？」

「基本的な動作を行う練習だ」

ユウの疑問にレナが答えた。

「ゆっくりとした動作でいいからまず剣を交互に打ち合う。もう一方を受け止める。攻めて側はこれを十回行った後相手の後ろに回り込み際に一撃与える。そして今度はそれを入れ替わり行う」

「それでいいの？」

「これを交互で一回と数えて十回行うんだ。腕に自信が無い物はスローペースでこれを行う。だが腕に覚えがある者同士であれば……」

「十回何かすぐに終るんだね？」

「……その通りだ」

と言うや否やレナが突然トレーニングを開始する。

猛烈な勢いかつ芸術的な剣捌きで木刀を奮う。

「ちょっと！！ これ！！ 木刀が持たないんじゃない？ てか僕じや無かったら頭力チ割れてたよ！！」

「お前ならこれぐらいでなければトレーニングにもならんだろう」

「言ってる事はあってるけどもさ！！ てかもう十回超えてるよこれ！？」

何故に僕はここまで恨まれているのだろうか……ユウには分らなかった。

怒られる理由があるとすればやはり昨日の戦いである。

もしかして手を抜いたと思われでもしたのか？

それとも自分に負けたのが屈辱だった？

ありとあらゆる可能性を考えながらとにかく猛攻に耐えた。

「あっ」

木刀がぶっ壊れた。

気付いた素振りを見せず……と言いかワザと無視して木刀を振り下ろそうとして来る。

「見切った！！」

「なっ！？」

左腕折り曲げて振り下ろそうしてくる腕を掴む。

そのままレナの右側に横へ滑り込む様に回り込みつつ更に右腕を加え、両腕でクルッと捻る。

相手の運動エネルギーと自分の力を加える合気道の要領（流石のユウでも初見で完全再現とまでは行かず、割りと力任せの部分が多い）で投げ飛ばした。

（あれーやっちゃったー？）

周囲がシューンと静まり返り、ユウは一人呆然としていた。

「レナ……お前が暴走するとはな」

「すいません。全力を出す打ちに熱くなって」

「仮にも赤服だろう」

「はい」

ユウとレナは幾多のテーブルが重なり、一つ島のように形成され、その島が綺麗に整列して配置されている職員室へと呼び出された。

外の日当たりがよく入り、心地良さすら感じる広い部屋でザワザワと遠巻きに教師が眺めているが特に会話には入ってこない。

当然目撃者が多い事もありユウは無罪放免……と言う訳ではなくケンカ両成敗と言う打倒な形を取らされた。

集団の人間が通う教育の場である以上、特別扱いなどすれば当然周囲からは反感が買われる。得にまだ精神的に未熟な人間が集まる学び舎では火を見るよりも明らかだ。

なので平等に罰を与える。

（しかし不思議な感覚だね……）

前世や今世でも理不尽な暴力や発言に晒されて来たユウだが不思議とこの担任のお叱りが悪い印象を持つ事は無かった。

（……ハッ！？　もしかして僕は）

「さて……ユウ。レナの事だが心当たりはあるのか？」

「え……」

思考がシャットアウトする。

先にレナは白い引き戸のドア（これも地球の学校をモデルにしていると思われる……）から退室したらしい。

元の外観は城だった事から連想するによくまあこれだけ手の込んだ改築した物だ。

「さ、さあ？ 昨日派手に暴れ過ぎたのか原因なんじゃ無いですか？」

「……もしくはバートネット家絡みか」

「？」

「私もよくは知らんがバートネット家は色々複雑な事情を抱えているらしい。生徒の間では特に噂になっているそうだ」

「はあ……」

単なる噂だがユウからすれば充分危険信号だ。

自分の経験則からして教師が生徒の事情を全て把握するのは至難の技である。

それを地球の学校生活でユウはよく学んでいた。

特にイジメとなるともう一種の裏社会が形成され、事態を把握した時には手遅れと言うケースは後が絶たない。

魔法学園であってもそう言った負の部分は地球とは変わらない事にユウは何とも言えない気分になった。

「で、バートネット家って……」

「バートネット家は代々高名な魔法使いを輩出していた家系だ」

とても落ち着いた雰囲気を持つ男性教諭が話しに入ってきた。

長身で白衣と眼鏡がとてもよく似合う。

コーヒーが好きなのか手に持ったマグカップからは渋い香りが漂っていた。

「えーと保険医のラファエル先生？」

「ああ、入学初日で災難だったね」

と軽く笑みを浮かべた。

「それにしても生徒のプライベートな部分を無闇に他の生徒へ話すのは教師としてどうかと私は思うよ」

「すみませんラファエル先生」

常時軍人の様なキツイ態度を取っていた先生が素直に謝罪した。

「それでユウ君だったかな？ 突然話に割り込んで来て何だが、君はレナの事をどう思うかね？」

「ソレは……え〜とケンカしてでも仲直りしたいです」

生徒の珍回答をどう思ったのかラファエル先生はマグカップからコーヒーを噴出した。

膝ま付いてゲホツゲホツと苦しそうに咳き込む。

担任はすぐさま傍に駆け寄る。

一分も絶てば遥訳セキも止まりふ〜と呼吸をしながら立ち上がる。

「ゴホッ！！ ゲホツ……はぁ……はぁ……教師の前でケンカ予告するとは中々斬新だね。教師歴は長い方だけどそんな生徒は君が初めてだ」

「全くだ……」

「いいえ。とある魔法少女が友達とお話する為のちょっとした話術です」

説明しよう……高町式お話とは？

これはとある世界の小学生の魔法少女が人の話を聞かない自分と同じ年頃の魔法少女と対話する為に編み出した話術である。

方法はいたって単純。

戦って黙らせる。

そしてお話しすると言うプロセスに移行する。

ここで重要なのが相手の生死など気にせず全力全快で攻撃をぶつける事と、相手を殺さないと言う相反する要素を何らかの形で習得していないと駄目な点だ。

そして相手を打ち破り、心身を持って接する事により対話を成し遂げるのだ。

最早話術でも何でもない気がするが……おや？ 誰か来たようだ？

「あの子ならもしかすると……」

「どうかしましたか？」

あゝ酷い目にあつて……では無く、ユウは職員室から退室し、その背中をじつとラファエルは見詰めている。

人柄の良さで知られ、何気に女性徒から人気が高いラファエルだがその時の表情は自分が知るラファエルの物とは違った。

それを上手く言葉で説明はできない物であつてが、強いて言うならば我が子を見守る父親の様な目をしている。

「いや何でもない……」

そう言つて彼はマグカップに僅かながら残っていたコーヒーをグイッと流し込んだ。

（派手に問題を起こしたらウンカイ先生か、もしくはロウ先生の教育的指導を受ける事になるからクレグレもケン力は避けるんだよ？）

時間は昼。

所為お腹が空く時間である。

「ご飯　ご飯」

ユウだつて腹は減る。

魔力を還元して生命維持を図ると言う技もあるがそんなエネルギー吸収式の人造人間みたいな真似をしてまでエネルギーは得たくない。

食堂はとても広く、軽く数百人単位の生徒が集まっていた。天井も高くシャンデリアがぶら下がり、硬い床や空気からは生徒達の活気を帯びているせいか暖かさを感じた。

だが東洋人である自分は珍しかったのかザワザワと視線の波が此方に寄つて来ていた。

（やっぱり注目されてるな）

苦笑しながらユウはカレーライスを受け取る。

空いてる席は何処か無いのかな？と思ひ見渡すと……

「ちよつといいかな？」

「うん？」

ふと赤い服を着た男子生徒が声を掛けてくる。

灰色の髪の毛が目立つが爽やかそうな好青年の男と言つた趣の男だ。

偉ぶつた態度が見えず、常に笑みを浮かべているその姿は何処か光と似た雰囲気があるが、青臭さの様な物は一切感じない。

やり手のエリートサラリーマンとかそんな雰囲気だ。

食器のお盆にはユウと同じくカレーライスが乗つけられていた。

そのせいか二人の間でスパイシーな香が漂い、より濃くなっている。

「初めまして。僕の名前はクラーク。サイバネル王国からの留学生さ」

「サイバネル王国？」

「この国の西側にある国だよ。僕はそこから来たんだ。一緒に食事どうだい？」

二人はと言う訳だが、空いている席につき、向き合うように話し始めた。

「へえ、クロウクラスなんだ？」

「うん。僕はまだ一年生だけどね。一つ上には学園最強のメデユウがいるんだよ」

「メデユウ？」

「この学園では非公式だけど四天王だと言われている人達がいるんだ。多くの種族が通う中で四人とも人間、男二人、女二人だったのがまた不思議何だけどね」

「ふ〜ん」

確かに多くの種族が通う中でソレは不思議だと思った。

たぶん偶然的な要素とかもあったのだろうとユウは考える。

「だけどこれって騒ぎを起こした生徒をピックアップしている部分があるから。もしかしたらまだまだ隠れた実力者がいるかもしれないね」

そんな考えを見越したかの様にクラークは補足してくれた。

「その中でもあの人は別格さ」

「メデュウって言う人が？」

「ああ。実質学園最強って言われている。もうこの学園で学ぶ必要なんて無いんじゃないかって言われるぐらいにね」

「どうしてそんな事が分るの？」

一旦スプーンを置いて語り始めた。

「勇者を倒してしまっただからね」

「うえ？」

あっけからんとした態度で飛んでも無い事を言っただけだ。

少し長い話になるね……

元々その勇者は魔法学園には仲間を求めてスカウトに来たんだ。

これ事態は別に珍しい話じゃない。

だが今回は違った。

一体何を考えていたのかメデュウを指名したんだよ。

元々メデュウはその時からかなりの問題児だったんだ。

先代生徒会長や学園長、教師陣がどうにか首輪を？いっている様な状態だね。

ここでもメデュウは当然問題を起こした。

自分より弱い奴に従いたく無いってね。

当然その勇者達は反発し、始まったのが模擬戦だ。

その噂を聞き付けて多くの生徒が集まったよ。

皆たぶんメデュウが倒される姿を想像したと思う。

だけど結果は大きく裏切られる者だった。

大勢の生徒や教師が見守る中一方的に倒したんだよね。

勇者達は傷一つ付けられず、そして一分にも満たない時間で全員地に伏せた。

メデュウ一人で全員でね……

「その後はもう大変。その国とは元々仲が悪かったからね。危うく魔王を倒す前に戦争でも始めそうな雰囲気になったんだよ」

共通の敵を持ってもどうやら人間は仲良しこよしとは行かない物らしい。

この世界では魔王と言う強大な存在が抑止力になっていると思っていたが、それを長い年月の間経験して行く内に魔王を倒すセオリーと言う物が出来上がり、精神的な余裕が出来たのだろうとユウは考えた。

「詳しいんだね」

「……その国の勇者って実は僕が元居たサイバネル王国の勇者何だよね」

「え……？」

それって色々和不味く無いのかなと思いつつ、冷たい水を喉へ流し込んだ。

「まあ謝罪代わりに色々として貰ったよ。特にテオス侯爵率いる人工ゴーレム部隊が送られた時は驚いたけどね」

「人工ゴーレム部隊？　もしかしてリベレイターとかが使っているって言う」

「ああ。最近勇者狩りと一緒に話題になってるね……確か皆並に大きくて王国務めの魔導師が複数人相手でも歯が立たないとか」

どうやらここでもリベレイターは有名ならしい。

「ああ、リベレイターで思い出したけどアルクレス魔神とかも最近噂になってるね」

「ま、魔神？」

「そつ。魔神。救いの神とも破壊紳とも言われてるね……」

自分も有名だった。

まあアレだけ暴れれば無理の無いかも知れないとユウは思う。

「そう言えば君はクラス？」

「ユニコーンクラスだよ」

「ああ。レナ・バートネットと同じなんだね」

ユウはえっ？ となった。

「レナ・バートネットは公爵家の令嬢。そう言う地位にも関わらず
言い寄る男はとても少ないんだ」

不意に視線を別の方向に向けた

食堂の片隅。そこには不意に人氣が少ない場所がある。

やたらサラダが置かれているテーブルにも目が付くがその隣の
テーブルにレナがいた。

小食なのか食事の量はとても少ない。

どっかの漫画で武道家は腹八分目が丁度良いと言う言葉が聞いた
事がある。

「最近僕も知ったけど、彼女にはある噂があるんだ」

「噂？」

職員室での話題が頭を過ぎりつつふと耳を傾けた。

「この国の上流階級社会でサイバネル王国の人間は信用されなくて
ね……殆ど盗み聞きでしか聞いた事無いんだけど、魔法が使えない
らしいんだ」

その言葉にユウは驚いた。

「魔法が？」

どう言う事だろうと思いつつ言葉を

「続きを話したい所だけどそろそろ時間ですからね」

「あっ」

そう言えば随分話し込んでいた様にも思える。
まだ授業は午後にもあるのだ。
ずっと話し込む訳にもいかない。

「この国じゃ精神的に孤立無援だからね。つつい話し込んだよ。
ごめんね」

「あ、いいよ。色々と勉強になったし」
「それはよかった」

じゃあねとユウは席を後にする。
そして入れ替わりレナがクランクへと近寄った。

「あの転入生に何を吹き込んだ」

静かに、丁寧な口調だが目を鋭く尖らせ、左手で剣の鞘を握り、
親指で剣の鐔を挙げて僅かに白い刃を覗かせていた。

質問次第では斬る。

そんな雰囲気全体から滲ませていた。
普通の生徒であればビビるか臆すなりしそうな物だがこのクランク
と言う生徒は態度を変えていない。

「ああ、君の噂を少々ね」

「身の程を弁えた方が身の為だぞ」

「君も気を付けた方がいいよ」

「……何のことだ？」

「あの転校生の事さ」

レナはピクツとなった。

「君を含めたこの学園の精鋭五十人を手加減して倒せる人間だよ。遅かれ早かれ直に気付くさ。それにユウ君も君に興味があるみたいだしね」

「ふん!!」

そう言つてレナは立ち去つてゆく。

食器を持ったクラークはハアと溜め息をついた。

「僕には脈……無いのかね」

ポツリとそう呟き、彼もまた食器を片付けにいった。

学園は広い。

そんな中には生徒が少ない場所も当然あった。
青い空。

風で揺れる程好く切りそろえられた草原。

そし太陽光を遮り、葉の隙間から光を照らし出す事で幻想的な雰囲気演出している背の高い木々。

ここは学園校舎にある裏庭。

男女が密会するには丁度いい場所だった。

「あの……これどう言う状況？」

レナは剣を抜き、それをユウに構えていた。
ロマンチックな雰囲気もクソも無い。

正に修羅場と言つ言葉が似合う状況だった。

「……クラークに何を吹き込まれた？」

「いや……ただ噂を聞いただけで」
「話せ」

有無を言わずドスが効いた口調で尋問する。

女には逆らうなと言う格言を何処かで（もしくは脳内の自分が知る筈のない知識の中で）聞いた事があるが今「ああ成る程」と理解した。

何かこう……逆らえない、反逆したら酷い目に合うと言う本能に危険信号が自動的に送られるのである。

「魔法が使えないって……聞きました。独自の調査によるとバートネット家の人間は代々高名な魔法使いを輩出している家系（情報源：ビュウ）ですけどレナさんはその……才能が無いと言う噂が……（情報源：不特定多数）」

だからか知らず知らずの内に目線を逸らし、罪を告白する罪人の様な表情で話し始めた。

どうでも良いがこの時のユウは両肩を内側に折り曲げ、足をくねらせて女の子見たいな……悪く言えばぶりっ子染みたポーズを取っていた。

外見や声色が女の子っぽいせい、気色悪さを感じさせないのは流石ユウと言うべきか、それともそんな容姿にした創造主が凄いと
言うべきであろうか……

「ふん馬鹿馬鹿しい」

やはりと言うかレナは否定した。

ビュウも同じく「ソレは有り得ないだろうと」言っていたし中には「経ちの悪い噂話」と言う者達も何名かいた。

ユウもそう思ったかった……である筈なのだがここで、ユウはあ

る選択をする。

ここで、ですよね〜と言って誤魔化せばよかったのだ。そうすればこの後の展開はまた違った物になっただろう。

「あの〜体に装着している魔導具って……」

とユウは証拠を突きつけたのだ。

瞬間、自分の顔の傍を銀色に輝く刃が突き抜けた。ガツッと後ろの木に何かが突き立てられる音がする。顔の上半分が暗くなって見えない。

ただ目が血に飢えた肉食獣の様に光り輝いている。

（あれ〜地雷踏んじやった〜？）

この時……ユウは今迄出合った中で一番の恐怖を感じた。恐さを通り越して何だか爽やかな気分になっていた。まるで全てを悟ったように。

そう、今から自分はラブコメの王道を駆け抜けるのだと。そして酷い目に会うのだと。

「続きを言ってみろ」

レナは容赦なかった。

片手に剣を握り締め、そしてもう片方で胸倉を掴んでくる。

「え……あはい」

遥訳ここでユウは現実から戻って来た。

「もしかして魔法を使えないから魔導具でそう言っ見せ掛けている

とかそんな落ち……」

それが戦闘の合図だった。

レナがロングソードを引き抜き、通り魔の如く襲い掛かって来る。しかし通り魔と言っても高度な戦闘訓練を受けた最強の通り魔だ。勝ち目は無い。

倒しても何か色々和不味い。

男女平等パンチは生憎会得していないユウは逃げる。通り魔から逃げる。

(この人魔法いらないだろ!?)

覚醒したかの様に木の枝と言う枝を忍者の様に飛び移りながら迫り来る。

昨日のレナは実は手を抜いていたのでは無いかと。

これが私の本気なのだと。

今の私は阿修羅すら凌駕できる存在だと言っている様な気もした

(*恐怖で色々ユウの思考がおかしくなってます)。

ぶっちゃけ光よりも強く無いかとユウは思い始めていた。

「危なっ!?!」

忍者の様に駆け抜け、ヒョウの様に襲い掛かるレナ。

ユウの制服をロングソードで破る。

危なかった。後気付くのがコンマ0・5秒遅かったら殺されていただろう。

攻撃に失敗したレナは再び木の枝に跳躍。

蝶の様に舞い、蜂の様に指すと言うヒット&アウェイの格言を見事に体現しているかの様であった。

（恐い！！ マジで恐い！？）

「本当にテメエはチート主人公か！？」と読者から言われかねない酷い体たらくを晒しながらもユウは考える。

心なしに「レナが本作品のラスボスなんじゃ無いかなあ？」と思いつつ反撃を試みた。

「何やってるんですかこんな所で！！」

「へ？」

可愛らしい少女の声が聞こえた。

聞くだけで和むようにとても甘ったるい美声による叱責。

それを聞いて二人は気を抜いてしまう。

そして激突。

「……なっ」

「……えと……そのこれは……」

凄まじく気まずい雰囲気である。

まるでレナがユウを押し倒している様にしか見えなかったからだ。剣を顔の傍に突き立て、そして手を押さえ体を重ね、目と目が見つめ合うその姿。

そして木々が生え揃うこの場所で二人っきりのこのシュチュエーション。

下手をすれば年下の男の子を刃物で脅迫して しようとしているお姉さん見たいになっている。

「あのえ〜と……お、お邪魔だったりするのかなあ……」

声の主たる少女はモジモジと華奢な体を恥しそうにくねらせ視線

を逸らしていた。

E
N
D

第二話「レナ・バートネット」(後書き)

どうみ皆様お久し振り。

初めての方は初めまして。

Mr Rです。

まだ不定期染みていますが、遥訳以前に近い形で制作を続けられるまで回復しましたが以前本調子と胸を張っては言えない状態です。

どうしてこうなったのか？

例の如く総合評価が高い作品や自分より上手い絵を見ていくうちにまた以前の持病みたいな物を発病してしまいました。

専門学校の先生も言っていました但这れはどうする事も出来ない作家なら誰もが通る精神的な物らしいです。

私の場合は他の人よりも何だか多い気がします。

五万アクセスは個人的には満点は付けられないデキとな、また中々更新できない事を焦って始めたこの第三章を第一話を書き終えた所でプロットを煮詰めると言うとても杜撰な制作スタイルをとってしまいました。

と言う物の、自分の作品が本当に面白いのか？ 自分の作品はもしかしてとてもつまらないのでは無いか？

また自己満足で書いているのでは無いか？

それを言い訳にして筆を止めるのは創作者として失格では無いか？

そう考えている内に私は絵や小説を創ると言う行為が酷く嫌になったのです。

その間私はまた答えを漫画やアニメに求めていました。

G線上へブンスドア、アイアンリーガー、銀河お嬢様伝説ユナ、ダイ・ガードなどの様な作品をめぐり合える事を期待して。

そうした過程で巡り合ったのが装甲騎兵ボトムズ・青の騎士ベルゼルガ物語、スカイガールズ、ガンダムOO劇場版、これはゾンビですか？（アニメ版）、インフィニット・ストラトス、そしてもしドラでした。

特にインフィニット・ストラトス、もしドラは中々興味深い作品でした。

インフィニット・ストラトスは大胆な設定と綿密な設定。

ソレを学園物として成り立たせるストーリー構成。

正直最初はこの作品に明確な殺意を覚えました。

ですがソレが嫉妬だと理解出来た時この作品を好きになりました。

そしてもしドラはゼミ漫画染みている部分もありましたが、変染球染みた題材でありながらジャンプ漫画のお手本のようなストーリー構成を一冊の本として簡潔に纏めたのも良かったと思います。

そうした作品と巡り合っていたせいか、何時しか私は五万アクセスを書き終えて、そしてこの作品を再開させていました。

本当に皆様にはご迷惑お掛けしました。

十万アクセス記念は何かやろうとは思っていますがまた計画性無しにやると五万アクセス記念の時の様になるため、慎重になります。

次回は無責任ながら出来るだけ早くとは思っています。
それでは今回はこの辺で。

ご意見・ご感想お待ちしております。

第三話「舞台調整」

優しき勇者・悲しみの冥王

第三章：魔法学園

第三話「舞台調整」

魔法学園南部エリア・商業地区。

学園都市の中央にある交差点、噴水広場を越えた先にあるこの地区は人が多く集まる。

その人々の目的は様々で冒険者や商人、王都から来た人間などがいた。

勿論学生達も数多くいた。

「幾ら可愛い子だからってエッチな事は駄目だよ」
「いや……私は……」

そんな学生達に混じるように店の外に置かれた白い丸テーブルにレナとユウと……後校舎裏で出会った美少女が可愛い声と表情で叱り付けていた。

容姿は一言で言うなら有りえないくらい可愛い。

王族貴族の様にとても手入れが整り、白いリボンをウサギの様に飾り付けているセミロングの金髪、純粹さが感じられる子供っぽく大きな瞳、天使の様にとても繊細そうな白い肌。

赤い制服を着ているからエリートなのだろうが、体はとても華奢で顔もまだ幼さが残り守ってあげたいと言う衝動が湧き出るだろう。（だがここは魔法と言う要素があるファンタジー世界。見かけで実

力を判断するのは死に繋がり兼ねないので注意が必要だ)

レナはこの少女を見た途端何もかも観念したかの様に従い、ユウもそれに同伴させて貰う形でここまでわざわざ学園の裏側から付いて来たのだ。

「何？　もしかして殺人未遂とか……」

「もう好きにしてください」

さつきからレナもこの調子だ。

ふとユウは回りに目をやると此方に全視線を注目させている。

「えーとこの人は？」

「生徒会長だ……今は違うが……」

「そだよ」

ニコツと微笑んで見せた。

「せ、先代生徒会長？」

「そ……私の名前はハニエル・スマイリー。この学園の『元』生徒会長です」

と簡潔に自己紹介した。

「いやー一人で校内散歩してたら何か裏庭であんな事になって驚いたよ」

と、まるであの修羅場(前話参照)を「あんな事も会ったね？」的な口調で笑ってみせる。

誤魔化しても何か無駄な気がしたのか、それともあの出来事を思い出して恥しかったのか二人とも顔を真っ赤にしていた。

「だけど初めてが、野外なのはどうかってお姉さんは心配してみたり……」

「いやだから私は……」

「じゃあ何なの？」

「え」と……」

少女は口を濁す。

言える筈も無い。口封じに思わず殺人未遂したなどと。

「あ……も、もしかして新手的SMプレイだったりと……」

「違います！！　どうしてそう言う流れになるんですか！？」

恥しそうに目線を逸らし、モジモジと体をくねらせて飛び出した爆弾発言にレナは初めて強く抗議する。

ヤラシイ妄想をしたのか顔は真赤になっていた。

何名かの生徒がテーブルに頭を打ちつけたり、席からずっこけたりしたのはきつと気のせいだ。

店員が赤飯の準備しろと駆け回っているのもきつと幻想だ。（そもそも異世界で日本の風習（？）がある時点で色々とおかしいが……）

「気を付けて方がいいよ転校生さん……レナちゃん年下好きな所とかあるから……」

「え？　そうなの？」

「何吹き込んでるんですか！？」

周りの事など構わず声を荒らげるレナ。

「まあ冗談交じりの雑談会は中断して……レナちゃん？　何があっ

たの？」

「ソレは……」

先程とは違い、先代生徒会長は真剣な眼差しを向けた。子供っぽい瞳からは強い意思が感じられる。それをどう思ったのかレナは目を逸らした。

「やっぱり模擬戦の後何か言われたりしたんだね？」

「言いえ……」

「本当なの？」

「はい……」

暗い雰囲気にも関わらず、店員が空気を読まず赤飯を「サービスです」と言って放り込んでくる。変な所で気が利く店であった。

「私はこれで失礼します」

そう言ってレナは逃げる様にしてテーブルから立ち去った。

「ごめんね転校生さん？ レナさんは悪い子じゃ無いんだけど真面目すぎて余裕が無い子でもあるの」

「どう言っ事なんですか？」

この時ユウは先程のやり取りである程度確信を得ていたが念のため耳を傾けた。

「実はと言うとね？ レナが魔法が使えなっ言っのは特待生制度を持つ子の間で有名な噂話なの。魔導具で誤魔化してはいるけど逆にそれで疑問視する人が多いみたいだね」

「そ、そう」

その噂の真相は本当なのだが本人のプライベートにも関るので言わないでおいた。

「ソレに特待生の子って貴族出身の子とか多いからなのかな？ 兎に角プライドが高い子とかが多いの。ちなみに昨日ユウ君と戦ったのは皆そう言う子出身だから」

「そうだったんだ……」

昨日戦った軍団は全員そう言う階級出身だったのかとユウは驚いていた。

（防犯体制とか色々と考えといた方がいいかな）

金持ちとか上流階級は敵に回すと厄介だ。

特にここは異世界である。

貴族がどんな連中かはユウもハッキリとは分らないが正直あんまりいいイメージが無い。万が一あの模擬戦でプライドを傷付けて何かしらの陰湿な手段を取って来たら最悪……と言つかしてくるであろう様がありありと見て取れた。

トリック学園長は一体どう言う考えでこんな事をしたのか分らないがこちらとしたりいい迷惑だ。

十中八九、甘ったれた根性をぶち壊させる為なのかも知れない……もしかすると自分自身を試しているのかも知れないが兎も角用心した方がいいだろうと心掛けた。

「そしてレナさんが最後まで残って割りと粘ってたでしょ？」

「うん」

「ソレを見て何か嫉妬したんじゃないかな？ まあこれ以上は本人

に聞いて見ないと分らないけど」

そして自分への逆恨みへと繋がる。

確かに有り得る推理だった。

付け加えるならば自分は魔力なんて無いのに突然莫大な魔力に恵まれている奴が突然現れて自分のクラスになって反抗心を抱いたのでは無いか？

（もしかして最後のあの戦いの内容が……）

ソレにあの性格だ。

ユウは今になって遥訳ある原因を思い当たった。

「……」

「ん？ どしたの？」

黙りこんだ後輩を見てハニエルは首をかしげた。

「いえ……人付き合いつて難しいんだねって思っただけ」

ユウはそう思わずにはいられなかった。

「いたいた！！ こんな所にいたのね転入生！！」

喧騒を掻き分ける様に元気の良い大声が聞こえる。

「あれは〜ティスちゃんと〜セドナちゃんと〜クリス君だ」

「それとビュウ君……」

白い翼を生やした長いブロンドヘアでグラマラスな可愛い

美少女。

長身で体格もよく、金髪のショートヘアーで顔立ちもいい
そして疲れ果てているビュウ。

「いやゝ生徒会長と疑惑の赤服にスーパールーキーの組み合わせを
探すのは意外と楽だったわ……」

腕を組みながらふんふんと燃える様な赤いボブカットの髪を持つ
少女が腕を組んでフンフンと

「貴方を勧誘して来ました!!」

例えばパーフェクト超人であっても、人間許せ無いと思う事は一つ
や二つぐらいある。

レナにもそれは当て嵌まる。

彼女の場合は自分自身の事。

自分は魔法が碌に使えない。

公爵家の令嬢なのに。

レナの家は大体優秀な魔法使い（魔導師）、あるいは魔法戦士を
輩出して来た。

だから自分もまた自然とそうなる事を周囲から、親から義務付け
られているようであったのである。

少女はその周囲から押し付けられた運命と自分自身にある残酷な

現実に向き合いながら今日まで生きていた。

だがこの学園に来てもそれは変わらず、魔導具で誤魔化す日々が続いている。

だからか自然と好きな教科は魔法を使わない授業と言う魔法学校を全否定する様な状態に陥った。

そしてもう一つは信念を曲げる事。

レナにとっての信念は一流の魔法使い、あるいは魔法剣士となり家の者達に認められることに努力を惜しまないこと。

だからこそなのかレナは自分自身が許せないでいた。

（手加減して遊ばれたくせに英雄気取りかよ）

自分と同じ赤い制服の生徒が言い放ったその一言が胸の奥底に突き刺さり、やがて自分が我を忘れていつていた事に気付いたのだ。

魔法云々以前に自らの未熟を恥じなければならない。

素直に全力で相手して欲しいとでも言えばよかったのだ。

なのにあんな回りくどい上に陰湿な態度を取った自分が許せない。

「……まだまだ未熟だな私は」

この学園に来てからレナは多少視野が広がったつもりだ。

同世代の人間でも上には上がいると。

特に四天王と言われる人間や学園最強と言われるメデュウ、先代生徒会長であるハニエルなどはもう自分とは違う次元にいる生き物だと深く感じ取っていた。

同時に家へ認められる、王国へ仕える魔術師はあれぐらいのレベルでなければならぬのだろうとレナは思う。（これは誤解もある

がレナはそう考えていた)

(だが何時まで私は未熟なのだ……)

まるで延々と物語のプロローグに閉じ込められている気分だった。せめて魔導具の補助無しに使えたら……とレナは思う。

何時しかレナは学園の交差点・噴水広場へと来ていた。

その名の通り中央に噴水が設置されており、定期的に大きな水のアーチが描かれるのである。

学園西部エリアに置かれた飛行船や東部の図書館、南部のゲート、そして北部には自分達を通う大きな城と言う名の学び舎が見える。位置関係上、人の往来が激しい場所であり生徒に混じって警備員もよく見かけられるのだがとてもどこかで平和だ。

この学園にいと今この大陸は危機的状況であるなど忘れてしまひそうだった。

リベレイター

ギアード

リリース

その他諸々の魔王達による大陸侵攻……これを終らせるには暗黒大陸にいると言われているルファールを見つけ出して倒さなければならぬらしい。

と言っても暗黒大陸の正確な位置は分らずじまい(遙か西方だとか東方だとかとても大雑把)で仮に掴めても何時になるのかも分らない状況だ。

何せ魔王は倒しても倒しても次々と補充される。勇者も一応補充できるが優秀な勇者は人間である以上一朝一夕で誕生はしない上に軍事的、経済的、国際的な問題を様々抱えている以上どう考えても非現実的であった。

（こんな事私が考えても仕方ないか）

何処か諦めに似た感情を抱きながらこの後どうするかを考える。普段はトレーニングするなり予習するなりと優等生の見本の様な生活を送っているが今日はそんな気分にはなれなかった。

（アレは……）

そんな時だった。

「ああレナか。こんな所で一人なにやってんだ？」

（嫌な奴に出会ってしまった……）

自分と同じ赤服……エリート服を着た男が下衆な笑みを浮かべてやって来る。

大柄な肥満体系。

しかも貴族階級出身。

その上先輩。

典型的な悪徳貴族と言う物を絵に描いた様な男だった。

（名前は確か……デップとか言ったか）

王都の方の学園で色々やり過ぎたため、この学園に転入して来たと言う噂さえ持ち、赤服内どころか普通の生徒にすらも嫌われていると言う。

これは補足となるが……ウラシエザームには幾つか魔法を教える学び舎が存在し王都にもそれがあつた。

どうしてそうなったのか？ 理由は様々ある。

教育を幅広く充実させるため。競争相手を作る事でお互いを高め合わせるため。だがそれは表向きの話で、よくある利権的な問題や政治的な問題による物の方が大きい。五十年近くの間魔王の侵略を受けずに来れば人が腐廃するには十分な時間であつた。

さて、王都の魔法学園はこのザードリィー魔法学園と違い完全に貴族専門の学校で伝統的な魔法教育とそれに必要な精神と言う理念の元教育を行われている。

何度か様々な形式の交流試合を行つてはいるが……酷い言い方もすれば王都の魔法学園にしてはお粗末な結果になる事が多い。

まだ地方の学園の方が気合が入っていると聞いていたがレナはその通り何だろうなと思つていた。

そんな学園からやつて来たこの男は一体何をやらかしたかは知らないが今こうして下種た笑みを向けてくるのはとても耐え難い物が感じられた。

しかも心なしか自分の周囲に異臭さえ漂っている。

「ゲヘヘヘヘ……そんな面するなよ。お互い知らない中でもアルメエ？ 食み出し者同士仲良くやろうぜ？」

「お前と一緒にするな」

体を嘗め回すような……まるで品定めを行つていくのかの様にネットリとした目の動きに激しい嫌悪感を覚えた。

「この学園の連中はどいつもこいつも口の聞き方がなってねえな」

？ そつ言つならデ・ッ・プ・セ・ン・パ・イ……だろ？」

体から、口から異臭を漂わせながらあからのさまな挑発。

正直相手にしたくも無いので「失礼します先輩」とでも言つて

「それとも魔法が使えない身売りの女にやあ礼儀なんて無いってのか？」

だがその一言でレナはカツとなった。

魔法を使えないと言われた挙句、身売りとまで罵倒されたのである。

「貴様……」

「そつじや無いつて言うんなら口先だけじゃ無い事を証明してみな」

「なら今証明してみせましょうか？」

視線を刃物の様に鋭く光らせ、鞘を持った左の親指で剣の鏢だけを上げてロングソードの白刃を輝かせる。

「君みたいな出来損ないに出来るんならね」

そついいつつ制服の上着からあるメダルを取り出した。

「訓練用の魔導具！？」

「君みたいな直情的なお馬鹿さんと違って僕ちゃん頭いいもんね」

それは訓練用の魔導具。

自身への攻撃を肩代わりする効果を持つタイプだ。

昨日が複雑化する強制離脱と言う物は無く、ただ抗力を高めた代物である。

「ゲヘヘヘヘ。ここじゃ色々和不味いからな。その気があるんなら今夜この場所へ来い」

呆氣に取られたレナを嘲笑うかの様にデップは手紙投げ捨てる用に渡して立ち去った。

レナはすぐさま封を開けると、そこには地図とメッセージが入っていた。

それをギリギリと力強く握り締め、齒を食い縛る。

この時の彼女はまるで仇討ちの対象を見つけた復讐鬼の様であったと言う。

この学園では部活、校外活動などと言った活動が奨励されている。

地球の学校と同じようにそう言うクラブがあった。

この北西部にある部室棟もその一つであった。

ここには文科系のクラブが多く所属しており、

「それでビュウ？ その転校生とはどうなの？」

「正直俺もよく分らない。あんだけ強いのになんだってこの学園に来たんだ？」

一方ビュウはある部屋に来ていた。

メガネを掛けた知的そうなブロンドショートの手徒。

白くキレイな羽を生やし、黄金の様な長いブロンドヘアーを持つ

少女。

そして燃える様に赤い左右に広がったオカッパ頭、悪戯っ子ばい瞳、男勝りで勝気な雰囲気を持つ女の子。

ビュウを含めた四人のメンバーがまるで会議室で使うような長テールブルに腰掛けていた。

「その人って赤服の人達を五十人倒しちゃったんでしょ？」

「まあ私の手に掛ければそれぐらい五秒で出来るわ」

（確かにこの女ならやりそうだな……）

ビュウは窓際の直前に置かれている上等な机に踏ん反り返るこの赤髪の少女ならやるんじゃないかと思った。

確かに赤服の人間達はこの学園に来る前から英才教育を受けている上に厳しい試験を潜り抜けているだけあってとても強い。

正直真正面からやり合えば勝てる気がしない。一説によれば王宮務めの魔法使いに匹敵し、地方の自警団や部隊に行けば即戦力とも言われている。

だが上には上がいる。

エリートを示す赤服、風紀委員の白服など関係なく強い奴は強い。この学園はそう言う所だ。

この五秒瞬殺宣言したオカッパ頭の少女「ティス・アドベンチャー」は現にそれが出来るぐらいの実力を持つ「炎使い」だ。

「で？ ビュウ？ あんた勝てそう？」

「無理に決まってるんだろ。未だに自分のえくとバチバチでもビリビリでも無くて……」

「雷属性だろ？」

「そうそう。クリス先輩それ」

今迄無言を貫いていたメガネを掛けた金髪の男が口を開く。

クリス・サバイヴだった。

見た目通り頭脳明晰であり、その上身体能力も高くビュウは何度か助けられた過去がある。

今では頼れるお兄さんに似たイメージさえ持っていた。（多少性格が変な所があるが）

「数多くある四属性とは違い稀少性がある属性の中でも更に稀少な雷属性……それ故に応用の仕方が未だに分っていない。だが決して弱い属性と言う訳では無かるう」
「はあ」

最後に研鑽次第だな。
と付け加えて解説を終えた。

「その様子だとまだ使いこなせてない見たいねその力」
「ああ。先生からは必ず伸びるって期待されてんだけど実感沸かなくて……」

「もしかするとあの転校生なら何か知ってるかも？」
「まさかあ……」

そんな都合の良い話などありはしない。

ビュウはこの地獄に踏み込んだ時の事を思いながらそう断じる。

「セドナさんはどう思いますか？」

「ふえ？ わわわ、私？」

ふと胸が大きなブอนด์ロングヘアの天使に話を振る。

突然話を振られたせいかわ少女はやや慌てながら質問に答えようとしていた。

セドナ・ホワイトフェザー。ホワイトフェザーは部族名であり、かなり高名な種族だとビュウは聞いていた。（＊情報源：クリス先輩）

（初めて見た時から思ったけど凄いキレイだな）

ティスも美女の部類に入るがセドナはまるで男の理想や欲望を詰め込んだような体付きだ。

スカートから食み出る健康的な、

「ビュウウクウウウンッ！ 何嫌らしい顔してるのかな？」

「ヒイイイイイ！？ 不幸への一方通行！？」

自分の思考が漏れていたのかまるで人を殺す五秒前にみたいな面をしたティスにヘッドロックを決められる。

声はまるで極寒の大地の様に低い。

このまま放っておくとガチで殺されそうだと真剣に思った。

クリスは……無視した。セドナは目を丸くして両手を振りアタフタしている。慌てた動作も可愛い人だなとほくそえみながらビュウは意識が遠退いていった。

数分後

「はあはあ……マジで死ぬかと思った！！」

「ケッ。この程度でくたばりかけるとは情け無い。この作品がダークファンタジー物だったら今頃死んでるわよ」

「しらねえよ！？」

ビュウは涙目で訴えた。

しかしその訴えは通らない。

「あ、だだ、誰か来たみたいです」

コンコンと規則正しくドアが二回叩かれる。

「大方風紀委員か生徒会の集金でしょう」

「お前の頭の中ではマフィアか何かかよ……」

「色々としようも無いな」

「悟らないでくださいクリス先輩」

そしてドアが開かれた。

「オヤオヤ、皆さんもう集まってますね」

「誰アタ？」

「確かクロウクラスのクラークじゃ？」

突如としてあのクラークはニコやかな笑みを浮かべながらやって来た。

灰色の髪の毛、まるで青年実業家か、それともビジネスマンかと言った雰囲気を持っている。

サイバネル王国出身と言っただけで色々と有名な男だ。

そのせいで色々と苦労している人の様にビュウは思えた。

「ふゝんまた珍しい客が来たものね？ 入部なら面接始めるけど」
（面接する余裕あのかこの同好会？）

ビュウは流石にこればかりは言わないでおいた。

一日にそう何度もあの世とこの世を行き交いたくはない。

「いえいえ。入部ではなくて、ちょっとした協力要請と言う形になります?」

「協力要請?」

何でも魔物の討伐依頼を請けたらしい。

学校の近くと言うのもあるので今夜に向うそうだ。

だけど戦闘に不安があるため強力要請をしたらしい。

「てか討伐依頼ってこんなのビュウでも出来るわよ?」

「悪かったな未熟で……」

討伐対象はやや大型の狼、ウルフ数体。

スピードがあり、足場や視界が悪い場所では厄介だが基本ザコの部類に入る(らしい)モンスターだ。

ビュウは何度が戦った事があるが、基本群れで獲物に襲い掛かる傾向があり、また縄張り意識が強く油断すると痛い目に合う。

最もティスからすれば大抵のモンスターは雑魚なのだろうが……とビュウは心の中で愚痴った。

「だがウルフと言っても色々種類はいる。ソレに敵はウルフだけではあるまい。万が一オーガやビッグウルフなどが現れでもしたら

……」

「いやまあ確かにそれは恐いな……」

クリスの指摘は確かに的を射ている。

倒すモンスターは一種類が出会うモンスターはそうではない。

また生態系の説明は進んでいるがまだまだ未知の部分が多いものがある。

油断は禁物だ。

「まあ話しに嘘は無さそうね。どうせ暇だったし、後は……」

ここでティスは何かを思いついたのか「ハッ？」となった。

「そうだ。あの転校生もこの機会に呼び寄せるわよ!!」

「ああ、もしかしてユウ君を？」

「そうそう!! 体験入部と称して兎に角接点を作るわよ!! あんな逸材生徒会や風紀委員には勿体無いんだから!!」

まるで世紀の大発見でもしたかのようにティスは大声を張り上げた。

第三話END

「たんだよな？」

ユウ「まあね、ガチで冥王名乗れるぐらいの戦闘能力はあったんだけど僕に匹敵するチートが大勢いたからね。ISの世界でも充分主力で生きて行けそうな連中がゴロゴロしてるよ……」

光「……ぶっちゃけ仲間必要なの？」

ユウ「うーん……それはチート小説における一つの問題点だね。下手すると「もうアイツ一人でいいんじゃないかな？」ってなるから、作者的には出来ることならウルトラマンと防衛隊の隊員ぐらいの関係がいいって言ってるね」

光「ウルトラマンと防衛隊の関係が、確かに互いの弱点を支え合って頑張っているよな」

ユウ「まあそこら辺はこれからの作者次第と言う事で……長々と話し込んだ事だし今回はこれまで」

ヒカル「次は作者の後書きです」

「後書き」

【最近他の転生チート系ファンタジー小説と比べてどうして人気が出ないのか自分なりに考えてみた】

その要員として私は北斗の拳みたいな痛快、爽快とも言える要素が少ない。

もしくはこのジャンルで読者が求める期待に応えられていない。小説家になろうで求められる作品ではなかった。

読者の期待と違う。

更新頻度が遅い……など色々と考えてはみたが本音は一人で判断しかねると言うのが原状だ。（その上理由は分ったからと言ってすぐにそれを修繕し、人気が出るかと言われたらそれはそれで別問題だが……）

最終的には地道に続けていくしか無いと言うのが私の出した答えだ（泣）

【今回の話について】

今回の話はかなりベタで無理矢理な感じになったと思う。

話のモデルをあげるとすればゼロの使い魔第一巻にあったギーシユとの決闘のやり取りであろう。

多くの二次創作でも使われ、説明不要なぐらい有名なエピソードだ。

本来ならば紅の騎士団と呼ばれるマジックアーマー（異世界版パワードスーツ）との戦いになり、元ネタどおり決闘となる筈だった。

だが「ユウの同好会との出会い」などを含めてストーリーの簡略化を図りたいがために私は「デップ」と言うキャラを作り出し、そしてレナの裏設定を絡ませたエピソードを思い立った。

デップの様な奴がザードリィー魔法学園に通えたのは人間の人格と評価はまた別物であると考えた場合別におかしい話ではない。

酷い例えだが「どんなに素行に問題がある不良でも東大に受験して合格できたらそいつは東大生であり、エリート」なのだ。（例えばどんな手段を使っても……）

【作品作りについて】

ふと私は短編作る事を思い立った。だがこれが中々上手くいかない。（実は話の更新が遅れる理由がこの短編製作やその難航にありたりする）

だがある時私は昔の作品制作を思い出した。

ソレは文章だけでキャラクターを作るのではなく、絵を描いてキャラクターを作り、それを元に物語を作る方法である。

以前やっていた方法だがこれが思った以上に嵌り、作品の制作が捗る用になったのである。

近日中にUP出来るかも知れないのでその時はよろしく願います。

【最後に】

この作品のご意見、ご感想お待ちしております。（と言ってもまだ十にも届いて無いけど（苦笑））

次回の更新は何時もながら未定です。

出来れば毎日更新が出来ればいいのですが（汗）

第四話「茶番劇・その1」

優しき勇者・悲しみの冥王

第三章：魔法学園

第四話「茶番劇・前編」

「レナ君の事が……」

白い布の仕切りで区切られたベッドが立ち並び、薬品の匂いがほのかに漂う保健室。

ユウはラフェル先生の元に尋ねていた。

殆ど唐突に訪れたと言う白衣の保険医は「ちょっと待っている」とコーヒーを入れてくれる。

ミルクが多く、コーヒーの苦味が少ない、どちらかと言えばカフェオレに近い味だった。

あの子は誰よりもちゃんと努力している子なの。だけど結果が出ずに疲れきってるの

どうしてあげたらいいのかな？

キチンと成果を出している人間には分らないと思う。言える事があるとするば……例え疎まれても真摯さを持って接する事かな？

ふとハニエルと分り際に話した会話の内容が頭を過ぎる。

自分のやってる事はもしかすると「真摯」さではなく、単なる「ストーリー」なのかも知れないが今は信じた事をやってみるしかない

いと思った。

ちなみにこの場所を訪ねたのはハニエルがキツカケである。何でもラファエル先輩はレナについてかなり詳しい人物だとか。もしかするとハニエル先輩以上の情報を得られるかもしれないと思いユウここまで足を運んだのだ。

正直ここまでしてレナを調べる義理はユウに一欠片も無い筈なのだが、ここで放り出すと色々と後悔してしまいそうだったからだ。

「彼女の事は一部の教員を除いて極秘扱いだ。だが知ってしまったのであれば隠すことも無いだろう」

「うん……」

二人は丸椅子に乗って向かい合い、心温まるコーヒーの匂いを醒ますように本題へと移った。

「彼女は努力だけでなくありとあらゆる方法を試した。時にはドーピングすら手を出そうとしたと言われている。最もそう言う類の薬品はお薦めしないがね？」

「やはり副作用が？」

「ああ……その変わり彼女は服の下は満遍なく刺青だらけだ。」

「え？」

その一言がユウには信じられなかった。

「魔力増幅、成長を促すための措置だよ。目に見えている範囲意外はほぼ全てそうになっている」

「そこまでも彼女は魔法が使えないの？」

凄い執念だとユウは思わずにはいられない。
同時にとても悲しく感じた。

「……まったく酷い話だ。皆優秀な魔法使いになるのに一人だけなれない。頑張っているのに成果は出ない。今の彼女はとても精神的に不安定だ。その解決策は」

「魔法が使えるにするか、それとも妥協するか……」

「ああ」

非現実的な選択手段を模索するか、もしくは後者……

（僕の力を使えばどうにかなるかも知れないけど……）

だけどソレはレナにとって望んだ結果では無いだろう。

レナが望むのは自分の頑張りで、自らの手で成果を得る事だ。
チートで得たいとは思わないだろう。

（逆に妥協なんかすれば……）

それこそ彼女自身の全てを否定する事になるだろう。

結局答えが出せぬままユウは保健室を後にする事となった。

「え」と君達は一体……」

大きな屋敷が立ち並ぶ学生寮群。

その門前に左右へ広がるように伸びた赤いオカッパ頭の少女、ク
ラーク、ビュウの三人が待機していた。

皆制服姿であるが男二人は武器を所持している。

クラークの武装は特徴的だった。

中折れ式の折り畳み式の銃であろうか？

肘の真下には刃が伸びている。

有名なロボットアニメで似た様な武装をしているのがあったが、独学でこの設計を編み出したのなら中々の物だと思えた。

ビュウはこれと言って特徴も無い平凡そうなロングソードを持っていた。

後胸に魔導具らしきアクセサリーを胸にぶら下げている。

赤いオカッパ頭の少女はとても気が強そうだ。

外見は十五歳ぐらい。

可愛いと言うより元気が良いと言う印象を持つ。

とてもスタイルがよく、胸も同年代の少女と比べれば大きい部類だ。

最近赤系統の髪の毛の女の子に縁があるなと思いつつその少女をじっ〜と見詰めた。

「どうも私達冒険同好会の体験入部だけど一緒に来るわよね？」

「へ？」

憑依したユウの記憶を辿れば「学校生活で一番ぶっ飛んだネーミングの部活は「悪の組織」部」だったか……ユウは直感的にソレと同じ様な空気を感じ取った。

悪の組織部は道楽で作られた学園合法秘密（部活に秘密もクソも無いと思うが……）結社だ。

まあ使用するパワードスーツはどれも軍用に匹敵するかそれ以上の性能だったりもして（中には一部ユウと互角に対抗して見せたの

もあつた）色々とオカシイ部分が多々あつたが。

創作物の世界では軍隊＜高校生・エンジニア・大統領と言う構図がよく見られるが憑依ユウがいたあの世界もそう言つた異常な創作物的な世界なのであるうか？（この世界も異世界とか魔法とかある時点でもう充分創作物の世界だが。それ以前にこんなメタな考察はあまりやるのは（ry）

と、憑依ユウの昔話を交えた考察は置いておき、ユウは迷つた。

（どうしよう……）

ユウ。

最強の力を持つが、他者とのコミュニケーション能力に自信があるかと言えばNO。

冥王になる前も散々だったし、なつた後も散々だった。

光、ネル、ユディなどの人にも巡り合えたが、この学園生活においてコミュニケーション能力は必須技能。

それが出来ないようでは浮いたままボツと卒業するのでは以前の自分と大差無い。

ここでユウは憑依ユウの経験を引きずり出し、最適な答えを導き出す。

この間僅か0・三秒。

（アレ？ 自分何の為にこの学園に来たんだっけ？）

数日経たずして本来の目的を半ば見失しながら（幸か不幸か後でちゃんと思ひ出した）もユウは話を切り出した。

「具体的に何をするんですか？」

「勿論冒険。私を満足させる為のね」
（わぁ〜女版志郎さんだ〜）

胸を張ってエッヘンと断言して見せた。
その態度からして能力を使うまでもなく「嘘じゃない」とユウは直感的に悟る事が出来た。

「噂の転校生って言うからには食べられそうぐらい可愛い容姿ね
〜何歳？」

「え〜と今年で十七歳です」

「え〜〜！？ ウッソー！？ その容姿で意外と年食ってるのね！
？」

東洋人は実年齢よりも若く見られると言つのは異世界でも同じだったらしい。

もっともユウは実年齢よりも二、三歳下ぐらいに見られる容姿だが。

後話の流れなどで解説する事は無かったがこの世界の暦は地球と共通しているので年齢の計算方はややこしくはない。

一年は地球と同じ12ヶ月。

誰が決めたのか獅子の月や乙女の月と言った具合に地球の黄道十二星座の名称を使われている。

四月 キャンサー 蟹の月。

十二月が魚の月と言った具合だ。

一週間も七日単位。

曜日の名称もムーン、ジュピターの日と言った太陽系の星の名前がどう言う訳か採用されている。

色々違和感を感じる方もいるかも知れ無いが世界が違えば常識や感覚も違うと言う事で割り切って欲しい。

仮にユウの誕生日である四月四日・（これも仮にだが）第二月曜日をこの世界で現す場合は「キャンサーの第二ムーンの日」となる。

ちなみに優が飛ばされたのは二月の半ば。

アルクレスに召喚されて一週間も経たない内に後にし、暫く経ってから奴隷となり三カ月もの月日が経過。

デモンズパラダイスを焦土と化した後この学園に辿り着いて特例的な中途入学。

現在は乙女の月（地球で言う六月）の中盤に差し掛かったぐらいだ。

「う……うん……そ、そうかな？」

「東洋じゃ若さを保つ秘訣みたいな物でもあるの？」

「そ、それよりもティスさん。時間が推してますんでそろそろ本題に」

おそろおそろクラークが暴走した臨時上司を止める。

「ああ、そうそう。取り合えずついて来て。拒否権は与えないから分った。いい機会だし一緒に行くよ」

「おいおい良いのかよ……トロールとかグリズリーとかと戦う羽目になってもしんねえぞ……」

夜中の外出はOKらしい。

ギルドから得た証明書を持参してゲートを潜ろうとした時。

警備兵の一人らしい髭を蓄えたハゲ頭のガタイのいいオツチャンに呼び止められる。

「そう言えばまだ帰って来て無い生徒がいるんだ。風紀委員や教師も何名か搜索に出払っている。もし見掛けたら連れて返って来てくれないか？」

とのことだった。

「よく覚えてるね」

「この東側のゲートを利用する人間は少ないからね。確かやたらデップリと太った……見てるだけでも嫌になる赤服の生徒と、もう一人……確か公爵家の令嬢の」

「レナ？」

ポツリとクラークが漏らした。

「そうそう。バートネットさん。太い方は噂のデップって言う奴だな。アイツは風紀委員と俺達警備員の間でブラックリストに乗ってるぐらいだ。ティスに比べたら小粒」

「おいティス。良かったな有名になって」

皮肉を全面に押しながら褒め称える。

「ふふん。私クラスの实力者になればこれぐらい楽勝よ」

しかしこの女は腕を組んで自慢げな態度を取った。

「「「誉めて・ねえよ・ないよ・ですよ……」」」

三人同時の心を一つに込めたツツコミも覇気が無ければ意味が無い。

軽くスルーされたまま話は進む。

「バートネットさんは夜中によく一人で鍛錬している姿を同僚が目撃してるから噂になってるんだ。しかし一人で練習の森に……何があつたのかとても殺気を充満させていたような……」

「一人でですか？」

「ああ、それとデップも何か気色悪い笑みを漏らしてやがったし……嫌な予感がするんだよな……」

何だかとても嫌な予感をユウは心の奥底で感じた。
殆ど感でしか無いが……

鉱山に作られた元採掘場。

そこでレナはデップと対面していた。

ブーツ越しに感じる硬い砂利の感触。その石ころの隙間から力強く伸び出る雑草。

周囲には栄えていた名残が、建造物の廃墟が立ち並んでいる。

ここに至るまでの道を形成していた木々が青々と生い茂っており、道中は多少苦労したが迷う事無く殆ど一本道だったためここまで辿りつけた。

今は既に廃棄されており当然人の気配は感じられず、夜盗などが根城にしていそうな場所だ。

（密会する場所にはおあつらえ向きな場所だな）

元々採石場のルートとして使われていたせいもあるのか地面は平

坦で雑草が多少生い茂っている程度。

まるで道を形成するかのように配置された森林が迷子になる事を阻止してくれた事で指定された夜の時刻に間に合った訳である。

剣を構えて洞窟の入口に背を向けたデップに向ける。

「これは一体どう言う事だ!？」

「まんまと引つ掛かったなレナ? まああの手紙を見れば分りそうなもんだけどね」

手紙には魔導具を使って魔法を使用している用に見せ掛けている事。

来なかったらそれをバラす事などが含まれており、嫌が上でも来なければならなかったのだ。

汚い手を使うとは思ってはいたが現実を予想を超えたものだった。

(黒い仮面の男が二人……)

男と言うのは外見から得られる凡その予測だ。

仮に女だからといって気を緩めるつもりは無い事である。

大方デップが権力振りかざして雇った連中であるのは想像できたが何故だか違和感を感じていた。

まるで王族の護衛にモンスターを兵士代わりに使用しているかのような と例えればよいのだろうか。

兎も角イメージに合わないのだ。

もしこの二人が見るからに筋肉質で小汚い山賊の上がりの悪党面集団であるならば特に疑問は思わなかっただろう。

早い話、何故こいつらはこんな小悪党に付き従っているんだ? と深い疑念を感じたのだ。

貴族の中には独自に私兵の軍隊を持つ者達がいるがデップの家に「裏の仕事を生業とする隠密集団がいる」が組織されていたり、また繋がりがあるなど聞いた事がない。

金で雇った可能性も考えられたが金で動くような人物には到底思えなかったのだ。

「この二人に勝てたら無能の魔法使いじゃ無いって認めてやるよ。もつとも君みたいな家柄だけしか取り得の無いよう奴がdけるとは思わないk度ね。ゲヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ」
「チツ!!」

自分自身が気にしている言葉を容赦なく浴びせられ再びレナの思考が怒りに染まり思考を打ち切る。

弱味に触れるとまるで逆鱗に触れた巨龍のようになってしまふのがレナの欠点だ。

「その減らず口をサッサと黙らせてやる!!」

吐き捨てるように叫びながらレナは自分から見て右の方に斬りかった。

垂直に剣先を空に向け、渾身の一撃を放つ。

相手は回避する素振りすら見せない

(なっ?)

と思いきや剣先をギリギリで避けて重い後ろ回し蹴りが腹へ突き刺さった。

硬い石ころの地面の上を転げまわる。

一瞬の出来事だった。

痛みに堪えつつ……たまたま向けていた空から仮面の男が此方に落ちて来ていた。

魔法による物か、それとも元々そう言う身体能力を持っているのか、有り得ない跳躍を見てレナは一瞬呆け……

（危ない！！）

咄嗟に体を横に向けた。

一瞬遅れて仮面の男は自分が先程まで倒れていた場所へ土煙を上げて着地。

その余波で体に石ころが当たるがそれを堪えて立ち上がり、再び剣を構えた。

この僅か十秒近くの攻防でレナは悟った。

（強い……なんて奴らだ……）

身体能力に目が行くが最初の一撃の回避動作。

まるで自分が死ぬのが恐く無いかのようなあの動き。

そしてカウンターにレナは直感的に思った。

自分との格の違いを感じた。

数々の模擬戦を見て来たがこいつに対抗できるのは生徒でも何人いるか……恐らく教師陣ですら難しいだろうと考える。

もしくは自分含めて五十人を手玉に取ったユウか……

「僕のものになるって言うんだったら止めてやってもいいぞ？」

唐突にム力つく声が耳を突き刺さる。

「断る！！ 誰がお前の様な下種に頭を下げるか！！」

「ゲヒヤヒヤヒヤ！ こいつの戦闘能力はお前も分つただろう？ さつさと降参すりや痛い目を見ないで済むつてのに」
「貴様…… 決闘を他人任せにして恥ずかしく無いのか!？」
「僕ちゃん偉いから何をやっても許されるんだも〜ん」
「クツ!!」

予想以上のゲスツぷりに怒りが込み上げる。
一体この男に何人の人間が犠牲となり、そして一体どれ程の怒りを、悲しみを味わった事だろうか。

（どうにかしてこいつらを倒さなければ……）

怒りに燃えていた頭が急速に冷えていくなか、視線を改めて仮面の人物に目を向けた。

この人物に勝てなければ自分自身は一生物の苦痛を背負わなければならない。

だがマトモにやり合っても勝ち目は無いのは先程の戦いで分つた。

（贅沢はいつてられん!!）

自分自身に魔法の才は無い。

だからこそ自分は魔道具に頼り、魔法使いを演じていた。

しかし今は生き延びる為に後ろめたい感情を押し殺し、魔法を使う。

本当はこの戦いで魔法を使いたくは無かったが相手が相手なため、卑怯な手を使って来た場合は容赦なく使うつもりだった。

（一で相手を誘導し、二で相手を討つ!!）

腕輪の形をしている魔道具を通じて剣に炎を纏わせ、周囲を明る

く照らす。

今行っている魔法は剣に炎を纏わせる「フレイムソード」。
そしてそのフレイムソードの炎を刃にして飛ばす攻撃

「フレイムカッター!!」

剣を横一線。

炎の斬撃が飛ばされる。

進路上の闇を照らし、大気を獣の様に焼き散らしながら仮面の怪人に迫った。

同時にレナは自分の出した技を追い掛けるように駆け出した。

(必ず回避されるのは分っている……後はどちらに回避するか!!)

飛ばされたフレイムカッターを仮面の人物はローブを激しく揺らしながら跳躍して回避した。

(今だ!!)

再びレナは腕輪を装着した右腕を向けてファイアボールを放とうとする。

空中では例えどんなに身体能力を持っても自由自在に動けない。

魔法を使うのであれば飛行魔法を使用して回避は可能であるが、レナにとっては些細な問題であった。

(当たってくれよ!!)

そう念じられずにはいられなかった。

炎の玉は獲物を目の前にした肉食獣のように目標へ突き進む。

これで倒れて欲しい。

希望的観測が通じる程甘い相手ではないとは頭の中では判っているが、後々の事などを考えればこれで倒れて欲しかった。

（え？）

現実是非情であった。

仮面の人物はあろう事か腕で火の粉を振り払うように掻き消してみせる。

冷静に思考が働いていたら何らかの力で

だが戦闘と言う独特な環境下で冷静な思考が出来るほどレナは熟練の兵士ではない。

視覚的に見ればまるで 素手で魔法を掻き消した かのように見えたのだ。

その隙を突くかのような仮面の怪人はそのまま此方へ再度飛び掛つて来る。

（噓……）

普通の人間であればこのまま次に起こるであろう事実を受け止めるだけだったろう。

しかしレナはここで奇跡を起こした。

ユウの攻撃を退けた時に見せた条件反射……魔法を使えなかった反面、ずっとずっと体を酷使するように打ち込んだ戦闘技術。

文字通り 血が滲むような努力をして得た物 が
相手は自分へ手を伸ばす。

少し遅れてレナは懷に飛び込むように潜り、剣を右横から袈裟に振り上げるようにして

一閃してみせた。

自分でも予想だにしなかった結末だった。
手応えがどうか関係無かった。

ただこの一撃で自分は大金星を挙げたと言う喜びと安堵感が体を包み込んだ。

しかし奇跡は二度も続かなかった。

「ガッ!？」

途端。

胴体を切裂かれた筈の仮面の怪人は片手でレナの細い首を万力で締め上げるかのように力を込めた。

掴む手はまるで死人のようにとても冷たくまるで命と言う形の無い物を握っているかのようなのだ。

フードを被ってよく見えない仮面の奥底に見える人形の酔うな無機質な瞳は死神を連想させる。

（何故生きているのだ？）

その原因を探る思考を働かせる前に意識が一瞬で遠退いていく。

デップが勝ち誇ったかのように何かを言っているが耳に入らなかった。

（なんとも呆気ない結末だな……）

時間にして一分も経ってないだろう。

勝ったと思い込み、その隙を突かれて逆転負けを許すとは。
何とも間抜けな展開である。

死にたくない

こんね結末では終れない。

選べるのならもつと立派な形に死にたい。

少女は強く願った。

目尻から暖かい滴が流れ始める。

こんな訳の分らない状況で。

あんな奴の目の前で。

死にたくは無かった。

「アッ……」

更に首への締め付けが強くなる。

何かを落としたが武器を手放した事を直感的に理解する。

戦いの中で武器を手放すのは愚の骨頂だと己を罵る前に生存本能が勝った。

両手を自分を掴み挙げる怪人の腕へと伸ばす。

どうにかして引き剥がそうと試みる。

だがそれだけだった。

死ぬのかな私……

諦めかけた時だった。

ボゴオン！！

まるで大砲が炸裂したかのような爆発音が響き渡る。

怪人物がくの字に折れ曲がり、レナが投げ出された。

「ナイスタイミングって奴かしら？ いっぺんこう言う登場やってみたかったのよね」

勝気な口調の女の声が妙に周囲へ響いた。

ジャリ、ジャリと硬い石が絨毯のように敷き詰められた地面を鳴らし、爆発の衝撃で驚いた鳥達が夜空へと逃げ去って行く。

一体何者だと思った時、現れたのはレナと同じ赤い髪をボブカットをやや両サイドに広げた赤い髪の少女。

青い女子生徒が着る制服越しから見ても分るぐらいの胸の膨らみ、制服のスカートから食み出る健康的に引き締まった足。

まるでベテランの舞台女優の如く自信満々な笑みで踏み歩いていく。

「あなたは……」

レナは目を向ける。

学園には学生、教員にも様々な実力者がいた。

生徒の中には教師のレベルに匹敵、あるいは凌駕する物までいると言っただ。

メデュウ。

ハニエル。

ユウ。

この三人意外にもまだまだ実力を持った生徒は多くいる。
だがそんな生徒の中でメデュウに匹敵する四人の生徒がいた。

鋼の肉体を持つと言う。

氷の女王にして絶対零度の氷使い。

全てを置き去りにする早さを持つと言う風使い。

そして

「冒険同好会部長ティス・アドベンチャー、そしてこいつがビュウ・スロウよ」

ティス・アドベンチャー。

最強の炎使い。

また学園一のトラブルメーカー。

自分とは正反対の生き方をしている人間。

正直好きにはなれない女の子だった。

（それがどうしてここに……）

まだ意識が朦朧としながらもレナは頭を働かせようとしたが検討も付かなかった。

「覚悟はいいかしら三下の悪党が」

そんな心境も露知らずティスはこれから何処か遊びに行くかの様な態度を崩さず全身から勢いよく炎を吹き出した。

第四話
E
N
D

第四話「茶番劇・その1」（後書き）

スイマセンかなり前に完成していたんですが何処で区切ればいいか分からず、結局（メモ帳基準で）前回と同じく17kbになりました。

就職活動などの関係上で次回からもしかすると分量が少なくなるかも知れません。

十万アクセス記念を待っている人とかいたら本当にごめんね（涙）

ここだけの話ですが……

最近物語を進めて思ったけど何かこの作品って段々と劣化禁書目録みたいになってるなとか思ったりしています。

それに何か登場キャラも既存のキャラに引っ張られる感がありますし…… どうか差別化図りたいとは思ってるんですが…… 今後の課題になるでしょうか。

最近全く来ないけどご意見・ご感想・ご批判^え待ってます。

第五話「茶番劇・その2」

優しき勇者・悲しみの冥王

第三章：魔法学園

第五話「茶番劇その2」

少し時間は巻き戻り……

「で、近道とか言っただけでも獣道なんだけど……」

もう既に周りが暗闇に包まれる中。

一向は緑が薄い平らな道を突き進む。

「嘗て採掘場があつた場所へ経由する形です。ここからなら練習の森への経路をショートカットできます」

「他所（の国）の人間なのによくそんな道を知っていたわね？」

「探検するのが趣味なんです。僕は」

と片手にライト（に似た形の魔導具）を持ちつつ笑みを向けて笑つてみせた。

「万が一学園都市が敵に回った時、自国の軍隊で奇襲させるためにこんな道まで把握しているのね」

「お前はそう言う発想しかできねえのか？」

瞬間、ドラゴンのブレス（火の息）に匹敵しそうな程の火の手が夜空を切裂いた。

一瞬夜空を赤く照らし、周囲の背景が赤く染まる。

「馬鹿野郎！！ 殺す気が！？」

「やる気じゃなかったらぶっ放さないわよ！！ どうせ直撃してもギヤグ補正で生き延びられるんだし……」

「ギヤグ補正あっても熱いモンは熱いんだよ！！」

すかさずメタなツツコミを入れるビュウ。

「ちょ、ティ、、ティスさん！？」

「い、行き成り魔法をぶっ放すなんて…… 過激な人なんだね」

啞然とするクラークに比べて諸事情でこう言う突発的な惨事に耐性がついているユウは落ち着いていた。

「そんな火力を放ったら森に炎が燃え移って大惨事になりますからここは穏便に……」

「大丈夫。その時はその炎を吹っ飛ばすから」

「エクストリーム消化なんですね。分ります」

「なに言ってんだユウ……」

現役の消防士が聞いたらマジでブチ切れそうな消化方法である。

「しかし採掘場か。噂でしか聞いた事無かったけど本当に存在したんだな」

「噂？」

「ああ。何でも学園近くの森の中には忘れられた採掘場があって幽霊が出たりとか、凶悪なモンスターが住み着いているとか……」

地球ならともかくここは異世界。

既に幽霊の戦い（第一章参照）は済ましている身としては何とも笑えない噂話だ。

「私が来た時はそんな気配は全く感じられませんでしたけどね」

とまるで安心させるように付け加えさせた。

「よくある悪戯チックな噂話つてところかしら？」

「まあそんなところでしよう。今向っている採掘場は遠い昔の頃は魔力形成されて天然物の鉱物が採掘され、とても栄えていたんですが……」

「やがて掘り尽くされて何もでなくなつたつてところですか？」

「ですね」

悲しい事に永遠の繁栄を齎す打ち出の小槌と言つ訳ではなく、鉱物も尽き果てて寂れて忘れられたらしい。

今も尚極少数の人間しか知らず、文字通り歴史の闇に埋もれた場所となつたのだそうだ。

「ところで……気付いている皆？」

唐突に三人が止まる。

「ええ……」

「まあね」

どうやら二人とも気付いていたようだ。

「おいおいどうしたんだ皆急に？」

ビュウだけは分かっていたいなかった。

「まだまだ未熟ね」

「そんな事言われても……って何だこいつら！？」

闇に溶け込むような黒装束の集団が多数から現われた。

「暇で暇で退屈していたら学生が迷い込んでくるたあ……」

「しかも一人は女だ。コイツあついているぜ。」

背格好は様々。

手には様々な武器を持っている。

口振りからしてこれは

「山賊かしら？」

「へっへっへっ。ここを通る奴を一步を抜かすなって頼まれてよ」

ただの山賊ではないらしい。

雇われの人間……と言う事は少なくとも裏の仕事を生業とする連中だろう。

単なるチンピラである可能性も無くは無いが……。

このウラシエザーム魔法王国を含めた大陸中央部は比較的治安が良い（＊ただし異世界基準でだが……）部類である。

山賊や野党の類の発生はあっても国境沿いであるのだが国境の防備を手薄にする程この国は平和ボケしていない。

こいつらは他所から雇い入れたか、もしくは町のゴロツキどもをそのまま引っ張って来たかと言う事になった。

「誰に頼まれたのかしら？」

「さあな。あの赤い制服着たお前と同じ色の髪の毛をしたお嬢ちゃんだ」

「もしかしてレナがつ！？」

驚いたようにビュウが声を挙げる。

「悪いが全員死んで貰……」

意外にも先手を打ったのはクラークだった。

折り畳まれた状態のブレードの前に突き出る杖から発光と共にパシユと言う音がした。

パシユ。

パシユ。

パシユ。

この音が響くだけで次々と敵が倒れて行く。

「あんた顔に似合わずエゲツない得物使うわね……」

「な、何が起きてるんだ！？」

ビュウは何が起きているか分らずキョロキョロと見回す。

襲撃者達も攻撃の正体が分らないまま次々と命を刈り取られていった。

まるで地球での戦争を再現しているかのようなシーンを眺めつつユウは考察した。

（風の魔法を圧縮して打ち出しているんだ……）

圧縮された空気砲弾を打ち込んで敵を殴打する魔法。

エアブレットを殺人的なレベルまで凝縮して打ち出している。

杖に見えるの物の正体は砲身。

そこから空気の塊をぶつけるだけの魔法エアブレードを凝縮して密度を高め発射している。

口を狭めたホースからはより勢いが強い水が出るのと同じ理屈を用いて制作されたのだろう。

射程距離はどの程度か分らないがまるでサイレンサー（消音器、銃口に付けるあの細い奴）の銃を扱っているようだ。

サイバネル王国製の最新技術か、あるいは彼独自のオーダーメイド、はたまた魔法学園製か……ともかく恐ろしいぐらいの対『人』兵器振り。

異世界であつても技術の発展とは恐ろしい物だとユウは肌で感じた。

「ヒイイイ!？」

「な、何しやがった!？」

訳も分らないまま数を減らされていく仲間達。

瞬く間に十人の命が亡くなった。

学生とは思えない戦果だがそれ以上に何故だかとても使い慣れている印象を持つ。

練習しているのなら別におかしい話では無いが頭を精確にヘッドショットして絶命させるなど幾ら異世界の人間であつても普通の精神では出来無いだろう。

明らかに殺し馴れている。

あの食堂で温和な笑みを持って接して来たクラークとは思えなかった。

（うわぁ……最初シロウさんみたいな人かなーとか思ってたけどこ
う言う人だったんだ……）

ユウもそうである。

多少嫌悪感の様な物は感じてはいるがデモンズパライジスの地獄とも言える経験、記憶を持っていたせいか強く抗議をする気は起きなかった。

そもそも自分を集団で囲んで刃物をちらつかせて殺すと宣言したのである。殺されても文句は言えないだろう。

クラークはまるでハリウッド映画のメチャクチャ強い主人公の用に次々と命を刈り取っている。

ある程度玉の誘導はしていると思うがそれにしても見事な腕前だ。

「私達は先に行くわ！！ ビュウ！！ お前もさっさと来い！！」

「お、俺も！？」

大丈夫だと判断したのであるが、ティスはビュウの首根っこを掴んで引き摺るように先へ進んだ。

何人かが通せんぼしようとしたが薙ぎ払うように払われた炎に焼かれ易々と突破される。

「さっさと片付けて僕達も合流しますよ！！」

「う、うん！！」

その後はもう三十秒も絶たない内に壊滅した。

あまりの手応えの無さにユウは拍子抜けしたぐらいである。

クラークの予想外の戦闘能力もあつたがユウの隔絶した戦闘能力も加わり、敗走を始めた。

「ひ、ヒイイイイイイ！！ に、逃げる！！」

生き延びた雇われの兵達は森の中へ逃げ込むようにして散って行くが……

「ギアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアア！」

悲鳴と共に首がユウ達の前に転がり込む。

「仮面の怪人！？」

黒いローブを身に纏い、黄色い爬虫類の骨を連想させる仮面を被る怪人。

手元やローブが赤い血で濡れている。

夜でなければよりリアルに見れたであろう。

「まさかとは思いましたが既に実践投入できる段階になっていたとは……」

こいつの正体をクラークは知っている様子だった。しかし今はこの驚異をどうするかが先決である。

そして現在……

「おいおい……森の中といい……これ本当にどう言う状況なんだ？」

茶髪のショートヘア、別の意味で問題児であると記憶している「ビュウ・スロウ」。

何時もと変わらぬ平凡そうな少年はこの状況を把握できていないのか目を丸くしてキョロキョロと辺りを見渡している。

知らぬうちに周囲を囲まれ、ティスに引つ張られて脱出したかと思えば突然投げ捨てられ、そして起き上がってみるとレナが倒れて

謎の黒いローブを身に纏い、仮面を付けた怪人二人組と見るからに悪そうで落ち近きになりたくない太った老け面の生徒がいたのだ。

この時ビュウは「もう訳が分らないよ」と状況把握に精一杯な状態だった。

「レナさん!! こんな所で何やってるんだ!? それにこれは一体……何がどうなってやがんだ!？」

「大方やらしい事でもするつもり……にしては大層な護衛付けてるじゃない」

視線を辿るとそこには軽装の鎧を着込んだ仮面の男がいた。

先程ティスに吹き飛ばされた方である。

全身を黒いタイツで多い、その上に動かし易そうに最低限の鎧を身に纏っている。

焼け焦げた後はあるが痛みは感じている様子は無く、まだまだ戦えそうだ。

「アレは一体……」

「気をつける。こいつらは普通じゃない……ただの人間だと思つと痛い目を見るぞ」

「確かにね……色々なモンスターとか戦つて来たけどこんな奴初めてだわ」

こう言う時クリスさえいれば何か知つてそうな気がした（*悪魔で気がする程度）が……とティスは思いつつ相手を眺める。

さっきの爆発魔法を食らえば生半可な戦士でも暫く動けなくなる物だとずっと思つていたが世界は広い。

もしかすると本気で殺す気でやらないと駄目かも知れないとティスは思つた。

「ゲヒヤヒヤヒヤヒヤ……そりゃそうだ。俺だって最近知ってんだからな。こいつらは命令一つでどんな事もやってのける殺人鬼さ」

自慢げに語るが要するに自分も知らないと言つ事である。
その様に呆れたのかティスはふうと溜め息をつく。

「救え無いわね。私が誰だか分つた上でそんな口叩いてんの？」
「ああ？ 前が何者か知らないがこいつらには絶対勝てねえ！！
痛い目を見たくないって言っんなら」

まだ学園に来てから日が浅いせいもあるのか、デップは知らない様子であつた。

この少女の事を。

「不味い！！ 全力使用するつもりだ！！」

「ぜ、全力使用？」

「普段通りって意味だよクソツタレ！！ 逃げるぞレナ！！」

まるで動物が自然災害などを予知するように微妙な変化を感じ取つたのかビュウは怯えながら退避を促した。

その様子にどうやら途轍もない事が起きるらしいと感じ取つたその時であつた。

目の前が光に包まれたのは……

その頃、ユウ達は

「お強いですね。並大抵の戦士なら一方的に仕留める事が出来る人

造兵士を一瞬で……」

仮面の怪人との戦いは殆ど一方的だった。

最初は驚いたが「似た様な奴との戦闘経験が豊富にあつたため」
(最もユウの場合は知識の上でだが……) 冷静に粉碎した。

体をバラバラに分解し、万が一再起動して復活しないようにしている。

例え人間では無いとはいえとてもエグく感じる。もっとも実際の人間相手にやれば……とそこまで考えたところで思考を止めた。
今はそんなことを考えている場合ではない。

「人造兵士？」

「ゴーレム技術の応用です。魔導人間とも言いますね」

行き過ぎた科学は魔法と大して変わらないと言うが、逆を言えば高度に発展した魔法も科学と変わらない。

それに人間である以上辿り着く発想は同じなのかもしれない。

地球でもこの世界でも剣や槍があるように、科学の代わりに魔法がある。

別にアンドロイドを作り上げても何ら不思議では無いように思えたが実際目にとこの異世界の技術は馬鹿に出来ない。

ロボット兵士は既に実戦投入されているし、二足歩行メカは既に民間企業が実用化している。

しかし人間以上の機敏な動作で格闘戦できる動作の人型機動人形はまだまだ夢物語の段階だ。

あのアイアンゴーレムもそうだがこの世界の技術は馬鹿に出来る物ではないなと思えた。

「で？ 今回の事件は何処まで知ってるの？」

「何の話ですか？」

「もしかしてレナを救いたかったからこんな回りくどい事をしたのかって聞いているんだけど？」

「……やっぱりバレましたか」

後ろめたさを隠すようにクラークは表情を曇らせた。

「急なお誘い、道の変更、そして襲撃事件……ちょっと考えれば誰だって気づくよ」

もつともティスやビュウが気づいているかどうかは怪しい物だが、軽い調子でユウが問い詰めると観念したのか今回の事件の舞台裏を軽く話し始めた。

「正直この話を知ったのはあの食堂での会話の後でした……公爵家の令嬢を使ってこんな強硬手段を使うとは思いませんでしたから我々は後手に回ったんです」

「我々って事は何かの組織に所属しているの？」

「……はい。僕が表立って動けば余計に事態を悪化させるかも知れませんでしたから。風紀委員や教師、警備員と言った人達に情報を漏らしたり……ともかく思いつく限りの手段を取りました」

どうやらここに至るまで思いつく限りの最善の手を打ってかなり手回ししているようであった。

それこそ今尚こうして平然といられるぐらいの手段を使ったとも考えられる。

「今回の体験入部もこの近道の件も？」

「ええ。時間さえあればもっと上手い手段を考え付けたかも知れませんが……時間が無かったんです」

「その割には道中余裕があったけど？」

ある仮説を元にユウは疑問を投げかけた。

「本当は無理をしてでも急ぎたかったのですが……悟られる訳には行きませんからね。それにレナさんの性格を考えた場合、無理に止めようとしても徒労に終わる可能性の方が高かったです」

と苦笑しながら言って見せた。

（つまり、偶然を装って助けに行くつもりだったのか……）

分かっていたがなんつー周りくどい手を取る物だとユウは思った。それにしても焦った様子を見せず、余裕が感じられるがこれは最善の手を打っていると言う自信の現れかもしれない。

ともかくユウは……

「じゃあ黙っていた罰としてこの事件解決したら告白ね？」

唐突な一言にクラークは口から何かを吹き出して顔を真っ赤にする。

同時に大爆発が何度もここまで響いた。

デップは正直言えばレナ・バートネットと言う少女のことはよく知らなかった。

そもそもデップは王都出身の学園の人間である。

通う生徒の殆どが貴族や裕福な人間であるこの学園はザードリィー魔法学園を見下していた。

だから学生身分で四天王などと言う大層な肩書きを持つ連中の実

力など眼中には無かった。

メデュウと勇者との一件だってそんな感じだ。

だが……今この時を持つて、そんな非現実的な認識はとても甘かったと思い知らされる事となった。

とあるお方から手渡された人造兵士が大砲の集中砲火でも浴びたかのようにバラバラとなって吹き飛んだのだから。

人造兵士は剣撃、打撃だけでなく魔法攻撃にすら高い防御力を誇りまた人間とは比べ物にならない程の反射神経を要する。

正直言つて驚異的な技術力だ。

そしてとても強い。

実験と称してこれまでもギルドに所属する冒険者やモンスターを襲撃させたりして実験を行ったから分かる。

「体温が変だと思ったら人形だったのね……手加減して損したわ」
「全然そうは見えなかったぞ……てか体温で分かるのかよそんなこと」

「私ぐらいの実力者になれば当然よ」

それがたかが学生の手で粉碎されたのだ。

ゴロゴロと焼け焦げた人造兵士の生首が尻餅をつくデップの前に転がり込む。

ヒツと体を震わせた。

そしてデップは逃げ出す。

もう一人を残して逃亡を始めた。

一旦自分が不利になると形振り構わず逃げ出す。

ずっと狩る側になって弱者をいたぶってきた男。

（どうして学生如きの身分であんな化け物みてえな実力もってんだよ！？ 「冗談じゃねえ！！」）

杖を取り出し、魔法の「エアークラフト」を作動。

風の魔法により肉ダルマの様な体を地上スレスレで滑空させるように移動する。

腐っているが彼も一応は元貴族の人間で王都の学園に通っていた男だ。

魔法使いとしての能力は割と高い部類にいる。

「俺だ！！ 邪魔が入ってしくじった！！」

杖を片手に彼は左手で通信用の魔導具を持つ。

一件携帯電話に似ているが機能は同じ魔導具を持つ物同士にしか使えないと言う欠点を抱えている。だが単純な性能であれば軍事レベルでも十分に使えるぐらいに強化した代物。（らしい。デップ本人も詳しくは知らない）

同時に自分の犯罪歴を消してくれたクライアントを結ぶ大切な導具でもある。

『此方でも確認した……』

魔導具から聞こえる声は女なのか男なのか分からない。

声色を意図的に変えて分かり辛くしているようであった。

「頼む！！ 俺を助けてくれ！！」

『無理だ。追っ手が多すぎる』

デップの助けをピシヤリと振り払った。

「お、おい！！ 冗談がきついぜ！？」

『冗談ではない。まさかこんな単純な仕事もこなせないとはな……お前だけ任せたのを後悔しているよ』

「そ、そんな……」

天国から地獄に突き落とされたような感覚を覚え、暫く呆然とする。

『まあ多少私のミスもあるのも否めない…… チャンスをやろう。再びレナを確保できればまた拾ってやる』

「ほ、本当なんだな！？」

『だがお前一人では荷が重いのは事実だ。サービスとして人工ゴーレム一機を寄越してやる』

「じじじ、人工ゴーレム？」

人工ゴーレム。

学園内でも多く見かけられる職人の手で造られたゴーレム達のことだ。

近年では二階建ての家一軒分ぐらいの大きさを持ち、汎用性、機動性に長けたゴーレムなどが主流だがそれ以前は鈍重で動きが鈍い上に巨体を誇ると言う扱い難いタイプだった。

『そちらに投下する。名前は「オクトパス」……それで邪魔者を粉碎しろ。レナの確保は此方でやる』

「あ、ありがとうございます！！」

今の今まですっかり忘れていた心からの感謝を述べた。

森の中にズシンと言う大音が響き渡る。

突然空中から大型の質量物体。

タコに見えるゲテモノ的なゴーレムが投下されたせいだ。

（ヤレヤレ。クラークの野郎に面白い祭りが始まるって聞いたから先回りしてみりゃあ、あの爆破女が出張るたあな）

まあ大方レナを助けるための方便だと思うが二重、三重の手を打つのは失敗が命取りとなる闇の世界にいる人間として正しい姿だが余りにも後先を考えずに行動してしまっている。

暫くは碌に身動きが取れなくなるだろうなと男は思っていた。

（まっ俺をいのように使おうとした罰としちゃあ軽すぎる気もするが……）

この男本当は万が一の場合レナを助けて欲しいとクラークから頼まれていた。

性格からして自分以外の人間を動かしているであろうことは容易に想像出来るがここ最近色んな勢力が激しく動き回っており、探りを入れるために動いたのもある。

だが駆けつけてみれば三下のデブが女一人をいたぶった拳げ句、安っぽい劇のようにティスが参上したのだ。

ティスの実力は実際かなり高い。

勇者のパーティーに入れても普通に主戦力でやっていけるだろう。炎の特性を百%理解しているのなら工夫次第で魔王の単独打倒すら成し遂げられる可能性を持つ。

それがティス・グラマトンだ。

（パーティーはまだまだ続くみてえだし、それにあの転入生の実力も見れると思うしなあ……その点に関しちゃ感謝するぜクラーク）

と、そこで男は後ろの気配を感じ取る。

「前生徒会長様とデカ女か」

「幾ら生徒会長を辞めたとしても、こんな嘗て無い大事件に動かない訳には行かないよ」

「……」

ハニエルとその側に控えるように立つ男のように髪の毛を短く切り纏めた長身の女性徒がいる。

学園指定の青い制服を着てなければ男だとは分からないだろう。

腰にはサーベルをぶら下げており、目を瞑っているが此方を警戒しているであろう事は容易に察する事が出来た。

（クラークの野郎、手当たり次第に手を打ちやがったな……）

正直俺を動かす必要はあったのか心の中で毒付く。

「で？ 本職の生徒会長は？」

「そんな噂話で動く訳にはいかないって。アイスちゃんは今もう既に動いているよ」

「チツ。対応がオセエ……こんな失敗前提の嫌がらせにも対応出来ねえようじゃまだまだお前に遠くは及ばねえな」

アイスなら余程の化け物が相手でない限り負けないが、生徒会長の実力は中の上。四天王と呼ばれる連中にはまず届かない。

赤服だが実力は他の赤服と五十歩百歩と言うのがこの男の評価である。

誤解がないように言っておくが生徒会長も他の国であるならば十分優秀な部類に入る。おかしいのはユウやティス達なのだ。

「で、お前は助けに行かなくていいのか？ 愛する生徒達のピンチだぜ？」

「大丈夫。レナの周りには強い味方がいるから。もしかすれば噂の機甲戦士レヴァイザ も見れるかも知れないしね」

「ケッ」

男は付き合つてらんねえとワザとらしく機嫌悪そうな態度をとる。

（だが確かにレヴァイザ の話は気になる……）

一応闇の人間である彼にもその話は聞いている。

マグネ ドを事実上単独で撃破した謎の青い鎧を身に纏う戦士。噂では本人の許可を取らず勝手に芝居が制作されていると聞く。

ユウと何らかの関わりがあると思われるがどれも要領をえない憶測だった。

（マジックアーマーの推進を考えている連中からすりゃあ嬉しい誤算だな）

この国は軍事面においても浪漫派、改革派（男が勝手につけた暫定的な名称）による水面下で争いが行われている。

浪漫派は早い話高度な訓練を受け、王に忠誠を誓う我々は小細工が無くともどんな驚異にも勝てる。と言う連中だ。

対して改革派は人工ゴーレムや学園で開発、研究された魔導兵器、飛行船の強化・改良などを推進する集団である。

謎だろうが何だろうが数々の勇者を葬ったマグネ ドを謎のマジ

ツクアーマーを装着した少年が撃破したと言っるのは改革派にとってはいいアピールだ。

今まで以上に推進、開発促進の流れが進むだろう。

ちなみにレナはどちらかと言うと浪漫派に位置し、本来ならデッブの古巣であり貴族の子達が通う王都の学園に通わなければならないのだが、魔法が使えないと言う欠点が原因である事を考えれば到底無理な話だ。

使用人を手足のように使う事になれている貴族の子供がレナをどう扱うかなどは容易に想像出来る。それが例え公爵家の人間であってもだ。

もっともバートネット家は何故だかそんな娘を放置しているようにも見えるが……

（まあこれは考えても仕方ねえか）

それよりも男が気になるのはあの転校生だ。

小柄の女のような容姿。

耳が覆われ、首筋が隠れる程度に伸びた黒髪。

白い肌。

東洋系（この世界でも東洋系＝中国、韓国、日本人のような顔立ちを指す）の顔立ち。

噂で聞いたブレイブイーターの外見的特徴が一致している。

デモンズパラダイスの闘技場で有名になり、その武勇を轟かせた戦士……商人と同じく情報が命である裏の世界で出回っている情報だ。

だがデモンズパラダイスと言えばクソどもの欲望の捌け口……実在する魔界であり地獄でもある。

暴力、殺生は日常茶飯事、裏社会の見本図のような場所で生きて来たにも関わらずあの明るい態度。クラークと同じく自分の闇を隠す

のが上手いのか、今の所裏の人間であると思われのような態度が見えない。（もしかすると壊れた可能性も否定は出来ないが）

だがアレだけの実力と特徴的な容姿を持っていながら今の今まで何の情報が入って来なかったのもおかしい話だ。

「ともかく……この茶番劇がどうなるか見物すつか。アンタはどうする？」

「もうそろそろ卒業だし表に立つ気は無いけど、できる限り裏方で頑張ってみようかな？　とか思ってる」

「人がいいこって……」

男は呆れたように溜め息をついた。

とある船の船内。

外から見れば見えないこの船の内部には多数の乗組員の他に大型のゴーレムの整備施設まで搭載していた。

現在はそのゴーレムを投下したため、元々広かった船内はかなり広くなっている。

この船は速度、隠密性、長距離航行、物資・人員輸送能力と言うパラメーターを重点的に意識して作られた謂わば工作船の類いだ。

先程ハニエル達が見たゴーレムの投下も実は透明になった状態で投下したため、外見的には突然空から振って来た様に見えたのである。

その船内には今回の事件を裏から引き起こしたある一団がいた。

「よかったの？　オクトパスを届けて？」

黒いゴスロリドレスを着た女性は白髪とメガネが目立つ男に問いかける。

衣装にも目を引くが顔に包帯を巻いており、より怖さが増している。

ウェーブ掛かった黒く長い髪の毛もスタイルも良さもこの衣装と顔の包帯の組み合わせの前ではより不気味さを際立たせる要素でしかなかった。

「その点は抜かりない。アレは元々失敗作で操作は意外と簡単だ。馴れば子供でも動かせる。ちゃんと例の装置も付いている事だしな」

と、白髪の男は自慢げに語って見せた。

長身で学者風な不健康そうな男。顔に皺も多い。

見るからに怪しげな研究を行ってそうな風貌である。

その男が言う例の装置とやはとても不健康そうな不吉なワードに聞こえてならない。

「あゝあ、私遊びたかったな」

「……僕はどちらでも」

ミニスカートを履いた可愛らしいツインテールの女の子は好物のデザートを親におあ付けを食らったような調子で。

白いフードを深く被った少年はポツリと呟く。

「ふうん。で？ あの落ち零れ君で本当に大丈夫なのかしら？」

興味に無さそうにゴスロリドレスの女は学者風の男に声を掛けた。

「ああ、仮にも勇者のパーティーにいた男だ。学生相手に遅れを取

るようならそれまでの話だ」

死のうがしままいがどうでもよく感じられる口調で言った。

その男はメデュウに潰されて以来、周りからの批難や侮蔑を味わい心を歪めた男である。

嘗ては好青年だったらしいが今では見る影も無い。

「私は私の作品がちゃんと活躍する機会さえ与えてくれればそれでいい」

「ふん。相変わらず変わってるのね」

「否定はせんさ」

相変わらずだなこの親父は、と顔面包帯の女は心の中で呟く。

自分達はある共通目的の為に集った集団である。

その中でもこの白髪の子父は変わり者で自分が作り上げたゴールムが活躍する機会があれば何でもいと断言している男だ。

主な制作品は生物を模したタイプからあの人造兵士と言う代物までもある。

それ達の代物は万人受けし難く、周囲からは白い目で見られていたそうだと女性は聞いている。この男にとって今の地位はぶっちゃけ天職なのかもしれないと思った。

「で？ 諜報員からの追加連絡は？」

「いいやまだだ。まだ上を動かす決定的な証拠が足りないのだろう」

「ふうん……まあ私はウラシエザームの連中に地獄を見せてやればそれでいいんだけどね」

「ならば王都で暴れれば良かろう」

「いいや。そんな三下の悪党みたいな真似は私に相応しくないわ」

今回の作戦を仕組んだのはこのうつとりと自分の願望を語る包帯

ドレス女だ。

成功しても失敗しても一定の成果を上げられる。
その作戦も後はデップを使い潰すだけとなっていた。

「私はウラシエザーム相手に暴れられればそれでいいわ」
「……僕も同じ」

その意見にどう思っているのか幼い二人の男女が応える。

『ソレについては僕も同感だ』

ガチャ、ガチャと重量感を感じさせる金属音が響く。若い男の声だ。

声がヤケに鮮明に

「ティンマンじゃない。あんたも今回はお休み？」
『出来れば万全の状態で挑みたい』

肌の隙間無く全身に鎧を身を包んだ白銀の騎士。
動き易さを重視してか突起物は全く無い。

ライダースーツのような衣装を下に着込み、上からプレートメイ
ルと呼ばれるパーツを間接の稼働を阻害しないように配置している。

ティンマンと言うのはコードネームだが便宜上彼はその呼び方で
呼ばせてもらおう。

『魔法学園には不確定の要素が多すぎる……だが今回の作戦は敵対
する不確定要素を釣り出せるかまたと無い機会だ』

「だから見送るつもりなのね」

『ああ。もうそろそろ激突している頃合いだろう？　もしかすると

レヴァイザ が登場してくれるかもしれない』

確かにティンマンの言うとおりだと包帯の女は同意する。

自分達がいる世界は一つの失敗が死を意味するのだ。これからのことも考えてできるかぎりイレギュラーは避けたい。それにマグネドを潰した奴が荷担している可能性もあるというのなら尚更だ。マグネドの戦闘能力は強固な防御態勢が敷かれた城を勇者含めた戦力であっても単独で陥落させる程である。現に数多くの勇者が消されていた。

そんな奴を倒した相手と戦わなければならない可能性がある以上、今回の作戦は打って付けの機会だ。少なくともベタな物語の悪役みたいに呆気なく蹴散らされるようなリスクが減らせる。

特に重要ターゲットであるレナ・バートネットの傍に奴が現れ、その存在を確認できたのなら大幅にこれからのプランを修正せねばならない。

「今の所はクラークが吊り上げられたところね……だけど今の暗部事情は詳しくなさそうだし、こちらは誤差の範囲。問題はあの黒髪のボウヤね」

「その戦力分析は私の作品がやってくれるさ……」

「まるで自分のゴーレムが潰されるのが前提みたいな言い方ね」

ゴスロリドレスの女はこの学者風な男に疑問を持った。

芸術家とか発明家だと言う人種は自分の作品に対して深い愛着のような物を持つ物だと思っていたが人によって違いがあるのだろうか？ 疑問を持った。

「弟子のサイエンにも言ったがただ単純に最強のゴーレムを目指すだけでは最強のゴーレムは作れないのだ。軍事兵器としての汎用性を持たせたテオスはその点をよく理解していた。まっ結果を見守る

「うじゃないか」

『「」「」……「」「」』

この場にいる誰もがこう思った。

彼自身のゴーレム学よりもお前のような奴に弟子がいたことに。

「絶対マトモな奴じゃないわよね？」

「……僕もそう思う」

END

第五話「茶番劇・その2」（後書き）

投稿小説の制作がえらく難航しています。

このまま放置しておくのも何なので急遽書き置きの方を投稿しました。

イラストの方も長らく停止状態だったので描きたいのは山々なんです。が以前の描き置きの分を完成させる流れになると思います。

それではご意見・ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7559m/>

優しき勇者・悲しみの冥王

2011年8月4日16時06分発行